

尊き御記憶に
聖山の髙僧パイシイ
言葉

第II巻 靈的覺醒

目次:

翻訳者による序文

至福の長老、スキモナフ・パイシイ・スヴィャトゴレッツは、1924年にカッパドキアで生まれ、ギリシャで育ちました。幼少の頃から修道生活を送りました。1950年に修道士となり、その大半を聖アトス山で、またコニツァのストミオン修道院や聖シナイ山でも修行に励みました。並外れた禁欲的修行を実践し、主から多岐にわたる恵みの賜物を豊かに授かった。神からの召しを受けた後、数千人の人々を靈的に導き、現代において最も恵みに満ち、最も分別のある長老の一人であった。1994年6月29日 / 7月12日に主のもとへ帰った。テッサロニキ近郊のスロティ村にある、自身が設立した聖使徒・福音記者ヨハネ神学者女子修道院に埋葬された。

1998年から2001年にかけて、長老パイシイの『言葉』の最初の3巻がギリシャ語で出版された。『言葉』のロシア語への翻訳は、そのテーマが今日特に時事性を帯びていることから、第2巻から開始することが決定された。ロシアおよび世界中で最近起こっている憂慮すべき出来事は、長老パイシオスの言葉の正当性、重要性、そして切迫性を改めて裏付けている。本書が、ロシアの人々が無関心と落胆という眠りから目覚める助けとなり、彼らを再びこの罪深い眠りへと陥れようとする悪意ある企てに立ち向かうための強力な武器となることを願っている。

第1巻の序文において、至尊のイグメニア・フィロフェイアは、長老パイシイの『言葉』の出版作業がどのように進められているかについて詳しく述べています。その説明を簡潔に繰り返しましょう。

長老は1967年から、その至福の死を迎えるまで、ヨハネ・神学者修道院を指導していた。修道院には、彼の霊的遺産が残されました。それは、修道女たちへの手紙（全員宛てのものも、一人一人への個別のものも）、彼との一般的な対話の録音や速記記録、そしてイグメニアの祝福のもと、長老との個人的な対話の直後にその内容を書き留めた修道女たちの記録などです。この霊的遺産は体系化され、現在は「聖パイスイ・スヴィャトゴルツの『言葉』」シリーズとして、テーマ別に分冊化されて刊行されている。必要に応じて、この資料には、聖パイスイが生前に執筆した既刊書からの抜粋が補足されることもある（本巻末の目録を参照）。

このように、ギリシャ語版においては、各巻は前の巻の続きではなく、独立した一冊の本とみなすことができます。したがって、ロシア語訳の第2巻を優先して刊行しても、読者にとって支障となることはありません。もし神の御心であれば、近い将来、長老パイシオスの『言葉』の第1巻、続いて第3巻のロシア語訳が刊行され、その後、ロシア語版の各巻はそれぞれの位置に収まることになるでしょう。¹

長老パイシオスの『言葉』の言語は、驚くほど生き生きとしており、比喩に富み、方言表現、慣用語、ことわざなどが豊富に散りばめられている。

場合によっては、それらを文体的に適切にロシア語に翻訳することが不可能でした。また、本書の編纂にあたっては、書簡、聖人伝、口頭での対話など、異なるジャンルの断片がしばしば一つの文脈に組み込まれていた点も考慮すべきです。翻訳作業において、これはさらなる難しさをもたらしました。翻訳者は、本書の刊行に尽力されたすべての方々に深く感謝するとともに、長老パイシオスの霊的な種が、ロシアの読者の共感に満ちた心という肥沃な土壌に根を下ろし、「御言葉を聞いて受け入れ、実を結ぶ者たち」（マルコ4:20）の心に豊かな実を結ぶことを願っています。アーメン。

キリストは復活された！

まことに復活された！

修道士ドリメドント。聖山アトス。キリストの復活祭、2001年。

¹ 現在、『長老パイシオスの「言葉」』の第I巻、第III巻、第IV巻、および第V巻が刊行されている。第VI巻も刊行準備が進められている。——編集部注

序文

1980年から、長老パイシイは私たちに、これから訪れる困難な時代について語っていました。彼はしばしば、私たちも『黙示録』に記されていることの多くを経験することになるかもしれない、と繰り返していました。長老は、その教えを通じて、私たちの中に健全な懸念を呼び起こそうと努められました。それは、私たちが霊的な戦いを強め、長老の目には修道生活の深部にも徐々に浸透しつつある無関心の精神に立ち向かうためでした。長老は、その語りかけを通じて、私たちが利己心を捨て、弱さを克服し、祈りに力を宿らせるよう助けようとしていました。「弱さによって——と彼は語った——祈りも弱くなり、そうすると私たちは自分自身にも、人々にも助けを与えることができなくなる。通信兵は役立たずになってしまう。そして、通信兵が機能しなければ、残りの戦士たちは敵に捕らえられてしまうのだ。」

「言葉」第1巻の序文『現代人への痛みと愛を込めて』と題された、すでに天に召された長老の著作には、長老パイシイ・スヴィャトゴルツの『言葉』集がどのようにして生まれ、その資料がどのように収集・体系化されたかが説明されている。本書である第2巻『言葉』は、「霊的な目覚め」と題され、今日の現実に関連するテーマについて長老が語った言葉が収録されている。これらの言葉は、私たちに絶えず警戒するよう呼びかけ、私たちが直面するかもしれない困難な状況に備えさせてくれる。というのも、私たちはすでに、長老がしばしば語っていたことを目の当たりにしてしまったからです。「私たちは、次々と襲い来る嵐を乗り越えていくことになるでしょう。これから数年間は、こうした状況が続きます。至る所で、社会全体が動揺しているのです。」

本書第2巻は5つの部分に分かれている。第1部では、現代に蔓延している人々の無関心と無責任さについて論じ、こうした状況下において、自覚あるキリスト教徒の義務とは、自己の改め、賢明な行動、信仰の告白、そして祈りを通じて他者を助けることであると述べられている。「私は、プラカードを掲げるよう呼びかけているのではない」と長老は言う。「神に向かって両手を挙げるように、と。」本書の第2部において、パイシイ神父は、読者をただ一つの偉業への呼びかけに限定することなく、霊的な行いへの熱意を燃え上がらせます。その後、各人には、その力と熱意に応じた闘いが残されており、それは地上の楽園、すなわちキリストにあって生きることを目指すものです。第三部では、期間の短い反キリストの独裁について語られている。それは、キリスト教徒に、聖なる洗礼の後、もう一度意識的にキリストを告白し、偉業に挑み、さらにはあらかじめサタンに対するキリストの勝利を喜び祝う絶好の機会を与えるものである。長老が語ったように、そのような機会には聖人たちでさえ羨むだろう。「多くの聖人たちは、偉業を成し遂げるために、私たちの時代に生きられることを願っただろう。しかし、それが私たちに与えられたのだ……私たちはそれに値しない。少なくとも、そのことは認めよう。」このような困難な時代を私たちがふさわしく生き抜くためには、自らの内に勇気と犠牲の精神を特に育むことが求められる。あらゆる困難を乗り越えるための力を、どのような源から汲み取るべきかについては、本書の第4部で論じられている。そこでは、神の摂理、信仰、神への信頼、そして神から与えられる助けに焦点を当てている。そして最後に、本書の第5部では、ますます蔓延する悪を打ち砕くための「強き武器」である心の祈りの必要性和力が強調されている。長老は、修道士たちに、戦時中の兵士のような完全な戦闘態勢

を整えるよう呼びかけている。彼は修道士たちに、絶えず祈りによって世を助け、修道生活の真の精神が変質しないよう守り、来るべき世代のためにその種を保存するよう努めるよう促している。最終章では、人生の最も深い意味が定義され、悔い改めの必要性が強調されている。

長老の言葉や行動の物差しは、いつものように、理性的判断である。以下の章で見ていくように、ある場面では、パイスイ神父は、せっかちな巡礼者たちが彼の独居室の門を金槌で叩き、「祈りを終わらせてください、ゲロンダ、神は怒りませんから!」と叫んでも、祈りを中断しない。――一方で、別の場面では、民衆による抗議デモに彼が不在であることが誤解を招き、教会に害を及ぼす恐れがあるため、世に出向くこともある。ある状況では、長老は神への憤りに燃えて冒涇に立ち向かうが、別の状況では、冒涇者をただ黙って祈るだけである。したがって、読者はこの本を最後まで注意深く読み終えるまでは、結論を急ぐべきではない。私たちは長老の教えからの引用を用いる際、特に慎重でなければならない。文脈から切り離されてしまうと、それらは対話相手に誤った結論を導かせてしまう恐れがあるからだ。心に留めておくべきことは、パイスイ神父が語ったきっかけは常に何らかの具体的な出来事や質問であり、長老の言葉は特定の個人に向けられたもので、その人の魂の救いが語り手の究極の目的であったということです。

長老パイシイをご存知の方々は、その言葉が時にどれほど厳しかったとしても、その言葉から心に湧き上がる優しさを覚えていることでしょう。それは、長老の使命が常に悪を癒やすことであり、恥の烙印を押すことではなかったからです。彼は相手の情欲を恥の柱に縛り付けることはせず、その魂を情欲から解放する手助けをした。それゆえ、長老の同じ言葉であっても、心の痛みや相手への愛という本来のつながりを失えば、異なる、そしておそらく癒やしの効果をもたらさない作用を及ぼす可能性がある。神からの慰めや安心感の代わりに、それらは心に疑いや恐怖を植え付けたり、あるいは極端な行動へと導いたりしかねない。しかし、私たちの長老は偏狭な人間でも、極端な人間でもなかった。彼が気にかけていたのは、善が善意をもって分かち合われること――つまり、それが益をもたらすようにすることだった。もちろん、彼は真実を語ることを決して躊躇しなかったが、理路整然と語った。聖なるものが冒涇されるのを見ると、神の憤りの炎に包まれることもあった。彼はこれから起こるであろう恐ろしい出来事を予告したが、その振る舞いは恐怖や不安を引き起こすものではなかった。それどころか、彼の言葉はあなたに復活の希望と喜びを伝えてくれた。しかし、それは犠牲の後に続く喜びであり、人をキリストと結びつける喜びであった。もしあなたがキリストと結びつき、教会の神秘的な命に参与し、キリストの戒めを守っているなら、もはやあなたにとって恐れるものは何もない。「悪魔も、苦しみも」ないのだ。長老ご自身が、いつもの明るく生き生きとした口調でこう語っている。「あなたが自分の中の『私』を捨て去るとき、キリストがあなたの中に飛び込んでくるのだ。」霊的生活全体の課題はまさにこれにあるため、パイシイ神父は、キリスト教徒を待ち受ける危険の一つに特に注意を喚起している。すなわち、自己犠牲の精神を育まなければ、キリストの命の共同者になることは不可能である。犠牲なしには、形式的なキリスト教徒、すなわち内面的生活を持たない人間になることしかできない。読者の中には、長老が語りのなかで頻繁に自身の生涯に言及していることや、彼が経験した奇跡的な出来事を、一見すると軽やかで気取らない口調で語っているように見えることに、戸惑いを覚える人もいるかもしれない。しかし、長老の口頭での言葉を紙面に書き起こすにあたっては、彼が自分自身につ

いて語るのにどれほど苦勞していたか、またそのためにどれほどのプレッシャーにさらされていたかを伝えることは不可能である、ということを念頭に置いておくべきである。時には、長老が同じ出来事について、異なる修道女たちに断片的に、また細部も異なって語ることがあり、その後、機会があれば、私たちは彼の語りの中に欠けている部分を補う情報を、非常に遠慮がちに彼から「引き出そう」と努めた。このように、長老パイシイは、修道院の霊的指導者として過ごしたその二十八年間、私たちを助けるために、自らの人生におけるいくつかの奇跡的な出来事を明かしてくれた。それは私たちにとって「霊的な施し」でした。そのため、期待していたような霊的な成長が見られないと、彼は非常に心を痛め、時には「私は砂に肥料を与えているようなものだ」とさえ言うほどでした。

長老の言葉を尊重し、以下の教えが出版される前に目を通し、それに関してご意見を寄せてくださったすべての方々、また、長老の教えが教会全体に向けられているというご自身の言葉で、私たちが始めた事業を続けるよう励ましてくださった方々に、感謝申し上げます。

多くの人々の証言によれば、昼夜を問わず私たちを見守り、その神聖な愛をもって助けてくださっているという、この巻に収められたその言葉が、私たちに善なる懸念を植え付け、私たちが愛をもって精進し、悪が退き、地上で神の平和が君臨するよう願う。アーメン。

聖母マリアの被昇天、1999年

聖使徒兼福音記者

ヨハネ・神学者の修道院のイグメナ、フィロフェイ修道女と姉妹たちは、
キリストにある。

—ゲロンダ、なぜカリヴァを出て森へ行くのですか？

—カリヴァに静寂などあるわけがないでしょう！ あっちから誰かがノックし、こっちから誰かがノックする。ある斜面に良い場所を見つけました。健康であれば、そこに祈りの拠点、レーダーを設置するつもりです。とても良い場所だ。夏にはうってつけで、木々もあって……自分の足で立つこともできる。もし私が修道者の務めを果たせるなら、それが私の喜びであり、私の糧なのだ！
いつかぜひ遊びに来てください！ ……

はじめに（長老の言葉より）

「神の御前に進むためには、神からの『代議員』となる必要があり、自分自身のための安楽な地位を手配する者であってはならない」

—ゲロンダ、²、現在起きている事態について、どのようにお考えですか？

—あなたは どうお考えですか？

— 私たちに何と言えればいいのでしょうか、ゲロンダ……？ それはあなたが私たちに語ってくださっていることではありませんか。

— 今のこの安穩とした空気が気にかかります。何かが仕組まれているのです。私たちは、今がどのような時代なのか、いつ死ぬのかさえ、まだ十分に理解できていません。これがどうなるのかは分かりませんが、状況は非常に複雑です。世界の運命は数人の手に委ねられていますが、神はまだブレーキをかけておられます。神が今起きていることに介入してくださるよう、私たちは熱心に、そして痛みを込めて祈らなければなりません。熱意を持ってこれに取り組み、霊的に生きましょう。今は非常に複雑な時代です。多くの灰やゴミ、無関心が蓄積されています——そして、これらすべてを吹き飛ばすためには、強い風が吹く必要があります。年配の方々は、人々が暴れ出す時が来るだろうと言っていました。[そして今]——柵を壊し、何も考慮に入れようとしません。恐ろしいことです！バビロンの大混乱が訪れました！『三人の若者の祈り』（³）を読んでみてください。彼らがどれほど謙虚に祈っていたかがわかるでしょう。

また、詩篇第82篇にはこうあります。「神よ、あなたに匹敵する者は誰か。黙してはいられない……」これこそが必要なのです。そうでなければ、良いことは期待できません。神の介入が求められています。

いくつかのヨーロッパ特有の病が蔓延し、ますます深刻な形をとっています。イギリスに住むキプロス人のある一家の主が、私にこう言いました。「私たちは霊的な危険にさらされています。家族全員でイギリスから逃げ出さなければなりません。」見れば、あちらでは父親が娘と結婚し、こちらでは母親が息子と結婚している……口にするのも恥ずかしいようなことです。それなのに、私たちはハムスターのように眠り続けています。私はプラカードを掲げるよう呼びかけているわけではありませんが、迫り来る大きな危険に注意を向け、神に両手を挙げて祈るべきです。どうすれば悪から身を守れるか、考えましょう。すべてを平準化しようとする傾向があるため、ブレーキをかける必要がある。今こそ 預言者の言葉をもって祈る時だ。「彼らの君たちをオリヴァ、ジヴァ、ゼヴェヤ、サルマン……のようにし、彼らが『神の聖所を我々のものとして受け継ごう』と決心したように。」⁴

大きな動揺が起きている。大混乱で、人々の頭は混乱している。人々はまるでミツバチのようなものだ。巣箱を叩けば、ミツバチは外へ飛び出し、「ブーン……」と鳴き始め、興奮して巣箱の周りを飛び回る。そして、どの風が吹くかによって、その方向へ向かう。北風なら巣箱に戻り、南

² ゲロンダ——霊的指導者に対する敬称。——訳者注

³ ダニエル書2章、21章、アザリヤの祈り、および三人の若者の歌を参照。（ここおよび以下、聖書へのすべての引用はスラブ語聖書による。）

⁴ 詩篇82篇12～13節。士師記7章および8章を参照。

風なら飛び去る。それと同じように、人々も「国家の北風」や「国家の南風」に吹きさらされ、かわいそうに頭が混乱している。しかし、この騒動にもかかわらず、私は自分の中に何らかの慰め、ある種の確信を感じている。 オリーブの木は、たとえ枯れてしまったとしても、新たな芽を出すだろう。神が宿っているキリスト教徒たちがいる。さらに、神の民、祈りの人々もおり、慈愛に満ちた神は私たちを忍耐強く見守り、再びすべてを正しい秩序へと導いてくださる。こうした祈りの人々が、私たちに希望を与えてくれる。恐れることはない。 私たちは民族として、これほど多くの嵐を乗り越え、滅びませんでした。それなのに、これから吹き荒れるであろう嵐を恐れるのでしょうか？ 今だって滅びたりはしません！ 神は私たちを愛しておられます。人間には、いざという時のために秘められた力があります。苦しい年月はほんの少しの間です。[ただ]一つの嵐に過ぎません。

私がこれ話すのは、皆さんに恐怖を抱かせるためではなく、私たちが今どこにいるのかを知っていただくためです。 私たちにとって、これは非常に好都合な機会であり、試練や苦難こそが勝利なのです。 キリストと共にあり、その戒めに従って生き、困難に立ち向かえるよう祈りなさい。 神の恵みが訪れるよう、情欲を捨てなさい。そしてもし（私たちが今どこにいて、これから何に直面するのかという）健全な懸念が私たちの中に芽生えるなら、それは必要な措置を講じ、備える上で大いに役立つでしょう。 私たちの生活は、もっと節度あるものにしましょう。もっと霊的に生き、互いに親しく接し、苦しむ人々を助け、貧しい人々を愛と痛みと優しさをもって助けましょう。 善良な人々が現れるよう、祈りましょう。

神様が道を示してください

慈愛に満ちた神は最善の方法で全てを整えてくださいますが、多くの忍耐と注意が必要です。なぜなら、もつれを急いで解こうとすると、かえってさらに複雑にしてしまうことがよくあるからです。神は忍耐強く解きほぐしてくださいます。今起きていることは、長くは続きません。 神様が箒を手に取りられるでしょう！ 1830年、聖山には多くのトルコ軍が駐留していたため、イヴィロン修道院には一時、修道士が一人も残っていませんでした。修道士たちは去ってしまいました——聖遺物を携えて去った者もいれば、反乱を支援するために去った者もありました。 ただ一人の修道士だけが、遠くからやって来て、ランプに火を灯し、掃除をしていた。修道院の内外は武装したトルコ兵で溢れかえっていたが、この哀れな修道士は掃除をしながらこう呟いた。「聖母よ！ 一体、これはどういうことなのでしょう？」とある日、彼は苦悩のうちに聖母に祈っていると、光に包まれ、顔を輝かせた女性が自分に近づいてくるのを見ました。それは聖母マリアでした。聖母は彼の手からほうきを受け取り、「あなたはほうき使いが下手ね。私が掃除してあげるわ」と言いました。そして掃除を始め、その後、祭壇の奥へと姿を消した。三日後、トルコ兵たちは皆去っていった！ 聖母マリアが彼らを追い出したのだ。真実でないものは、神がまるで目から涙で塵を追い出すように、一掃してしまう。悪魔は働くが、神もまた働き、悪を善へと転じ、そこから善が生まれるようにされる。例えば、タイルが割れても、神はその破片から美しいモザイクを作り出される。だから、少しも落胆してはならない。なぜなら、すべてとすべての人の上に神がおられ、神はすべてを支配し、各人を被告席に座らせて行いに対する答えを求め、それに応じて各人は神から報いを受けるか

らだ。何らかの形で善に協力した者は報われ、悪を行う者は罰せられるでしょう。神は最終的にすべてを正しい位置に整えてくださいますが、私たち一人ひとは、この困難な年月の中で、祈りや善行を通じて行ったことについて、その責任を問われるのです。

今日、人々は信仰を破壊しようと努めており、信仰という建物を崩壊させるために、こっそりと石を一つずつ取り除いている。しかし、この破壊に対する責任は私たち全員にある。石を取り除いて破壊する者だけでなく、[信仰が]破壊されるのを目の当たりにしつつも、それを強固にするための努力を怠っている私たちにも責任があるのだ。隣人を悪へと駆り立てる者は、そのことについて神に答えなければならない。しかし、その時にそばにいた者もまた、答えなければならない。なぜなら、その者もまた、誰かが隣人に悪を行っているのを見ていながら、それに立ち向かわなかったのだから。人々は、説得の巧みな者を容易に信じてしまう。

—ゲロンダ、人々はまるで獣のようです……

—私は獣について文句を言うつもりはない。ほら、動物には理性がなく、大きな悪を働くことはできない。それに対し、神から遠く離れてしまった人間は、最も凶暴な獣よりもさらに悪くなるのだ！ 大きな悪を働く。強い酢は、酸っぱくなったワインから作られる。その他の人工的な酢は、それほど強くはない…… さらに恐ろしいのは、悪魔が墮落した人間と結託したときだ。そうすれば、悪魔は他者に二重の悪をもたらす。それは、肉欲的な思いが肉体と結託して、肉体にさらなる悪をもたらすのと同じである。悪魔がそのような人間と協力するためには、悪魔がその人間を頼りにできなければならない。つまり、その人間自身が悪を好み、その悪を内に抱えている必要があるのだ。

その結果、神よ、私たちをお守りください、これらの墮落者たちは[意図的に]私たちに困難をもたらし、他の人々や修道院を圧迫するでしょう。彼らは、自分たちの計画を妨げるという理由で、教会や修道生活に対して敵意を抱くようになるのです。現在の状況に立ち向かうには、世俗的な方法ではなく、霊的な方法しかありません。嵐はもう少し激しくなり、缶詰やゴミ、あらゆる不要なものを岸に打ち上げ、その後、状況は明らかになるでしょう。そして、この状況の中で、ある者は清らかな報いを受け、またある者は借りを返すことになるのを、あなた方も目にするでしょう。結果として、人々が経験する苦しみは耐え難いものではなくなるでしょうが、もちろん、「神よ、あなたに栄光あれ」と口にするということもないでしょう。

神はなんと私たちを愛しておられることでしょう！ もし今日起きていること、⁵、そして今企てられていることが、人々がより大きな霊的な無知にあった二十年前に起きていたなら、それは非常に辛いことだったでしょう。今、人々は知っています。教会はより強固になったのです。神は人間——ご自身の被造物——を愛しておられ、人間自身が信仰を持ち、神の戒めを守る限り、その必要とするものを必ず備えてくださいます。

⁵ 1985年6月に説教された。（以下、ギリシャ語版の出版者による注釈は、出典を明記せずに記載する。）

「主の御業を怠慢に行う者は呪われる……」⁶

昔、敬虔な修道士のうちの誰かが、世の中の情勢を気にかけることに時間を費やしていたなら、その者は塔に閉じ込められなければならなかった。⁷ 今はその逆だ。敬虔な修道士であっても、世の中で支配的となっている状況に関心を寄せず、その行方を案じなければ、塔に閉じ込められなければならない。なぜなら、かつては統治者たちが神を心に宿していたのに対し、今の統治者の多くは神を信じていないからだ。今や、家族、若者、教会など、あらゆるものを崩壊させようと企む者が大勢いる。現代において、わが民が置かれている状況に関心を持ち、そのことを案じることは、すなわち信仰の告白である。なぜなら、国家は神の律法に敵対して戦っているからだ。国家が制定する法律は、神の律法に反するものである。

また、教会を[神による]定めとして認めず、自国民に対しても高慢な態度をとるほど無関心な人々もいます。しかし、自分たちが怠けて過ごすために、「使徒パウロは、世俗的な事柄に関心を持つべきではないと言っている」と言い、無関心のままです。しかし、使徒パウロが意図していたのは別のことでした。当時、権力は偶像崇拜の民の手中にありました。中には国家と決別し、キリストを信じる者もありました。使徒パウロは、まさにそのような人々に対して、「この世のことに心を留めてはならない」と語ったのである。それは、彼らが世から離れるためであり、なぜなら、当時、全世界が偶像崇拜に染まっていたからである。⁸ しかし、コンスタンティヌス大帝が権力を掌握し、キリスト教が勝利を収めて以来、教会、修道院、芸術、礼拝規程などを備えた偉大なキリスト教の伝承が徐々に形成されていきました。つまり、私たちにはこれらすべてを保存し、教会の敵にこれを崩壊させない責任があるのです。私は、霊的指導者たちでさえ「そんなことには手を出さな！」と言うのを耳にしたことがある。もし彼らが偉大な聖性を持ち、祈りによって何にも関心を寄せないような境地に達していたのなら、私は彼らの足にさえ口づけしただろう。しかし、今の彼らは無関心だ。なぜなら、誰に対しても好かれる存在であり、のうのうと暮らしたいと願っているからだ。

無関心は世俗の人々でさえ許されないものであり、ましてや霊的な人々にとってはなおさらです。誠実で霊的な人は、何事も無関心に行ってはなりません。「主の御業を怠慢に行なう者は呪われる……」、⁹——と預言者エレミヤは語っています。

⁶ エレミヤ書 48章10節。

⁷ 海賊からの防衛のために用いられた、聖山の修道院の高所にある防御施設。

⁸ 参照：テモテへの手紙第二 2章4節。

⁹ エレミヤ書 48:10。

人々に霊的な助けを与えよう

昔は、十人のうち六人が神を畏れ、二人が節度を保ち、二人が無関心でしたが、後者でさえも心の奥底には信仰を持っていました。今日ではそうではありません。これがどこまで進むのか分かりません。今は、できる限り、人々に霊的な助けを与えましょう。かつての大洪水の際、ノアの箱舟の中でそうであったように、今この時も、少なくとも何人かが救われ、霊的に傷つくことのないように。多くの配慮と熟考が必要だ。起きていることを様々な角度から検討し、人々を助けなければならない。人々が集まってくるのが私の好みに合うと思うか、あるいはこれほど大勢の人が集まるのを見たいと思っていると思うか？ いいえ、そうではありませんが、私たちが置かれているこの状況において、不幸な人々には少しばかりの手助けが必要です。私は、人々と関わりを持たないために司祭になったわけではありませんが、結局のところ、人々と関わる機会はさらに増えてしまいました。しかし、神は私の心境をご存知であり、もし私が自分の好きなことをしていたら与えられたであろうものよりも、さらに多くのものを私に与えてくださっています。私は何度、聖母マリアに、何も見ず、何も聞かず、全世界のために祈れるような、静かで人里離れた場所を見つけてほしいと願ったことか。しかし、聖母は私の願いを聞き入れてくれない。それなのに、私の取るに足らない願いばかりは聞き入れてくれるのだ。しかし、ほら、人々がやってくる直前にも、神は私が休めるように、何らかの病気で私をベッドに縛り付けてしまう。神は、私が以前祈りの中で感じていたあの甘美さを私に与えてくれない。なぜなら、そうすれば私はその甘美さから離れられなくなってしまうからだ。その頃、誰かがカリヴァを訪れると、私は無理やりその霊的な状態から抜け出さなければならなかった。¹⁰

カリヴァの中では、私は他の人たちのスケジュールに合わせて生活している。中で詩篇を読んでいると、外からノックされる。「ちょっと待って、15分だけ」と言うと、彼らは「おい、神父さん、祈りはもういいよ、神様は怒らないさ!」と叫ぶ。彼らがどこまで行っているか、お分かりだろうか？ まあ、少しの間だけ中断するのならまだしも、外に出たらそれで終わりだ。それまでにできた分だけ、それで終わりだ。7時半か7時になる頃には、落ち着いていられるように、私はすでに晩課を終えていなければならない。「聖なる栄光の朝の光よ!」皆さんが早課を終える頃、私はすでに晩課のロザリオを終えている。朝にアンティドルを食べられればまだいいが、その後は一切の食事を取れず、死人のように倒れてしまう。かつては、復活祭や光の週にも、第九時や三日祭の礼拝を行っていたものだ。¹¹ できるかできないかに関わらず、やり遂げなければならない。ある時、何が原因で人々が来られなかったのかは分からない——おそらく海上で嵐があり、船が出航しなかつ

¹⁰ 長老が経験した精神的な緊張状態（彼は、あたかも暖かさにさらされたりそくのように、神と人々への愛によって溶けていくのを感じていた）の後、彼は、人々への援助を拒んではならないという啓示を天から受けた。それ以来、彼は昼の間は訪ねてくる人々のために時間を割き、夜には世の様々な問題について祈りを捧げた。しかし、巡礼者の数が著しく増えたとき、長老は祈りに全時間を捧げるために、人知れぬ場所へ身を隠そうと考えた。その時、彼は二度目に、自分の「パナグダ」という小部屋にとどまり、人々を助けるべきであるという啓示を受けた。

¹¹ ビザンチン式で午前9時（午後3時）まで、あるいは3日間、飲食を断つこと。

たのだろう——が、カリヴァには誰も来なかった。 ああ、あの時、聖エピステミアの洞窟で過ごしたように、私はシナイの日々を過ごしたのだ！¹² 海が嵐の時は、私の心は凪いでいる。海が凪いでいる時は、私の心は嵐だ。

もちろん、私はどこかに引きこもって静寂の中に身を置くことも可能です。カリフォルニアやカナダへ行くための旅費を負担してくれると申し出てくれた人が、どれほどいたかご存知ですか？ 「来てくれ、ここにはイシハステイリアがあるんだ」と彼らは言います。¹³ もし見知らぬ場所に身を置けば、まるで楽園にいるような気分になるでしょう。誰も私のことを知らず、自分なりの生活リズムがあり、私が望むような修道的な生活を送れるでしょう。しかし、ご存知の通り、動員解除は戦争が終わってからのことです。そして今、戦争——霊的な戦争——が繰り広げられています。私は最前線にいなければなりません。これほど多くのマルクス主義者、フリーメイソン、サタニスト、その他あらゆる者たちがいるのです！ どれほど多くの取り憑かれた者、アナーキスト、惑わされた者たちが、彼らの「魅力」を私が祝福してくれるようにとやって来るか。そして、彼らに考えさせることもなく、どれほど多くの者が私のところに送り込まれていることか。ある者は彼らを処分するため、またある者は自分たちで穴から蛇を引きずり出さなくて済むように……もしあなたがたが、私がどれほど多くの方面から圧迫されているかを知っていたら！ 私の口には、人々の苦しみによる苦味が広がっている。しかし、心の奥底では慰めを感じている。もし去るなら、それは前線から逃げ出した、後退したことになるだろう。私はそれを裏切りだと考えるだろう。そう理解しているのだ。私がこの道を歩み始めた時、果たしてそれを望んでいたのだろうか。それとも、もしかすると、修道院を助けたいと思っていたのだろうか？ ある場所へ向かっていたのに、は別の場所にたどり着いてしまい、今、私はどれほど苦悩していることか！ そして、[周囲で起きていることについて]誰かが語っている声など聞こえない。教会が破壊されている？ 「別にいいさ」と誰かが言うだろう。その人は、ただ少しでも暖かい場所に身を置けるなら、どちらとも仲良くしているのだ！ 「居心地の良い場所」なんて！ 結局のところ、彼自身は悪魔に「仕向けられる」ことになるだろう。これはまさに不名誉なことだ！ もし私が自分の楽しみになることをしたかったら——ああ、それがどれほど簡単だったか、あなたもご存知だろう！ しかし、目的は自分が満足することではなく、他者を助けることにあるのだ。もし自分がどうやりくりするかばかり考えていたなら、どこにでも居場所を見つけられただろう。しかし、神の御前に立つためには、神からの「代議員」にならないといけないのであって、自分自身のための居心地の良い場所を手配する者になってはならないのだ。

¹² 1962年から64年にかけて、長老はシナイ山にある聖エピステミアの荒野の独房で修行に励んだ。

¹³ イシハステイリオン（ギリシャ語のἡσυχία＝静寂に由来）とは、多くの場合、母修道院に属する特殊な形態の修道院、あるいは母修道院の近くに位置する独立した庵を指す。——訳者注

第1部。 愛の責任

「教会は、律法主義者たちのようにではなく、愛によって行動する。教会はすべてを忍耐強く見守り、その人がどんな過ちを犯そうとも、どんなに罪深い者であろうとも、一人ひとりを助けようと努める」

第1章。 無関心な世代

神に対する無関心は、他のすべてに対する無関心を招く

「あれ、あそこから聞こえるあの音は何ですか？」

— 飛行機ですよ、ゲロンダ。

— 窓を閉めてくれ。まさか、あいつがここに突っ込んでくるなんてことにならないように！ 世の中がこれほどまでに狂ってしまっているのだから、いつそんなことになってもおかしくない！ すべてが崩壊している：家族、教育、行政.....それなのに、彼らは全く気にも留めていない！ 彼らには何の気概もない.....

— ゲロンダ、私たちがこのような状態に陥ってしまったのは、誰のせいなののでしょうか？

— 私が言いたいのは、無関心がどれほど深刻なレベルに達しているかを強調したいということです。どこかの学校に行ってみれば分かるでしょう。例えば、窓が開いていて、風でサッシがガタガタと揺れている場合、子供が自ら進んで窓を閉め、ガラスが割れないようにするのは、なかなか難しいことです。子供たちは口を開けてぼんやりと、窓が揺れるのを見つめ、まるで何も起きていないかのようにその横を通り過ぎていくでしょう。無関心です！ ある将校——彼は倉庫の責任者だった——が私にこう話してくれた。「燃料・潤滑油の倉庫を警備するまともな兵士を見つけるのに、ひどく苦労している。¹⁴ 他人が放火したり、あるいは彼自身が不注意でタバコの吸い殻を落として火事を起こしたりしないようにするためだ。」

¹⁴ 燃料・潤滑油。——訳者注

冷淡な気風、勇気など全くない！我々はすっかり墮落してしまった！神は一体いつまで我々を許してくださるのだろうか？かつてはどれほどの尊厳があり、どれほどの愛があったことか！¹⁵ 1940年の戦争中、¹⁶、国境ではイタリア兵が時折、我々の国境警備隊員と交流し、ギリシャの哨所を訪ねてきた。そして、ギリシャ人たちの気前の良さをよく見てほしい。ある時、イタリア兵がギリシャの哨所を訪れた際、ギリシャ人たちは彼らにコーヒーを淹れ始めた。すると、あるギリシャ人将校が彼らの目の前で、50ドラクマや100ドラクマの紙幣が束になった札束を取り出し（当時はお金に価値があったのです）、火種として火の中に投げ込み、イタリア人たちにギリシャ国家がいかに豊かであるかを示そうとしたのです。イタリア人たちは驚きで言葉を失いました。これこそが犠牲精神というものでした！

そして今日、かつて共産主義国家に息づいていたあの精神が、私たちにも伝わってきた。ロシアでは、今年は豊作だったにもかかわらず、どれほどの飢饉になるか、ご存じだろうか！¹⁷ その時期に小麦を刈り取らなかったから、秋になって刈り取りに出たのです。秋に刈り取るなんて？もしその小麦が自分たちのものじゃなければ、どうしてそれを気にかけて、刈り取りに行ったりするのでしょうか！彼らの生活は、まさに強制の連続です。彼らには何かを創造しようという意欲がありません。何年も何も創造してこなかったからです。そして、こうして生まれた気力の欠如や無関心さによって、国全体が没落してしまった。雨が降っているのに、脱穀された小麦は脱穀場で乾かされている。彼らはそんなことなど気にも留めない。帰る時間か？彼らは去っていくが、雨は小麦を台無しにしてしまう。

翌日、決められた時間に、残ったものを集めに来るのだ！しかし、もし自分の小麦が脱穀場に置かれたまま雨に降られたら——それを無駄にさせるだろうか？それを救うために、眠る暇もないだろう。そしてその時、疲れの中から喜びや歓喜を感じるはずだ。

神への無関心は、他のすべてへの無関心を招き、崩壊へとつながる。神への信仰は偉大なことである。人は神に仕え、そして両親、自分の家、親族、仕事、村、地域、国家、祖国を愛する。神や自分の家族を愛さない者は、何も愛さない。当然のことながら、その人は祖国も愛さない。なぜなら、祖国とは大きな家族だからだ。私が言いたいのは、すべてはここから始まるということだ。人は神を信じず、その結果、両親も、家族も、村も、祖国も顧みなくなる。まさにこれを今、崩そうとしているのだ。そのために、この緩みきった状態が植え付けられているのである。ある警察官からこんな手紙が届いた。「仕事が山積みで、行けない。この地区には本来8人いるはずなのに、今

¹⁵ フィロティモ（ギリシャ語：φιλότιμο）。この言葉は、霊的生活におけるフィロティモの重要性を強調する長老パイシオスの説教の中で繰り返し登場する。現代ロシア語には、φιλότιμοに相当する語はない。文字通りには「寛大さ」「犠牲を厭わない心」「道徳的あるいは霊的な理想のために物質的なものを軽んじる態度」と訳すことができる。——訳者注

¹⁶ 1940～41年のギリシャとファシスト・イタリアとの間の戦争。——訳者注

¹⁷ 1990年に発せられた。

は2人しか残っていない。」聞いてくれ、一体何が起きているんだ！あと2人増員すればいいのに、そうはいかない——彼らはたった2人しか残さないのだ！

しかし、幸いなことに例外もある。ある日、ある父親がやって来て、私にこう言った。「アンジェロスのために祈ってくれ、¹⁸ そうしないと、あの子は殺されてしまう。」私はその息子がまだ幼い頃から知っていたが、今ではすでに兵役で軍隊に入っていた。「どうしてですか？何かあったのですか？」と私が尋ねると、彼はこう言いました。「ある日、彼は他の兵士たちが職務を怠ってトランプをしているのを目撃しました。彼は注意しましたが、聞き入れられませんでした。その後、彼は彼らを報告した。すると、トランプをしていた連中の一人が、彼を殺すと脅し始めたんだ。」——「ねえ、」と私は言った。「あいつが彼を殺すことなんてないさ。でも、アンジェロスがトランプをしなかったという理由で軍法会議にかけられないよう、私は祈っておくよ！」

また、別の出来事を聞いて、私はこう言った。「神に感謝だ。まだ祖国を想うギリシャ人がいるんだな。」あるパイロットは、トルコ軍機が国境を侵犯した際、彼らが国境を侵犯した証拠となる写真を撮影しようと、少し追い越そうとした。別のパイロットが無線で彼に叫んだ。「あいつを放っておけ！」——しかし、そのパイロットは譲らず、懸命に追いかけた……トルコ側の飛行機はより大きく、速度も速く、しかも非常に低空を飛行していたため、かわいそうなギリシャ人のパイロットは海に墜落してしまった！一方で、ただ飛行機で遊び回っているだけの人たちもいる！これほどまでに、人々の間には違いがあるのだ！

人は善の意味を理解し、それを必要だと感じなければならない。そうでなければ、ただただだらしない状態が続くだけだ。強制で誰かを戦場に送り出してみろ！その人はあちらから逃げ出し、こちらからこっそり抜け出そうとするだろう。しかし、敵がどのような悪をもたらすかを理解すれば、その人は自ら進んで志願兵として名乗り出るだろう。

今日、人々は自分自身の周りをぐるぐる回っている

かつて私の故郷、ファラサではこう言われていた。「仕事があるなら、明日まで先延ばしにするな。美味しい料理があるなら、明日まで取っておけ——客が来るかもしれないから」。今ではこう考える。「仕事は後回しにしておこう。明日誰かが来て、助けてくれるかもしれない。でも、美味しい料理は今晚、自分たちで食べてしまおう！」と。今の人の大半は自分中心に回っていて、自分のことしか考えていない。例えば、土砂降りの雨が降ったとしよう。そうすれば、皆さんの大半は、洗濯物が干してあるかどうかを気にして、それを取り込むために駆け出すでしょう。それ自体は悪いことではありませんが、それ以上のことはしません。洗濯物は、たとえ濡れても、また乾きます。その一方で、その時間に脱穀場で働いている人たちはどうでしょうか？彼らのことを気の毒に思うのでしょうか、彼らのために祈るのでしょうか？あるいは、雷が光る嵐のさなかに、畑で働いている可哀想な人々や、温室を管理している人々のことを思い出す人が、果たして五、六人いる

¹⁸ つまり、アンゲロスという名の彼の息子のことである。——訳者注

でしょうか。つまり、人は他人のことを考えず、自分の「私」から抜け出せず、常に自分自身を中心に回っているのです。しかし、自分自身を中心に回っているとき、その中心にあるのは自分自身であって、キリストではありません。その人は、キリストという軸の外にいます。もし人が隣人のことを考える境地に達したいと望むなら、その心はまずキリストに[根ざさなければなりません]。そうして初めて、人は隣人のことも考え、さらに動物や自然全体についても考えるようになる。その人の「ラジオ」はオンになっており、信号が届くやいなや、助けに駆けつけるのだ。もしその人の心がキリストに定まっていなかったら、その人の心は機能せず、それゆえにキリストも、隣人も、ましてや自然——動物や木々、植物——を愛することはない。もしあなたが今のように振る舞っているなら、どうやって動物や鳥たちと心を通わせることができるのでしょうか？！鳥が屋根から落ちてきたら、あなたは餌をあげるでしょうが、落ちてこなければ、そんなことすら考えもしないでしょう。私は鳥たちを見て、「かわいそうな彼らに餌をあげなきゃ！」と言い、パンくずをまき、水を置いて飲ませてあげます。木に病気の枝が見えると、すぐに他の枝に感染しないよう切り落としたいと思います。あるいは、ドアや窓がガタガタと音を立てると、私の心はそこへ向かいます。自分が何かを必要としているときは自分のことは忘れてしまいますが、ドアや窓が壊れていないか、何か被害はないかを確認します。自分のことは、その合間に考える程度です。もし誰かが被造物のことを思い、そのために心を痛めるなら、その人はどれほどその創造主のことを考えていることでしょうか！もし人がそう振る舞わないなら、どうやって神と調和できるのでしょうか？

そしてもう一つ：外に出る時は、周囲に目を配ってください。もしかしたら、誰かが不注意か、あるいは悪意から（誰も悪事を働かないことを願いますが）、何かを投げ捨てて火事になったかもしれません。ですから、よく見てください。これもまた霊的な領域に関わることです。なぜなら、この一瞥の中にも愛が存在しているからです。私はカリヴァから出る時、下を見下ろし、屋根を見渡し、焦げた匂いがしないか嗅ぎます。もし「火事が起きても祈れば火は消える」という信仰を持っているなら話は別ですが、そうでないなら、[人間として]行動しなければなりません。あるいは、遠くで轟音が聞こえると、私は耳を澄ませて、それが何なのかを確かめる。大砲か、演習中か、何かを爆破しているのか？私の心はすぐにそちらへと向かい、起きていることについて祈り始める。他者への愛ゆえに自分自身を顧みない者には、神の偉大な御加護があり、すべての人々がその人を気遣う。

しかし、今の世代は——無関心の世代だ！大多数はパレードのためだけにしか役立たない。もし何かが始まったら、「身を守れ！」などと言ってはいけない。もっとも、今やパレードさえも望まれていないのだ！以前はパレードに出かけ、行進曲を聴き、胸の奥で何か震えていたものだ。今日、私たちギリシャ人の間には、だらしなさがある。もちろん、他の民族はさらにひどい。彼らには理想がないからだ。ほら、ギリシャ人には欠点がたくさんあるが、神からの賜物——愛好心と勇猛さ——もある。彼らにとっては、すべてが祝祭なのだ！他の民族には、辞書にそんな言葉さえ載っていない。

私たちには責任がある¹⁹

ある根っからの無神論者が私のカリヴァを訪ねてきた。あれこれと好き勝手に話した後、こう言い放った。「私は聖像破壊者だ」。何にも信じていないところから始まり、まさか聖像破壊にまで至るとは！ 「おい、無神論者め、もし何も信じていないのなら、なぜ俺に『自分は偶像破壊者だ』なんて言うんだ？ 偶像破壊運動の時代²⁰には、一部のキリスト教徒が過度な熱意から迷いに陥り、反対の極端に走ったが、その後、教会がすべてを正しい位置に整えたのだ。彼らが信じていなかったなどということはなかったのだ。」ところで、この無神論者は今日の状況のすべてを是認していた。我々は彼と口論になった。「そうか、わかった」と私は言った。「一体どういうことなんだ？ 裁判官たちは裁くことを恐れている。人々は犯罪者を訴えるが、その後、原告は脅され、訴えを取り下げざるを得なくなる。結局のところ、これらすべてを仕切っているのは誰だ？ お前は、そんな状況が気に入っているのか？ 彼らを是認しているのか？ お前自身が犯罪者だ！ そのためにここに来たのか？ さあ、ここから出て行け！」私は彼を追い出した。

— ゲロンダ、そんなことをおっしゃって、怖くないのですか？

— 何を恐れるというのですか？ 私はすでに自分の墓穴を掘ってしまいました。もし掘っていないければ、誰かが代わりに労力を費やして掘らなければならないと気にかかっていたでしょう。しかし今は、土を数すくい投げ入れるだけで済むのです……

他にも、キリストと聖母マリアに対して最も冒瀆的な言葉を吐いたにもかかわらず、テレビに出演を許されている無神論者で冒瀆者を知っている。そして教会は沈黙し、こうした神を冒瀆する者たちを破門しない。教会はそうした者たちを破門すべきだ。破門なんて、惜しいのか？

— ゲロンダ、彼らはどうせ何も認めないのに、破門されたところで何を理解するというのですか？

— 少なくとも、教会が自らの見解を表明していることが明らかになるでしょう。

— ゲロンダ、沈黙というのは、結局はそれを認めているのと同じことではありませんか？

— そうだ。ある者が聖母マリアについて冒瀆的なことを書いたが、皆黙っていた。ある者に「あの人、こんなことを書いているのを見ないか？」と尋ねると、「えー、あの人になんてできる？ 関わったら、自分も汚れてしまうよ」と言う。彼らは発言することを恐れているのだ。

— 彼は一体何を恐れているのですか、ゲロンダ？

— 自分が何か書かれたり、皆の前に晒されたりすることを恐れて、聖母マリアへの冒瀆を黙認しているのです！ 誰かが穴から蛇を引きずり出して、私たちが平穏でいられるのを待つようなことはやめましょう。それは愛の欠如です。そうすると、人は計算高さに動かされ始めるのです。 だか

¹⁹ 1992年に発せられた。

²⁰ 偶像破壊運動——100年以上にわたり（726～843年）、ビザンツ帝国を揺るがし、第7回全地公会議（787年）後に一時沈静化したキリスト教の異端。レオ5世アルメニア人皇帝によって始まった偶像破壊運動の第2段階は、843年に聖メフォディオス総主教の時代に終結した。偶像破壊者とは、聖なるイコンを崇敬しないキリスト教徒を指す。

らこそ、今、こんな風潮が広まっているのです。「あの人とは〔良好な〕関係を築いて、私たちに褒めてもらいましょう。そして、あの人とは友達になって、私たちに恥をかかせないように、馬鹿にされないように、犠牲にならないようにしましょう！」一方で、無関心から黙っている人もいます。「黙っておこう——そうすれば、新聞に私のことが書かれることはないだろう」と。つまり、大多数は完全に無関心なのだ。最近になってようやく少し変化が見え始めたが、それまでの長い間、誰も何も書いていなかった。ずいぶん[多くの]年前、私は聖山でとある[人物]に怒鳴りつけたことがある。「お前の愛国心は痛いくらいに強すぎる」と、彼は当時私に言った。ところが最近、彼がやって来て私を見つけると、こう言い出した。「すべてを台無しにしたな。家族も、教育も……」そこで、私は彼の言葉を借りて返してやる番が来た。「愛国心は——」と私は言った。「お前の方が痛いくらいに強すぎる！」

こうした状況は、悪い面もあれば良い面ももたらした。悪い面は、かつては心の中に何かを持っていた人々でさえ、無関心になり、「私に状況を変えられるわけがない」と言い始めたことだ。良い面は、多くの人が考え始め、変わり始めたことだ。中には、私を訪ねてきて、以前自分たちが犯した何らかの悪行を正当化しようとする人もいる。それは、彼らが考え始めたからだ。

—つまり、ゲロンダ、私たちは常に自分の信仰を告白すべきなのではないでしょうか？

— 分別が必要です。声に出して語る必要のない場合もあれば、大胆に信仰を告白すべき場合があります。なぜなら、沈黙すれば責任を負うことになるからです。この困難な時代において、私たち一人ひとり人間として可能なことを行い、人間として不可能なことは神の御心に委ねるべきです。そうすれば、私たちができる限りのことをしたのだから、良心は安らかになるでしょう。もし私たちが立ち向かわなければ、先祖たちが墓から蘇るでしょう。彼らは祖国のためにあれほど苦しんだのに、私たちはそのために何をしているというのでしょうか？ 正教のエラダ、その伝統、聖人たち、そして英雄たちに対して、ギリシャ人自身が戦いを仕掛けていているというのに、私たちは沈黙しているのです！ これは恐ろしいことです！ ある人にこう言った。「なぜ黙っているのですか？ あの人物がやっているようなことが、一体許されることでしょうか？」すると彼は答えた。「何を言うというのですか？ あの人、すっかり腐りきっているんですから。」「もし彼が腐りきっているのなら、なぜ黙っているのですか？ こいつを叩きのめせ！」などと言うはずがない。そんなことは一切なく、彼を放っておいているのだ！ ある政治家には、私は厳しく叱りつけた。「『私はこれに同意できない！』と言え。それが正直な態度だ！ まさか、自分だけが楽をしておいて、他はすべて荒らされても構わないというのか？」

もしキリスト教徒が証人とならず、悪に立ち向かわなければ、[破壊者たち]はさらに横暴になるだろう。もしキリスト教徒が立ち向かえば、彼らは考え直すだろう。しかし、今のキリスト教徒は闘士ではない。初期のキリスト教徒は手強い連中だった。彼らは世界全体を変えたのだ。ビザンチン時代でさえ、教会からたった一つのアイコンが持ち去られようものなら、民衆は抵抗した。キリストは、私たちが復活できるよう十字架にかかれたのに、私たちは無関心だ！ もし教会が国家との対立を避けるために沈黙し、もし大司教たちが、などの人道支援機関からの支援を受けているため、すべての人と良好な関係を保つために沈黙し、もし聖山の人々も経済的支援を打ち切られない

ようにするために沈黙するなら、²¹ 一体誰が声を上げるというのか？ あるイグメンにこう言った。「もし支払いを停止すると通告されたら、『それなら我々も宿泊の受け入れを停止する』と返答しなさい。²² そうすれば、彼らは首をかしげるだろう。」神学の講師たちも、水よりも静かにしている。「私たちは」と彼らは言う。「公務員です。給料がなくなったら、その後どうやって生きていけばいいのですか？」ちなみに、修道院は年金でも手出しをされた。では、なぜ私はこのささやかな地方行政機関（ΟΓΑ）の年金さえ受け取りたくないのか？²³ たとえ修道士が地方行政機関の保険に加入していたとしても、それはやはり不公平だ。もし彼が「無資産者」として加入しているのなら——その場合は確かに彼の名誉になるが、なぜ地方行政庁で彼を加入させる必要があるのか？ 修道士は高額な年金を放棄し、世俗を離れて修道院に入った——それなのに、また年金が支払われるのだ！ これでは、年金のためにキリストを裏切るようなことになりかねない！

— ゲロンダ、例えば、ある尼僧が何年か教師として働き、今は年金受給資格を持っている場合はどうすればよいのでしょうか？

— それならまだましだ。だが、こうしておく。もし彼女がこの年金さえどこかに捧げれば、キリストは彼女に立派な年金を与えてくださるだろう！

私たちに何が待ち受けているかが見えているからこそ、胸が痛むのです

年月は過ぎ去っていくが、なんと過酷な年月だろう！ 困難はまだ終わっていない。状況は激しく揺れ動いている。もし誰かが精神的に強くなければ、困難な状況に直面したとき、どう振る舞うだろうか？ 神は、成功できないような人間を創造されたわけではない。私たちは自分の中に愛の心を育む必要がある。そしてもし、神よどうかお守りください、本当に激動の時代が訪れたとしたら、果たしてどれだけの人が立ち続けることができるだろうか？ 1940年の戦争前、コニツァの²⁴ にある私の大工工房の隣には市場があり、そこへ村々からトウモロコシや小麦などが運ばれてきていた。貧しい農民たちがトウモロコシを売りに市場に運んでくると、一部の「金持ち」——とはいえ、銀行から多少の利息をもらっている程度の「金持ち」——は、それを足で蹴りながら「いくらだ？」と尋ねてきた。戦争が勃発し、彼ら自身もすべてを売り払わなければならなくなったとき、ある者は微笑みながら言った。「こんにちは！」——別の者は丁寧に「トウモロコシはありませんか？」と尋ねた。だから今は、すべてについて神に感謝しなさい。勇気を持って振る舞うよう努めなさい。少し気を取り直してください。私たちに何が待ち受けているかが見えているからこそ、胸が痛

²¹ 長老が言及しているのは、経済的援助（いわゆる「メトヒに対する支払い」）のことである。すなわち、1924年以降、ギリシャ政府が聖アトス山の修道院に対して毎年支払うことを約束した一定の金銭である。当時、アトス山の修道院は、オリーブ油、小麦、ワイン、その他の収入源であったメトヒを、小アジアからのギリシャ人難民に譲り渡した。

²² アトス山の共同生活を行う修道院は、巡礼者や観光客を無料で宿泊させている。——訳者注

²³ ΟΓΑ（Όργανισμός Γεωργικών Ασφαλίσεων）——農業に従事する人々のための保険組合。——訳者注

²⁴ コニツァーギリシャ北西部にある町で、長老が幼少期から青年期を過ごした場所である。——訳者注

むのです。ところで、他の国のキリスト教徒たちがどんな苦しみを耐えているかご存知ですか？²⁵ ロシアでは——強制労働に処されているのです！ これほどの困難です！ 霊的な本など、どこにあるというのでしょうか！ アルバニアについては言うまでもありません！ 食べるものもありません。教会も修道院も一つも残されていません。キリスト教の名前が聞こえるのを嫌がったため、名前さえも変えられてしまいました。アメリカでさえも、正教徒は少なく、あちこちに散らばっていますが、彼らがどれほど苦しんでいるかご存知ですか？ もし（近くに）正教会の共同体がないなら、礼拝に参加するためだけに、電車で何時間もかけてどこか遠くまで行かなければなりません。何か問題について相談するためだけに、聖山までやってくるのです！ [だからこそ]、ギリシャに蔓延しているこの弛緩した精神は、大きな不感謝なのです。

かつての共産主義諸国において、神はどれほどの聖人を現されることでしょうか！ 殉教者たち！ 彼らは死を覚悟しました。高い地位にありながら、神の律法に反する法律には同意しませんでした。「私は同意しない。私を殺してもいい、投獄してもいい」——彼らは、他の人々が道を踏み外さないようにと、そう言ったのです。しかし、私たちの国では、多くの人が強制されることなく、そのような無関心を露わにしています。もし彼らが、困難や戦争、あるいは苦難の時代とはどのようなものかを知っていたなら、物事を違った視点で見るとはどうでしょう。なぜなら、今はまるで何も起きていないかのようだからです。それはまるで、ある人が、例えば夏にオーストラリアからギリシャへ飛んできて、秋——オーストラリアに春が訪れる頃——にまた戻っていくようなものです。春から春へと移り変わり、冬を見ることはありません。冬がどのようなものかさえ知らず、悪天候など、そういったことを何も知らないのです。

—ゲロンダ、無関心な人をどう助ければよいのでしょうか？

—優しく彼に不安を抱かせ、考え込ませ、彼自身が助けを求めたいと思わせる必要があります。他人に水を飲ませるためには、その人が喉が渇いている必要があります。試してみてください。食べる気がない人に無理やり食べさせようものなら、吐き出してしまおうでしょう。もし相手が[何かを]望まないのなら、私はその人の自由や自由意志を奪うことはできません。

無知を言い訳にすることはできない

—もしかすると、ゲロンダ、無知ゆえに無関心な人もいるのではないのでしょうか？

— 無知なんてとんでもない！ 無知について話してやろう。ハルキディキ出身の言語学者は、聖山が何なのかさえ知らなかったのだ！²⁶ あるドイツ人の教師が彼に聖山のことを教えてくれ、二

²⁵ 1987年5月に発表された。

²⁶ ハルキディキは、ギリシャ北東部に位置する半島であり、面積は2,995 km²の行政区画である。ハルキディキ半島の3つの先端のうちの1つが、聖山アトスである。車でハルキディキ半島を端から端まで走破するには2時間しかかからない。つまり、ギリシャ文学者の無知は、トロイツェ＝セルギエフ修道院が何であるかを知らないモスクワ近郊の文学者の無知に例えることができる。残念ながら、そのような事例も存在するのである。——訳者注

人は一緒に訪れた。そのドイツ人はプロテスタントだったが、聖山にどれだけの修道院があるか、さらにはどの聖人の聖遺物がどこにあるかまで知っていた。このような無知に言い訳はあるだろうか？ 別のハルキディキの住民は、アメリカに住む知人から、私に助けを求めに来るよう勧められた。アメリカから！ これからまた話すが、フロリナから一人の男が私のカリヴァを訪ねてきた。²⁷ 「君はフロリナそのものから来たのか？」と私が尋ねると、「ええ、その通りです」と彼は答えた。「『そこの方々は』と私が言うと、『良い大主教がいらっしゃるでしょう』と。すると彼は『その方はどのチームでプレーしているんですか？』と尋ねてきた。サッカー選手だと思っていたのだ！ 彼はサッカーに夢中になりすぎて、自分の大主教さえ知らなかったのだ。少なくともカンディオティス（²⁸）くらいは誰もが知っているはずなのに。このような無知には言い訳の余地がない。

いや、今日の世界において、無知を正当化する理由などない。善意や愛が欠けているのだ。キリストを知るための善意を持つ者は、キリストを知り、[キリストに]立ち返るだろう。たとえその人のそばに神学者も修道士もおらず、神の御言葉を聞く機会がなくても、もしその人に善意があるならば、何らかの蛇や獣、稲妻、洪水、あるいはその他の出来事が、その人が回心するきっかけとなるでしょう。神は彼を助けてくださる。ギリシャのあるアナーキストの青年がドイツへ行った。そこで彼は、麻薬などに手を染めたため、矯正施設に収容された。何をしても彼には効果がなかった。矯正施設で誰かが彼に福音書を手渡した。彼はそれを読み、たちまち心変わりした。「ギリシャへ帰ろう、あそこには正教会がある」と決心した。故郷の村に戻ると、親戚たちが彼に結婚するようせがんだ。結婚し、子供が生まれた。若い父親は福音書を読み、教会に通い、祝日には仕事をしなかった。他の者たちは、彼がそのような生活を送っているのを見て、こう言った。「彼は福音書を読んだせいで正気を失い、頭がおかしくなったんだ。」妻はすぐに彼を捨て、子供を連れて去ってしまった。妻が去った時、彼は村にあったすべてのもの——農地、トラクター、所有していたものすべて——を置き去りにし、修行のために洞窟へと向かった。ある告解司祭が彼にこう言った。「まずは妻を見つけ、彼女とのことをすべて解決してから、自分がどうすべきかを決めるべきだ。」そこで、彼は妻を探すためにテッサロニキへ向かった。彼は、告解司祭がそう言った以上、キリストが妻を現してくれると信じていた。しかし、テッサロニキでキリストは妻を彼に現さなかった。ところで、彼はあるドイツ人グループと知り合い、彼らに信仰を教え、そのうちのひとりが洗礼を受けた。そのドイツ人たちは彼にアテネ行きの切符を買ってくれたが、そこでも妻の姿は見つからなかった。ドイツ人たちは再び彼に切符を買ってくれ、彼はクレタ島へ向かった。そこで何らかの仕事に就き、ある霊的指導者のもとを訪れた。その神父は彼の悩みを聞くと、「君の妻と子供は、もしかしてこんな風に見えないか？ 最近、一人の女性がやってきて、この辺りで働いているんだ」と言い、訪れた男に彼の妻を正確に描写した。「きっと彼女に違いない」と男は言った。霊的指導者は妻にそのことを伝えた。妻は夫を見るやいなや、呆然としてしまった。「あなた、魔術を

²⁷ フロリナ——ギリシャ北西部の都市。——訳者注

²⁸ アウグスティン（カンディオティス）（1907年生まれ）——1967年から1999年までフロリナ都主教を務めた。多くの霊的著作を著し、熱烈な説教者でもあったこの献身的な大司教の名は、ギリシャ全土で広く知られている。——訳者注

使って私を見つけたのね。あなたは魔術師だわ」と彼女は言った。夫が何か言う間もなく、彼女は夫を置いて逃げ去り、彼はまたしても妻を見失ってしまった。彼は私のことも知り、私のカリヴァを訪ねてきた。一度ノックをして待っていたが、私がドアを開ける間、少し脇に下がってお辞儀をしていた。彼の着ていた服はぼろぼろだった。彼は私にすべてを話してくれた。私には少し乾燥したイチジクがあったので、彼にあげた。「私には歯がない」と彼は言った。「私も」と、私は言った。「歯がないんだ。」「君は」と彼は尋ねた。「痛い？　僕は痛いよ。痛みからキリストの喜びが生まれるんだ。」「何かTシャツでもあげようか？」と私は尋ねた。「僕には」と彼は言った。「二枚あるんだ。暖かくなったら、一枚あげるよ。」私は言った。「いいか、すべてがうまくいき、妻と話し合いがまとまるまでは、自分の健康を大事にしてくれ。君には子供の責任もあるんだから。」なんと献身的なことか！　なんと素晴らしい信仰だろう！　しかも彼はまだ二十七歳にもなっていないかった。ましてや、修道生活についてどこで知ることができただろうか？　彼は全くの無知だったが、善良な心を持っていた。神が彼を助け、彼は福音の教えに則って深く成長したのだ。

だからこそ、私は今日、無知は決して言い訳にならないと言うのです。知的障害のある人や幼い子供だけが、その無知を言い訳にできるのです。しかし、今日では幼い子供でさえ、物事をすぐに理解するのです！　つまり、人が望めば、真理を知るための機会はたくさんあるのです。

第2章。

キリスト教徒であるという事実そのものが それ自体がすでに信仰の告白であるということ

—ゲロンダ、クリスチャンによる様々な抗議運動には何か意味があるのでしょうか？

—クリスチャンがそこにいること自体が、すでに信仰の告白なのです。祈りによってより大きな助けとなる人もいるかもしれませんが、その沈黙を悪用して、「あの人は抗議しなかった。したがって、彼らは我々の味方であり、我々に同意している」と言う者も出てくるでしょう。もし誰かが悪と戦おうとしない——つまり、信者たちを惑わす者たちを糾弾しようとする——ならば、悪はさらに大きくなるでしょう。そうすれば、信者たちは少しばかり勇気づけられるでしょう。そして、教会と戦う者たちにとっては、より困難になるでしょう。教会は彼らの遊び船などではなく、キリストの船なのです。こうした人々は非難に値する。彼らの唯一の関心事は、高額な給料を得ること、豪華な車を持つこと、娯楽に明け暮れること……そして彼らは、事実婚に関する法律を可決

し、²⁹ 中絶を合法化する。もちろん、神は悪が勝利することを許さないだろうが、今話しているのはそれではない。

そして、彼らはキリストを嘲笑するために、こうした神を冒瀆する映画を上映している。彼らはこう言おうとしているのだ：

「ほら、キリストはこんな存在だった！ 今こそメシアが現れる！」——そして、自分たちの「メシア」を現すのです。彼らはその方向へと物事を進めているのです。

—そして人々、ゲロンダ、これを信じて墮落してしまうのです！

—墮落している者がさらに墮落するのです。そして、彼らがそれを信じるのは、正当化の余地のないことを正当化し、自分の心をなだめたいからなのです。こうしたあらゆる神への冒瀆によって、彼らは道徳的な暴挙を正当化しようとしているのです。彼らはすでにあらゆる一線を越えてしまいました。信者たちは、映画『キリストの最後の誘惑』³⁰ が信仰を冒瀆しているとして訴訟を起こしましたが、検察官たちは「大したことではない！」と言っています。これほどの神への冒瀆など、かつて聞いたこともありません！ 私たちにとって、この冒瀆的な映画に対する抗議は、信仰の告白でした。しかし、もちろん、こうした一連の冒瀆行為からも良いことが生まれています。麦と稗が分けられ、世界はふるいにかけてられるかのように選別されていくのです。

—ゲロンダ、場合によっては、個人であれ集団であれ、身を守るべきであり、そうでない場合もあるのではないのでしょうか？例えば、あなたが異端者と呼ばれた時には反論されましたが、他の非難に対しては沈黙を守られました。

—それは聖なる父たちが言っていることであり、私が言っているわけではありません。他のいかなる非難も私の霊的生活に役立つのですが、異端であるという非難は、私をキリストから引き離してしまうのです。³¹

人々は眠らされようとしている

—ゲロンダ、世の中で起きているあらゆる出来事の中で、人々はどのようにして改心すればよいのでしょうか？

—改心したいと思う者は、些細なことから改心するものです。例えば、ランプが揺れたり、あるいは地震の際に本人が激しく揺さぶられたりすることで、その人は我に返るのです。一方、不信

²⁹ 1980年代半ばまで、ギリシャでは教会による結婚のみが公式に認められていた。——訳者注

³⁰ 1988年、マーティン・スコセッシ監督による冒瀆的な映画『キリストの最後の誘惑』が、アテネの映画館で短期間上映され、エラダ教会の信徒たちから激しい抗議の嵐を巻き起こし、上映禁止を求める声が上がった。長老は、当時ヘルニアによる痛みにも耐えながらも、アトス山の他の聖者たちと共にテッサロニキを訪れ、抗議集会に参加し、その姿で信者たちを鼓舞した。

³¹ 参照：聖イグナティオス（ブリャンチャニノフ）。『著作集』第V巻。オテチク。モスクワ：『信仰の規範』。42-43頁。

仰者は、戦争や何らかの災害が起きると聞くと、さらに悪くなり、「どうせ死ぬんだから、楽しもう」と言って、完全に放蕩にふける。しかし、昔は、無関心な人々でさえ、戦争が起きると知ると、我に返り、生き方を改めたものだ。今ではそのような人はごくわずかです。かつて、私たちの民は靈的に生きていたため、神は彼らを祝福し、聖人たちは奇跡的な方法で私たちを助けてくれました。そして、私たちは常に数で上回る敵に打ち勝ったのです。私たちは今、自分たちを正教徒だと言っていますが、残念ながら、多くの場合、「正教徒」という名ばかりを冠し、正教徒らしい生活を送っていないのです。

私は、大勢の信徒たちと共に社会活動に従事しているある靈的指導者に、「神を冒瀆する映画について何か知っているか？」と尋ねました。彼は私に、「何も知らない」と答えました。何も知らなかったのです。それなのに、彼自身は大都市で奉仕しているのです。彼らは、人々が動揺せず、娯楽にふけるように、人々を眠らせてしまっているのです。いいか、決して「戦争が起きる」とか「再臨がある」とか言ってはならない。だから準備をしなければならない、と。人々が決して動揺しないように気をつけろ！ まるで、死が自分たちを待っていることなどないかのように、「死の話はしないで、お祭りや洗礼式の話しましょう」と泣き叫び、そうして偽りの喜びを感じているあの老婆たちと同じだ。もし彼女たちが、近所に住んでいたおじいさんが昨日亡くなったこと、別のおじいさんが瀕死の状態にあり、やがて亡くなること、明後日には自分たちよりずっと若い人の追悼式があることを考えれば、死について思い巡らし、こう言うだろう。「私は懺悔をしなければなりません。靈的に備えなければなりません。なぜなら、もしかすると、私も間もなくキリストによって別の命へと召されるかもしれないからです。」そうでなければ、死が訪れ、準備ができていないまま彼らを連れ去ってしまうのです。また、誤った善意から、「異端者たちに、彼らが迷いの中にいるとは告げないで、彼らへの愛を示そう」と言う者たちもいます——こうしてすべてを同列に扱ってしまうのです。もし彼らがキリスト教の初期に生きていたなら、私たちには聖人が一人もいなかったでしょう！当時、キリスト教徒たちはこう言われていました。「ただ火に乳香を投げ入れさえすれば、キリストを否定するな。」キリスト教徒たちはこれを受け入れなかった。「投げているふりをすればいい」。受け入れなかった。「キリストのことは口に出さず、好きなところへ自由に行ってい」キリスト教徒たちはこれさえも受け入れなかった。しかし今日、人々が水で薄められているのを見て取れる。種が間違っているのだ。

— ゲロンダ、使徒パウロは、「*靈の実とは、愛、喜び……*」³²と語っていますが、これは喜びこそが正しい生き方の証であるという意味なのでしょうか？

— ええ、世的な喜びと神聖な喜びがあるからです。何かが靈的ではなく、不純であるとき、心には真の喜びや平安は宿りません。靈的な人が感じる喜びは、今日多くの人が追い求めているような喜びとは異なります。異なるものを混同してはいけません。聖人たちは、私たちが求めているような形の喜びを持っていたのでしょうか？聖母マリアは、そのような喜びを持っていたのでしょうか？キリストは——笑われたのでしょうか？聖人の中で、苦しみなくこの人生を全うした人は誰がいるで

³² ガラテヤ5:22。

しょうか？ 現代の多くのキリスト教徒が求めるような喜び——不快なことは一切耳にしたくない、動揺したり心の平穏を失ったりしたくないと願うような喜び——を、いったいどの聖人が持っていたのでしょうか？ もし私が、喜びを保つため、心の平穏を乱さないため、穏やかであるために動揺を避けているのなら、私は無関心な人間なのです！ 霊的な柔和さと、無関心からくる柔和さは別物です。ある人々は言います。「私はキリスト教徒だから、喜びと平静を保たなければならない」と。しかし、彼らはキリスト教徒ではありません。お分かりでしょうか？ それは無関心であり、世俗的な喜びに過ぎません。こうした世俗的な要素を内に抱えている者は、霊的な人ではありません。霊的な人は、全身が痛みそのものです。つまり、起きていることに心を痛み、人々のために心を痛めるのです。しかし、その痛みに対して、神からの慰めが与えられます。彼は痛みを感じつつも、自分の中に と神からの慰めを感じます。なぜなら、神が樂園から彼の魂に祝福を注ぎ、その人は神の愛によって喜びを得るからです。これこそが喜び、すなわち霊的な喜びであり、言葉では言い表せないほど深く、心を満たすものである。

この例はそれ自体が物語っている

— ゲロンダ、世俗の中で霊的な生活を送る人々は、不信者たちの前で断食していることを示すべきでしょうか？

— もし、私たちの教会によって定められた断食——水曜日、金曜日、数日間の断食——について言えば、そうすべきです。なぜなら、それは信仰の告白だからです。しかし、キリストへの愛のために、あるいは何らかの願いが祈りに聞き届けられるようにと、修業として行われる他の断食は、秘密裏に行われるべきです。

目的は、単に正教的に語ったり書いたりすることではなく、正教的に生きることにあるのです。だからこそ、説教者に個人的な経験がなければ、その説教は人々の心に届かず、人々を変えることもできないのです。

— では、ゲロンダ、もし聞き手や読者が善意の心を持っている場合はどうでしょうか？

— ああ、それならその人はすでに神の恵みを受けており、まさにそのおかげで益を得ています。しかし、善意を持たない人は、説教者の言葉を分析し始め、何の益も得られません。正教的に考えることは簡単ですが、正教的に生きるためには努力が必要です。

ある時、ある神学者が説教の中で、必要に迫られていたため、人々に献血に行くよう呼びかけました。そして実際、多くの人々がその説教に動かされ、大量の血液を献血しました。しかし、彼自身は、率直に言って血液が余るほどあったにもかかわらず、一滴も献血しませんでした。人々は惑わされてしまいました。「私は——と、その神学者は当時人々に言った——自分の説教によって人々を献血へと駆り立てた。それは、まるで私が誰よりも多くの血液を献血したのと同じことだ！」そうして彼は自分の考えを納得させていた。しかし、説教をするよりも、ひっそりと自ら少しの血液を献血しに行ったほうが、彼にとっては良かったはずだ！

尊厳とは生き方にある。教会とは全く縁のないある男が、私にこう言った。「私は『右派』だ。」「だが、十字を切らないのなら、それには何の意味があるんだ？」と私は彼に答えた。「十字

を切らないなら、その手が『右』と見なされることに何の意味があるというのか？ 十字架の印をしない左手と何が違うというのか。どう考えても、左手もまた十字架の印をしていないのだから。もしあなたが『右派』でありながら十字架の印をしないのなら、左派と何が違うというのか？ 目的は、あなたが霊的な人間となり、キリストに近づいて生きることにある。そうすれば、他の人々をも助けることができるのだ。」

もし人が正しい生活を送っているなら、その行いはそれ自体で語ってくれる。ある町に、司祭も主教も、すべての人を非難するプロテスタントが住んでいた。一方、その近くの修道院では、ある修道士が修行に励んでいた。ある日、ある無神論者がそのプロテスタントに尋ねた。「まあいい、君はすべての主教や司祭を非難している。では、この修道士についてはどう思う？」——「その修道士については、——と彼は言った——彼を認めている。なぜなら、彼は彼らとは違うからだ。」信仰を持つ人は、どこにしようとも、自ら正しい生き方をしているなら、いかに他者を助けることか！ 覚えているのだが、私の知人の警察官の一人が、[ユーゴスラビアとの]国境で勤務していた。[向こう側には]セルビア人の共産党員がいたが、ただの党員ではなく、最も無神論的で、党内で最も信頼されている幹部たちだった。司祭たちが国境を越えてくる際、その警察官は彼らの手に口づけをしていた。共産党員たちはそれに気づきました。「ギリシャ人の警察官が、セルビア人の神父たちの手に口づけをしている！」これは共産党員たちに大きな印象を与え、彼らは信仰について考えさせられました。

そして、何らかの責任ある地位にありながら、キリスト教の原則に忠実であり続ける人々が、いかに他者を助けていることか！ だからこそ私も、ある「大物」たちが訪れる際には、彼らに会って手助けしようと努めている。なぜなら、彼らの模範は他者に非常に良い影響を与えるからだ。私が知っているある元帥は、まさにその模範です。彼が何をするにしても、すべては内面から、心から湧き出るものであり、表面的なものではありません。他の人々は彼を見て、考えを改め、改心するのです。

かつては、地方の貴族たちにも善良な心根があり、信仰心がありました。ある都市で、ある高貴な貴婦人がある国会議員に何と言ったかご存知ですか？ 彼女は夫と共に夕食会に出席していました。その時は聖母被昇天の断食期間中でしたが、肉や魚が供されていたのです……その貴婦人は断食中だったため、食べませんでした。議員はそれに気づき、「体力の弱い人や旅人は断食をしません」と言いました。「ええ、もちろん」と彼女は答え、「特に車に乗って旅をしている人はなおさらです」と言いました。結局、彼女は肉料理には一切手をつけませんでした。昼食会には、他の出席者の中に一人の聖職者もあり、彼は彼らに向けて歓迎の挨拶を述べた。「皆様と共にこの場にいられることは、私にとってこの上ない光栄です」などと、延々と話し続け、山ほどの賛辞を並べ立てた。すると、その貴婦人の夫が彼を遮って言った。「『人の子らよ、君主たちに頼ってはならない。彼らには救いはない……』³³」というの、その聖職者は彼らの前で媚びへつらおうとしていたからだ。また別の時、同じ女性がとある大学の神学教授にこう言った。「些細なことにこだわ

³³ 詩編145:3。

ったり、試験で神父たちを落第させたりしないでください。彼らが試験に合格できるよう努めてください。なぜなら、教区には司祭が不足しているのですから！」私が言いたいのは、かつては地元の貴族たちが教会を支持し、民衆にとっての模範であったということです。

今日、人々に良い影響を与えるのは、私たち自身のキリスト教徒としての模範と、私たちのキリスト教的な生き方である。キリスト教徒は、霊的な勇猛さと高潔さ、そして犠牲の精神によって際立っていなければならない。だからこそ、私は信徒たちにこう言うのだ。「キリストを愛し、謙遜を保ち、自分の義務を果たしなさい。そうすれば、キリストが人々の前であなたの美德を明らかにしてくださるだろう。」美德には、「その人がどこにしようとも、その人そのものを明らかにする」という法則があります。たとえその人がキリストのために隠れたり、狂人のふりをして身を隠したりしたとしても、美德は、たとえ後になってからであっても、その人を明らかにするでしょう。そして、その人が蓄えてきた宝は、その時になって初めてその全貌を現し、再び多くの魂を助け、おそらくその時には、より大きな助けとなるでしょう。

神は私たちが忍耐してくださっている

今、神は起きていることを容認しておられます。それは、邪悪な者が言い逃れできないようにするためです。場合によっては、神ご自身が直ちに介入されますが、他の場合には、神は待ち続け、すぐには解決策を示されません。神は人々に忍耐と祈り、そして闘いを求めておられます。なんと神は高潔な方でしょう！

別の人を例に挙げよう。あの[内]戦でどれほど多くの人々を殺したか、³⁴、それなのに今も生きている！来世で、神は彼にこう言われるだろう。「私は、善良な人よりも長く、お前を生かしておいたのだ。」そのような人には、罪を軽減する情状酌量の余地などない。

—ゲロンダ、なぜ時々、そのような人々が重病になっても死なないのでしょうか？

—おそらく、彼らには重い罪があるため、死なないのでしょう。神は、彼らが悔い改めるのを待っておられるのかもしれませんが。

—では、彼らに苦しめられている人々はどうなるのでしょうか？

—罪がないのに苦しんでいる人々は、貯蓄通帳に積み立てているのです。罪のある人々は、借りを返しているのです。

—ゲロンダ、これはどういう意味ですか。「*悪意ある者や魔術師たちは、より悪いことへと成功し、人を惑わし、また自らも惑わされる*」と。³⁵

—見てごらん。ある種の利己心を持つ人々がいて、神は彼らを頭ごなしに叩いて、もっと低いところへ降りるようにさせる。他の人々はもう少し利己心が強く、神は彼らを頭ごなしに叩いて、さらに低いところへ降りるようにさせる。しかし、悪魔的な高慢さを持つ者たちには、神は手を出

³⁴ 1946年から1949年にかけて、ギリシャ政府軍と共産主義反乱軍との間で起きた内戦。——訳者注。

³⁵ テモテへの手紙第二 3:13。

さない。こうした人々は繁栄しているように見えるかもしれないが、それは一体どのような繁栄だろうか？ それは黒い繁栄だ。そして彼らは単に下へ落ちるだけでなく、まさに深淵へと落ちていく。神よ、どうかお守りください！

義人の守り

— ゲロンダ、あるステヒラにはこう歌われています。「義なる怒りに駆られて。」³⁶ どのような怒りや憤りが最も義なるものなのでしょう？

— 他人が傷つけられているのを見て、真の痛みから叫び、怒る——それが「最も義なる怒り」です。自分自身が傷つけられた時に怒るのは、不純な怒りです。誰かが聖なるもののために苦しんでいるのを見れば、それはその人に神への熱意があるということです。そして、キリストのために狂人となった者も、このように見分けることができる。例えば、イコンを取り出して、それを彼の目の前に逆さまに置くと、キリストのために狂人となった者はすぐに飛び上がるだろう！これが狂人に対する「テスト」である。つまり、神にかなった義なる憤りがあり、人間において正当化されるのはそのような憤りだけである。モーセが民が金の子牛に犠牲を捧げているのを見たとき、彼は憤り、神が彼に与えた戒めの石板を地面に投げつけ、それらは粉々に砕けた。³⁷ 大祭司アロンの孫であるピネハスは、二度の殺人を犯した。それにもかかわらず、神は、彼の家系からイスラエルの祭司たちが生まれるよう命じられたのだ！ ピネハスは、イスラエル人のザムブリが、モーセとすべてのイスラエル人の目の前で、ミディアン人の女ハズビと不義を犯しているのを見て、我慢できなくなった。彼は民の集まりの中から立ち上がり、二人を殺した。そうして神の怒りは収まった。もし彼が二人を殺さなかったならば、神の怒りはイスラエルの民全体に下ったであろう。³⁸ なんと恐ろしいことか！ 私は、詩篇に「フィネアスは怒りを鎮め、殺すのをやめた」という一節を読むたび、³⁹ 何度もその名に口づけをする。また、キリストも、神殿の境内において牛や羊、鳩が売られているのを見、両替商たちが金を両替しているのを見ると、鞭を取り、彼らを追い出した。⁴⁰

霊的な人が憤り、個人的な事柄において自分自身を守ろうとする時、それは完全に利己的であり、悪魔の仕業である。そのような人は、外側から悪魔の影響を受けているのだ。もし誰かが傷つけられたり、いじめられたりしているなら、他の人がその人のために立ち上がらなければならない。そして、それは正義のために立ち上がるべきであり、自分の個人的な利益のためではない。自分自身のために怒りをぶつけるのはふさわしくない。しかし、重大な霊的な問題、すなわち私たちの

³⁶ 第1回全地公会議の聖なる教父たちへの礼拝におけるスティヒラ。

³⁷ 出エジプト記 32章1～20節を参照。

³⁸ 民数記 25:1-15 参照。

³⁹ 詩編105篇30節。

⁴⁰ ヨハネによる福音書 2章14～15節を参照。

信仰や正教に関わる事柄を守るために、加害者に立ち向かうのは別問題だ。それがあなたの義務である。他者のことを思い、彼らを守るために立ち向かうことは、愛から行われる行為であるため、清らかな行いである。

私がシナイ山へ行ったとき、1～2週間に一度、聖体拝領のために修道院へ下りていった。⁴¹ ディケオス⁴² 彼はとても質素な人だった。ある日、彼は私にこう言った。「いや、毎週はダメだ。修道士は年に4回、聖体拝領をすべきだ。」当時、彼らにはめったに聖体拝領を行わないという慣習があった。「そして、クコリも身につけてはいけない」と彼は私に言いました。私はカミラフカの上にクコリを被っていましたが、彼らは厳粛な場合のみクコリを身につけていたのです。「お許しを」と私は答え、クコリをスカーフのように肩にかけました。それ以来、この件についてはあまり気にしなくなりました。そんなことで口論するわけにもいきませんから。しかし、聖体拝領のたびに私は準備を整え、教会へ向かった。司祭が「神への畏敬と信仰をもって近づきなさい……」と宣言すると、私は頭を下げてこう言った。「わがキリストよ、あなたがたは、私があなたの至聖なる秘跡をいかに切実に必要としているかをご存知です。」そして、私は自分の中にこれほどまでに[はっきりと]変化を感じていたため、もし聖体拝領をしていたなら、この変化を経験できたかどうか、確信を持って言うことはできない。数ヶ月が経ち、私のためにシナイ山までやって来た4、5人の若者たちが修道院を訪れた。彼らにも聖体拝領を控えるよう言われていた。そこで私がこの件について話し、問題は解決された。

冒瀆者たちへの対抗

— ゲロンダ、聖書には、聖霊への冒瀆は赦されない、とあります。⁴³ これはどのような冒瀆なのでしょう？

— 聖霊への冒瀆とは、そもそも神聖なものに対する軽蔑のことです（もちろん、その人が正気である場合に限ります）。その場合、その人は罪を犯していることになります。例えば、ある人が私に「お前の神々と一緒に消え失せろ……」と言ったとき、私は彼を突き飛ばし、しっかりと揺さぶりました。なぜなら、それは神への冒瀆だったからです。あるいは、例えば、二人が教会の前を通りかかったとします。一人が十字を切って、もう一人に「おい、君も十字を切ってよ……」と言うと、相手は反発して「うるさいな、お前は誰だ、俺にどこで十字を切ればいいのか指図するなんて!」と言います。このような軽蔑こそが冒瀆です。したがって、敬虔な人間に冒瀆などあり得ないのです。そして、恥知らずさもまた神への冒瀆である。恥知らずな者は、自らの墮落を正当化するために、例えば福音の真理などを歪曲したり踏みにじったりする。彼は真理を尊ばず、現実を尊

⁴¹ 注12を参照。

⁴² シナイ山の聖エカテリーナ修道院では、長老評議会の議長であり、大司教が不在の間にその職務を代行する者を「ディケオス」と呼ぶ。

⁴³ マタイによる福音書12章31節を参照。

ばず、意識的にそれをくしゃくしゃに丸め、聖なるものを泥の中に踏みつける。そして次第に、それがその者の常態となっていく。やがて神の恵みは彼から離れ、その人は悪魔の影響を受けるようになる。もし彼が悔い改めなければ、一体どこまで事態は進むことか、！... 神よ、どうかお守りください！.....もし誰かが怒りのあまり、聖霊さえも冒瀆したとしても、その冒瀆は許されないものではない。なぜなら、その人は自分が口にした冒瀆を信じてはいなかったからだ。彼は、その瞬間、怒りのあまり自制心を失ったがゆえに、それを口にしたのである。そして、彼もまたすぐに悔い改める。しかし、恥知らずな者は、自らの墮落を正当化するために嘘を正当化する。自らの墮落を正当化する者は、悪魔を正当化しているのだ。

—では、ゲロンダ、彼はどのようにして自分の墮落を正当化するのですか？

—彼は10年前に別の件で言われたことを思い出し、それを自分の言い訳の例として持ち出すかもしれない。その瞬間、悪魔——最も優れた弁護士——でさえ、そんなことを思いつくことはできなかっただろう。

—そんな人は、どんな気持ちになるのでしょうか？

—何を感じるか？ 彼には決して安らぎがない。たとえその人が正しく、自分自身を正当化しようとしているとしても、安らぎはない。ましてや、彼が間違っていて、恥知らずな方法で自分を正当化しているならなおさらだ。ですから、私たちは可能な限り、恥知らずさや軽蔑を恐れるべきです。それは神聖なものに対してだけでなく、私たちの隣人に対してもです。なぜなら、私たちの隣人は神の御姿だからです。恥知らずな人々は、聖霊への冒瀆の第一段階にあります。第二段階には、神聖なものを軽蔑する者たちがいます。第三段階には悪魔がいます。

—ゲロンダ、教会や修道生活などに対して悪口を言われたら、どうすればよいのでしょうか？

—まず、例えばあなた個人について誰かが悪口を言ったとしても、それは恐れることはありません。考えてみてください。キリストご自身でさえ、キリストであるにもかかわらず侮辱されましたが、彼は反論しませんでした。ましてや、罪人である私が何者だというのでしょうか？もし私個人を侮辱しようとしたとしても、それは私を全く気にかけることはありません。しかし、修道士としての私を侮辱する時、それは修道制度そのものへの侮辱でもあります。なぜなら、私は修道士として、その制度と切り離せない存在だからです。その場合は、黙ってはいけません。そのような時は、侮辱する人に少し話をさせ、その後で一言二言伝えるべきです。ある時、バスの中で一人の女性が司祭たちを罵っていました。私は彼女に言い終えるまで待つてから、彼女が黙ったところでこう言いました。「私たちには司祭たちに対する不満はたくさんありますが、神が彼らをパラシュートで空から降ろしたわけでもないでしょう。彼らも人間であり、人間としての弱さを持っています。でも、一つ教えてほしいのですが、あなたのような母親——化粧を厚く塗り、爪はハヤブサのように尖っている——が、どんな子供を産み、どうやって育てるというのですか？そして、もし神父や修道士になったとしたら、その子はどんな人間になるというのか？」別の時、私がアテネからヤニナへバスで向かっていた時のことを覚えている。ある男が、当時何か問題を起こした大司教を、道中ずっと非難し続けていた。私は彼に一言二言言い、その後は祈っていた。彼は相変わらず言い続けていた。ヤニナに到着してバスを降りた時、私は彼を脇に呼び寄せて言った。「君、私が

誰だか知っているか？」——「いいえ」と彼は答えた。「それなのに、なぜ君は——と私は言った——座ってそんなことを言うんだ？　もしかすると、私は君が罵っているあの人より何倍も悪い人間かもしれないし、あるいは、私は聖人かもしれないぞ？　どうして私の目の前で、一般の信徒ですらそんなことをするなんて想像もできないようなことを平然と口にできるんだ？　改心するよう努めなさい。さもないと、神から頭を思いっきり叩かれることになるぞ！　もちろん、君のためを思っていることだ。」見ると、彼は震え始めた。しかし、周囲の騒ぎから察するに、他の人々にもその意味が伝わったようだ。

[時々]、聖なるものが侮辱されているのを見ても、周囲は黙っていることがある。ある時、聖山から出発する際、船上で、精神病院から聖山へ逃げ出してきたある不幸な男に出会った。彼は絶え間なく叫び、この世の権力者たち、政府、医師たち……を罵り続けていた。「何年も——」と彼は叫んだ。「俺は電気ショックや薬で苦しめられてきた。お前たちはいいだろう！　欲しいものは何でも手に入るし、車だって持っている！　でも俺は12歳の時、母に島へ送り出されて、それ以来もう25年——精神病院から精神病院へと転々としてきたんだ！」彼はあらゆる政党を罵り、やがてはキリストや聖母マリアまでも冒瀆し始めた。私は立ち上がり、「もうやめろ！　ここには当局の代表者が一人もいないのか？」と言った。すると、彼の同伴者——おそらく警察官だろう——が動揺し、彼を少し制止した。その哀れな男は、叫び、罵りながら、自分の悲惨な境遇をすべて吐き出した。そして、私は彼を気の毒に思った。その後、彼は近づいてきて私の手に口づけをし、私も彼に口づけをした。彼の言うことは正しかった。私たち皆——程度は違えど——この事態に対して責任があるのだ。そして、私もまた、この哀れな男の冒瀆の原因の一つだった。もし私が霊的な人間であれば、彼を正気に戻せたはずだ。

ファラシオの人々は、⁴⁴ 交換の際、⁴⁵ ギリシャへ向かう船に乗っていたとき、なんと失望したことか！　二人の船員が互いに罵り合い、キリストと聖母マリアを冒瀆していた。ファラシオの人々はこれを大いに快く思わなかった。ギリシャ人であり、キリスト教徒でありながら、キリストと神の母を冒瀆するとは！　彼らは神を冒瀆した者たちを捕らえ、海に投げ込んだ。幸い、彼らは泳ぐことができ、助かった。たとえある人間が侮辱されていても、我々は彼を守る義務がある。ましてやキリストとなればなおさらだ！　ある日、一人の少年が私のカリヴァを訪ねてきた。彼は足を引きずっていたが、その顔は輝いていた。「ここには——」と私は思った。「神の恵みがこれほど輝いているのだから、何か特別な事情があるに違いない！」「元気かい？」と尋ねると、彼は自分に何が起きたかを話してくれた。天井に届くほどの大男が、キリストと聖母マリアを冒瀆していたので、その少年は彼を止めようと飛びかかったのです。その大男は少年を地面に叩きつけ、踏みつけ、足

⁴⁴ ファラスの住民——カッパドキア（小アジア、現在のトルコ領）にある大きな集落。聖アルセニオス・カッパドキオスおよび福者パイシオス長老の故郷である。——訳者注

⁴⁵ 1924年の住民交換を指す。この交換により、小アジアのギリシャ人はギリシャへ移住し、ギリシャに住んでいたトルコ人はトルコへ帰還した。——訳者注

を不具にしてしまい、それ以来、そのかわいそうな少年は足を引きずるようになったのです。殉教者よ！ 殉教者や殉教者たちが、一体どれほどの苦難を耐え抜いてきたことか！

「ゲロンダ、軍隊では、敬虔な若者たちの中には、悪口を言う者たちと接するのが難しいと感じる者もいます。彼らはどうすればよいのでしょうか？」

— 理性を働かせ、忍耐が必要です。神が助けてくださいます。私たちと一緒に従軍していたある無線通信士——元医師でしたが——は、不信仰者で、神を冒瀆する者でした。彼は毎日、司令部にやって来て、私に洗脳を試みていました。ダーウィンの進化論やその類のくだらない話を語ってきましたが、そのすべてが神への冒瀆に満ちていました。しかし、ある出来事をきっかけに、彼は何かを悟った。私たちは彼と一緒に任務に就いていた。大きなラバ一頭に、無線機と担架を積んでいた。ある非常に滑りやすい下り坂で、私はラバの尻尾を掴み、医師は手綱を引いていた。すると、ある瞬間、担架がラバの耳にぶつかり、ラバは——バシッ！——と後ろ足で私を激しく蹴り、私は吹き飛ばされた。すぐに意識を取り戻し、自分が歩いていることに気づいた！ 覚えているのは、「わが主よ！」と叫んだことだけだった。それ以外は何も覚えていない。私の体には蹄鉄の跡が残っていた。ここだ——胸全体が真っ黒になっていた。それほど強くラバに蹴られたのだ。医師は、私が歩いているのを見て、目を丸くした。私たちは旅を続けた。少し先で、医師が石につまずいて転倒し、起き上がれなくなってしまう。すると彼は叫び始めた。「わが主よ、わがキリストよ！」彼は敵に捕まることを恐れていた。「今、みんなが私を見捨ててしまう。もう終わりだ。私はどうなるのか、誰が助けてくれるというのか！」——「心配するな」と私は言った。「私は君と一緒にいる。もし私が捕まれば、君も捕まるだろう。」すると、その哀れな男は考え込んだ。「アルセニイは⁴⁶ ロバに蹴られても何事もなかったのに、私はほんの少しつまずいただけで、もう歩けなくなってしまう！」やがて彼は立ち上がったが、足を引きずっていたので、私が彼の歩行を手伝った。他の者たちは先へ進んでいった。彼は教訓を得て、それ以来、分別がついた。以前は毎日神を冒瀆していたが、危険にさらされた瞬間、「わが御母よ、わが御母よ！」と叫び始めた。すぐに御母のことを思い出したのだ。一方、別の男は軍隊でオートバイ兵だったのだが、二度も足を骨折しながらも、神を冒瀆し続けていた。

「彼には何も言わなかったのですか、ゲロンダ？」

— 彼に何を言うというのですか？ 私は何も言いませんでしたが、彼は、私を傷つけるためにわざと、キリストと聖母を罵り続けていました。私は後でそのことに気づき、ただ祈るだけでした。そして、なんと——以前は彼も他の者たちも、理由もなく汚い言葉を吐いていましたが、その後、何かがうまくいかず悪態をつこうとしたとき、彼らは自分の舌を噛みしめるようになったのです！ もし恥知らずな人が汚い言葉を吐いたり、神を冒瀆したりするなら、何かで忙しいふりをして聞こえないふりをし、自分では祈り続けるほうがよい。なぜなら、もし彼があなたが彼を監視していることに気づけば、彼は絶え間なく汚い言葉を吐き続けるかもしれないからだ。そして、そのようにして、あなたは彼が不浄な霊に取り憑かれる原因となってしまうのだ。しかし、下品な言葉を吐く

⁴⁶ 長老の俗名。

のが恥知らずではなく、良心を持つ人で、悪い習慣からそうしているだけなら、あなたは彼に何かを言ってもよい。だが、彼に良心があるだけでなく、利己心も十分にある場合は、注意が必要だ。彼に厳しく言うのではなく、できる限り謙虚に、そして心を痛めながら語りかけなさい。聖イサアクは次のように述べている。「あなたの美德の力で、あなたと争う者たちを戒めよ……そして、あなたの口からの柔和さと平和をもって、彼らの口を封じよ。抑制のきかない者たちには、あなたの徳ある行いで戒め、肉欲に溺れる恥知らずな者たちには、あなたの目の節制をもって戒めよ。」

47

第3章。

「すべて清きものは清きものによって……」⁴⁸

霊的な人は「火を食う者」である

— ゲロンダ、今日、神から遠く離れて生きる人々に惑わされることなく、社会の中で正しく、キリスト教徒らしく生きるにはどうすればよいでしょうか？

— 神から離れて生きている人たちに、どうして惑わされるのでしょうか？ もし6人か8人の兄弟姉妹がいる家族の中で、1人か2人がサタンに誘惑されたとしても、その罪深い生き方が残りの人々を惑わすことなどあるのでしょうか？

— いいえ、彼らは兄弟だから、そのことを心配するでしょう。

— ほら、見ろ。悪は私たちの内にあるのだ。私たちには愛がないから、すべての人を兄弟として感じることができず、彼らの罪深い生活に誘惑されてしまうのだ。私たちは皆、一つの大きな家族であり、互いに兄弟なのです。なぜなら、すべての人間は神の子供だからです。もし私たちが、すべての人と兄弟であることを真に自覚しているなら、罪の中で生きる人々のことを痛ましく思うでしょう。そうすれば、彼らの罪深い生活に誘惑されることはなく、むしろ彼らのために祈るようになるのです。

つまり、もし私たちが誘惑されるなら、悪は外にあるのではなく、私たちの中にあるのです。誰かに誘惑されたとき、自分自身にこう言い聞かせましょう。「あなたは一体、何人の人を誘惑し

⁴⁷ 「柔和さと穏やかさをもって、不遜な者たちの恥知らずな口を塞ぎ、彼らを黙らせよ。放蕩な者たちには、あなたの高潔な生き様をもって非難し、恥知らずな者たちには、あなたの節制された眼差しをもって非難せよ。」参照：アッバ・イサアク・シリア人。『著作集』。セルギエフ・ボサド、1911年。第56説教。281頁。

⁴⁸ テトス1:15。

ているのか？ 神の名において、なぜあなたは自分の兄弟を容認しないのか？ そして、あなたがしていることすべてを、神はどのようにあなたを容認しておられるのか？」と。神について、至聖なる聖母マリアについて、そして地上のすべての人々を見守っている天使たちについて考えてみてください。彼らはまるでバルコニーに立っているかのように、下にある広場を見下ろし、そこに集まっているすべての人々を見ているのです。ある者は盗みを働き、ある者は罵り合い、またある者は肉欲の罪を犯している——といった具合です。彼らは一体、どうしてそれらを容認できるのでしょうか？ 彼らはこの世のあらゆる悪と罪を容認しているのに、私たちは自分の兄弟さえ容認できないのです！ これは恐ろしいことです！ ...

— ゲロンダ、使徒パウロの「私たちの神は焼き尽くす火である」という言葉はどういう意味でしょうか？⁴⁹

— もしストーブに紙やゴミを投げ込んだら、それらは燃え尽きてしまうのではないのでしょうか？ 霊的な人についても同じです。悪魔が彼の中に投げ込むものは何でも、燃え尽きてしまうのです。「火を食らう者」！ 人の内に神聖な炎が燃え上がれば、すべてが燃え尽きてしまうのです。もはや邪悪な思いはまとわりつかない。つまり、悪魔は絶えず邪悪な思いを投げつけ続けるが、霊的な人は「火そのもの」であり、それらを焼き尽くすのだ。そしてやがて悪魔は疲れ果て、[攻撃]をやめる。だからこそ、使徒パウロはこう言うのだ。「清い者には、すべてが清い。」清い者にとってはすべてが清く、不浄なものは何一つない。たとえ清い者を泥沼に投げ込んだとしても、彼らは清いままである。それは、どこに落ちようとも、明るく清らかなままである太陽の光のようなものだ。

霊的な人は、聖なる者と触れ合うことで——その言葉の良い意味において——変容するが、肉的人人からは影響を受けない。彼はその人を見て、その人のために苦しみはするが、自分自身は傷つかない。霊的な状態の中間にいる人は、霊的な人からは善へと変わり、肉的人人からも変わるが、それは悪へと向かう。肉的人人は聖人を理解できず、肉的人人からは心を乱される。そして、もし悪霊に取りつかれた者が聖人を見て逃げ去るなら、肉的人人は聖人のもとへ行き、彼を誘惑し、惑わそうとする。ソドムの住民のような状態にまで達した者は、天使たちによってさえも誘惑される。⁵⁰ 謙虚な人は、たとえ霊的に未熟であっても、霊的な清さを持ち、天使と親和性があるため、神の天使と悪魔を見分けることができる。一方、利己的で肉欲に囚われた人は、狡猾な悪魔に容易に惑わされるだけでなく、自らもその狡猾さを広め、自身の肉欲によって他者の肉欲を煽り立て、弱い魂を自らの霊的な「細菌」で汚染してしまうのである。

— ゲロンダ、すべてが清らかに見えるその境地には、どうすれば到達できるのでしょうか？

⁴⁹ ヘブライ人への手紙 12章29節。

⁵⁰ 参照：創世記19章1～5節。

— 神の恵みがそこに宿るためには、心を清めなければなりません。「神よ、私のうちに清い心を造り給え……」、⁵¹ ——詩篇にはそう記されていますね。心が——男性であれ女性であれ——清められれば、そこにキリストが宿ります。そうすれば、人々は他人を誘惑することも、自ら誘惑されることもなく、他者に神の恵みと畏敬の念を伝えるようになります。注意深く、自らの霊的な清らかさを守る人は、神の恵みも守り抜き、すべてを清らかに見るだけでなく、不浄なものさえも善のために活用します。不浄なものでさえ、その人の善なる霊的な取り組みにおいて、有益なものへと変容するのです。不要な紙は、清潔なナプキンや糊、ノートに再生し、青銅の破片は燭台などに作り変える。逆に、偽りを受け入れ、偽りの心で考える人は、善さえも悪に変えてしまう。まるで弾薬を製造する工場のように——たとえ金であっても、弾丸や砲弾の薬莢にしてしまう。なぜなら、その工場の機械はそう仕組まれているからだ。

もし誰かが罪に屈し始めると、その人は内側から黒ずんでいき、魂の目が濁り、物事がぼやけて見えてくる。やがてその人は罪に汚され、罪に縛られてしまう。たとえ清らかなものであっても、不浄なものとして見えてしまうのだ。例えば、貞潔で清らかな生活を送る若者たちがいることを信じられない人々がいる。「今日では、そんなことはあり得ない」と彼らは言う。哀れな彼らは罪に深く沈み込みすぎて、すべてを罪深いものとしてしか見ることができないのだ。角の生えた者たちと付き合う者たちは、⁵²、神の天使たちと親しくしている他の人々が存在することなど、想像すらできない。しかし、豚にユリへの畏敬の念を求めるべきではない。何しろキリストもこう言われたのだ。「……あなたがたの真珠を豚の前に投げ捨ててはならない。豚がそれを踏みつけ、……」⁵³ / それゆえ、霊的に、清く生きる者は、非常に慎重でなければなりません。世俗の人々との付き合いにおいて決して自由を許さないだけでなく、彼らに霊的なことに干渉させることも許してはなりません。そうすることで、自分自身を傷つけず、彼らを傷つけることもないからです。なぜなら、世俗の人々の掟は異なり、カノナルク⁵⁴ も異なり、彼らは聖なる世界と香水を区別することができないからです。

— ゲロンダ、キリストの近くで生きたいと願う者を、外的な誘惑が妨げることはあるのでしょうか？

— いいえ。私たちをキリストから引き離すことができるのは、私たちの霊的でない生活だけです。角のある悪魔はまさにそれを行っており、誘惑を生み出し、悪意をまき散らし、人々に対して時には残酷に、時には狡猾に戦いを仕掛けてくるのです。

⁵¹ 詩篇50:12。

⁵² タンガラシュカ（ギリシャ語：ταγκαλάκι）——これは長老が悪魔につけたあだ名である。——訳者注

⁵³ マタイによる福音書 7章6節を参照。

⁵⁴ カノナルク——聖歌隊が次に歌うべき曲を告げる聖歌隊員。ここで長老が言わんとしているのは、罪深い行いにおいて「カノナルク」の役割を果たすのは悪魔であり、悪魔が人間に何をすべきかを指示しているということである。

キリストは私たちを愛しておられ、私たちが御心に従って生きる時、キリストは私たちのそばにいてくださいます。ですから、誘惑が芽生えているのを見ても、恐れったり、パニックに陥ったりしてはいけません。もし人が、起きていることに霊的な態度で向き合わなければ、一日たりとも喜びを持つことはできないでしょう。なぜなら、悪魔は人の弱点を突いて、その人を動揺させるために絶えず誘惑を生み出し続けるからです——今日はこれ、明日はあれ、明後日はまた別の誘惑と。

自分たちで誘惑を作り出さないようにしましょう

可能な限り注意深くあり、人にとって誘惑となるような状況が生まれるきっかけを与えないようにしましょう。悪意ある者に対して隙を見せてはいけません。なぜなら、思考が傷ついた魂はさらに傷つき、その後、自分を正当化するための口実を探してしまうからです。そうなれば、私たちは一方で築き上げつつ、他方で破壊することになってしまいます。

ある日、数人の若者、現代の若者たちが私のカリヴァを訪ねてきました。私たちは彼らと話をしました。その日、私は聖山を出発しなければなりませんでした。彼らはそれを知ると、自分たちも出発する準備を始めました。船の上で、彼らは私のところに来て、隣に座りました。彼らは大きな興味を持って、私に様々な霊的な質問を投げかけてきた。しかし、同乗者の中には、この状況を誤解し、私たちを強い疑いの目で見つめる者もいた。もし、私たちの会話が誤解されることを予見できていたなら、私は適切な措置を講じるよう配慮していただろう。

この世は狡猾だ。誘惑を生み出さないよう努めなければならない。我々は、適切な対策を講じることができない事柄や、経験不足な事柄については責任を負わない。しかし、不注意から問題を引き起こしたのであれば、神からの報いを期待してはならない。報いを得られるのは、我々が注意を払い、問題が敵によって引き起こされた場合である。例えば、誰かが「あなたは魔力に囚われている」と言うとき。まず私は、自分が本当に魔力に囚われているかどうかを確認します。「彼がそう言うということは、何かを見たに違いない。理由もなくそんなことを言うはずがない。きっと彼は誤解しているに違いない」——そう考え、自分の中に誤解を招く要素がないか見つけ出し、それを正そうとします。もし私が「惑わされている」とか「魔術師だ」と言われるなら、それは私にとっては好都合だ。人々が集まってこなくなるから、私の生活は修道士らしく静かになるからだ。しかし、その噂を流した不幸な者は、教会に害を及ぼしたとして地獄に落ちるだろう。彼を気の毒に思わないだろうか？そして、私が不注意だったために、私にも責任があるのだ。例えば、一部の信徒が私の手に口づけしようと近づいてくるので、私は彼らの頭を軽く叩くことがあります。それを見た誰かが、「ただの修道士なのに祝福している。彼は司祭なのか？」と言うかもしれません。その人は悪くないのです。私がもうそんなことをしてはいけないのです。

— ゲロンダ、人が不注意から何らかの誘惑を生み出したとき、「放っておきなさい、彼は責任能力がないのだから」と言う人もいます。これについてはどうお考えですか？

— 正気でないのは、考えることができない人であり、不注意な人ではありません。不注意な人は焚き火を焚き、その場所で火事が起きることを考えません。そのような人々が焚き火を焚いて他人の魂を焦がすとき、私たちは祈り、せめてバケツ一杯の水を火にかけるべきです。また、旋風の

ような人々もいます。彼らには敬虔さがありますが、頭が少しおかしく、自分と意見が合わないことを耳にすると、それが正しいかどうかも見極めずに、すべてを粉々に打ち砕いてしまいます。そんな時は、私たちは慎重に彼らの勢いを抑え、彼らが止まったら、やはり慎重に車輪の下に石を一つ置いておく必要があります。なぜなら、彼らは後方に転がり、他の人々も巻き込んでしまう可能性があるからです。

ある人たちは誘惑を作り出すのが大好きだ

耳にすることを安易に信じてはいけません。なぜなら、ある人々は自分たちが理解している範囲でしか話さないからです。ある時、一人の男がハジェフェンディ⁵⁵ のところへやって来て、こう言いました。「ハジェフェンディ、お祈りください。あの上の方で、百匹の蛇が集まっているんです！」——「百匹の蛇！？ どこから？」——聖アルセニウスは驚きました。「えー、100匹とは言わないけど、50匹は間違いなくいた！」——「50匹の蛇？」——「まあ、25匹はいたよ！」——「25匹もの蛇が一斉に這い寄ってきたなんて話を、今まで聞いたことがあるか？」——と聖人は尋ねた。するとその男は、10匹は間違いなくいたと答えた。「いい加減にしろ、——と聖人は言った——まさかあそこで集会でも開いていたのか？ いきなり10匹もの蛇が這い寄ってきたなんて。いや、そんなことあり得ない！」——「5匹でした」——男は譲らない。「5匹？」——「まあ、2匹でした。」それから聖人は彼に尋ねた。「君はそれを見たのか？」——「いいえ」と彼は答えた。「でも、枝の中で『シュッ、シュッ、シュッ！』とヒス音を立てているのは聞こえました。」つまり、もしかすると、あれはそもそもトカゲだったのかもしれない！ 私は、聞いたことだけで、よく確かめずに結論を出すことは決してしない。ある人は非難するために何かを言い、ある人はただそう言うだけで、またある人は何か特別な目的を持って話すのだ。

ある人たちは、いかに誘惑を仕掛けるのが好きか！ コニツァには、とても親しい二人の友人がいた。祝日や日曜日には、彼らは街をうろつくことなく、ストミオンの修道院（⁵⁶）を訪れ、聖歌隊席で歌うことさえあった。その後、彼らは「ヴェルブリュディツァ」と呼ばれる山に登った。⁵⁷ ある時、ある悪党が彼らに誘惑を仕掛けた。ある友人のところへ近づき、「なあ、お前の相棒がお前について何て言ってたか知ってるか？ こうこうこうだ」と言った。それから彼はもう一人の友人のところへ行き、「知ってるか、お前の親友がお前について何て言ってたか？ あれこれ」と。二人はたちまち激昂し、修道院の真っ只中で大騒動を引き起こした。その間に、火種をまいた張本人はこっそりと逃げ去り、二人は互いに罵り合っていたのだ！ 若い方はさらに少し神経質で、年上の相手を侮辱し始めた。

⁵⁵ ハジェフェンディ——ファラスの住民たちは、聖アルセニウス・カッパドキアスをこのように呼んでいた。

⁵⁶ 1958年から60年にかけて、至福の長老パイシイは、コニツァの近くにあるストミオン修道院で修行に励んだ。——訳者注

⁵⁷ パピング山（ティムフィ）の頂上は、その形が雌ラクダのシルエットを彷彿とさせる。

私は思った。「どうすればいいんだ？ ほら、あの若者が何をしていることか！」 私は年上の男に近づき、こう言った。「ねえ、あいつは若いし、それに少し神経質なんだ。だから、彼を恨まずに、謝ってやれよ。」 「神父様」と彼は言った。「謝罪なんてできるわけがないでしょう。あいつが私を侮辱しているのが見えないんですか？ それに、彼が私を非難していることなんて、初めて聞きましたよ。」 そこで私は若い方のところへ行き、こう言った。「ねえ、彼は年上だし、事態は君が思っているようなものではない。さあ、彼に謝りに行こう。」すると彼は激昂し、叫び始めた。「神父さん、君とも喧嘩してやるぞ！」 「まあいいさ、」と私は言った。「よし、パンテリス、喧嘩しよう。ちょっとだけ準備させてくれ。」そう言って、私はその場を離れた。修道院の裏手、400メートルほど離れたところに、庭の柵用に用意しておいた分厚い丸太があった。私はそこへ行き、長さ5メートルほどの丸太を1本手に取り、修道院へと引きずっていった。彼を笑わせるために、必死でそれを引きずっていた。彼は私が何かを引きずっている音を聞いたが、私が何をしようとしていたか、想像がつくだろうか？ 私はそれを中庭に引きずり込み、教会の入り口の正面で立ち止まった。「おい、」と私は言った。「パンテリス、もうやめろよ。さもないと喧嘩になるぞ。」 その棒が何のために必要だったのかを理解したとき、二人は大笑いした。これで決まりだ！ 氷が割れた。悪魔も砕けた。「お前たち、頭はあるのか？ 一体何をやってるんだ？」と私は言った。そして彼らはまた友達になった。

— その同じ日に、呪いがかけられたんですか？

— ええ、そして二人はひどく言い争ったんですよ！ 悪魔が何をしているか、わかりますか？ あの三人目のやつは、二人が兄弟のように仲が良いのを妬んだんでしょう。片方に相手の悪口を吹き込んで、逃げ出したんです。中傷というのは本当に卑劣なことです。だからこそ、敵は悪魔と呼ばれるのです。⁵⁸ 悪魔は、ある人にはこう言い、別の人にはああと言うのです。そして誘惑を生み出す。そして、このかわいそうな二人はそれを信じて、喧嘩してしまった。

— 彼はわざとそうしたのですか？

— ええ、二人を引き離すために。もちろん、彼はそれを「愛」から、つまり嫉妬からやったのです。

罪を公にすること

何か悪いものを見かけたら、それを覆い隠し、広めないようにしましょう。道徳的な墮落が[皆に]知れ渡るのは良くありません。例えば、道に汚物が落ちているとしましょう。 分別のある人は、そこを通りかかった際、人々に嫌悪感を抱かせないように、何かでそれを覆い隠すだろう。一方、分別のない人は、覆い隠すどころか、それをかき回して悪臭をさらに強めてしまう。私たちも同様に、分別なく他人の罪を公にすることで、さらに大きな悪を招いてしまうのだ。

⁵⁸ Διάβολος（ギリシャ語）——中傷者、διαβάλλω（ギリシャ語）——中傷する、悪口を言う、密告する。——訳者注

福音書の「教会に告げよ」という教え⁵⁹は、すべてが公にされるべきだという意味ではありません。なぜなら、今日の教会は「すべて」を意味するものではないからです。教会とは、キリストが望むように生きる信者たちのことであり、教会と敵対する者たちのことではないのです。キリスト教の初期、告解が教会の全会員の前行われていた時代には、主の「教会に告げよ」という言葉は文字通りの意味を持っていました。しかし、家族全員が同じ告解司祭のもとで告解を行うことが稀になった現代において、この「教会に告げよ」という言葉によって敵に惑わされることのないようにしましょう。なぜなら、例えば道徳的な過ちなどを公にすることは、教会と敵対する者たちにそのことを知らせることになり、彼らに教会に対して戦いを仕掛ける口実を与えてしまうからです。そして、そのようにして、弱い魂の信仰は揺らぎます。

もしある母親に娼婦の娘がいたとしても、彼女は人前でその娘を罵ったり辱めたりはせず、娘の名誉を回復するためにあらゆる手を尽くすでしょう。彼女は持ち物を最後の一品まで売り払い、娘を連れて別の町へ移り住み、娘を結婚させて、そうして彼女の過去の生活を改めさせようと努めるのです。教会もまったく同じように振る舞います。慈愛に満ちた神は、私たちの罪深さをすべてご存知であるにもかかわらず、愛をもって私たちを忍耐強く受け入れ、誰をも笑いものにはされません。また、聖人たちは決して罪人を世間の前で侮辱することではなく、愛と霊的な繊細さ、そして神秘的な方法で、悪の是正を助けてきました。それなのに私たち自身は、罪人でありながら、その逆の行動——つまり偽善者のような振る舞い——をとってしまいます。私たちは、誤解の容易な犠牲者とならないよう、また他者の行いを悪と見なさないよう、注意深くならなければなりません。

—ゲロンダ、あなたは道徳的な過ちを公にすることについて触れられました。では、罪や、それ以外の性質を持つ不健全な状態について、他者に知らせる必要があるのでしょうか？

—こう考えてほしい。私は知人の何人かに対してはそうしている。例えば、誰かがはしゃぎすぎて他人を誘惑しているのを見かける。私はその人に改めるよう助言する——一度、五度、十度、二十度、三十度と。しかし、その人は改めない。しかし、何度も注意された後でも、その人が引き続き悪行を続ける権利はない。なぜなら、他の人々もそれに巻き込まれ、その人を真似てしまうからだ。ほら、人は悪を簡単に真似るが、善はそうではない。だからこそ、その悪行を目撃している他の人々を護るために、私はそのことを彼らに伝えざるを得ない時が来るのだ。

言い換えれば、私がこう言うとき：「あの人のやっていることは気に入らない」と言うとき、それは非難するためではありません。なぜなら、私はすでに彼自身に500回もそう伝えてきたからです。しかし、彼の弱さを見ている他の人々がその影響を受け、彼を真似てしまい、さらに「長老パイシイが何も言わないのなら、彼の行動には何の問題もないのだろう」と言ってしまいかねないからです。もし私が「それが気に入らない」という考えを口にしなければ、私がそれを是認している、あるいは私自身もそれを気に入っているかのような印象を与えてしまう。そうして全体が崩壊してしまうのだ。なぜなら、誰かがその横暴な者のやり方が正しいと判断し、自らもそれを真似し始めるかもしれないからだ。その結果、どうなるのでしょうか？ ちなみに、人々は私が彼に何も言わ

⁵⁹ マタイによる福音書 18章17節。

なかったのは、この間ずっと彼が私をどれほど苦しめてきたかを知らないからだと考えています。さらに、悪魔もそこへ現れてこう囁きます。「君がそうしても何の問題もない。ほら、他の人も同じことをしているし、パイシイ長老も彼に何も言わないじゃないか。」ですから、誰かが自分の「ティピコン」に従って生き続け、⁶⁰、私が改めるよう助言したにもかかわらず、依然として不品行を続けているのを見かけると、その人を知る相手との会話の中で、「あの人がやっていることは、私には気に入らない」と伝えます。それは、その人を害から守るためです。これは非難ではありません。物事を混同してはいけません。

すると、ある人たちがやって来て、「なぜそれを他人に話したんだ？ それは秘密だったはずだ」と非難し始める。「秘密なんてあるわけないだろう」と私は言う。「君には千回も言ったのに、君は改めなかった。私が君の行いを容認していると思い込んでいる他の人たちを、君が台無しにする権利などない！」私が黙っているのに、あいつが他人を惑わすなんて！特に、私の知っている家族の子供がやってきて、その子の振る舞いが家族を崩壊させているとわかったときは、こう言います。「いいか、もし改めないなら、お前の母親にこのことを話すぞ。君に、私のところに来て、そんなことを全部話しておきながら、その後も相変わらずわがままを言い続ける権利など、誰も与えていない。私は、君の家族を守るために、君のお母さんに伝えるつもりだ。」もし彼に悔い改めの気持ちがあるなら話は別だ。しかし、もし彼がそのやり方を続けるなら、私はそのことを彼のお母さんに伝えなければならない。なぜなら、私はその責任を負っているからだ。

第4章。 物事には 賢明さと愛をもって

自己研鑽

もしあなたが教会を助けたいと思うなら、他人を正すよりも、まず自分自身を正すよう努めなさい。あなたが自分自身を正せば、教会のほんの一部がすぐに正されることになる。そして、もし皆がそうすれば、教会は完全に整えられることは明らかだ。しかし、今日の人々は自分自身以外のあらゆることに気を取られている。なぜなら、他人のことに気を配るのは簡単だが、自分自身に向き合うには労力が必要だからである。

もし私たちが自己改善に取り組み、主に神の助けを頼りに、外的な活動よりも内的な活動に重点を置くならば、他者をより多く助け、より実りある支援ができるでしょう。さらに、私たちは内

⁶⁰ ティピコン（ギリシャ語）－規則、規範；ここでは：生活様式、習慣。一訳者注

なる静寂も得ることができ、それは私たちが出会う人々の魂を静かに支えてくれるでしょう。なぜなら、内なる霊的な状態は心の美德を現し、他者の魂を変えていくからです。まだ清められた内面の霊的な状態に達していないまま、誰かが外的な活動に没頭すると、ある種の霊的な闘いを繰り広げることにはできても、同時に動揺や苦悩を抱え、神への信頼が欠け、しばしば平安を失うことになるでしょう。もしその人が自分自身を善い者にしていないならば、公共の福祉に対する自分の関心が純粹であるとも言いきれない。古い自分や世俗的なものすべてから解放されて初めて、その人は神の恵みを持つようになる。そうして、彼自身の心にも平安が訪れ、どのような性質の人であっても助けることができるようになる。しかし、もし彼が神の恵みを持っていないならば、自分自身を制御することも、神に喜ばれる結果をもたらすような形で他者を助けることもできない。まず彼自身が恵みに浸らなければならず、そうして初めて、すでに聖化された彼の力が、他者の救いのために用いられることができるのである。

善は善意をもって行われるべきである

—ゲロンダ、何か問題に直面したとき、どのようなことをお考えになりますか？

—人間として、何ができるか、何ができないかを考えます。私はあらゆる角度から問題を検討します。「こうすれば、あちらではどう影響し、あちらではどうなるだろうか……そこからどんな悪いことが生じ、どんな良いことが生じるだろうか……」と。自分の決断が可能な限り正しいものとなるよう、常に多角的に問題を見極めるよう心がけています。不注意から多くの過ちを犯してしまうことがあるからです。そして、後になって「こうすべきだった」と後悔しても、もう手遅れです——いわゆる「鳥は飛び去ってしまった」という状態です！…例えば、誰かがうっかり家を燃やしてしまったとします。まあ、仕方がない、その人を処刑するわけにもいきません。しかし、悪いことはすでに起きてしまったのです……

[ある時]、ある組織で問題が発生した。その責任者が私のところに来て、こう言った。「まあ、すべて片付いたよ。あそこに行って、あの人とあの人を見つけ、こうこうと伝えて、問題は解決した。」——「問題は、」と私は言った、「今まさに始まったばかりだ。それ以前の状態は、問題ではなかった。最初は小さな火種がいくつかあっただけで、それ自体は自然に消えていたはずだが、今や炎が燃え盛っているのだ。」彼は自分の行動ですべてを解決したと思い込み、さらに私たちに褒めてほしいとさえ思っていた。しかし実際には、彼の行動が大騒ぎを引き起こし、問題はさらに複雑になってしまったのだ。

善行を穏やかに成し遂げ、利益をもたらすためには、多くの注意と分別、そして思慮が必要だ。そうでなければ、利益をもたらすどころか、相手を苛立たせてしまうことになるからだ。そしてもう一つ：やろうと思っていることは、熟すまで待つほうがよい。なぜなら、未熟な状態で「強行」する、つまり性急な決断を下してしまうと、後で困難に直面し、苦しむことになるからだ。重要なことは、少しの間保留にしておけば、その後、迅速かつ正しく行えるものだ。たとえ頭脳明晰であっても、その行動の先頭に立つのが虚栄心や利己心であり、本人はそれに気づいていないかもしれない。例えば、狩りの際、たとえ雑種の犬であっても、注意深く探せばウサギの足跡を見つけ出

す。一方、純血種で、犬としての最良の資質をすべて備えた犬であっても、急いでいるときは右往左往して無駄に走り回るだけだ。思考に先立って行動することは、高慢である。それゆえ、急いで行動するのではなく、あらかじめすべてを熟考し、祈らなければならない。祈りが先立つとき、働くのは理性の泡や軽率さではなく、聖化された理性である。

私たち霊的な人々は、しばしばまるで神がおられないかのように振る舞い、神が働かれることを許さない。しかし、神はご自身の御業をご存知である。つまり、霊的な手段を用いて困難を霊的に解決できるにもかかわらず、私たちは世俗的な方法で行動しようとしてしまうのです。私がシナイにいた頃、あるホジャ⁶¹ が毎週金曜日に修道院を訪れ、中に入り、そこにあったモスクのミナレットに登っては、大声で叫び始めたのです！ その声の大きさはなんと凄まじいことか！ 上の方、聖エピステミアの洞窟にまで響き渡っていた。その後、修道院は解決策を見つけた。金曜日にホジャが来る時は、彼が中に入れないように修道院の扉を閉めるようになったのだ。私はそのことを知らなかった。ある日、下へ降りていくと、激怒したホジャがいた。「今こそ——」と彼は言う。「奴らに、俺の目の前で扉を閉めるなんてどういうことか、思い知らせてやるぞ！ ...」私は言った。「いや、あの扉はラクダが入ってこないように閉めたんだ。お前が入ってこないように閉めたわけじゃないよ。」その後、私はこのことを修道院の修道士たちに話した。ある書記が言った。「あのホジャに、俺が思い知らせてやる！ あいつに痛い目を見させてやる！ 政府に、ホジャが私たちに迫害していると書き送ってやる！」——「聞いてくれ」と私は彼に言った。「正教会は、薬なんかじゃないんだ。シナイ山の聖なる父たちと聖エカテリーナに祈りを捧げ、あとは神に委ねよう。私も上に行って祈ってくるよ。」修道院の兄弟たち数人にも祈るように伝え、案の定、ホジャは思い知らされた！ 荷物をまとめて去り、姿を消したのだ！ もし扉を閉め続けていたら、政府はいずれ「ホジャが私たちに迫害している」という話が嘘だと気づき、大騒動になっていただろう。ホジャは、自分が毎週金曜日に訪れていたから扉を閉められていたのだと言い、修道院に損害を与えただろう。さらに以前、ある[金持ち]が[シナイ]山を見て、聖カタリナの山頂に別荘を建てたいと思ったことがあった。しかし、何らかの病気にかかり、亡くなってしまった。そしてつい最近も、誰かがそこで何かをしようとしたが、その人もまた亡くなってしまった。それゆえ、私たち人間自身の努力だけに頼るのではなく、祈りを捧げ、神に委ねるほうがよいのだ。

分別ある振る舞い

— ゲロンダ、誰かが悪い振る舞いをしているのを見かけたとき、その人に何か言うべきでしょうか？

— その人がどのような人物かによります。現代においては、多くの分別と神からの啓示が必要です。あなたの質問に答えるのはそれほど簡単ではありません。私は、個々のケースごとに500もの「細かな事情」があることに気づきました。改心できる人もいれば、改心せず、私たちの指摘に対

⁶¹ ホジャ—イスラム教における宗教裁判官および教師。— 訳者注

して否定的に反応する人もいます。特に、利己心を持つ人は、その点を突かれると悪い反応を示します。たとえ自分が間違っていることを理解していても、そのような人は利己心から一步も譲りません。そして、私たちの動機が完璧でない場合、つまり、他者への思いやりのほかに誇りがあり、私たちの愛が純粋でないとき、その人は非常に強く抵抗します。

もし私たちが愛から、痛みを伴いながら誰かを諭すならば、相手が私たちの愛を理解しているかどうかに関わらず、その人の心には変化が起こる。なぜなら、私たちを動かしているのは純粋な愛だからだ。しかし、愛のない、偏見に満ちた非難は、非難される者を獣のようにしてしまう。なぜなら、私たちの悪意が相手の利己心に突き刺さり、ライターが火打ち石から火花を散らすように、火花を散らすからだ。もし私たちが愛から兄弟を忍耐強く受け入れるなら、彼はそれを理解する。そして、たとえそれが内面的なもので、外見上は一切表れていなくても、私たちの悪意も彼は理解します。なぜなら、私たちの悪意は彼の中に不安を引き起こすからです。同様に、悪魔も、たとえ光の天使の姿をとって現れたとしても、不安をもたらしますが、真の天使は、優しく、言葉では言い表せないほどの喜びをもたらします。

— つまり、ゲロンダ、私たちが何かを言ったときに否定的な反応が返ってくるということは、私たちの行動の出発点が利己主義であるということですか？

— 誤解も多々あります。ある人はこう理解し、別の人はそうではないと理解します。しかし、常に自分自身を省みる必要があります。「なぜ私はこれを言いたいのか？ どのような動機から来ているのか？ 隣人のために心が痛んでいるのか、それとも自分を良く見せたり、自慢したりするために言いたいのか？」もし人が心を清めていれば、たとえ怒ったり、叫んだり、誰かに注意したりしたとしても、その動機は清らかなものです。そして、すべてが正しく進むのです。なぜなら、その人は理性を働かせて行動しているからです。分別とは清らかさであり、神聖な啓示であり、精神的な明晰さです。それゆえ、内面にそれがあの中で、利己主義が共存できるのでしょうか？ そして、動機が清らかであれば、人の心は安らぎの中にあります。このようにして、自分のあらゆる行動が善いものかどうかを理解することができるのです。

皆さんは、しばしば、相手に「こうすべきだ」と、まるで上司のような口調で話していることに気づいていません。そこには利己心が働き、あなたは相手を敵に回してしまいます。動機が清く、謙虚さがあるならば、その指摘は相手の助けとなります。それ以外の場合は、利己心が働き、逆の結果を招いてしまいます。自分の「私」、つまり利己心から行動の動機を浄化すれば、その動機はすべて清らかなものとなるでしょう。分別のない振る舞いからは、正気を失って（自分や他人の）頭を打ち砕く狂人の振る舞いよりも、しばしば大きな悪が生じます。なぜなら、分別のない人々は、その鋭い言葉で感受性の強い魂を傷つけ、しばしば彼らを絶望へと追い込み、致命的な傷を負わせるからです。

また、誰に対しても同じように振る舞う人もいます。しかし、指サシに樽と同じ量の液体を注いだり、馬と同じ量の荷を牛に積んだりすることはできない。牛は耕作のためのものであり、鞍や荷物を背負わせるには適していない。同様に、馬もまた、荷物を運ぶためにあるのだから、鋤に繋ぐのはふさわしくない。一方はある仕事のため、もう一方は別の仕事のためだ。全世界を自分の物差しに合わせて均一にしようとするべきではない。誰にでもそれぞれの個性がある。そして、害がな

いのであれば、あることについては目をつぶってもよい。もしすべての人々が、この世のうちにすでに[自分にふさわしい]地位に就くことができたなら、あらゆる暴挙は止み、地上もまた楽園となるだろう。それゆえ、他者に対して過度な要求を突きつけてはならない。

精神的な誠実さは愛によって示される

昨今の世の中がうまくいかないのは、誰もが「偉大な」真理を語るものの、それが現実と合致していないからだ。甘い言葉や偉大な真理は、真実を語る口から発せられたときに初めて価値を持つ。それらは、善意と清らかな心を持つ人々の心の中にのみ根を下ろすのである。

—ゲロンダ、誠実さには世俗的なものと霊的なものがあるのですか？

—ええ、もちろんです。世俗的な誠実さには、分別が欠けています。

—それは、人が状況にふさわしいこともあれば、そうでないことも言う場合のことですか？

—それだけではありません。真理は真理ですが、分別なく真理を語れば、それはもはや真理ではありません。例えば、ある人の頭がおかしいというのは真理です。しかし、その真理を口に出そうとしても、何の益もありません。また、ある人はこう言います。「誠実であるために、広場へ行って、人々の前で罪を犯そう。」これは誠実さではありません。分別を十分に備えた人は、寛大な愛と犠牲精神、そして謙虚さを備えている。そのような人は、たとえ苦い真実であっても、極めて率直に語り、自らの優しきでそれを和らげる。その結果、甘い言葉と共に伝えられるその真実は、より大きな利益をもたらす。それは、苦い薬が甘いシロップと一緒に服用されることで、より大きな効果を発揮するのと同じである。

分別なく用いられた真実は、犯罪を犯すことになりかねない。真実の名の下に行動して、犯罪を犯す者もいる。思慮を欠いた誠実さを持つ者は、二重の悪を犯す可能性がある。まず自分自身に、そして次に他者に。なぜなら、そのような誠実さには思いやりがないからだ。真に誠実でありたいと願う者は、まず何よりも自分自身に対して誠実であることから始めよ。なぜなら、精神的な誠実さはそこから始まるからだ。もし誰かが自分自身に対して不誠実であれば、それは自分自身だけを損ない、自分自身だけを嘲笑しているに過ぎない。しかし、他者に対して不誠実な振る舞いをするならば、それは他者を嘲笑することになるため、死に至る罪を犯すことになる。

—ゲロンダ、単純さゆえにそのような人になれるものでしょうか？

—単純だなんてとんでもない！ そんな人にどこに単純さがあるのか！ もしそれが子供なら、単純さがあるだろう。もしそれが聖人なら、単純さがあるだろう。しかし、もし知的障害もない大人がそのような振る舞いをするなら、それは悪魔だ！

—では、その人は何を味わっているのでしょうか？

—まさに地獄そのものです。一つの誘惑が次々と別の誘惑に取って代わります。誘惑は絶え間なく続くのです。

—しかし、ゲロンダ、率直に振る舞うべきではないでしょうか？

— 多くの人が[理解し、]利用しているような「率直さ」には、律法主義的な精神が潜んでいる。「私は率直な人間だ。屋根の上で説教する（⁶²）」と言い、他人を笑いものにしている。しかし、結局のところ、笑いものになるのは彼ら自身なのだ。

「律法の文字は人を殺す」⁶³

ある時、私はある人にこう尋ねた。「あなたは誰ですか？ キリストの戦士ですか、それとも悪の戦士ですか？ 悪にも戦士がいることをご存知ですか？」クリスチャンは狂信者であってはならず、すべての人々への愛を持たなければならない。理性を働かせずに、たとえそれが正しい言葉であっても、むやみに言葉を投げかける者は、悪を行っているのだ。私はある作家と知り合いだった。彼は非常に敬虔な人だったが、世俗の人々に対しては、魂の奥底まで突き刺さり、彼らを震撼させるような粗野な言葉遣いをした。ある日、彼は私にこう言った。「ある集会で、ある女性にこう言ったんだ。」しかし、彼はそれを彼女を傷つけるような言い方で伝えてしまった。彼は皆の前で彼女を侮辱してしまっただの。「聞いてくれ」と私は彼に言った。「君は人々にダイヤモンドの散りばめられた金の冠を投げつけているが、その投げ方では、弱い者だけでなく、強い者の頭さえも打ち砕いてしまう。」「キリスト教的に」[引用符付き]人々を石で打ちのめすようなことはやめよう。人々の前で罪を犯した者を糾弾したり、偏見を持って誰かについて語ったりする者は、神の霊ではなく、別の霊に動かされているのだ。教会は愛によって行動し、律法主義者たちのようなやり方では行動しない。教会はすべてを忍耐強く見つめ、その人がどんな過ちを犯そうとも、どんなに罪深い者であろうとも、一人ひとりを助けようと努めるのだ。

私は、一部の人々に奇妙な論理が見られることに気づいている。彼らの敬虔さは良いことだし、善への傾きもまた良いことだが、さらに霊的な分別と寛容さが必要である。そうしてこそ、敬虔さが偏狭さを伴わないようにし、頭が硬く頑固になりすぎて、たとえ杭を打ち込んでも動かないような状態にならないようにするためである。すべては、人間の中に霊的な判断力が宿るための霊的な状態を持つことにある。そうでなければ、その人は「律法の文字」に固執することになり、「律法の文字は人を殺す」のである。謙遜さを持つ者は、決して教師気取りになることはなく、相手の話をよく聞き、意見を求められた時には謙虚に答える。決して「私」とは言わず、「考えが私にそう告げている」とか「先人たちが言った」と言う。つまり、弟子として話すのだ。他人を正すことができると思う者には、多くの自我がある。

— ゲロンダ、誰かが何かを始めるとき、善意を持っていても、[その後]極端に走ってしまう場合、それはその人に分別が欠けているということでしょうか？

— その行動には利己心があります。そして、そのような人は自分自身を知らず、それを理解していないため、極端な方向に走ってしまうのです。しばしば、ある人々は敬虔な気持ちから始める

⁶² ルカ12:3を参照。

⁶³ 参照：コリントの信徒への手紙二 3章6節。

ものの、その後、とんでもないところまで行ってしまいます！ 例えば、聖像崇拜者と聖像破壊者たちのように。どちらも極端です。ある者たちは、キリストの聖像を削り取り、神聖な聖体拝領を「改善」するために、その粉を聖杯に撒き散らすまで至りました！ 他方、ある者たちはイコンを焼き、踏みつけました……。そのため、教会はイコンを高い場所に安置せざるを得ませんでした。そして、争いが収まると、私たちがそれらを崇拜し、そこに描かれた方々に敬意を捧げられるよう、イコンを低い位置に下ろしたのです。

人は何をするにせよ、神のためにそれをしなければならない

— ゲロンダ、私は普段、他人を悲しませたり、彼らの目から見て落ちぶれたりすることを恐れて行動しています。神を悲しませないことについては、あまり考えていません。神への畏れは、どのようにして深められるのでしょうか？

— 警戒心が必要です。人は何をするにせよ、神のためにそれを行わなければなりません。私たちは神を忘れ、それから「自分は重要なことをしている」という思いが働き始めます。人に気に入られようとする気持ちも働き始め、私たちは人々の目から見て落ちぶれないように努めてしまうのです。もし誰かが、「神が自分を見ておられ、見守っておられる」という思いで行動するなら、その人が何をするにせよ、それは確かなものとなります。そうでなければ、人々に良く見られようとして何かをしても、すべてを失い、すべてを無駄にしてしまうのです。人は自分のあらゆる行動について自問すべきです。「よし、自分がしていることは好きだが、神はこれを喜ばれるだろうか？」と。そして、それが神の御心にかなうかどうかを吟味するのです。もしこれを怠れば、やがて神の存在そのものも忘れてしまうでしょう。だからこそ、昔は「神のために」とか、「ああ、あいつは無神論者だ、神を恐れない」と言っていたのです。」あるいは、「もし神が望まれるなら」、「神が許してくださるなら」とも言ったものだ。昔の人々は至る所に神の臨在を感じ、常に神を目の前に置き、注意深く生きていた。彼らは詩篇に記されているような状態を体現していた。「主が私の前に現れたのを見た……私は動じない。」⁶⁴ だからこそ、彼らは[動揺することなく]、揺るぎない状態を保っていたのです。しかし今や、ヨーロッパ式の「典礼規則」が徐々に流行し、多くの人が世俗的な礼儀作法ゆえにだけ、礼儀正しく振る舞っているのが見て取れます。人が何をするにせよ、キリストが自分を見ておられ、見守っておられることを自覚し、純粹にキリストのために行わなければなりません。その内面には、人間的な要素があってはなりません。人のあらゆる行動の核心には、キリストがいなければならない。もし私たちが人々に好かれたいという目的で何かをするなら、それは私たちに何の益ももたらさない。細心の注意が必要だ。どのような動機が私たちを行動へと駆り立てているのか、絶えず自問自答する必要があります。もし自分が人に気に入られたいという気持ちに駆られて何かをしようとしていることに気づいたら、直ちにそれを打ち砕かなければなりません。なぜなら、善いことをしようとしてもそこに人に気に入られたいという気持ちが混じ

⁶⁴ 詩篇15章8節。

ってしまうなら——ああ、それはまるで穴の開いたバケツで井戸から水を汲んでいるようなものだからです。

誘惑の大部分は、他者と関わる際に、私たちの内側に「自我」が存在するとき、すなわち、私利私欲に動かされ、自分を誇示し、個人的な満足を得ようとする時に、しばしば生み出される。天へと昇るのは、世俗的な上昇ではなく、精神的な下降である。低く歩む者は、常に確かな足取りで進み、決して転ばない。それゆえ、可能な限り、自分の中から世俗的な誇示や世俗的な幸運——すなわち霊的な不運——を根こそぎ取り除いていこう。隠れた、あるいは露骨な利己主義や人に媚びることを嫌悪し、心からキリストを愛しましょう。私たちの時代は静けさではなく、センセーショナルさや空虚な騒ぎによって特徴づけられています。しかし、霊的な生活は静かなものです。私たちにできることを、その通りに、静かに、自分の能力の範囲を超える目標を追い求めずに実行できれば、それは良いことです。そうでなければ、その行いは私たちの魂と体に害を及ぼし、しばしば教会にも害を及ぼすことになるからです。

真の隣人への奉仕には、キリストへの奉仕も含まれている。注目すべきは、隣人への奉仕をいかにして清らかなものにするか、すなわち、そこから人への迎合を取り除き、この人間的な捧げ物（すなわち隣人への奉仕）がキリストへと届くようにすることである。もし誰かが、表向きは正教会の教えに従って教会の問題を整理しようとしているが、その真の目的が自分自身をより良く「整える」ことにある——つまり、自分の個人的な利益を念頭に置いている——ならば、そのような人がどうして神の祝福を受けることができるでしょうか。可能な限り、神に近づくような生き方をすべきです。常に自らを省み、神の御心を行うよう努めなければならない。神の御心を行うとき、人は神と親しい関係にあり、そのとき、神に求めずとも、泉から絶え間なく水を汲み取るように、恵みを受け取るのである。

私たちは霊的な感覚という器官を身につける必要があります

聖霊は、ある場所ではある姿で、別の場所では別の姿をとるようなものではなく、唯一であり、数多くの賜物を持っておられます。聖霊は混乱の霊ではなく、愛と平和の霊です。霊的な人々が互いに攻撃し合うとき、それは彼らが聖霊とは何の関係もない、他の多くの霊の影響下にあることを意味します。かつて聖霊は啓示を与え、導いてくださいました。なんと壮大なことか！今日、聖霊は降りてくるための前提条件を見出せない。旧約聖書のバビロンの塔の建設は、無邪気な遊びに過ぎなかった。例えば、あなたが粘土を求めたのに、藁が運ばれてきた、といった具合だ。今、私たちの間には、情念に満ちたバビロンの塔の建設が起きている。あなたが粘土を求めているのに、頭に向かってレンガが投げつけられるのだ。しかし、もし人が自らのあらゆる行動から「自我」を取り除き、自分の意志を切り捨てれば、その人は正しく働いていることになる。そのような人は必ず神の啓示を受け、隣人との相互理解の精神も持つだろう。なぜなら、人が自分自身の考えを自分の中から取り除くと、神の考えが彼のもとにやってくるからだ。

神聖な啓示を得るためには、霊的な感覚の器官を身につける必要がある。これは、特に現代において、人々が何かを理解するためになすべき最も重要なことである。状況がまさにそれを強いて

いるのだ。考えてみてください。当時の小アジア、あの困難な時代において、状況はギリシャ人たちに頭を働かせることを強いていました。アルメニア人やトルコ人に囲まれていても、二人のギリシャ人は互いに理解し合うことができましたが、彼らには何も理解できませんでした。さらにこうです。今日、私たちの生活がどれほど悪化しているかを見れば、霊的な人々はお互いに相互理解を見出さなければなりません。厳しい時代がやってきます。頭を使わなければなりません。もし人が頭を使わず、神からの啓示も受けていないならば、個々の状況ごとに、どう行動すべきか指針を求めなければなりません。すべてを教えてもらえるなどとは期待してはいけません。何かについては、誰かに言われるのを待たずに、自分たちで理解しなければならないのです。覚えている。かつてコニツァで、私が軍隊に入る直前、反乱軍が迫っているという情報を得た。⁶⁵ 私たちは4人だった。私と3人のムスリムだ。私たちは町の端にあるあるトルコ人の家に駆け込んだ。5歳のトルコ人の男の子が状況をすべて察して、こう叫んだ。「こっちへ、こっちへ！ ここから逃げろ、私の台所を通して！」私たちは台所を通り抜け、家の裏に出て、地下にある物置のような場所に何とか身を隠すことができた。反乱軍がやって来たとき、その子は家から出てきて、中には誰もいないと彼らに告げると、走り去った。たった5歳の子供、あのようなちっぽけな子で、まだまともに話すことさえできなかったのに、ほら、なんて賢明に行動したのだろう。すごい、その場で状況をすべて理解したのだ！ 見てください：彼はすべてを理解し、愛していました。一方、大人であれば、軽率さから悪事を働いてしまったかもしれません。ですから、私たち洗礼を受け、聖油を注がれ、教えを受け、多くの書物を読んだ者たちは、未熟で幼い状態に留まってははいけません！ 翼を広げなさい！「翼を広げた者」とは誰か、ご存知ですか？ 六つの翼を持つセラフィムたちです！ 彼らは六つの翼を持ち、それを羽ばたかせながら、「聖なる、聖なる、聖なる！」と讃美しています。さあ、飛んでいきましょう。六つの翼を持ちましょう！

神からの啓示こそがすべてです

私はよくある人たちにこう言います。「神があなたを啓発してくださる通りにしなさい。」「神があなたを啓発してくださる通りに」と言うとき、私はその人に、人間の論理ではなく、神の啓発を通して物事を見てもらいたいのです。自分が好きなことが、まさに神からの啓発であるかのように考えてはいけません。

—ゲロンダ、教えてください。神の啓示はどのようにして訪れるのでしょうか？

—電線の錆を取り除けば、古びた電線も良い導体になります。そうすれば、その人は自分を通して神の恵みを導き、神の恵み深い光を受け入れることができるのです。そうでなければ、短絡が起こり、恵みは働きません。その根本はここにあります。人は、神の恵みが自分から離れないように注意を払わなければなりません。そうすれば、神からの啓示を得ることができるのです。なぜなら、神からの啓示がなければ、すべての行いは無意味になってしまうからです。

⁶⁵ すなわち、共産主義者の反乱軍。——訳者注

恵みが弟子たちに降り注ぐまで、キリストは彼らとどれほど苦勞されたことか。彼らはあまりにも未熟だったからだ！五旬節の前に、弟子たちには神から世を助ける力が与えられていた。しかし、彼らはまだ五旬節に受けた神の啓示を持っていなかった。キリストが、ご自身がエルサレムへ行くこと、人の子が十字架につけられることなどを彼らに語っていた当時、彼らは、キリストがエルサレムへ行けば、王にされるだろうと考えていました。彼らは人間的な考え方で物事を捉えていたのです。だからこそ、誰がキリストの右に座り、誰が左に座るのかということばかりを気にしていたのです。ゼベダイの子らの母は、キリストの御国において、自分の子供の一人をキリストの右側に、もう一人を左側に座らせてくださるよう、キリストに願い出ました！しかし、キリストが彼らに慰め主である聖霊を送られたペンテコステの日以来、使徒たちはすでに絶えず神の恵みを受けていました。以前は、彼らは時折しか神の啓示を受けられず、まるでバッテリーが充電されてはまた放電されるかのようでした。再びコンセントから充電しなければなりませんでした。また放電すれば、またコンセントへ！主が彼らに慰め主を遣わされたとき、その「コンセント」はもう必要なくなりました。私が言いたいのは、今の私たちが彼らよりも優れているということではありません。しかし、私たちは「恵みの時代」に生きており、それゆえ、罪を軽減する事情は一切ありません。私たちは洗礼を受け、慰め主がおり、すべてを備えています。当時、キリストはまだ十字架にかけられておらず、悪魔はある意味で権威を握り、人々を容易に誘惑していました。十字架の死の後、キリストはすべての人々に神の啓示を受ける機会を与えてくださいました。キリストはご自身を犠牲にして、私たちを解放してくださいました。私たちは御名によって洗礼を受けました。キリストはすでに私たちを「コンセント」に恒久的に接続してくださいましたのです。今、神の恵みの電流が通らなくなる原因は、私たち自身にあるのです。なぜなら、私たちは自分の配線を錆びついたままにしているからです。

—ゲロンダ、聖霊が人の内に宿るためには、どのような前提条件が必要なのでしょうか？

—修道的な精神、謙遜、愛、寛大さ、犠牲の精神が必要です。聖霊の恵みがなければ、人は何の役にも立ちません。聖霊は光、すなわち神の光です。これこそがすべての基盤なのです。もし人が目が見えなければ、ガラスにぶつかったり、崖から落ちたり、穴に落ちたり、汚物の中や、さらには奈落の底に落ちてしまうかもしれません。光を失っているため、どこへ向かっているのか見えません。しかし、少しでも見えるなら、用心します。もっとよく見えるなら、これらすべての危険を避け、安全に自分の道を歩むことができます。光が訪れるためには、闇から抜け出そうとする意志が必要です。たとえ少しぼんやりとしていても、人々が物を見ることができれば、もう転ぶことはなくなり、神も悲しまれることはありません。もしある（地上の）父親が、自分の子供たちが泥や茨の中、あるいは崖から転落するのを悲しむなら、神はどれほど深く悲しまれることでしょうか！

世の中のあるゆる悪は、神の啓示がないことに起因している。神の啓示がないとき、人は闇の中にいる。すると、ある者は「あっちへ行こう」と言い、別の者は「いや、私はよく知っている。こっちへ行ったほうがいい」と言い、三番目の者は「あっちへ」、四番目の者は「こっちへ」と言う。誰もが、自分が正しいと思う方向へ進むのが正しいと考えています。言い換えれば、皆が善を望んでいるものの、心が曇っているために互いに理解し合うことができないのです。もし心が曇っていなければ、彼らは口論することなどなかったでしょう。どの道がより良いかをはっきりと見極

め、共にその道へと進んでいったはずです。私が言いたいのは、誰もが善意を持って行動できるはずなのに、この混乱のせいで、社会にも教会にも多くの問題が生じているということです。少なくとも教会においては、大多数の人に悪意はありませんが、神からの啓示が欠けているのです。善を求めて争っているのに、結局のところ、どうなってしまうのでしょうか…… ですから、神に、せめて少しだけでも神の啓示を与えてくださるようお願いしましょう。そうでなければ、私たちは盲人のようにつまずいてしまうからです。神の聖体礼儀において、司祭が「御自身のものから御自身のものへ」と唱えるとき、私は神に、世界が物を見ることができるよう啓示してくださるよう祈ります。せめて少しだけでも神が啓蒙してくださり、闇が払われ、人々が霊的に傷つくことがないように！そして、聖アルセニオス・カッパドキオスが「集会に向かう者たちを神が啓蒙してくくださるよう」と唱えた第二の詩篇を読みながら、私はこう言います：「神よ、すべての統治者を照らしてください。そして、聖職者たちと教会のすべての父たちを照らし、彼らが聖霊を受け入れ、世を助けることができますように。」もし神が、ある者をほんの少し照らし、他の者を受け入れやすいようにしてくださるなら、そこからどれほどの善が生まれるか、お分かりでしょうか？統治者が一言発するだけで、すべてが変わるのです。人々は神の啓示を必要としています。

慈愛に満ちた神は、善意を持つ者たちに神の啓示を与えてくださいます。ある裁判官が、自身で経験した出来事について私に話してくれました。ある修道院が、土地を購入するために500ゴールド・リラを携えた一人の修道士を派遣しました。その修道士がある商人に声をかけると、商人はこう言いました。「その金は俺に預けておけ。わざわざ持ち歩く必要なんてないだろう。」修道士は金を預け、善意から「なんて良い人だろう、私の負担を軽くしてくれた！」と思った。しかし、彼が戻ってみると、商人は500リラを返すどころか、修道士が自分に800万も借りていとまで言い出したのだ！不幸な修道士は途方に暮れた。どうやって修道院に戻ればいいのか？！500リラを渡したのに何も買えず、その上さらに800万リラを請求されているのだ！事態は裁判にまで発展した。裁判官は靈感に導かれて一連の質問を投げかけ、商人が修道士に何も貸していなかったばかりか、むしろ彼からリラを奪っていたことが証明された。私はこの裁判官の中に、預言者ダニエルが持っていたような境地を見出した。⁶⁶

彼には神への畏れがあり、それゆえに神は彼を啓発し、彼の行動は正しいものでした。

すべての基礎は、神からの啓示である。それが与えられれば、人は周囲の人々を慰め、自らも霊的に成長する。だからこそ、私はこう言うのだ。ランプやシャンデリア——[人間の]知性による発明——は良いものだが、人を照らす神の恵みの神聖な光は、それらとは[比べものにならないほど]高いものである。神の啓示を受けた人は、物事を非常に純粋に見通し、疑いなく悟り、自分自身は疲れを知らないばかりか、他の人々をも大いに助けることができる。

⁶⁶ ダニエル書13章45～62節を参照。

第2部。

修業と敬虔について

「自らの魂の救いに注意深く、熱心に取り組み、精進し、成功を収め、実を結び、霊的に養われ、天使のように喜ぶ者」

第1章。

「善行」

魂の聖化をめぐる闘い

タンガラシュで溢れかえるこの世の中で、注意深く、精進する魂を見かけると、私はとても喜びを感じます。神は慈愛深く公正な方であり、私たち一人ひとりにふさわしい賜物を与えてくださいました。例えば、男性には勇気、女性には愛といった具合です。神は、私たちが精進し、神の恵みの助けを借りて霊的な階段を登り、私たちの創造主である御方にますます近づいていけるように、それらを私たちに与えてくださったのです。霊的に私たちを助けてくれる人々だけでなく、私たちのそばには、私たちを助けてくださるキリストご自身、至聖なる聖母マリア、ケルビム、セラフィム、そしてすべての聖人たちが私たちのそばにいてくださることを決して忘れてはなりません。さあ、大胆に歩みましょう！キリストは極めて強く、全能です。キリストは、私たちが「悪者の角を砕く」ことができるよう、その神聖な力を与えてくださいます。キリストは常に目に見えない形で私たちを見守っておられ、私たちが善意を持ち、自分の力の及ぶ範囲で小さな善行を成し遂げるならば、私たちを強めてくださいます。

可能な限り、罪を犯すきっかけを避けましょう。私たちの感情に注意を払いましょう。なぜなら、すべてはそこから始まるからです。もしそれが時に私たちにとって辛いことであるなら、少なくとも好奇心を避け、私たちの目が罪深い光景を凝視しないようにし、悪魔たちが後に私たちに「映画上映会」を仕掛けてこないようにしましょう。燃えている炭を手握りしめれば、当然、手を火傷するでしょう。しかし、それを手の中で転がしていれば——もちろん、あまり長くはできませんが——害を及ぼすことはありません。邪悪なイメージも同様です。それらが素早くちらりと過ぎ去る時、目はそれを捉えきれず、ほんの軽く触れるだけなので、それらのイメージは後に魂を焼き尽くすことはありません。

世俗の生活において不注意で悪い習慣を身につけてしまった人々は、回心した後、敵からの罵声を不平を言わずに耐え忍びつつ、悪しき欲望を育んではならない。もし彼らがこのように修行を積み、清められ、大きな罪を知らず、悪い習慣も身につけず、かつ激しい非難にも遭わない、貞

潔な人々の境地に達するだろう。過去の過ちを教訓として活かす者は、大いに成功する。地勢を知らずに地雷原を歩く者は、非常にゆっくりと慎重に前進せざるを得ない。さもないと、空中に吹き飛ばされてしまうからだ。しかし、地勢を知っていれば、これまでの経験をもとに、たとえ負傷していても、自信を持って素早く前進することができる。自分の魂という未開の畑に取り組み始めた者は、そこから情欲という茨をすべて取り除き、その場所に美德を植え付けるでしょう。しかし、これは非常に困難な作業であり、強い意志と忍耐を必要とします。

—ゲロンダ、この行いの実践的な側面についてお話しいただけませんか？

—毎日、世俗的かつ罪深いものに対抗する霊的なものを自分の中に取り入れようと努め、そして少しずつ古い人を脱ぎ捨て、やがては霊的な領域を自由に動き回れるようになるのです。記憶にある罪深い情景を聖なるイメージに、世俗的な歌を教会の聖歌に、世俗的な雑誌を霊的な書物に置き換えていくのです。もし人が、この世的なものや罪深いものから離れず、キリストや聖母マリア、聖人たち、そして勝利を収める教会とのつながりを持ち、自らを神の御手に完全に委ねなければ——霊的な健全さを達成することはできないでしょう。

—ゲロンダ、霊的な健康とは何でしょうか？

—霊的な健康とは、清らかな思い、啓発された知性、そして常にキリストと至聖なる神の母をその内に宿す、清められた心に他なりません。細心の注意、自己観察、そして祈りは、魂の健康を得るために大いに役立ちます。祈りは魂を清めるために必要であり、分別は良好な霊的な状態を維持するために必要です。

もちろん、人生は保養所のようなものではありません。喜びがある一方で、悲しみもあります。復活には、まず磔が先行します。試練の打撃は、私たちの魂を救うために必要なものであり、それらは魂を清めるからです。それは衣服と同じです。洗濯の際にこするほど、衣服はきれいになります。タコも同様だ。叩けば叩くほど、タコはきれいになり、柔らかくなる。魚もまた、海で生き生きと泳いでいるときは美しく見え、市場で鱗がついたまま内臓も取り除かれていない状態で横たわっているときでさえ、美しく見える。しかし、食用に適するのは、きれいに処理され——見た目は醜くなり——それから焼かれたときだけである。人間も同様だ。世俗的なものをすべて振り払ったとき、外見上は生命や世俗的な活気——鱗——を失ったように見えても、自分の中から不要なものをすべてかき出し、「焼き上げられ」、そうして初めて食用に適したものとなるのだ。

霊的に成長するために役立つもの

神が（彼らを抑制するためか、あるいは悪意ある者の嫉妬ゆえに）北風の冷たさ——試練——に打ちのめされることを許された人々には、その後、花を咲かせ実を結ぶために、多くの太陽の暖かさと精神的な清々しさが必要となる。まるで、冬の小春の気まぐれな暖かさに信頼を寄せて芽を広げ、その後容赦なく氷のような北風に打ちのめされた木々のように、その後、樹液が巡り始め、花や実を結ぶためには、多くの春の太陽の暖かさと小雨が必要なのです。

—ゲロンダ、霊的な回心には何が必要でしょうか？

— 神への希望と信頼に満ちた愛に満ちた行いです。純朴さと愛に満ちた行いは、内なる平安と確信をもたらし、そうして魂は希望と喜びで満たされます。闘う者が勝利を収めるためには、忍耐、愛、そして霊的な勇気が必要です。勇気は愛に満ちた心から湧き出るものであり、もし心からキリストのために何かを行うならば、それは疲れることも痛むこともない。なぜなら、キリストのための苦しみは霊的な饗宴だからである。わずかな愛に満ちた粘り強さと自己観察があれば、非常に短期間で霊的に成長することができる。そうすれば、魂はキリスト、至聖なる神の母、天使たち、そして聖人たちから助けを受けるようになる。また、聖書の朗読、祈り、内省も大いに役立つ。そして、少しの間、沈黙を守ることも助けとなる。

私たちのキリストは、「善き業」⁶⁷ に励む者たちに力を与えてくださいます。これは、すべての聖人たちが、肉を霊に従わせるために成し遂げたものです。たとえ傷を負ったとしても、冷静さを失うことなく、神の助けを求め、勇気を持って戦い続けるべきです。善き羊飼いはその声を聞き、すぐに駆けつけてくださいます。それは、子羊が傷を負ったり、狼や犬に噛まれたりして哀れに鳴く声を聞いた牧者が、助けに駆けつけるのと同じです。かつては嘆かわしい人生を送っていたが、今や奮闘している人々に対して、私はより深い愛を抱き、常に彼らのことを心に留め、情欲に苦しめられていない人々よりも、彼らのためにより深い痛みを感じている。それと同じように、羊飼いにとっても、傷ついた子羊や衰弱した子羊は他の子羊よりも痛ましく、その子羊が元気になるまで、特に手厚く世話をするのだ。

また、私たちが正しく霊的な戦いを続けているにもかかわらず、何の進歩も見られない理由として、次のようなことがある。すなわち、私たちが彼に宣戦布告したため、その悪霊がサタンに援軍を求めたのだ。もし一年前に私たちがたった一人の悪霊と戦っていたなら、今や五十体と戦っており、一年後にはさらにその数が増え、その繰り返しとなる。神は、私たちが驕らないように、この実態を私たちに見せないようにしておられるのです。私たちはそれを理解していませんが、神は[私たちの中に]善意を見出し、私たちの魂を磨き上げているのです。

— ゲロンダ、もし誰かが精進しているのに成果を上げられないのは、なぜでしょうか？

— おそらく、その人は高慢な心で霊的闘いに励んでいるのでしょう。しかし、ある人々がどこでつまずき、成果を上げられないのか、お伝えしましょうか？ 彼らは（霊的成長のための）素質を持ちながら、それを些細なことに浪費してしまい、その結果、霊的闘いにふさわしい力が残っていないのです。例えば、私たちが敵への攻撃を開始し、必要なものをすべて揃えて戦いの準備をしているとしましょう。しかし、敵は敗北を恐れて、他の戦線での攪乱工作や攻撃によって、私たちを分断し、注意をそらそうとします。私たちはそこに注意を向け、部隊を右へ左へと送り出します。時間は過ぎ、弾薬や食料は減り続け、部隊には古びた軍服を支給することになります。兵士たちの間で不満の声が上がり始めます。その結果、私たちの力はすべて消耗し、敵と戦うことができなくなってしまいます。そして、霊的な戦いにおいても、ある人々は同じように振る舞うのです。

— ゲロンダ、霊的な成長には、周囲の状況も影響するのではないのでしょうか？

⁶⁷ テモテへの手紙一 6:12を参照。

— ええ、助けにはなりますが、聖人たちに囲まれていても、必ずしも成功するとは限りません。キリストと常に共にいたユダほど、恵まれた条件を備えた人物が他にいるでしょうか？ ユダには謙遜さと善意が欠けていた。裏切り後も彼は謙遜せず、怒りと利己心で銀貨を投げ捨て、狡猾に首を吊った。そしてパリサイ人たちは悪魔のような振る舞いをした。彼らの企みが成し遂げられた後、彼らはユダにこう言った。「お前は見るだろう。」⁶⁸ 神は人の状態に応じて働かれる。聖霊を妨げるものは何もない。そして私が理解したのは、人がどこにしようとも、もし誠実に努力すれば、望むもの、すなわち自分の魂の救いに達することができる、ということだ。ロトはソドムとゴモラに住んでいたが、彼の霊的な状態はなんと素晴らしかったことか！⁶⁹ 今、私たちがそれを望もうと望まざろうと、より良くなるために、そして私たちの中に神の恵みが働くように、努力しなければなりません。現在起きていることは、私たちを神にさらに近づけるよう強いており、これからもそうし続けるでしょう。それは、神の力を得て、いかなる状況でも正しく行動できるようにするためです。そしてもちろん、慈愛に満ちた神は私たちを見捨てず、御加護を授けてくださるでしょう。

また、霊的な状態を向上させることで、私たち自身も気分が良くなり、キリストを喜ばせることができるということも知っておくべきです。キリストの子供たちが成長する時、キリストがどれほど大きな喜びを感じられるか、誰が想像できるでしょうか。すべての人々が霊的に成長し、アルファでありオメガであるキリストと一つになることを願っています。私たちの人生全体がアルファとオメガに委ねられているとき、すべてが聖別されるのです。

霊的な読書

— ゲロンダ、善き懸念を抱き始めた人々にとって、どのような本を読むことが助けになるでしょうか？

— まずは福音書を読んで、キリストとは何かを理解するようにさせなさい。[その後]少し心を砕くようになったら、旧約聖書を読むようにさせなさい。何も読んでいない人たちに助けを求められると、どれほど難しいか、わかるでしょう？ まるで小学校の生徒が大学の教授のところへ行って、「助けてください」と言うようなものです。そんな時、教授は何を言えばいいのでしょうか？ 「1プラス1は2です」とでも言うのでしょうか？

また、心の中に真摯な悩みを持たない人々がやって来て、「神父様、私には問題なんてありません。すべてが順調です。ただ、あなたに会いに立ち寄っただけです」と言うこともあります。しかし、人は決して「自分には何の問題もない」とは言えません。何かしらは[やはり]あるものです。霊的な生活のための闘いは、決して終わることがないのです。あるいは、ある人たちは私にこう言います。「何か霊的なことを教えてください。」それはまるで、食料品店に行って「商品をください」と言うようなものです。そう言われたら、店主も戸惑ってしまうでしょう。具体的なものを

⁶⁸ マタイによる福音書 27章4節。

⁶⁹ 創世記19章1～38節を参照。

求めないのです。「これだけの米」「これだけの砂糖」などと指定せず、「商品をください」と言うのです。あるいは、薬剤師のところへ行って、「薬をくれ」と言うのと同じだ。何の病気なのか、医者に行ったのか、医者にと何と言われたのか、何も説明せずに。これでは、どう理解すればいいのか分からないだろう！しかし、精神的な不安を抱えている人は、自分に何が欠けているかを理解し、それを求め、恩恵を受けるのだ。私が信仰の初心者の頃、ある本を読むと、忘れないように書き写し、読んだ内容を実践に活かすよう努めました。私は単に楽しい時間を過ごすために本を読んでいたわけではありません。私の中には健全な探求心があり、何か理解できないことがあれば、[正しい意味]を知るために質問しました。私はあまり本を読まず、読んだ内容で自分自身を厳しく試していました。「自分は今どこにいるのか？何をしているのか？」と。自分自身を被告席に座らせ、読んだ内容が「片耳から入って片耳から出る」ような無意味なものにならないよう、決して許しませんでした。

今日、人々は多くの読書をするあまり、まるでテープレコーダーのようになってしまい、自分のカセットを不要なもので埋め尽くしてしまっている。しかし、聖イサアクによれば、「行いのない学びは恥の源である」⁷⁰。同様に、スポーツに関心のある多くの人々は、ソファに座ってスポーツ雑誌や新聞をただ漫然と読み、自分たちは子牛のように無気力でありながら、アスリートたちを称賛している。「うわぁ、」と彼らは言う。「なんて素晴らしいアスリートだ、よくやった」と。しかし、自分たちは汗一つかかず、体重を1キログラムも減らすことさえしない。スポーツについて読み続け、その間ずっとソファに寝転がり、そこから得られるのは、何の益もなく、ただ読むことそのものからの楽しみだけである。世間の人々のうち、ある者は新聞を読み、ある者は冒険小説を読み、またある者はスタジアムでの試合を観戦し、こうして皆が時間を過ごしている。霊的な本を読む人の中にも、同じことをする者がいる。彼らは夜通し眠らずに、これらの本を夢中で読みふけり、楽しみを得ている。霊的な本を手に取り、楽な姿勢で座り、読みふけるのだ。「私は得るところがあった」と、そのうちの誰かが言うだろう。むしろ、楽しめた、心地よい時間を過ごせた、と言ったほうがよい。なぜなら、それは「得」ではないからだ。本に何が書かれているかを理解し、自分自身を省み、読んだ内容を自分自身に当てはめるよう努めて初めて、あなたは利益を得ることができるのです。「私が読んでいることは何を語っているのか？私は霊的にどの段階にいるのか？私は何をすべきなのか？」そして、人が知れば知るほど、その人はより大きな責任を負うことになるのです。「多くのことを知らず、その責任を負わなくて済むように」と、読むではいけないと言っているわけではない。読書に対してそのような態度をとることは、偽善に他ならない。私が言いたいのは、単に楽しみを得るためだけに読むべきではない、ということだ。読者の記憶力が優れていて、多くのことを記憶してしまうのは良くない。

また、その人は多くのことを語ることができ、読んだことを自分の人生に応用していると思ひ込んで、自分自身を欺くこともあります。そうして、自分自身にも他人にも、誤った感情を抱かせ

⁷⁰ 「しかし、行いに裏打ちされた言葉は希望の宝庫であり、行いに裏打ちされない知恵は恥の源である。」 アッバ・イサク・シリア人『著作集』（セルギエフ・ボサド、1911年、7頁）参照

てしまうのです。ですから、多くの読書で自分の心をなだめてはいけません。読んだことを実践することに取り組みましょう。多くの読書は百科事典的な教養を与える——そう言われているのでしょうか？

— はい、ゲロンダ。

— しかし、重要なのは、神を中心とした教育を身につけることです。私は大学教授になるつもりありませんし、多くのことを知る義務也没有。神を中心とした教育を身につければ、必要に応じて他の分野のことも容易に知ることができるでしょう。分かりましたか？

— 気が散っている時、読書に集中するのは役に立ちますか？

— ええ、魂を温めるために、少しばかり非常に力強いものを読むべきです。心配事や気掛かりは読んだ内容に覆い隠され、心は神聖な領域へと移されます。そうでなければ、心は普段の大半の時間を費やしていた事柄へと向かってしまうのです。

— ゲロンダ、もし誰かが疲れていたり落ち込んでいたりして、何か軽いもの——短編小説や物語など——を読みたいと思った場合はどうでしょうか？

— そのような場合にふさわしい霊的な本など、一つもないというのでしょうか？ 目的は、その人が落ち込みを忘れることなく、そこから解放されることにあるのです。娯楽文学は解放をもたらしません。小説も、新聞も、テレビも、霊的生活には役立ちません。霊的な雑誌でさえ、愚かな嫉妬を煽り、動揺を引き起こすことで、クリスチャンに害を及ぼすことがよくあります。注意してください。余暇に余計なものを読んではいけません。ある種の本を読むことは、まるでカボチャの薄っぺらなスープで胃を満たすようなものであり、一粒の小麦を探すために藁の山を掘り起こすようなものです。「ええ、」と一部の人は言う。「でも、そういう本を読むとリラックスできるんです。」いや、そんな「読み物」で頭が混乱し、目が痛くなるような状態で、どうしてリラックスできるというのか、君よ？ それなら、休息をとるために、むしろ眠ったほうがましだ。人が何を読むかによって、その人の霊的な状態を見分けることができる。非常に世俗的な人は、不道德な雑誌を読むだろう。それほど世俗的ではない人は、それほど卑猥ではない雑誌や新聞を読むだろう。教会に通う人は、霊的な出版物、現代の霊的な本、あるいは教父たちの著作などを読むだろう。

— ゲロンダ、どのような霊的な本が最も助けになりますか？

— 今日、神の御恵みにより何千冊もの聖父たちの著作が刊行されていますが、それらは非常に大きな助けとなります。これらの本には、あなたが求めているもの、必要としているものが見つかります。それらは真の霊的な糧であり、霊的な道を安全に導いてくれます。しかし、それらが助けとなるためには、謙虚さと祈りを込めて読まなければなりません。教父たちの書物はCTスキャンに似ています：⁷¹ CTスキャンが人の身体の状態を映し出すように、霊的な書物は人の霊的な状態を映し出します。教父たちのテキストの各文には、一つではなく多くの意味が秘められており、それは各人が自身の霊的な状態に応じて理解するものです。できれば、翻訳ではなく原文そのものを読む

⁷¹ 断層撮影——異なる深さに位置する対象物の個々の断面の陰影画像を得る、層ごとのX線検査（『医学百科事典』参照）。——訳者注

のが望ましい⁷²。なぜなら、翻訳者は自身の霊性に応じて原文を解釈してしまうからだ。しかし、いずれにせよ、聖父たちの教えを理解するためには、心を整え、精神を集中させ、霊的に生きなければならない。聖父たちの霊は、霊によってのみ受け取られるからである。特に、アバ・イサアク・シリンの修道的な言葉は大きな助けとなりますが、その「糧」が消化されるよう、少しずつ読む必要があります。「エヴェルゲティノス」⁷³は、[それを通じて]聖父たちの精神のすべてを知ることができるという点で、偉大な恩恵です。この書物が助けとなるのは、聖なる父たちがあらゆる情欲とどのように戦ったかを順を追って記述しており、魂は父たちがどのように労苦したかを悟り、益を受けるからです。聖人の伝記も同様です。これらは聖化された歴史であり、それゆえに、特に子供たちにとって大いに助けとなります。しかし、それらをおとぎ話のように読むはいけません。

敬虔さを身につけるために、多くの知識を持つ必要はありません。私たちが知っているわずかなことを深く思索すれば、心は動き出します。ある人はたった一つのトロパリを聞くだけで心が揺さぶられますが、別の人はすべてを暗記しているにもかかわらず何も感じないこともあります。それは、その人が霊的な現実の外側を歩んでいるからです。ですから、教父たちの著作を、たとえ一日一、二行でも読んでください。それは、心を大いに強めてくれるビタミンなのです。

「真の崇拜者たち……」⁷⁴

「この小さくて愛らしい教会では——と、ある人々は言います——私は神聖な典礼を深く体験できますが、大きな教会ではそうではありません。もし教会が漆喰で塗り固められ、白く塗られているなら、私は何も感じませんが、壁画が描かれ、立派なイコノスタスなどがある教会では、神聖な典礼を深く体験できるのです。」これは、食べたくない人に、食欲をそそるために食事に塩やコショウを加えるのと同じことです。

—つまり、ゲロンダ、あなたが挙げたことは何の意味もないということですか？役に立たないのですか？

—そんなことは言っていない。助けにはなりますが、そこに固執してはいけません。そうでなければ、人は魔法のような方法でキリストを感じようと努め、暗い独房や、薄暗いランプ、心を和ませるような教会を探し求め、それなしでは祈ることができなくなってしまうでしょう。しかし

⁷² この場合、長老が指しているのは、古代ギリシャ語で書かれた教父文献と、それらを現代ギリシャ語に翻訳したものである。ロシアの霊的文献においても、スラブ語で書かれた教父文献と、それらを現代ロシア語に翻訳したものが同様の関係にある。——訳者注

⁷³ 「エヴェルゲティノス」とは、ビザンツ時代にコンスタンティノーブルのエヴェルゲティス修道院の修道士パウロによって編纂され、18世紀末に聖ニコディモス・スヴィャトゴルツによって初めて刊行された、4巻からなる教父の教えの体系的な集成である。

⁷⁴ ヨハネの手紙4章23節を参照。

、どこにいても同じように感じられるべきです。電車の中だろうと、洞窟だろうと、旅の途中だろうと。神は一人ひとりを小さな教会として造られました。そして、その教会はどこへでも持ち運ぶことができるのです。

誰もが安らぎを求めているが、安らぎは内面からやってくる。そして、ある聖地から別の聖地へと巡礼するこれらの哀れな人々は、キリストを見つけたいと願っているが、その間もキリストは彼らのすぐそばにいたのだ。苦勞せずにキリストを見つけられる機会があるにもかかわらず、彼らは疲れ果ててしまい、結局はキリストを見つけられない。真に靈的な人は、あちこちをさまよい、様々な名所を巡ることで平安を得ることはない。それらは、苦しみにある人々のためのものであり、彼らの動揺を少しばかり忘れさせてくれるからだ。神からの慰めを持つ靈的な人は、そのようなものを必要としません。もしその人が神からの慰めを内に持たないならば、世俗の人々と何ら変わりません。その人の志や関心もまた、靈的なものではなく、世俗的なものとなるでしょう。そのような人は、世俗的な何かによって平安を得ようと努めることになるのです。

多くの人が聖山を訪れ、さまざまな長老たちに会い、それぞれから聞く言葉に勇気づけられ、自分なりに解釈してその意味を混同し、さらに「とても有意義な時間を過ごせた!」と言う。しかし、もし彼らがたった一人の修道士を訪ね、その人に相談し、その人が言ったことを実行しようと努めたなら、真の助けを得られたことでしょう。彼らが今行っていることは、「靈的観光」と呼ばれます。彼らは時間を無駄にし、目的もなく苦しみ、何の益も得ていません。もし彼らが一人の神父に忠実に従い、聞いたことを実行していたら、どれほど楽だったことでしょう! なぜなら、そうすれば彼らは内面から疲れが消えていくのを感じられたはずですが、今はあちこちをさまよい、この世の人々と同じように、聖山の緑豊かな風景を眺めて休息しているだけだからです。

また、「ある聖母のもとへ、別の聖母のもとへ行こう!」と言う者たちもいる。聖母はただお一人である。彼らは敬虔さからではなく、ただ旅をして楽しみたいという欲求から、こうしたことをしているのだ。このことから、彼らの心が落ち着いていないことが見て取れる。敬虔さや謙虚さを欠いている者なら、たとえ主の聖なる御墓のクヴクリヤそのものに座らせたとしても、何も見ることはできないだろう。しかし、もし敬虔さがあれば、ゴルゴタの丘でさえも聖なる火を見ることができるのだ。ある時、聖サヴァ修道院の修道見習いの一人が、大土曜日、自分の修道院のために聖なる火を受け取るべく、主の聖墳墓を訪れた。通常、近隣の修道院は修道士たちを聖なる火を受け取りに派遣する。その見習い修道士は小細工を思いついた。修道服を着て、信徒たちを押しつけて最前列に割り込んだのだ。しかしその後、聖職者たちが到着すると、彼は後ろに押し戻されてしまった。というのも、誰がどこに立つかはあらかじめ決められていたからである。その時、見習い修道士は自分自身を罵り始めた。「ああ、この忌まわしい罪人め、ああ、この滅びゆく魂め、その醜い本性をさらけ出してまで前に割り込んだとは! さあ、ここから出て行け、失せろ! お前は教会にさえいる資格などないのだ!」そして彼は、そう自分に言い聞かせたことを信じていた。彼は教会を出て、キリストにこう懇願した。「わがキリストよ、お願いです、私を嫌悪なさらしないで、どうか他の聖地へ行くことをお許しください。」それから彼はゴルゴタへと登り、そこで再び自分を呪った。「考えてみろ、お前はなんて悪巧みをしたんだ! この無価値な者が修道服を着ているというだけで、自分より優れた他の人々を追い払っていたのだ……」そして、彼がそうして自らを責め

立てていたある瞬間、聖なるゴルゴタから強烈な光が放たれ、彼の存在そのものを貫いた。「聖なる火が降りてきた！」——その時、その哀れな男はそう言い、ゴルゴタから聖なる火を自分のランタンに灯して、その場を去っていった。

—つまり、ゲロンダ、聖地巡礼などは、例えば聖地への巡礼は、益にならないということですか？

—考えてみてほしい。今日、わずかな利益を得るために旅をすると、電車や飛行機、ホテルなどで（むしろ）大きな害を受けることになる。すべてが世俗化してしまったのだ。霊的な場所へ向かい、そこで世間の甚だしい放蕩を目にして、一体どのような利益が得られるというのか？ これらすべてが益となるためには、非常に強い人間でなければならない。そして、団体旅行の際に説明や解説をするあのガイドは、時には黙っていたほうがよいのだ！ なぜなら、彼は敬虔さを欠いた口調で、例えば「ここはゲッセマネ、ここは主の聖なる御墓」と言う代わりに、こう騒ぎ立てるからだ：「これはこれ、あれはあれ、さあベツレヘムへ向かいます。そこにはペルシャから賢者たちがやって来ました」——と、巡礼者たちをこっそりと……[まるで]クウェートへ「連れ去って」しまうのです！ 聖書を読み、ここが主の聖墳墓であり、ここがゲッセマネであることを知っている人にとって、そのようなガイドは集中して祈ることを妨げてしまう。こうした話は、聖書を読んだことのない人だけに必要だが、聖地への巡礼に訪れる人々は皆、聖書を読んでいるのだ。その結果、人々は恩恵を受けるところか、頭が混乱したままになってしまう。さらに、ある聖地からすぐに逃げ出し、別の聖地へと駆け回ってしまう——聞いたことが心に残らないのだ。もちろん、巡礼の同行者や引率者が霊的な人々であり、事前に適切な準備がなされていた場合は別だが。

ファラスからヤニツェに移住してきたある女性は、こう語った。「これって、ハッジなの？⁷⁵ エルサレムまでは30分で飛んで行って、30分で戻ってくる。これってハッジなの？」 昔、貧しい巡礼の女性たちは聖地に留まり、そこで徹夜祈を行っていた。それは霊的な恩恵を得るためであり、また宿代を節約して施しを配るためでもあった。もし巡礼から戻っても精神的に何の変化も見られない人がいれば、こう言われたものだ。「ニンニクになって出かけたのに、ネギになって帰ってきたな」。聖アルセニオス・カッパドキオスは10年ごとにエルサレムへの巡礼を行い、そこから船に乗るために5日間歩いてメルシンまで歩いた。 今日では、このようなことはめったに見られない。ウラジオストク出身のロシア人男性が私のカリヴァを訪れた時のことを覚えている。そこは日本の対岸にあたる。彼は聖地まで徒歩で行くという誓いを立てていた。彼が司教のもとへ祝福を求めに行くと、司教は「正気じゃない、一体どこまで歩いて行くつもりだ？」と言った。そこで彼はまず、モスクワ近郊のザゴルスクにある修道院へ行き、ある長老から祝福を受けた。復活祭の日にザゴルスクを徒歩で出発し、10月にはエルサレムに到着した。 1日70キロメートルを歩き続けた。その後、エルサレムから聖山まで徒歩で登り、再びエルサレムへ向かおうとしていた。彼には確かに神

⁷⁵ ハッジ（文字通り「巡礼者」）——東方では、聖地への巡礼を成し遂げた人物の名前の前に付けられる敬称——訳者注。

聖な使命があり、⁷⁶、まるで別世界に住んでいるかのようなようだった。彼はギリシャ語を少し知っていたので、私たちは互いに理解し合えた。「僕はね——と彼は私に言った——そこで反キリストに出会い、殉教者になるだろうと思っていたんだ。彼が僕の首を切り落とすだろうと！ でも、そこにはいなかった！ 今、またエルサレムへ行き、君のために主の聖墓の前で礼拝を捧げるから、君は僕の名前を覚えていてくれ。」彼は飛び起きて、地面にひれ伏し、自分がどう礼をするか、そして頭を石にぶつける様子を私に見せてくれた！ 彼の中には炎が燃えているのが見て取れた。一方、観光目的で敬虔さもなく聖地を訪れるような人たちは、むしろそこへ行くべきではない。

聖地では、キリストの臨在がいかに強く感じられることか！例えば、ゴルゴタへ向かう道中、何かが変わっていくのを感じる。その道がどこへ続くのかさえ知らなくても、その道を歩いているだけで、胸が締め付けられるような思いに駆られる。そこには、ラテン語で「via Dolorosa」と書かれた看板もある。⁷⁷そして、主の聖墓の前には、実に多様な人々が集まっている。聖職者、信徒、身なりがきちんとしている人もいれば、そうでない人もいます。長い服を着ている人もいれば、短い服を着ている人も、ほとんど何も着ていないような人もいます。髪を刈り上げている人もいれば、長い髪の人もある。様々な人々、様々な人種、様々な民族。そして信仰も様々で、ある者はローマ・カトリック、ある者はアルメニア正教……しかし、皆がそこへやって来て、聖地を崇拝している。これは私に深い印象を与えた。胸を打つ光景だ。しかし、これらすべてを、心が温まり、靈的に高められるように、善意を持って捉える必要がある。

— ゲロンダ、もし巡礼したいという気持ちがないとしたら、それは敬虔さが欠けているということなのでしょうか？

— いいえ。私自身、聖山のすべての修道院を訪れたわけではなく、多くの聖地にも行ったことがあります。例えば、聖ヨハネス・ルスキュの聖地には行ったことはありませんが、だからといって私がその聖人を敬っていないということにはなりません。ある聖地にある聖人の[聖遺骨]に対して敬虔な心を持つことは良いことですが、そこへ行くことばかりを追い求める必要はありません。好機が訪れたり、何か理由ができた時に、そこへ行けばよいのです。重要なのは、キリストがサマリアの女に言われた言葉です：「……『真の礼拝者たちは、霊と真理をもって父を礼拝する』」

私たちの魂の救い

— ゲロンダ、ある人は自分が救われると確信していますが、他の人はそれを疑っています。どちらの姿勢がより正しいのでしょうか？

⁷⁶ Θεῖος ἄνθρωπος（ギリシャ語）——訳者注。

⁷⁷ 苦難の道（ラテン語）。

— 目的は、人が神の戒めを守ることにあります。霊的な人は、たとえ神が自分を樂園に入れなかったとしても、それを気にかけないような境地に達さなければなりません。今日私たちは生きていますが、明日はこの世を去るかもしれないということをしっかりと理解し、キリストのもとへ至るよう努めなければなりません。神の恵みによってこの世の虚しさを悟った人々は、最も偉大な賜物を受け取ったのです。彼らには、透視の賜物を得て未来を予見する必要はありません。なぜなら、自分の魂の救いを予見し、救われるために可能な限り最大限の霊的な措置を講じれば十分だからです。キリストもこう言われました。「一つの魂の価値は、全世界の価値に勝る。」⁷⁸ これほどまでに、魂の尊さは計り知れないのです！ それゆえ、魂の救いは偉大な業なのです。

— つまり、ゲロンダ、救いへの希望も、苦しみへの恐れも持つべきではないということですか？

— 救いへの希望があれば、苦しみへの恐れはありません。人に救いへの希望があるなら、その人は多かれ少なかれ順調なのです。神は、愛をもって、できる限り精進し、不品行に走らず、その闘いにおいて時には敗れ、時には勝利する人を、決して見捨てられることはありません。神を悲しませないよう少しでも心が向いている者は、樂園へ「ガラシを履いたまま」入っていくでしょう。本質的に慈愛に満ちた神は、その者を樂園へと「押し込んで」くださり、その者が値する以上のものを与えてくださいます。そして、その者が悔い改めの心にあるその瞬間に、その魂を迎え入れるよう、すべてを整えてくださるのです。その人は一生をかけて苦闘するかもしれないが、神は彼を見捨てず、最もふさわしい時に彼を迎え入れてくださる。

神は慈愛に満ちており、私たち全員が救われることを望んでおられます。もし救いがごく少数の人々のためだけのものであったなら、キリストはなぜ十字架にかかれたのでしょうか？ 天国の門は狭くはありません。⁷⁹ それは、謙虚に 頭を垂れ、高慢に膨れ上がっていないすべての人々に開かれています。ただ悔い改めさえすれば、つまり自分の罪の重荷をキリストに委ねさえすれば、彼らは自由にその門をくぐることはできるのです。さらに、私たちには情状酌量の余地があります。私たちは肉体を持っており、天使たちのように単なる霊ではありません。しかし、悔い改めず、謙虚に救い主に近づかなければ、私たちに言い訳の余地はありません。十字架上の強盗はただ「許してください」と一言言っただけで救われた。⁸⁰ 人の救いは一分一秒にかかっている。謙虚な思いを持つ者は救われるが、高慢な思いを抱く者はすべてを失う。

私たちには、愛欲から、そしてそれ以外の何ものからも救われるべきです。神にとって、人が苦しんでいるのを見る以上に大きな痛みはありません。神の多くの祝福に対する感謝と、神の御姿

⁷⁸ マタイによる福音書16章26節を参照。

⁷⁹ 長老は、もちろん、これらの言葉で、天国の門が狭いというよく知られた福音書の教え（マタイ7:13-14およびルカ13:24参照）に異議を唱えようとしているわけではないが、救いの道は広く、すべての人に開かれているということを強調している。——訳者注

⁸⁰ ルカ23:40-43を参照。

である隣人への謙虚で愛に満ちた態度、そしてささやかな愛の行いを組み合わせるだけで、私たちの魂がこの世でも来世でも安らぎを得るには十分だと私は思う。⁸¹

第2章。 悪魔の働きについて

悪魔は修行者を打ちのめそうとしている

— ゲロンダ、時には誘惑が次から次へと押し寄せてきて、私にはもう力が残っていません……

— 誘惑を避ける方法を教えてあげよう。私の言うことを受け入れてくれるか？

— はい。

— 誘惑を避ける唯一の方法は……悪魔の味方になることだ！ なぜ笑う？ この方法が気に入らないのか？ それなら、よく聞いておけ。

人が闘っている限り、誘惑や困難はつきものです。そして、誘惑を避けようとすればするほど、悪魔はより激しく立ちのびてきます。時には、私たちの生活は福音的な生き方と相反することがあります。だからこそ、誘惑を賢く活用すれば、私たちの生活を福音と調和させる機会が与えられるのです。

— でも、ゲロンダ、私は些細なことにこだわってしまい、その後、より高次の目的のために奮闘する気力が失われてしまうんです。

— それはまるで、敵が軍隊を無力化するために仕掛ける地雷のようなものです。タンガラシュカは、他の方法では修行者に害を及ぼせないと見ると、些細なことで修行者を無力化しようとしています。しかし、小さなタンガラシュカであっても、少なからぬ害をもたらすことがあるということを覚えておいてください。ある時、ある小さなタンガラシュカにこう尋ねられた。「さて、君には何ができるんだい？」——「私に何ができるって？」と彼は聞き返した。「私は仕立て屋や靴職人のところへ行って、糸を絡ませたりして、彼らをイライラさせたりするんだ！」最大の誘惑は些細なことから生じ、それは私たち人間の間だけでなく、時には国家間でも起こる。霊的な人々には誘惑の深刻な口実がないため、悪魔は些細なことを口実として利用する。悪魔は、愚かなことや子供じみたことで人の心を打ち砕き、人間の心を自分の望む通りに変えてしまう。そうして人は無感覚になり、切り株のようにその場に立ち尽くしてしまうのだ。

— ゲロンダ、なぜ、生活リズムや霊的生活の規律を確立し、最初は精進する意欲があったにもかかわらず、すぐに自制心を失い、以前の状態に戻ってしまうのでしょうか？

⁸¹ 言うまでもなく、長老の言葉は、精進し、教会の秘跡に参与する正教会の信徒たちに向けられている。

— あなた自身、その理由が分からないのですか？ タンガラシュカは、私たちが霊的に努力していることを知ると、私たちの「プログラム」を別のものへと「切り替える」のです。自分なりの秩序を確立し、一つの軌道に沿って進み始めた途端、私たちは別の軌道に迷い込んでしまうのです。そして、注意を怠っていると、それに気づくのは数日後になってしまいます。だからこそ、修行者はあらゆる面で悪魔に逆らわなければならない（もちろん、理性を働かせて）し、[さらに]経験豊富な霊的指導者が彼を見守らなければならないのです。

— では、自分自身に対して繊細な内省を行っていない人に対して、サタンは戦いを仕掛けてくるのでしょうか？

— サタンは平凡な人々には近づかず、修行者のもとへやって来る。それは、彼を誘惑し、その道を外れさせるためだ。敵は、自ら内面への精緻な研鑽を行っていない者に対して、時間を浪費してまで精緻な働きをかけることはない。ジプシーの針で縫う者には、ジプシーの針を持った悪魔を送り込むだろう。繊細な手仕事に従事する者には、繊細な手仕事をする悪魔を送り込む。最も繊細な刺繍師には、極めて繊細な作業を専門とする悪魔を、自分自身への研鑽を粗雑に行う者には、粗野な悪魔を送り込む。初心者の元には、初心者の悪魔を送り込むのだ。

繊細な魂を持ち、愛に満ち、感受性の強い人々は注意しなければならない。悪魔は尻尾をくねらせて彼らをさらに感受性の高めるため、彼らは落胆に陥ったり、神よ、どうかお守りください、自殺にまで至ったりする恐れがあるからだ。悪魔は、私たち人間に隣人に逆らって争うよう煽るものの、自分自身が決して逆らうことはない。怠惰な者をさらに怠惰にし、「頭が痛い、体調が悪い。祈りのために起き上がらなくても大丈夫だ」という考えでその者をなだめる。敬虔な人を、悪魔はさらに敬虔にさせ、高慢に陥らせたり、あるいはその力の及ばない偉業へと駆り立てたりする。そうして、かつて熱心だった修行者が力尽き、やがてすべての霊的な武器を捨てて、諦めてしまうように仕向けるのである。冷酷な者を悪魔はさらに冷酷にし、感受性の強い者を過度に敏感にする。

どれほど多くの人々が、ある者は感受性の強さゆえに、またある者は神経が摩耗しているゆえに、不眠に苛まれ、薬を飲み続けたり、病院で無駄に苦しんだりしていることか！ 今日、心の安定した人を見かけることは稀だ。人々は蓄電池のようになり、その大半はまるで帯電しているかのようだ。そして、懺悔をしない人々は、さらに悪魔的な影響を受け、ある種の悪魔的な魅力を放っている。なぜなら、悪魔が彼らを支配しているからだ。若者であれ、少女であれ、高齢者であれ、穏やかな眼差しを持つ人はごくわずかだ。狂乱！ 狂乱とは何か、知っているか？ それは、人々と相互理解に達することが不可能な状態のことだ。

悪魔は私たちに鎮痛注射を打っている

外科手術における麻酔について議論していたある医師たちに、私はこう言いました。「悪魔の麻酔は人間にとって深刻な結果を招きますが、あなたがたが行う麻酔は、人を助けるものです。」悪魔の麻酔とは、蛇が鳥やウサギを麻痺させ、抵抗なく食い尽くすための毒のようなものだ。悪魔が人間を打ち負かそうとするとき、彼はまず「麻酔医」という小悪魔を先遣隊として送り込み、そ

の者に人間を無感覚にさせるよう仕向ける。その後、悪魔自身が現れて人間を粉々にし、好き勝手に振る舞うのです。しかし、それはまず「麻醉医」が私たちに麻醉注射を打ち、私たちが意識を失うところから始まります。例えば、修道士として、私たちは「侮辱や非難に耐える」と誓い、他の神聖な誓願も立てますが、その後、悪魔に惑わされて、誓ったこととは正反対のことをしてしまうことがあります。あることから始めて別のことで終わり、ある場所へ向かうつもりが別の場所にたどり着いてしまうのです。私たちは不注意なのです。私がこのような例を挙げたことがなかったでしょうか？

かつてコニツァには銀行がありませんでした。人々が借金をしたいときは、ヤニナまで出向いていました。近隣の村々から数人が集まり、例えば馬を買うためにお金を借りるために、72キロメートルを徒歩で歩いて行ったものです。当時、馬さえいれば家族を養うことができた。自分の馬を誰かの馬とつがいにして、畑を耕すのだ。そんなある日、ある農民が馬を買うためにヤニナへ借金をしに行った。馬で畑を耕せば、鋤で苦労する必要がなくなるからだ。彼は銀行で融資を受けると、ユダヤ人の店をぶらぶらと見て回った。あるユダヤ人が彼を見つけると、店の中に引きずり込んだ。「さあ、おじさん、中に入ってください。あなたなら、なんて素敵なものがあるか見てみて！」農民が店に入ると、ユダヤ人は棚から布のロールを次々と取り出し、一つを手にとって別のものを放り投げていた。「持って行きなよ」と彼は言った。「いい生地だ。お前の子供たちのためなら、もっと安くしてやるよ！」お人好しの農民は、ある店から飛び出し、別の店へ向かった。「さあ、おじさん、」と別のユダヤ人が彼に言う。「中へお入りください。あなたなら、もっと安く売ってあげますよ！」彼の目の前で布のロールを棚から取り出し、広げ、巻き戻し……最後には、この不運な男の頭がくらくらしてしまった。彼には、さらに少しばかり好奇心もあったのだ。「まあ、仕方ないか」と彼は言った。「あいつが棚からロールを下ろして、広げてくれたし……子供たちのために安く譲ってくれるらしいし……」彼は銀行で引き出したお金をユダヤ人に渡し、布のロールを買ったが、それも腐っていたのだ！そもそも、なぜ布のロールを丸ごと買う必要があったのだろうか？布をロール単位で買うなんて、金持ちですらせず、必要な分だけ買っていたものだ。結局、彼は腐った布のロールを抱えて家に戻った。「馬はどこだ？」と彼に尋ねられた。「俺さ」と彼は言う。「子供たちのために布を持って帰ってきたんだ！」しかし、そんな大量の布を彼らはどうすればいいというのか？銀行には借金が残りと、馬も買えなかった——手元にあるのは、虫食いの布のロールだけだ！そしてまた、いつもの生活に戻るしかない——鋤で土を耕し、苦しみ、借金を返済するのだ！もし彼が馬を買っていたなら、馬に乗って帰ることができ、家用の物も少しは買えたはずだし、それ以降も鋤を手で畑で死に物狂いで働く必要はなかっただろう。しかし、ご覧の通り、ユダヤ人の店での無駄遣いのせいで、彼は一体どこまで追い詰められてしまったのか？悪魔も同様に振る舞う。狡猾な商人のように、彼はあなたを右へ左へと引きずり回し、足を引っかけて、最終的には自分が望む場所へあなたを導こうとする。そして、もしあなたが不注意であれば、ある場所へ向かうとしたのに、結局は別の場所にたどり着いてしまうのだ。悪魔はあなたを欺き、あなたは人生の最も貴重な年月を失ってしまうのです。

悪魔は、人が益を得られないようにあらゆる手を尽くす

悪魔は巧妙な手口を使う。例えば、霊的な人に聖体礼儀の最中に邪悪な考えを吹き込もうとしても、その人はそれに気づき、身を引き締めてそれを追い払ってしまう。そこで悪魔は、その人に霊的な考えを吹き込む。「あの聖体礼儀に関する本には、こう書かれている」と悪魔は言うのだ。それから、例えばシャンデリアに注意をそらし、その人は誰が作ったのかと考え始める。あるいは、悪魔は「あの病人を訪ねなければならない」と思い出させる。「おやまあ！——その人は言うだろう。「聖体礼儀の最中にひらめきが訪れた！」——その一方で、すでに内側には悪魔が割り込んでいるのだ。人は自分の思いと対話し始め、司祭が「神への畏敬と信仰をもって参列せよ！」と宣言する声を聞いて初めて、聖体礼儀が終わったことに気づく。しかし、自分自身がその礼儀に全く参加していなかったことに気づくのだ。そう、ここ教会でも、修道女がシャンデリアのろうそくに火を灯しに行くとき、私は、年配の人々でさえも、誘惑者の方が注意をそらしていることに気づく。彼らは、修道女がろうそくに火をつける様子をじっと見つめているのだ。これはまさに子供じみた行為だ！ このようなことは、子供たちが喜ぶようなものだけだ。「火がついた！」——と彼らは言う。幼い子供たちにはそれなりの言い訳があるかもしれないが、大人たちには？ あるいは、聖体礼儀の最中は動きを控えるべきであるにもかかわらず、誘惑者が修道女の一人をそそのかして、神聖な瞬間に祭壇上の本をページをめくらせ、物音を立て、他の礼拝者たちの注意をそらしてしまうこともある。その物音を聞いた人々はこう尋ねるのだ。「これは何だろう？」と。彼らの心は神から離れ、タンガラシュカは喜ぶ。だからこそ、礼拝中に私たちのせいで他の人々の注意がそらされないよう、注意を払うべきである。私たちは人々に害を与えているのに、それに気づいていません。あるいは、教会での朗読の様子を観察してみてください。朗読者が、人々に益をもたらす最も神聖な瞬間に差し掛かると、すぐに[何かが起こります]。風がドアを激しくバタンと閉めたり、誰かが咳き込んだり……。人々の注意はそらされ、読まれている聖なる言葉から恩恵を受けることはできません。これがタンガラシュカの仕業なのです。

ああ、もし悪魔がどのように働くかを見ることができたら！ あなた方は彼を見たことがないからこそ、ある事柄を理解できないのです。彼は、人が恩恵を受けられないようにするためにあらゆることをするのです。私は自分のカリヴァで人々と話している時に、このことに気づきます。聞き手に助けとなるよう、会話のクライマックスに差し掛かった途端、すぐに何か物音がしたり、誰かが入ってきたりして、私は話を中断せざるを得なくなります。悪魔はあらかじめ彼らに、向かいの修道院を眺めながらおしゃべりをするよう唆したり⁸²）、あるいは何か面白いものを見せるよう仕向けたりして、会話の最も重要な瞬間に彼らがやってくるようタイミングを計るのです。そうして私は話題を変えざるを得なくなり、話し相手は有益なものを得られないままになってしまうのです。というのも、悪魔は会話の初めからそれがどう終わるかを知っており、自分が損害を被ることを悟ると、最も重要な瞬間に誰かを送り込んで私を遮らせるからだ。「おい、」と新しく来た者

⁸² これは、聖大殉教者パンテレイモンのクトルムシュ修道院を指しており、その向かい側に「パナグダ」という修道室がある。——訳者注

が叫ぶ。「神父様、ここの入り口はどこですか？」 「『どうぞ』と私は答える。『ルクマと水を召し上がって、あちらから入ってください』」すると、その瞬間、別の人が入ってきて私の話を遮る。立ち上がって彼らに挨拶しなければならないからだ。ほどなくして三番目の人たちがやってきて、また立ち上がらなければならない。そして彼らは会話を切り出す。「どこから来たんだ？」——といった具合で、私はまた 最初からやり直さざるを得なくなり、例えば、すでに挙げたあの例え話を繰り返さなければならない。ようやく話し始めたかと思うと、下からまた誰かが叫ぶ。「おい、パイシイ神父！ どこに住んでるんだ？ 入り口はここか？」また立ち上がらなければならない。

まったく、この誘惑め！ ある日は悪魔が6、7回もこんなことを仕掛けてきて、私はついに……見張りを立たざるを得なくなった！ 「お前はあそこに座って、あっちから誰も来ないか見張ってろ。お前は、俺が用事を済ませるまでここに座ってろ。」こうして、六、七回も一から話を始め、人々が教訓を得られるところまで話を進めても、またあの厄介者たちが邪魔をしてくるのだ。

ああ、誘惑よ、敵は一体何をしているのか！ 敵は絶えず私たちの波長を別の周波数に切り替えてくる。信仰に励む者が何かから感動を得ようとしたその瞬間、「パチッ！」と、人の注意をそらすような何かに波長を切り替えてしまうのだ。 また何か霊的なことを思い出そうとしているか？ 「パチン！」——と、別のことを思い出させるのです。[そうして]敵は絶えずクリスチャンを惑わし続けます。もし人が悪魔の働き方を理解すれば、多くのものから解放されるでしょう。

— ゲロンダ、それをどうすれば理解できるのでしょうか？

— 観察するのです。観察することで学ぶのです。最も優れた気象学者は誰でしょうか？ 羊飼いです。[なぜですか？] 彼らは雲を観察し、風を注視しているからです。

[人間の]意志の翼

人は良い影響にも悪い影響にも簡単にさらされてしまいます。悪い影響にさらされるほうが簡単です。なぜなら、そこには悪魔がはびこっているからです。例えば、タバコは体に悪いからと、誰かに禁煙するよう勧めてみてください。 その人が禁煙を決意した途端、悪魔はすぐに近づいてこ言うでしょう。「このタバコはニコチンが少ないし、こっちには浄化フィルターが付いているから、これを吸えば害はないよ」。つまり、悪魔はその人が禁煙しないための言い訳を見つけ出し、その人にとっての「逃げ道」を用意してしまうのです！ 何しろ、悪魔は私たちに山ほどの言い訳を見つけ出すことができるのです。そして、悪魔が勧めるタバコは、かえってさらに大きな害をもたらすかもしれません。だからこそ、私たちは意志の強さを持たなければなりません。もし若いうちに自分の欠点を克服しなければ、後になっては克服するのが難しくなります。なぜなら、人は年を重ねるほど、意志が弱くなるからです。

意志の力がなければ、人は何も成し遂げられません。聖ヨハネス・クロイソストモスはこう言っています。「『したい』と『したくない』にすべてがかかっている。」⁸³ つまり、すべては人がしたいと思うか、思わないかにかかっているのです。なんと偉大なことでしょうか！神は本質的に善であり、常に私たちのために最善を願っておられます。しかし、私たちもそれを望まなければなりません。なぜなら、人は二つの翼——神の意志と自らの意志——によって霊的に飛翔するからです。一方の翼——神の意志——は、神が私たちの片方の肩に永遠に貼り付けてくださいました。しかし、霊的に飛翔するためには、私たちももう一方の肩に、自らの翼——人間の意志——を貼り付ける必要があります。もし人が強い意志を持っていれば、その人には神の翼と等価な人間の翼があり、飛ぶことができる。しかし、もし人の意志が未発達であれば、飛び立とうとしても、[その代わりに]宙返りをしてしまう。もう一度試みても——また同じことになってしまうのだ！

—ゲロンダ、意志の力は鍛えることができるのでしょうか？

— すべてを鍛えることができる、と私たちは話していませんでしたか？ すべての人には意志の力があります——ある人には少なく、ある人には多いだけです。人が修行に励む心構えを持ち、祈り、神に自分の中の意志の力を増やしてくださるよう願うとき、神は彼を助けてくださいます。人は、もし成功しないのであれば、それは意志を全く働かせていないか、あるいは十分に働かせていないか、さらにその意志が弱まっているため、やはり何の役にも立たないということを知らなければなりません。ある鳥が、片方の翼は丈夫なのに、もう片方を放置しているとしよう。その翼からは羽が抜け落ち始め、やがてその鳥はまともに飛べなくなってしまう。片方の翼は正常に機能しているが、もう片方はまるで壊れた櫛のようだ。鳥はその翼を動かすが、風が通り抜けてしまい、飛び立つことができない。少し跳ね上がったかと思うと、宙返りをして落ちてしまう。飛び立つためには、もう片方の翼も健全でなければならない。

つまり、人間もまた、常に正しく、霊的に飛翔したいのであれば、注意深くあり、人間の意志を放置してはならない、と言いたいのです。タンガラシュカは何をするのか？ そっと近づき、まず人間の翼からごく小さな羽を1本引き抜き、次に少し大きな羽を引き抜き、そしてもし人間が不注意であれば、大きな羽まで引き抜いてしまう。その結果、人間は飛び立ちたくても飛び立てなくなってしまうのだ。そして、もし敵が数本の羽を抜いてしまったなら、人は飛び立とうとすると、逆さまに空へ落ちてしまう。なぜなら、羽根をむしり取られた意志の翼からは、風が勢いよく吹き抜けているからだ。神聖な翼は常に羽で満たされており、「完備」されているため、悪魔はこの神聖な翼の羽をむしり取ることはできない。人の注意は、怠けたり、悪魔に自分の〔人間の〕翼から羽を抜かせたりしないように向けられるべきである。人がどこかで少しずつ怠け始めたり、どこかで無関心になったりすると、その意志は力を失う。そして、もし〔その人自身が〕〔霊的に努力する〕

⁸³ 「さて……神は真実な方であり、あなたがたを救うと約束された以上、間違いなく救ってくださる。しかし——約束された通りに。では、神はどのように約束されたのか。それは、私たち自身が望み、神に従うときであり、単に、あるいは石や木のように無為のままでいるときではない。」参照：聖ヨハネ・クラマトリオス『著作集』第11巻第2冊、サンクトペテルブルク、1905年、607頁。

ことを望まないなら、神は何をなさるだろう？ 神は人間の自由を尊重されるため、干渉しようとはされません。このようにして、人は神の翼をも無力にしてしまうのです。しかし、人に意志の力があるとき、つまり自分の翼も損なわれていないときは、神が望まれること、すなわち人も望むことになります。そして、そのとき人は飛ぶのです。

— ゲロンダ、結局のところ、この「飛翔」とは一体何なのでしょう？ あなたは、霊的な成長への願い、あるいは救われたいという願いのことをおっしゃっているのですか？

— もちろんそうだよ、兄弟よ！ 私が「飛翔」と言うとき、それは霊的な高揚を意味しており、どこかのヒノキの木に飛び乗ることなど意味していないのだ！

— ゲロンダ、以前、あなたは「土地を耕し、種を蒔き、必要なことはすべて行っても、結局一粒の穀物も収穫できないことがある」とおっしゃっていました。

— ええ、その通りです。不注意な人の労苦は悪魔に奪われてしまいます。しかし、注意深く、自分の魂の救いに熱心に取り組み、精進し、成功を収め、実を結び、霊的に養われ、天使のように喜ぶ者もいます。

第3章。

善き交わりから生じる益について

兄弟愛

— ゲロンダ、私たちには困難な年が待ち受けているとおっしゃるのを聞いて、私は不安になります。

— 互いに友愛と調和を保ち、霊的に備え、勇敢でありなさい。一つの体となり、何も恐れてはなりません。神も助けてくださいます。霊的な愛を育み、母親が自分の子供に対して抱くような愛を持ちなさい。互いの関係が兄弟愛に満ち、犠牲の精神があなた方の間に息づいていましょう。そうすれば、困難な日々も少しずつ乗り越えていけるでしょう。

私たち修道士は、言うまでもなく、この世を離れ、知人や親族を後にし、アダムと神の偉大な家族に加わるためにここにいる。しかし、信徒たちは、互いに助け合うために、霊的に親しい人々や知人との関係を維持しなければならない。世の中で奮闘するクリスチャンが、霊的な人々とのつながりを保っていれば、頼れる存在がいることになります。どれほど霊的に生きていようとも、（特に現代においては）良き交わりの輪は不可欠です。霊的な人々とのつながりは（霊的な読書以上に）、クリスチャンにとって大いに助けとなります。なぜなら、この霊的な結びつきがもたらす喜びが、彼の中に霊的な行いへの強い熱意を呼び覚ますからです。また、職場や奉仕の場においても、霊的な人々が互いに知り合い、助け合えるようにしておくことは良いことです。例えば、同僚の

間で何らかの問題が生じ、互いの支えが必要になることがあります。もし霊的な人々が互いに知り合っていないければ、互いに話しかける決心がつかないかもしれません。

— ゲロンダ、仮に、ある人が[かつて]何かで私たちを助けることを断り、今では再びその人に助けを求めるのをためらっている場合、これは正しいことでしょうか？

— いいえ、いいえ。もしかすると、以前は助ける余裕がなかったのかもしれませんが。それは、あなたが私に十字架をねだり、私がそれをあげるのと同じことです。別の機会にあなたがねだっても、私が持っていないければ、[当然ながら]あげられません。その後、配るために十字架を買ったのに、私が配る機会を待っているのに、あなたは近づいてきても頼んでくれないのです。

今日、人々は同じ高層マンションに住んでいても、互いに面識がない。しかし昔は、隣人同士の絆があり、それが人々が互いを知る助けとなり、困った時には互いに支え合っていた。例えば、誰かが荷馬車でどこかへ向かっている途中、道で知り合いに出くわすと、「どこから来たの？ どこへ行くの？ 私もそこへ行くところだ。乗って、一緒に行こう」と誘ったものだ。あるいは、馬でどこかへ行きたい人がいれば、隣人のところへ行行って「どこへ行くつもり？ もし待てるなら、3時間後に馬で出かけるから、一緒に乗せてあげられるよ」と尋ねたり、「明日、あそこへ行くんだ。来てください。うちで一晩泊まって、朝一緒に出発しましょう。」人々は隣人のことを思いやり、何か手助けできることがあれば、それを拒むことはありませんでした。人々には親切な心があり、万が一に備えて助けられるようにと尋ねていました。他の村にも親しい知り合いがいました。

— ゲロンダ、人々が霊的に結びついていることには、どのような益があるのでしょうか？

— 現代では、たとえ信仰深い人々が互いに結びつくことを望まなくても、悪魔がその結びつきを強いることになる。今日、悪魔はその多くの悪意によって、人々に最大の恩恵をもたらしている。例えば、信仰深い父親が子供たちのために家庭教師を探そうとするなら、その教師を自宅に招き入れることになるため、善良で信仰深い人物を見つけざるを得なくなる。一方、まだ職に就いておらず、子供たちに個人指導をしたいと願う信仰深い教師は、安心して過ごせるよう、良識ある家庭を探すことになるだろう。あるいは、塗装工であれ電気技師であれ、霊的な生活を送っている職人は、世俗的な家庭ではトラブルに巻き込まれるため、気楽に過ごせるよう、良識ある家庭での仕事を探すようになるだろう。キリスト教徒の家主もまた、自宅で働くために、善良な職人や信仰深い人を探すだろう。どちらの側も、協力し合える霊的な人を求めることになる。こうして、少しずつ、あらゆる職業や学問に携わる霊的な人々が互いに知り合うようになる。

結局のところ、悪魔は望まずとも、その悪意によって善をもたらすことになる。すなわち、羊を子山羊から分け隔てるのだ。羊は子山羊から離れ、一つの群れとなり、唯一の羊飼いと共に暮らすようになる。⁸⁴ かつて村では、農民たちが羊や山羊を羊飼いに預けていました——ある者は5頭、ある者は10頭——そして羊は山羊と一緒に放牧されていました。なぜなら、当時の山羊は分別があり、角で羊を突くようなことはしなかったからです。今や山羊たちは凶暴になり、キリストの羊たちを痛烈に角で突いている。羊たちは優しい羊飼いを待ち望み、羊だけで構成された群れを望んで

⁸⁴ 参照：ヨハネ10:16。

いる。なぜなら、この世が変貌してしまった姿は、罪の中に生きる者たちにとってのみふさわしいものだからである。それゆえ、人々は分かれることになる。羊も山羊も、それぞれ別々の道を歩むことになるだろう。霊的な生活を望む者たちは、次第にこの世で生きられなくなり、自分と同じような神の民を探し求め、霊的指導者を見つけ、さらに罪から遠ざかろうとするだろう。まさにこの「善」を、今、悪魔は自ら望まずして行っているのだ。そして今、都市だけでなく村々でも、ある人々は娯楽施設へと急ぎ、無関心な生活を送っている一方で、他の人々は徹夜祈祷や祈願会、霊的な集会へと急いでおり、こうした人々は互いに深く結びついている。

困難な時代には、非常に強い兄弟のような絆が生まれるものです。戦争中、私たち半大隊の兵士たちは、2年間で共に過ごし、兄弟以上に固く結ばれていました。なぜなら、困難や危険を共に乗り越えてきたからです。私たちはそれほど深く結ばれていたため、互いを「兄弟」と呼び合っていました。彼らは世俗的な人々で、世俗的な考え方を持っており、福音書も霊的な本も読んでいませんでしたが、それにもかかわらず、互いに離れようとはしませんでした。人々は、良い意味での、ごく普通の世俗的な教育を受けていましたが、それよりもはるかに高次なもの——愛と兄弟愛——を持っていたのです。最近、私たちの仲間のひとりが亡くなり、残りの戦友たちが全国各地から彼の葬儀に駆けつけました。そして数日前、ある戦友が私に会いにここへやって来ました。彼はどれほど強く私を抱きしめたことか！ 私はその腕から抜け出すことさえできませんでした！

今、私たちは悪魔と戦っている。だからこそ、互いにさらに親しくなり、互いに兄弟としてより一層結ばれるよう努めてほしい。そうして皆で、私たちが選んだ道を共に歩み、急な小道を登って、甘美なゴルゴタへと共に上っていくのだ。

霊的な絆について

— ゲロンダ、昨日、あなたはここ数日に会ったすべての人々を、自分の兄弟として感じていたとおっしゃいました。霊的な絆とは何でしょうか？

— 私たちはすべての人と、肉において兄弟です。私たちは皆兄弟であり、皆、神の僕です。そして私たち信者は、さらに恵みによって、私たちのキリストの神聖な血によって贖われた神の子でもあります。霊的な生活において、私たちは肉的にはアダムに由来する親族であり、霊的にはキリストに由来する親族なのです。霊的に生きる人々は、互いの間にこの霊的な絆を感じ取ります。彼らは同じことを考え、同じものを求め、一つの目標を追い求めています。例えば、もしあなたに、自分の気ままに世俗的な生活を送っている血のつながった姉妹がいたとしても、彼女とは何の霊的な絆も感じないでしょう。

— では、霊的な絆は崩壊することもあるのでしょうか？

— ある人が霊的な生き方をやめたとき、その人と、霊的に生きている他者との絆も途絶えます。霊的に生きる相手が遠ざかるのではなく、霊的な生き方をやめた方が自らその相手から離れていくのです。それは、人が神に従って生きるほど神に近づき、神に従って生きることをやめるほど神から遠ざかるのと同じです。そして、神の恵みが遠隔から作用し、人々に伝えられる力であるのと同様に、悪魔の邪悪なエネルギーもまた、遠隔から作用し、伝えられる力である。例えば、二つの

魂が霊的な状態にあり、そのうちの片方がもう片方を思うとき、両者の間には霊的な結びつきが生じ、一方の魂がもう一方に神の力を伝える。同様に、罪深い生活を送り、互いに何らかの交わりを持つ二人の魂についても、一方が遠隔から他方から悪魔的な影響を受け、一方から他方へと「電報」が送られるのです。

— ゲロンダ、そのような悪魔的なつながりを持っていた二人のうち、一人が良い方向へと変わったら、それはもう一方の助けになるのでしょうか？

— はい。相手からは返答がありません。なぜなら、良い方向へ変わった人は、いわば〔自分の霊的な〕電話の受話器を取らないからです。回線が切れてしまい、つながりはもうありません。したがって、返答を得られなかった人は考え直す可能性があり、もしその人が望むなら、それが助けになるかもしれません。

— 情熱に駆られた人と交流する際、その情熱が私たちに悪影響を及ぼさない場合、それは私たちが相手の性格に影響を与えているということになるのでしょうか？

— もし私たちが霊的な状態、すなわち聖さを備えているならば、私たちは彼に大きな影響を与えます。なぜなら、[その時には]神の恵みが彼に影響を及ぼし、それによって私たちの隣人は益を受けるからです。愛をもって兄弟を忍耐強く受け入れるとき、彼はそれを理解します。同様に、悪意についても、もし私たちの中にそれがあるならば、たとえ外見には現れていなくても、相手はそれを理解します。魂が持っているものは、そのまま（他の魂に）伝わるのです。情欲は情欲を、苛立ちは苛立ちを、怒りは怒りを伝えます。一方、恵みを受けた魂の恵みの賜物は、隣人に恵みの賜物を伝えるのです。

— では、徳のある人々と交わることは助けになるのでしょうか？

— もちろん役立ちます。絶えず乳香が焚かれている修道院の部屋に入れば、そこから出たとき、あなた自身も乳香の香りがするでしょう。牛舎に行けば、牛舎の臭いが染みつくでしょう。世俗の家に行けば、世俗の香りがするようになるでしょう。〔覚えているのだが〕占領下で、私たちは5ヘクタールの土地に様々な品種のメロンを植えた。農業学校から持ち込んだアメリカ産の品種——これほど大きく、とても甘い白いメロン——や、地元の品種である「アルグ」メロン、その他もだ。もしアメリカ産のメロンの隣にズッキーニが生えていた場合、メロンの甘みがズッキーニに移ってしまうことがあった。ズッキーニはより甘くなり、メロンは味気なくなってしまう。これは受粉によるもので、花から花へと飛び回るミツバチが原因なのだ。「ヘそ」の大きなメロンを見かけたら、それはズッキーニの隣で育ったものだと覚えておいてください。

「アルグ」種のメロンが良質のメロンの隣で育つと、その良質のメロンから甘みを奪ってしまいます。良質のメロンは甘みを失いますが、少なくともその場合は、その甘みもメロンの中に残るでしょう。しかし、良質なメロンの隣にズッキーニがあると、ズッキーニの方が甘くなり、調理する際には塩をたっぷり使わなければならなくなります。メロンは甘みを失い、ズッキーニにとっても良いことではありません。一方、メロンがメロンの隣にある場合、良質なメロンは甘みを失いますが、もう一方のメロンはより甘くなります。つまり、霊的にあまり成長していないクリスチャンが、霊的に成長した人のそばにいと、後者は疲れてしまったり、少し傷ついたりするかもしれな

いが、その代わりに前者は恩恵を受けるということだ。もし霊的な人のそばに、世俗的で信仰のない人がいれば、前者の労力と時間は無駄になってしまう。もし世俗的な人が、他者から語られた言葉の何かに心を動かされたとしても、それはせいぜいそれだけのことです。しかし、その人が語られたことを[自分自身の]世俗的な哲学の概念で解釈し、つまり世俗的な精神で受け止めてしまえば、何の益も得られません。つまり、その人はカボチャのままであり、たとえ味が少し甘くなったとしても、本質は変わらないのです。

コミュニケーションにおける慎重さ

軍隊、特に通信部隊では、どの無線局が味方のもので、どれが敵のものを判別するための具体的な特徴を記した識別表があった。我々は味方の無線局を把握していた。ある時期、無線受信技術の特別訓練で、私たちは中継局を設置し、敵局の所属を特定しようと試みました。「これは何だ？」と尋ねたり、「1!」と叫んだりして、どのような返答があるかを聞き、その反応で敵を突き止めようとしたのです。言い換えれば、もしその無線局を確実に特定できなかった場合、私たちはそれを信用せず、その正体を突き止めようとしたのだ。霊的な生活においても同様である。ある「無線局」が自分たちのものではないとわかったら、私たちは自分自身にこう言い聞かせなければならない。「なぜ私がこの局と交信しなければならないのか？ と自問すべきです！」無線技士が、その無線局が他人のものであると理解しながら、それとの交信を試みようとするのは、重大な過ちです。しかし、その無線局が単に他人のものであるだけでなく、敵の局であることを知りながら、あえて敵と交信しようとするなら、その罪はどれほど深刻なものでしょうか！ 私が言いたいのは、他者との関係に関する問題においては、思慮と慎重さが必要だということです。そして、最も確実なのは、一人ひとりが自分の霊的指導者に相談することです。

会話においても注意を払うべきです。なぜなら、多くの場合、精神的な話題から始まり、結局は噂話で終わってしまうからです。人は時間を無駄にするだけでなく、非難によって自らの魂を傷つけてしまいます。私たちには、誰かを非難する権利などないからです。私たちは、この世で起きていることさえも非難する権利など持ち合わせていない。もしできるのなら、心を痛めつつそのことについて語り、悪い状況を是正する手助けをしようと努めるべきだ。また、亡くなった人々を非難してはならない。幸いなことに、すべての人々の魂は神の御手の中にあるのだから。

私は、多くの人が、たった一言の不注意な言葉によって、その思いが傷つけられているのをよく目にします。もし、私たちが口にする言葉に税金が課せられたら、どれほど注意深くなるか、お分かりでしょうか。「これだけの言葉を話せば、これだけの金額を支払う」と言われたら、私たちは自分の言葉を慎重に選ぶでしょう。電話では、通話料を支払うため、何をどれだけ話すかを考えます。今、言葉のために多くの時間が浪費されています。

— ゲロンダ、『天梯』には、非難は憎しみの産物であると書かれています。では、単なる噂話の中に愛が含まれていることはあるのでしょうか？

— はい。ある魂を深く愛し、他の人々がその魂を羨ましがっているのを見ると、他の人々が羨ましがらないように、その魂について何か一言言うこともあるでしょう。すべてを試みなければな

りません。しかし、自分に不当な扱いを受けていると考え、そのために悲しんだり苛立ったりし、何らかの理由で憤りを表す、欠陥のある、あるいは傷ついた人間は、悪魔でさえも成し得ないほどの害を他の魂にもたらす可能性があります。ユダは、香油を注いだ女性が香油を無駄遣いしたことに憤り、「この香油を売って、その金を貧しい人々に配るべきだった」と言った。恵みを持っていた他の使徒たちも、ユダの影響を受けてしまった。⁸⁵ 彼らは、ユダの言葉に表向きは理があるように見え、彼の影響下に陥ってしまった。なぜなら、彼らはユダの金に目がくらんだ心を知らなかったからである。しかし、キリストはユダの欲望を満たすために、彼に金箱さえも任せてしまい、ユダは「その重荷を背負わされた」のである。⁸⁶

— ゲロンダ、二人の人間が意見が合わず、第三者に意見を求めるとき、その第三者はどのような立場を取るべきでしょうか？

— もし、意見の相違が個人的な事柄に関わる人々を相手にするのであれば、その第三者は両者の面前で自分の意見を述べたほうがよいでしょう。そうしなければ、それぞれが自分の都合の良いようにその言葉を利用してしまうからです。もし、意見を求められた人物の言葉に重みがあるならば、対立する両者は その言葉を重砲として利用し、容赦なく互いに砲撃し合うことになるでしょう。そして、その言葉を口にした本人にも、予期せぬ形でその砲弾が降りかかることになる。したがって、彼は可能な限りそのような人々を避け、自らの内に平安を保ち、これらの人々の間の平和——ひいては[全世界の]平和——のために祈ることができるようにすべきである。もし、誘惑を生み出すことを好むような人々を完全に避けることができないのであれば、少なくとも言葉数を減らし、誘惑を最小限に抑えるようにすべきだ。悪意はなく、単に浅はかなだけだという人も、その浅はかさによって誘惑を生み出しているのだから、何の意味もない。

母性愛

— ゲロンダ、もし人が愛と気配りのある振る舞いの両方を兼ね備えているなら、それはその人に心の清らかさがあるということでしょうか？

— ケースバイケースです。多くの場合、それは世俗的な礼儀正しさに過ぎません。確かに、多くの人には優しさがあり、礼儀正しいですが、だからといって彼らが霊的な高潔さや犠牲精神を持っているとは限りません。彼らには善良な素質はあるが、今話しているのはそれではない。世俗的な礼儀正しさを持ち、偽善を働く者は、多くの悪事を働く可能性がある。なぜなら、相手は騙され、その人に心を開き、結局のところ、敬虔さの意味を知らない世俗的な人間に、自分の敬虔さを無駄に費やしてしまうからだ。それは、青銅貨しか知らない人々に金貨を与えるようなものです。また、世俗的な会話や、自己中心的な意見の表明に喜びを見出す人々に、時間を無駄に費やして霊的な論しを与えるべきではありません。

⁸⁵ マタイによる福音書26章6節以降、マルコによる福音書14章3節以降、ヨハネによる福音書12章3節以降を参照。

⁸⁶ ヨハネ12:6。

— ゲロンダ、もし誰かが何らかの問題を抱えていて、そのことを延々と話しに来る場合、しかもその時点で問題がすでにある程度解決しているとしたら、どう対応すべきでしょうか？

— 初めて来た時には、彼には言い訳があります。気持ちを吐き出さなければならないし、あなたから多くの時間を奪う権利があるのです。その場合は、彼の話聞いてあげなければなりません。聞いてあげないと、その人は「自分にうんざりしている」とか「自分を理解してくれない」と思い込んでしまいます。しかし、その後も彼が同じことを延々と繰り返すようなら、こう言いましょう。「私があなたの話を聞けないというのではなく、あなた自身にとってそれが得策ではないのです。あなたは夏でも冬のように考えてしまいます。でも今は状況も少し良くなってきて、春です。もうすぐ夏もやってきます。それなのに、夏なのに冬の寒さを考えて、自分の考えのせいで震えてしまうのです。」しかし、時には霊的な人々同士の関係でさえ、次のようなことが見られる。ある人が自分の苦しみを相手に打ち明けようとするが、相手は自分の喜びを失いたくないがために、それを聞こうとしない。相手は、平穏を保つために、急いでいるふりをしたり、話の話題を変えたりすることがある。これはまさにサタンのような振る舞いである。それはまるで、誰かが私のそばで死にかけているのに、私が少し離れたところで歌を歌っているようなものだ。「泣く者と共に泣く」とはどうなったのか？⁸⁷ ましてや、それが深刻な教会の問題に関する話であるならばなおさらだ。もしクリスチャンが「その状況でさえ」他人の苦悩に共感しないのであれば、彼は「もはや」教会の体の一部ではない。

— もし私が、他の人々の過ちに対して弁解の余地を見出せないとしたら、それは私が冷酷であるということになるのでしょうか？

— 他人の過ちには言い訳を見つけられないけれど、自分自身の過ちには言い訳を見つけられるのですか？ それなら、ほんの少しの時間が経てば、キリストもあなたを許す理由を見つけられなくなるでしょう。人が不注意であれば、その心は一瞬にして石のように硬くなってしまいます。そして、また一瞬にして、その心は[再び]優しいものになることもあります。母のような心を持ちなさい。母親の気持ちがわかるだろう。彼女はすべてを許し、時には子供たちのいたずらに気づかないふりをすることもある。忍耐し、許し、他者に寛容でありなさい。そうすれば、キリストもあなたに寛容になってくださるだろう。

— ゲロンダ、では、心はどのようにして広がるのでしょうか？

— それは、あなたが常に他人の不品行や不完全さ、過ちを許し、それらを鏡のように見つめているときに広がります。もちろん、悪霊が他者に対する悪意ある考えを吹き込むこともあるでしょう。特に、何らかの實在する理由がある場合はなおさらです。しかし、それらの考えを受け入れるか拒絶するかは、私たち次第なのです。相手の立場に立って考えれば、私たちは共感を持って接し、その人を許すことができるでしょう。さらに、何かが悪意からではなく軽率さから行われた場合、それは理解でき、[私たちの中に]否定的な反応を引き起こすことはありません。人間の弱さがあ

⁸⁷ ローマ人への手紙 12章15節。

るということは、自然なことであり、すべての人に共通するものです。悪とは、人々の内に悪意が存在することである。

— もし誰かが悪い状態にあり、私が良い状態にあるとしたら、私はその人に影響を与えることができるでしょうか？

— もし誘惑者が、そのようにあなたに物事を提示してきたらどうでしょうか？ あなたがより良い状態にあると、どうして決めつけたのですか？ 自分が他者より優れていると信じ始め、その人を憐れみ始めたその瞬間から、私が憐れむべきはもはやその人ではなく、自分自身なのです。たとえば〔クリスチャン〕が、隣人が本当にうまくいっていないのを見ても、彼を正当化し、罪を軽減する事情を見つけ出してしまおう。彼は自分だけのために情状酌量の余地を探すのではなく、自分こそが他者よりも劣っていると認め、自身の不潔さに心を痛める。彼は、神から与えられたすべてのものに対して、何の見返りも返せていないことを認め、「神よ、私を顧みないでください。私を脇に追いやってください。私は何も成し遂げていない。他の誰かを助けてください」と。真に成功を収める人々は、自分自身が大きく前進したとは感じず、ただただ深い悔い改めと謙遜、そして言い表せない喜びを伴う神の愛のみを感じている。

第4章。

畏敬の念によって神が感動されることについて

「敬虔」とは何か

— ゲロンダ、敬虔とは何でしょうか？

— 敬虔とは、神への恐れ、内なる謙虚さ、そして霊的な感受性のことです。敬虔な人は恥ずかしがり屋かもしれませんが、その恥ずかしさは彼の心に蜜を注ぎ、彼の人生に苦しみではなく喜びをもたらします。敬虔な人の動きは繊細で丁寧です。彼は神、天使、聖人たちの臨在をはっきりと感じ取り、自分を見守る守護天使の存在を身近に感じています。心の中では、自分の体が聖霊の宮であるということを常に心に留めています。⁸⁸ そして、彼は質素に、清らかに、聖なる生活を送っています。敬虔な人は、どこにいても注意深く謙虚に振る舞い、あらゆる聖なるものを生き生きと感じ取っている。例えば、彼はイコンに背を向けて立たないように注意を払う。ソファや椅子など、人が座る場所には、福音書や霊的な書物、あるいは何らかの聖なる物を置かない。イコンを見れば、彼の心は喜びで満たされ、目には涙がにじむ。どこかに書かれたキリストの御名を見ただけでも、彼は畏敬の念を込めてそれに口づけをし、その魂は内から喜びに満たされる。たとえ地面に捨てられた新聞の切れ端に、例えばキリストのお名前や「聖三位一体の聖なる神殿」という言葉が印刷

⁸⁸ 参照：コリントの信徒への手紙一 3章16節および6章19節。

されているのを見つけただけでも、彼は身をかがめてその切れ端を拾い上げ、敬虔に口づけをし、それが地面に捨てられていたことを嘆くのです。

—つまり、ゲロンダ、敬虔さと畏敬の念は別物ということですか？

—敬虔さ（⁸⁹）はコロンであり、畏敬の念は香である。私にとって畏敬の念は最大の美德だ。なぜなら、畏敬の念を持つ人は神の恵みを引き寄せ、恵みの受け手となり、恵みは自然と彼と共に留まるからだ。そして、その人の内から神の恵みが「現れる」とき、誰もがその人の前で畏敬の念を抱き、好意を持って接するようになる。一方、恥知らずな人間は、大人も子供も問わず、嫌悪感を抱かせるものだ。

女性である皆さんは、男性よりも深い敬虔さを持つべきです。女性は本来、敬虔であるべき存在です。男性に敬虔さがなければ、彼らは単に無関心なだけですが、女性が敬虔さを失えば、重大な過ちを犯すことになりかねません。ある男性が私にこう話してくれた。「妻と聖地巡礼に出かけ、ヨルダン川へ行った時のことだ。私が川に入り、その水で身を清めている間、彼女は岸边に座って、ヨルダン川の水に足をぶらぶらさせていたんだ！『おい』と私は言った。『、お前！ここで何をしているんだ？ヨルダン川まで足を洗いに来たのか？』と、私は腹を立てて彼女を叱りつけた。」どうやら、彼の妻は全く無関心な人で、[基本的なことさえ]理解していなかったようだが、この可哀想な男自身は極めて敬虔な人だった。

敬虔さは伝染するという点について

—ゲロンダ、敬虔さはどのようにして得るのですか？

—父たちは、敬虔さを得るためには、それを備えた人々と共に生活したり交流したりし、彼らがどのように振る舞っているかを観察すべきだと言っています。パイスイオス・ザ・グレートは、誰かから「どのようにして神への畏れを得ることができるか」と尋ねられた際、次のように答えました。「神を愛し、神への畏れを持つ人々と交わりなさい。そうすれば、あなたも神への畏れを身につけることができるでしょう。」もちろん、これは彼らが何をしているかを観察し、その行動の意味を内面で感じることなく、ただ外見上それを真似るべきだという意味ではありません。そのような場合は、それは敬虔さではなく、偽りの敬虔さになってしまうからです。偽りは人を遠ざける。敬虔とは、人の内にある神からの恵みである。敬虔な人は、自分の内からそう感じるからこそ、その行いをするのである。もちろん、私たちの中には生まれつきの敬虔さがありますが、それを育まなければ、タンガラシュカが忘却を植え付け、私たちを無感覚と不敬虔へと陥れてしまいます。しかし、敬虔な人の振る舞いを観察することで、敬虔さは再び目覚めるのです。

⁸⁹ 「敬虔」という言葉について、長老は、それに見合う内面の状態を伴わない、外見上の敬虔な行いを指していると定義している。

— ゲロンダ、なぜ聖なる父たちは、畏敬の念についてのみ、「それを得たいなら、それを持つ人と交わるべきだ」と語っているのでしょうか？なぜ他の美德についても同じことを言わないのでしょうか？

— それは、敬虔さが伝染するからです。敬虔な人の仕草や振る舞いは、香りのように他者に伝わるのです。もちろん、その人自身に善意と謙虚さがある場合に限りですが。言っておくが、もし人が敬虔さを持ち合わせていなければ、その人には何もない。一方、敬虔な人は、たとえ教養がなくても、あらゆる聖なるものを純粹に見ることができ、それが実際にどのようなものであるかをありのままに見る。神聖な意味に関わる事柄については、何一つ間違えることはない。敬虔な人は、まるで自分の父や母に対して悪意を抱かない子供のようです。なぜなら、その人は両親を愛し、尊敬し、両親の行うすべてのことを善く、清らかなものとして見ているからです。それならば、何もののにも比べることもできず、すべてにおいて完全な神の前では、どれほどさらに深く敬虔でなければならないことでしょう！敬虔さを欠く者は過ちを犯し、教義に関して迷いへと逸れてしまいます。私は、敬虔さを欠きながら、聖書や教父たちの著作について解説や注釈を執筆する人々が、どのような過ちを犯しているかを目の当たりにしています。

霊的な事柄においては、すべてに畏敬の念と心が不可欠です。畏敬の念から生まれるものはすべて聖別されています。とりわけ、ある聖人のための礼拝式を執筆するためには、その聖人を愛し、その聖人の前で畏敬の念を抱かなければなりません。そうして初めて、礼拝式は心から紡ぎ出され、畏敬の念の香りを放つことになるのです。そして、もし神聖な狂気、神聖な恍惚の状態に達することができれば、詩句は内側から自然と溢れ出てくるでしょう。

— ゲロンダ、人が敬虔さを身につける上で、他に何が助けになるのでしょうか？

— それには、あらゆる聖なるものを知性で探究し、深く掘り下げること、そして与えられた好機を活かすことが役立ちます。これらすべてが、人の内に畏敬の念を少しずつ呼び覚ましていくのです。例えば、もし私に、ある教会に少し立ち寄って祈るという好機が与えられているのに、それを利用しなければ、私は自ら恵みを失うことになります。しかし、立ち寄りたいたいと思いつつも、何らかの障害に直面してそうできなかった場合、私は恵みを失うことはありません。なぜなら、神は私の善意を見ておられるからです。畏敬の念を育む上で、私たちの地域や祖国にまつわる聖人たちを知り、彼らを愛し、彼らと心をつなぐことも大いに役立ちます。私たちが聖人たちに畏敬の念を抱き、彼らを愛するとき、神は喜ばれます。そして、聖人たちに畏敬の念を抱くようになれば、神に対する畏敬の念はどれほど深まることでしょう！

— ゲロンダ、教会での敬虔な振る舞いは、私たちにどのような助けとなるのでしょうか？

— 教会へ行くときは、心の中でこう言いなさい。「私はどこへ行くのか？今、私は神の家に入ろうとしている。私は何をするのか？イコンに、そして神に礼拝を捧げるのだ。」あなたは自分のケリアから、あるいは奉仕の務めを果たすために教会へ向かいます。それならば、教会から天へと、そしてさらにその先——神のもとへと向かってください。

— それはどのようにして起こるのですか？

— 教会は神の家です。そして、私たちの真の家は樂園にあります。ここでは姉妹たちが歌っています。そこには天使たちや聖人たちがいます……。もし、世俗の家に行くとき、私たちがドアをノックし、足を拭いて、控えめに座るのなら、キリストが犠牲として捧げられている神の家では、どのように振る舞うべきでしょうか？ 神の御血の一滴によって、主は私たちを罪から贖い、その後、私たちの癒やしのために「御自身の尊い」御血の川を注ぎ、御自身の至聖なる御体で私たちを養ってくださいます。ですから、こうした畏れ多くも神聖な出来事を心に思い起こすとき、それは私たちが教会で敬虔な態度で振る舞う助けとなるのです。しかし、神聖な聖体礼儀において、司祭が「心を悲しませよ」と宣言し、私たちが「主に向けましょう」と応えるその瞬間でさえ、その心が真に主に向けられている人々は、実に少ないことに気づきます！ それゆえ、私たちは心の中で「私たちの心を主に向けましょう」と唱えるほうがよいのです。なぜなら、私たちの心と精神は常に下を向いているからです。さらに、「イマミー」と言いながら、実際には心（「上」）を主に向けられていないのですから、それは嘘に他なりません。言うまでもなく、もし私たちの心を「上」に向けさえすれば、他のすべてものも自然と「上」に向かうことになるのです。

— ゲロンダ、もし誰かが教会で感動的に歌ったとしても、そこからどんな益があるのでしょうか？

— [歌う者は] 心を神聖な意味に留め、畏敬の念を持つべきです。さらに、トロバリやスティヒラを単なる文学作品として扱うのではなく、その神聖な意味を心で受け止める必要があります。畏敬の念は一つのことであり、教会歌の芸術や技術はまた別のものです。畏敬の念を伴わない芸術とは、単なる[表面的な]装飾に過ぎません。聖歌者が畏敬の念を持って奉仕を行うとき、賛美歌は彼の心から溢れ出し、心に響く歌声となります。人が内面的に良好な霊的な状態にあるとき、すべては順調に進みます。したがって、心を打つように歌うためには、内面を整え、心から、敬虔な心を持って歌う必要がある。もし聖歌隊員に邪な思いがあるなら、その賛美歌の歌唱はどうなるだろうか。その時は心から歌うことはできないだろう。聖書にもこう記されている。「心穏やかな者は、歌え。」⁹⁰ ある時、聖ヨハネス・ククゼリスが山羊の世話をしながら歌い始めると、山羊たちは立ち上がり、直立した。これを見ていた人々は、それが皇帝宮廷の聖歌隊長であるククゼリスであることを悟った。ですから、あなたがたは、何をするにせよ、心を込めて、キリストのためになさい。そして、あなたの刺繍にも敬虔さを込めなさい。なぜなら、それらは聖なるものを覆うことになるからです。あなたがカティアのために刺繍するカバーでさえもそうです。⁹¹ 人が敬虔さを持ち合わせているとき、その心の美しさは、読書や歌、さらには過ちに至るまで、その人が行うすべてのことに現れるのです。

— 過ちの中にも？

⁹⁰ ヤコブ5:13。

⁹¹ カティアとは、取っ手付きの大きな香炉のことで、礼拝の特定の場面において、右肩に刺繍入りの覆いをまとったボノマール（教会で奉仕を行う修道士）がこれを使って香を焚きます。カツィアの取っ手の上部には、炭の粉と乳香を入れる容器があり、その先端には、香を焚く際にリズミカルな音を響かせる鈴が吊り下げられている。

— ええ。ほら、敬虔さと謙虚さは、その人の過ちの中にも現れているのです。

外見上の敬虔さについて

深い信仰と真の敬虔さを備えた人は、至高で霊的な、言葉では言い表せないものによって養われています。しかし、ただ形式的で表面的な敬虔さしか持たない人々もいます。そのような人々は、心の中で淡々と言います。「よし、今から教会に入る。つまり、きちんと座らなければならない。動いてはいけない。頭を下げ、こうやって十字を切らなければならない！」また、信仰に関して揺らいでいるにもかかわらず、徹夜祈祷の間ずっと立ちっぱなしの人々もいます。

— ゲロンダ、彼らは何かを心配しているのでしょうか、何かを探しているのでしょうか？ なぜそんな振る舞いをするのでしょうか？

— 彼らの中には何かがあるのです…… [これらすべて]は良いことですが、内面からそれを感じる必要があります。こうした行いは、単に外見上だけ行われるべきではありません。敬虔さから教会に入る際にスクフを脱ぐのと、頭を涼しくするために脱ぐのとでは、全く別物です。敬虔さは、私たちが聖体拝領をする様子や、アンティドールを受け取る様子などに現れます。

— ゲロンダ、ある人が、他の人が敬虔さを表す様子を見て、誘惑に駆られることはあるのでしょうか？

— こう言っておこう。広い十字を切って自らを祝福するとしても、それを素朴に、謙虚に行えば、他人を不快にさせることはない。しかし、他人に見られているかどうかを気にして、延々と十字を切っているようでは、人々はそれを嘲笑するだろう。あるいは、教会を通りかかった際、近くに人がいないか確認したり、あるいは人がもっと集まるまで少し「待ったり」して、人に見られることを狙って初めて十字を切ったりお辞儀をしたりするようなら、他人がその人を嘲笑うのも当然だ。ご覧の通り、世俗的な心構えは受け入れられない。真の敬虔さがあるときは、それがはっきりと見て取れる。しかし、真の敬虔さがなければ、「見栄えの悪い」⁹² は「見苦しい」ものへと変わってしまう。

「聖なるものを犬に与えてはならない」⁹³

人々が、聖遺物に当てて聖別してもらうために、病人の衣服をあなたに渡すときは、それがTシャツだけであって、他の下着ではないかどうか、注意深く確認してください。それ以外のものは不適切であり、それは不敬虔な行為です。太陽を汚すことはできないし、神をも汚すことはできないのは当然のことです。問題は、私たち自身がそのような不敬虔な行為によって、不浄な霊に支配されてしまうということです。

⁹² ローマ13:13。1コリント14:40。1テサロニケ4:12。

⁹³ マタイ7:6。

かつて人々は病気になると、自分のランプから油を取り、それを体に塗って回復していました。今ではランプは単なる形式として、照明のためだけに灯されており、ランプを洗う際の油は流し台に捨てられてしまいます。ある時、ある家を訪れた際、女主人が流し台でランプを洗っているのを見かけました。「その水はどこへ流れているのですか？」と私が尋ねると、「下水道へ」と彼女は答えました。「なるほど」と私は言った。「あなたは、子供が病気のときはランプから油を取り出して十字架の形に塗っているのに、そのコップに入った油をすべて下水道に流してしまうのですか？ 一体、それをどう正当化するのですか？ そうして、どうしてあなたの家に神の祝福が降りるというのですか？」

今の家では、例えばアンティドルが包まれていた紙切れのような、聖別されたものを捨てる場所がない。しかし、私の家では、皿を洗った水さえも排水溝には流さなかったことを覚えています。食事の前後に祈りを捧げる以上、パンくずひとつでさえも聖別されるものだから、その水は別の場所に捨てられていたのです。今日、こうした習慣はすべて失われてしまいました。それゆえ、神の恵みも失われ、人々は狂乱しているのです。

できる限り、あらゆることに注意を払いましょう。聖体拝領、アンティドーラ、あるいは聖油塗布の後には、アルコールに浸したコットンで手を拭き、その後それを燃やすのが良いでしょう。祭壇を清める際、掃除後に集まったものはすべて、海に捨てたり、清らかな場所で燃やしたりしなければなりません。なぜなら、床にアンティドーラや聖体の微粒が落ちている可能性があるからです。もちろん、聖体の微粒が床に落ちたとしても、キリストが踏みにじられることはありませんが、私たち自身から神の恵みが失われてしまうのです。

海外では、教会に専用の排水口さえありません。聖体拝領の際の水は、雨水と一緒に流されます。「私たちには——と〔海外の司祭たちは〕言います——細菌が増殖しないように、専用の排水口を設けることが禁じられているのです。」すべての人々は、肉体的にも精神的にも微生物に満ち溢れているのに、もし聖体の滴が頭にかかる、「微生物が増殖してしまう！」と言うのです。それでは、どうして神の恵みが訪れるというのでしょうか？ 世における狂気はここから始まります。幸いなことに、若くても年配でも、敬虔な女性たちがまだおり、彼女たちのために神はこの世を守っておられるのです。

— ゲロンダ、ある女性が、自分の居間に飾るために聖アルセニオスのイコンを描いてほしいと私たちに頼んできました。

— そこにはイコンだけがあるのでしょうか？ 他の絵や写真は置いていないのでしょうか？ それに、その居間でタバコを吸ったりはしないのでしょうか？ 彼女には、このイコンを他の部屋のイコノスタスに、他の聖像たちと一緒に安置し、そこで祈るほうがよいでしょう。以前私が立ち寄ったある家では、十分なスペースがあったにもかかわらず、階段の下にイコノスタスを設けていました。また別の家では、女主人が下水管の前にイコノスタスを設けていました。「まあ、」と私は彼女に尋ねました。「どうしてそんな場所にイコノスタスを作ることを思いついたのですか？」——「私、ここが好きなんです」と彼女は言いました。しかも、その場所は東向きというわけでもなく、いや、北向きなのです！ それでは、どうしてそこから恵みが訪れるというのでしょうか？ 「聖書にはこうある。『持っている者には、さらに与えられ、満ちあふれる。しかし、持たない者からは、

持っているものまでも取り去られる』と。』⁹⁴ 私たちは自分にはあると思っているが、持っているものさえも、私たちから奪われてしまうのだ。

敬虔な心は少しずつ失われつつあり、私たちが目にする悪はそこから生じている。不注意のせいで、悪霊に取り憑かれることさえある。ある女性——神様がお許しくださることを願うが、彼女はすでに亡くなっている——が、聖水を流し台に捨ててしまったために、悪霊に取り憑かれてしまった。彼女の瓶には、ほんの少しの聖水が残っていた。「あら」と彼女は言った。「この聖水、古くなっちゃったわ。捨てなきゃ。それに、この小瓶も使いたいし。」彼女は聖水を捨て、中にはバジリカの残りがあったので瓶も洗った。そして、その後、悪霊に取り憑かれてしまった。恵みが去ってしまったのだ。なぜなら、恵みは敬虔でない人の内に留まることはできないからである。

「もし、ゲロンダ、誰かが間違って聖水を捨ててしまったらどうなりますか？」

— もしその人が自分で聖水の瓶を、例えば戸棚などに置き、時間が経ってからそれが聖水であることに気づかなかったのなら、その人には半分の罪がある。しかし、もし他の誰かがそこに置いたもので、それを捨てた人がそれが聖水だと知らなかったのなら、その人は罪を問われない。

もし人が聖なるものに畏敬の念を抱かないなら、神の恵みはどのようにしてその人に近づくのでしょうか？ 恵みは、それを尊ぶ人々のところへやって来ます。「聖なるものを犬に与えてはならない」と聖書は言っています。霊的な感受性がなければ、繁栄はあり得ません。聖山のある[ケリオスの修道士]が、ある教会から聖像を盗み出し、自分の教会に置いた。別の者は、祭壇の上の屋根から石板を取り外し、ベランダを覆うために自分の独房へ持ち帰った。雨が降り始めると、水が祭壇に流れ込み、聖なる祭壇の上にまっすぐに注ぎ込んだ！ ある日、私が中に入ってみると、なんと、その教会は盛大な儀式で聖別されており、祭壇の中央には聖遺物——脊椎——が安置されていた。私はその聖遺物を手に取り、特別な場所で洗い清めた。「一体、何をしたのですか！」と、私はそれをやった者たちに言った。「教会は聖別されているのに、あなたたちは屋根の石を外してしまい、水が聖なる祭壇に流れ込んでいるじゃないか！」その後、彼らは職人を探し出し、屋根を少し手直ししてもらった。また別の場所では、堤防の建設に使うために祭壇の板を持ち去った。そして、その板もセメントも、吹き荒れた嵐によって海へと流されてしまった。そんなことをする人たちは、その行為にどれほどの不敬が込められているかさえ理解していない。コニツァに、子供たちが教会の壁に落書きをしただけで追い払っていたある老人がいたのを覚えている。彼はそれを不敬だと考えていたのだ。それなのに、今や私たちは一体どこまで来てしまったことか！

あらゆるものへの敬虔さ

そして、もう一つ注意してほしいことがある。あなたのソファには十字架の模様が入ったものが敷かれていたが、十字架の上に座ったり、踏んだりしてはならない。ユダヤ人は、靴の底の外側だけでなく、内側——かかとや靴底の下にも十字架が描かれた靴を作っている。お金を払って、十

⁹⁴ マタイ 13:12。

字架を踏みにじれ！ 彼らは以前、片面にキリストと聖母マリア、もう片面にペトルーシュカが描かれたガラガラを作っていました。彼らはまるでこう言っているかのようでした。「ペトルーシュカだろうがキリストだろうが、何が違うというのか！」 哀れな人々はキリストと聖母マリアを見て、子供たちにそのガラガラを買ってあげていたのです。赤ん坊たちはガラガラを床に投げ捨て、踏みつけ、汚していた……。そして今、私が聞いたところによると、中国付近のどこかで、カトリックの宣教師たちが、内側にキリスト、外側に仏陀が描かれたようなメダリオンを身につけているそう。内側にキリストだけを刻むか、あるいは公然とキリストを告白すべきです！ そうでなければ、神の恵みは訪れないのですから！ そしてここギリシャでも、残念ながら、考えもせずに聖母マリアを郵便切手に描いた者たちがおり、その切手は投げ捨てられ、踏みつけられています。

— ゲロンダ、人はあることに対しては敬虔さを持ち、あることに対しては持たないということはある得るのでしょうか？

— いいえ。もし畏敬の念が本物なら、人はすべてにおいてそれを持つものです。ある時、スタヴロニキタ修道院に一人の司祭が滞在していました。第六詩篇の「⁹⁵」を唱える際、彼はスタシディオンの座を下ろして座ったままでした。「神父様、」と私は彼に言いました。「第六詩篇を唱えていますよ。」—「私はね」と彼は答えた。「こうしているほうが、より深く受け止められるんだ！」 考えてみてよ！ それから何年も経って、彼は再び訪れ、私を見つけ出した。会話の中で、彼は木製の板に紙のイコンを貼り付けて、祝福として配っていたことを話してくれた。「どうやって貼り付けてるの？」と私が尋ねると、「木に糊を塗り、その上にイコンを載せるんだ。たくさん作ったら、イコンを一つずつ重ねて、上から自分が座って、糊がしっかり固まるようにするんだ。それから本でも手に取って、少し読むんだ。」それを聞いたとき、私は背筋が凍りついた！「一体、何をしているんだ！」と私は言った。「聖像がくつつくように、その上に座るなんて?!」—「えっ、だめなのか？」と彼は尋ねた。

ほら、いつの間にかここまで来てしまっているのが分かるか？ 問題なのは、不敬虔な態度がそこで止まらず、さらに悪い方向へと進んでいることだ。人は善の方向か、悪の方向かのどちらかに向かっていくものだ。そしてこの司祭、見てごらん、どこから始めて、どこまで来てしまったか！ 最初は「そうすれば六篇の詩篇をよりよく理解できる」と言っていたのに、やがて「そうすればイコンもくつつくし、私はそれを崇敬できる」とまで言うようになった。当時、スタヴロニキテで私が彼に六篇の詩篇について話したとき、彼はそれを奇妙に思ったようだ。しかし、そこには他にも、立ち続けていた年配の修道士たちがいたのだ。彼らはスタシディウムに少し寄りかかり、微動だにしない。疲れていたり、病気で足が震えていたりして座るなら話は別だ。キリストはそれを責めたりはしない。しかし、自分のやり方がより良いと思い込み、「座っている方がよく理解でき

⁹⁵ シェストプサルミエ——詩篇集から選ばれた6つの詩篇（第3、37、62、87、102、142篇）で、早課の冒頭で朗読される。六篇の詩篇の第一部を構成する最初の三篇の詩篇の後、「栄光あれ、今や。ハレルヤ（3）」という言葉が唱えられる際、他の同様の場合において教会規則で定められているような、十字を切る動作や腰まで深くお辞儀をすることは行われない。

る」と言うのは別問題だ。これに対する言い訳などあるだろうか？ 霊的生活とは、気楽な気晴らしではありません。もし痛みがあるなら、座っても構いません。キリストは暴君ではありません。アバ・イサアクもこう言っています。「立ってられないなら、座りなさい。」⁹⁶ しかし、彼は「座れるなら座りなさい！」とは言っていません。

— ゲロンダ、教えてください。なぜ私たちは六篇の詩篇の朗読中に座らないのですか？

— それは、六篇の詩篇が最後の審判を象徴しているからです。ですから、六篇の詩篇を読んでいる間、心が最後の審判の瞬間に向くのが良いのです。六篇の詩篇を読むのに六、七分かかります。最初の節の後は、十字を切ることもありません。なぜなら、キリストは今、十字架にかけられるために来られるのではなく、審判者として[この世に]現れるからです。

かつてはどのような敬虔さがあったかについて

— なぜ、ゲロンダ、現代では敬虔な心がこれほど稀になってしまったのでしょうか？

— それは、人々が霊的な生き方をやめてしまったからです。彼らはすべてを世俗的な論理で解釈し、神の恵みを追い払っています。かつては、なんと深い敬虔さがあったことか！ アカルナニアやエトリア⁹⁷ には、とても素朴で敬虔なおばあさんたちがいました。彼女たちは、プルス修道院のラバたちが用事で下山してくる際、その前に地面にひれ伏して頭を下げていたのです。「これらは、」おばあさんたちは言いました、「聖母マリアのラバたちよ！」——そして、次々と頭を下げていたのです！ もし彼女たちが至聖なる聖母マリアの修道院のラバに対してこれほどまでの敬虔さを示していたのなら、彼女たちが聖母ご自身に対してどれほどの敬虔な心を抱いていたか、想像してみてください！

— ゲロンダ、ファラシオの人々が抱いていたその敬虔さは、聖アルセニオスによって彼らの中に育まれたものなののでしょうか？

— 彼らには以前から敬虔な心があったが、聖人はそれをさらに深めた。ファラシオ人たちは、伝承に基づいて敬虔な心を持っていた。聖アルセニオスの聖歌隊員であったプロドロモス・カルツィノグルという老人は、非常に敬虔な人だった。彼はコニツァに移り住んだ後も、そこで教会の聖歌隊員を務めていた。この老人は八十歳を過ぎていたが、毎朝、夜明け前に約半時間かけて、教会

⁹⁶ 「もし、徹夜祈祷の最中に、長時間の立ちっぱなしがその長さに耐えられなくなり、力尽きてしまうとき、心の中で——より正確に言えば、悪知恵に満ちた者が蛇のように心の中でこう囁く、『もうやめなさい。立ってられないのだから』と。そのときは、こう答えなさい。『いや、もう一カフィズマだけ座っていよう。それこそが眠りよりも良い。たとえ私の舌が沈黙し、詩篇を唱えられなくとも、心は祈りの中で、また神との対話の中で神から教えを受けているのだから、この覚醒はあらゆる眠りよりも有益である』と。」参照：アッバ・イサアク・シリア人。著作集。セルギエフ・ボサド、1911年。第52説教。231頁。

⁹⁷ 中央ギリシャの近隣地域。長老はそこで兵役を務めた。——訳者注

で歌うために徒歩でニジニャ・コニツァまで下りていった。「私は」と彼は言った。「キリストの犬である。」冬、霜が降りる時期には、下り道は非常に危険だった。道は氷に覆われ、滑らないようにどこを踏めばよいか探さなければならなかった。しかし、彼はそんなことには全く気にも留めなかった。なんと敬虔なことか！…

両親が私に話してくれたところによると、ファラシオの人々〔彼らがまだ故郷にいた頃〕は、ファラサに教会を建てるために資金を集めたという。しかしその後、聖アルセニイは、ファラサにはすでに教会があったため、そのお金を貧しい人々に配ろうとした。聖人自らが貧しい家庭を回ってお金を配ったが、不幸な人々はそれを受け取ろうとしなかった。教会からお金を受け取るなんて、あり得ないことではないか？そして、人々がお金を受け取らなかったため、聖人はやむを得ず、村の⁹⁸ 長にこのお金を託し、ケサリアの主教のもとへ送らざるを得なかった。「道中、同行者を連れて行け」と聖人は彼に言った。「あなたの祝福があれば、それで十分です」と村長は答えた。彼がその金を司教に届けると、司教は彼に尋ねた。「さて、ハジェフェンディは、この金でどうするよう命じたのか？」——「貧しい家庭に配るように、と」と村長は答えた。「なぜ彼の言うことを聞かなかったのか？」——「人々は、これが教会の金だから受け取らないのです。」結局、司教もそのお金を村長に返した。ファラシオトたちは、交換プログラムでファラスから去る際、聖アルセニオスに、ギリシャで教会を建てるためにこのお金を持ち帰ると告げた。すると聖アルセニオスは涙を流し、彼らにこう言った。「ギリシャには多くの教会があるだろうが、ここにあるような信仰は、あそこでは見つからないだろう。」

アイコンへの敬虔

そして、私たちはアイコンに対してどのような敬虔な心を抱くべきでしょうか！ある修道士が、誰かへの祝福として聖ニコラオスのアイコンを用意しました。それを上質な紙に包み、しばらくの間戸棚にしまっておいたのです。しかし、うっかりして、アイコンを逆さまに置いてしまいました。ほどなくして、部屋の中で何かがトントンと鳴り始めた。修道士は、その音がどこから聞こえてくるのか確かめようと、あちこち見回した。しかし、まさかそれが戸棚の中から聞こえてくるなど、想像もつかなかっただろう！その音はかなり長い間続いた。「トントン、トントン！」——修道士を落ち着かせなかった。ついに、タンスに近づいた修道士は、その音が中から聞こえていることに気づいた。タンスを開けてみると、音は聖像が入った包みから発せられていた。「この聖像、どうしたのだろう？」と修道士は不思議に思った。「ちょっと見てみよう。」

アイコンを広げると、それが逆さまに立てられていたことがわかった。そこで彼はそれを正しい向きに立て直すと、音はすぐに止んだ。

敬虔な人は、特に聖像を深く敬う。ここで「聖像を敬う」と言うとき、私たちは、その聖像に描かれている人物を敬っていることを意味している。もし人が、自分の父や母、祖父、祖母、ある

⁹⁸ ファラス村の村長はプロドロモス・エズネピディス——長老パイシオスの父——であった。

いは兄弟の写真を持っていて、それを破ったり踏みつけたりできないのなら、ましてや聖像に対してはなおさらのことではないでしょうか！ エホバの証人には聖像がなく、私たちが聖像に捧げる敬意を、彼らは偶像崇拜だと見なしています。ある時、私はあるエホバの証人に尋ねた。「あなたたちの家には、写真はないのですか？」——「あります」と彼は答えた。「では」と私は言った。「母親が、遠くへ出かけている子供がいる時、その子供の写真にキスをしないでしょうか？」——「します」とエホバの証人は言った。「では、彼女がキスしているのは、紙なのか、それとも自分の子供なのか？」——「自分の子供です」と彼は答えた。「そうでしょう」と私は言った。「彼女が子供の写真にキスするとき、紙ではなく子供そのものにキスしているのと同じように、私たちも紙や板ではなく、キリストにキスしているのです。」

— ゲロンダ、もしある板に以前、キリストや聖母マリア、あるいはある聖人のイコンが描かれていて、時間の経過で絵の具が剥がれてしまったとしても、それでも私たちはそれを口づけすべきでしょうか？

— ええ、もちろんです！ 人が畏敬の念と熱い愛をもって聖なるイコンに口づけをする時、その人はあたかもそれらのイコンの絵の具を[自分の中に]取り込み、吸収しているかのようで、その人自身の内側に、これらの聖人たちが描かれるのです。聖人たちは、紙や板から「飛び出し」、人々の心に刻み込まれることを喜びます。キリスト教徒が敬虔に聖なる像に口づけをし、キリスト、神の母、聖人たちに助けを求める時、彼は自分の心で口づけを行っているのです。その心は、キリストの恵みだけでなく、聖母マリアや聖人たちの恵みだけでなく、キリストそのもの、あるいは至聖なる聖母マリア、そして聖人たち——それらが、その人の〔内なる〕神殿のイコノスタスに立ち現れるのです。「人は聖霊の宮である。」⁹⁹ ほら、どの礼拝もイコンへの口づけで始まり、口づけで終わるではないか。もし人々がこれを理解していたなら、どれほどの喜びを感じ、どれほどの力を得ることになるだろうか！

— ゲロンダ、なぜ聖母マリアへの祈願カノンにある聖母賛歌の一つに、「あなたの尊い御像に礼拝を捧げない不信心者たちの口は、無言である」とあるのですか？

— もし誰かが敬虔さを欠いていて、イコンに口づけをするなら、その人の口は黙っている、音を出さないのではないだろうか？ そして、敬虔な人が聖なる像に口づけをする時、その口は美しい響きを奏でているのではないだろうか？ 中には、イコンに口づけをする際、それには触れない人もいます。また、聖像に口づけする際に、唇で軽く触れるだけの人もいます。そういうことです。¹⁰⁰ 何か聞こえましたか？

— いいえ。

— ほら、つまり、その口は「無言」で、音を出さないのです。しかし、敬虔な人がイコンに口づけをすれば、その口づけの音が聞こえます。その時、その口は美しい響きを奏でるのです。口が

⁹⁹ 参照：コリントの信徒への手紙一 3章16節および6章19節。

¹⁰⁰ 長老はあるイコンに深く頭を垂れて祈りを捧げたため、何の音も聞こえなかった。

「無言」だと言われても、それは神を冒瀆しているという意味ではありません。しかし「事実は事実です」、ある口は無音であり、別の口は美しい響きを奏でるのです。 私たちが聖なるイコンを目にする時、私たちの心は神と聖人への愛で満ち溢れ、その前にひれ伏し、礼拝し、深い敬虔さをもってイコンに口づけをすべきです。 もしあなたが、フィロフェイ修道院の敬虔な年老いた修道士、サヴヴァ神父をご覧になったなら——彼が、いかに深い敬虔さ、感動、そして愛をもって、「甘い口づけ」と呼ばれる至聖なる聖母マリアのイコンに口づけをしていたか、お分かりになるでしょう！ この聖母マリアのイコンには、修道士たちがいつも同じ場所に口づけをしたため、隆起さえ生じているほどです。

畏敬の念を込めて描かれるその像は、敬虔なイコン画家から神の恵みを吸収し、人々に永遠の慰めをもたらす。 イコン画家は、自分が描くイコンに自分自身を「重ね合わせ」、投影するものであるため、その精神状態は極めて重要である。ティホン神父¹⁰¹ は私にこう語った。「息子よ、私が聖骸布を描くときは、『尊きヨセフよ、木から下ろせ……』と歌っているのだ」彼は絶え間なく歌い、泣き続け、その涙がイコンに滴り落ちた。そのようなイコンは、この世で永遠の説教を成し遂げる。イコンは、何世紀にもわたって説教し続ける。そして、例えば苦しんでいる人が、キリストや聖母マリアのイコンに目を向けるとき、慰めを受けるのだ。

すべては敬虔さに根ざしている。 ある人は、イコンが立てかけられていた壁にただ触れるだけで、すでに恵みを受ける。一方で、最も素晴らしいイコンを持っていたとしても、敬虔さがなければ何の益も得られない人もいる。ある人は普通の十字架から益を得られるが、敬虔さを持たない人は、命を与える木そのものからさえ益を得られない。

神への捧げ物には、最も清らかなものを捧げなければならない

ある時、ここ、あなたの教会で、私は戸惑いを覚えました。聖壇の上で、あなたがこのような小さなろうそくに火を灯しているのを見たからです。私の教会では、イコノスタスの前の燭台にさえ、これほど小さなろうそくは置かないようにしています。それは軽視だと考えているからです。

——しかし、ゲロンダ、ろうそくは底まで燃え尽きるべきだと言われています。

——ええ、底まで燃え尽きるのは構いませんが、重要なのはどこで燃え尽きるかです。信徒がろうそくを立てる燭台で底まで燃え尽きると、聖壇や祭壇で燃え尽きるとでは、話が別なのです。祭壇で半分ほどしか燃えていないろうそくを灯すのはふさわしくなく、それは軽視にあたります。また、パンカディルにおいても、たとえ礼拝の終わりまでろうそくが持ちこたえたとしても、もしそれが非常に小さいものであれば、交換してください。そして、神聖な典礼の開始時——小典礼と大典礼の双方において——は、常に大きなろうそくを使用してください。なぜなら、それは尊き洗礼者ヨハネを象徴しているからです。 ところによっては、節約のためにランプさえ消してしまう

¹⁰¹ 参照：長老パイシイ『アトス山の聖なる父たちとアトス山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年。13-40頁。

が、神を畏敬の念をもって崇めれば、神は大きな祝福を与えてくださるということを理解していないのだ。また、追悼礼拝において、糸を蠟に浸したような極細のろうそくを使うのは、神への軽視に他ならない。そのようなろうそくを人々に配ることさえ恥ずかしいことだ。

「ゲロンダ、修道女たちは自分の部屋で、好きなだけろうそくを灯してもいいのでしょうか？」

— 燃やさせておけばいい。悪魔も一緒に燃え尽きるだろう。ほら、世界中が炎に包まれているではないか。ただ、彼女たちが灯すろうそくには意味がなければならない。つまり、祈りを伴っていないなければならないのだ。

自分を神に捧げることは、実に偉大なことなのです！ 私たちは甘い果実を食べながら、香炉の中の樹液を神への捧げ物としています。蜂蜜を味わいつつ、神への捧げ物として蠟を捧げますが、それさえも私たちはしばしばパラフィンと混ぜてしまっているではありませんか！ 神の寛大で豊かな祝福への感謝として、たった一本の蠟燭を神に捧げているだけなのに、まさかそれさえもごまかそうというのか？ もし神が、私たちに蜂蜜を捧げることを望まれたらどうだろう？ その時は、私たちがどうするかを想像してみしてほしい！ 私たちは、神に蜂蜜シロップか、あるいは砂糖を溶かした水を少し捧げていたことでしょう。神は私たちを真剣に受け止めてはくださらないでしょう！ 神への奉仕以外なら、何にでも節約はできます。神には、最も清く、最も良いものを捧げなければなりません。

— でも、ゲロンダ、一般の人々は、パラフィン製のろうそくを灯すことがなぜ不敬なのか、あまり理解していないようです。

— それなら、こう伝えてください。「教会でパラフィン製のろうそくを灯すのは、皆さんの健康に害があります」と。そうすれば、彼らは少しは考え直すでしょう。ましてや教会が狭い場所なら、[そんな不自然なろうそくのせいで]窒息しかねません！ パラフィン製の大きなろうそくを灯すよりは、たとえ小さくても純粋な蜜蠟で作られたろうそくを一本灯すほうがましです。まさにこのせいで、多くの人が教会で気分が悪くなり、気を失ってしまうのです。小さな教会なのに、パラフィンがあちこちで燃え盛っているのですから！ ... しかし、それだけでもあればまだましなものです……。食用に適さない油で、聖灯を満たそうとしているのです。人々は一体どこまで墮落してしまったのでしょうか！ 旧約聖書には、神殿で使用される聖油は、木から収穫されたオリーブの実から作られるべきであり、地面に落ちたものから作ってはならないと記されています。まさか、神が油や乳香を必要としているのでしょうか？ いいえ、そうではありませんが、[それによって]神は心を動かされるのです。なぜなら、それは人間が神への感謝と愛を表現する捧げ物だからです。シナイ山で私が感銘を受けたのは、このことでした。ベドウィンたちは、かわいそうに、[神への]捧げ物となるものを何も持っていないのです。そこで彼らはどうするかといえば、他の石とほんの少し違う小石——ほら、こんなちっちゃな石——を拾ったり、あるいは岩の割れ目などで二、三枚の葉っぱを見つけたら、それをモーセが杖で打って水が湧き出たあの石の上に置き、そこに捧げ物を残していくのです。そして、授乳中の母親たちはそこへ行き、[その石の上に]数滴の乳を絞り出し、「神よ、私の子供たちを育てるための乳をください」と願うのです。ほら、彼らの[神への]感謝の気持ちを見てください！ これは決して些細なことではありません。それなのに、私たちは何を

しているのか……。これらの人々が私たちを裁くことになるだろう。彼らはそこに、石の上に、小さな木片や紙片、小石などを置いていく……。神はこれらすべてを必要とされているのか？ いいえ、必要ではない。しかし、神は、その善き心と善き意志を見て、助けてくださるのだ。

—ゲロンダ、ろうそくに火を灯すとき、そのろうそくが特定の目的のために捧げられるのだと告げるべきでしょうか？

— ろうそくに火を灯すとき、あなたはそれをどこへ送っているのですか？ どこかに送っているのではないですか？ ろうそくを通じて、私たちは神に何かを願っているのです。あなたがろうそくに火を灯し、「肉体と精神に苦しむ人々のため、そしてそれを最も必要としている人々のために」と言うとき、その人々の中には生きている人もいれば、亡くなった人も含まれているのです。私たちが彼らのためにろうそくを灯すとき、故人たちがどれほどの安らぎを感じるか、知っていますか？ こうして私たちは、生きている人々と故人との間に霊的なつながりを持つのです。一言で言えば、ろうそくとは、私たちが神や病人、故人などと接触するための「アンテナ」なのです。

—ゲロンダ、なぜ私たちは乳香を焚くのですか？

— 私たちは神を賛美するために香を焚きます。私たちは神を賛美し、全世界における神の偉大な御恵みに感謝を捧げるのです。香もまた捧げ物の一つです。そして、教会で聖像に香を焚いた後、それを神と聖人たちに捧げた後、私たちは人々——神の生ける聖像——にも香を焚きます。

願い事であろうと感謝であろうと、心を込めて行いなさい。「わが神よ、心を込めてお願いいたします。どうか私にこの恵みをお与えください」——そうして私はろうそくを通して「語りかける」のです。そして、香によって私はこう「呼びかけ」ます。「わが神よ、あなたのすべての賜物に、私の心を尽くして感謝いたします。私の多くの罪、全世界の恩知らずさ、そして私自身の数多い恩知らずさを赦してくださることに、感謝いたします。」

できる限り、畏敬の念と謙虚さを[自分の中に]育んでください。それは、あなたがたが神の恵みを受け入れる助けとなります。なぜなら、畏敬の念と霊的な謙虚さを持つ人は、もしさらに謙遜であれば、神の恵みを受け入れるからです。もしその人に畏敬の念と謙遜さがなければ、神の恵みは彼に近づきません。聖書にはこう記されています。「私が目を向けるのは、柔和で、沈黙を守り、私の言葉に畏れおののく者だけである。」

第5章。 「賜物」には 神聖な酸素

人々は苦しむ人々のことを忘れてしまう

— ゲロンダ、以前、あなたは「人間の慰めを避けるほど、神の慰めを受け入れる」とおっしゃっていました。では、なぜ空腹のときの方が、祈りをより強く感じられるのでしょうか？

— ええ、しかしそれだけでなく、空腹な者同士は互いに理解し合えるのです。満腹な者は空腹な者の気持ちを理解できません。ある町では食べ物を捨てているのに、少し離れた場所にはロシアからの移住者が住んでいて、食べるものがないと聞きました。その不幸な人々は、ある種の温室やトタン板の小屋に身を寄せ合っています。仮に、食べ物を捨てている人たちが、すぐそばに困窮している人々がいることを知らないでしょう。しかし、なぜ彼らは確かめるために尋ねようとしないのか？ 食べ物を捨ててしまうのだ！ 私たちは、自分たちが持っている不要な物さえも分け与えようとしません。ある人が必要なものを買うことができない一方で、別の人が自分では使わない物を持っていて、それを困っている人に与えない——それは罪です。私にとって、これほど大きな苦しみはありません。キリストは最後の審判で私たちにこう言われるでしょう。「あなたは私を飢えさせ、食べ物を与えなかった。」¹⁰²

すべてを持っている人の中には、「今日、貧困など存在しない」と言う者もいます。彼らは隣人のことを考えません。自分の安らぎを乱されたり、失ったりしないよう、他人の立場に身を置いてみようとはしないのです。しかし、そのような心の持ちようでは、どうして貧しい人を見つけられるのでしょうか。もし人が他人のことを考えるなら、貧しい人を見つけ、その人が何を必要としているかを見出すことができるのです。そして、頭を撫でてくれる人が誰もいない孤児が、どれほど多くいることか！ 人々は苦しんでいる人々のことを忘れてしまう。彼らの心は、のうのうと暮らしている人々のことで占められており、苦しんでいる人々ではなく、そうした人々と自分を比較してしまうのだ。もし彼らが、例えば、十字を切ったというだけで、20年間も狭い独房に、互いに重なり合うように詰め込まれて収監されている、北エピル（アルバニア）の不幸な住民たちのことを考えたとしたら……！ そうすれば、人々は物事を違った視点で見るようになるだろう。恐ろしいことだ！ 私たちには、そんなことを想像することさえできません。「互いに重なり合って」とはということか、ご存知ですか？ 座っても、横になっても、立ってもいられない……窓などあるはずもなく、壁に小さな穴でもあればまだましという状況なのです¹⁰³

— つまり、墓の中のことですね、ゲロンダ！

— 墓の中なら、せめて足を伸ばせるでしょう。なんという苦しみでしょう！ 今日の世界には多くの悲しみがあります。なぜなら、弾薬は生産されているのに、人々は運命のなすがままに放り出されているからです。アフリカでは、人々がラクダの糞を食べているのを見ました。あそこの人間の体は、もはや体とは呼べません。まるでカエルのように。胸郭は小枝で編んだかごのようです。

¹⁰² マタイによる福音書25章42節。

¹⁰³ 1990年5月に述べられた。

なぜ私は胸が痛むのでしょうか？ 私たちにはすべてがあるからこそ、他人の苦しみに心を痛めないのです。それなのに、天国に行きたいと願っているのです.....

1958年に私がストミオン修道院に来たとき、コニツァには一人のプロテスタントがいて、アメリカからの経済的支援のおかげで、80世帯をプロテスタントに改宗させていた。彼は彼らのために集会用の礼拝堂を建てることさえしていた。不幸な人々は極度の困窮に陥っており、その深刻な貧困ゆえに、物質的な援助をしてくれるプロテスタントになることを余儀なくされていた。ある時、その不幸な人々の一人が私にこう言った。「私はプロテスタントになるだけでなく、ユダヤ人になることさえ厭わない。それほど困っているからだ。」それを聞いて、私は言った。「何か手を打たなければならない。」と。そこで、ある程度の経済的余裕があり、他者を助けることのできる人々を集め、彼らと話し合った。彼らは貧しかったが、当時は完全に世俗的な人々であったものの、心根は優しくかった。特に、その中の一人は、完全に世俗的な生活を送っていたにもかかわらず、寛大な心を持っていた。私が彼を初めて見たとき、「外見は腐った木のように見えるが、内側には善良な火種がある」と言った。そこで、私たちはいくらかのお金を集めて、貧しい家庭に配ることに決めた。私は、裕福な人たちに、自ら貧しい人々のところへ行き、お金を配るよう勧めた。そうすることで、彼ら自身も心を動かされ、恩恵を受けることができるからだ。そうして彼らの心は、たとえ石のように硬くても、和らぎ、人間らしいものになっていった。そうして彼らには天国の扉が開かれた。短期間のうちに、これらの慈善家たちは皆変わっていった。なぜなら、彼らは[自分たちのすぐそばに]存在していた悲惨さを目の当たりにし、もはやクラブやダンスパーティーで遊ぶことに魅力を感じなくなったからだ。「君は——」と彼らは言った。「私たちを無力にしてしまった。これでどうやって遊びに行けばいいんだ？」彼らは教会に近づくようになり、そのうちの一人については、後に彼が聖歌隊員になったことさえ知った。しかし、その八十世帯も、神の恵みによって次々と正教会へと戻っていった。その後、あるアメリカのプロテスタントたちが、そのプロテスタントの説教者が何を成し遂げたのかを見にやって来たが、彼にはもはや信者が一人もいなかったため、彼らは彼を裁判に訴えたのだ！

— ゲロンダ、困っている人の中には、遠慮なく助けを求める人もいれば、何も言わない人もいます。

— 多くの人は恥ずかしがり、自分の評判を傷つけないのです。そのような人々は、他の人たちよりも助けを必要としています。そして、[まず第一に]彼らを助けるほうが正しいのです。私は二人の医師を知っていますが、彼らには何か不幸なことが起きたとき、アスピリンを買うお金さえありませんでした。愛を持つ人は、施しを求めてくる人に与えるだけで満足するのではなく、自ら困っている人を探し出し、彼らを支えようとします。私の母は、それをとても熱心に行っていました。

愛の基準

もし人が[余裕]を持って施しをするなら、その人に愛があるかどうかは判断できません。なぜなら、愛からではなく、単に不要な物を処分するために与えている可能性もあるからです。愛が表

れるのは、人が自ら困窮している状況にありながら与えるときです。例えば、私が自分には愛があると考えているとしよう。神は、私の愛を試すために、貧しい人を私のところに送ってくる。もし私に、例えば時計が二本あって——一本は良いもので、もう一本は少し傷んでいる——その傷んだ方を貧しい人に渡したとしたら、それは私の愛が二流であることを意味する。もし私に真の愛があるなら、貧しい人に良い時計を差し出すはずですが、そこには欠陥のある論理が絡み、私たちはこう言います。「良いものを渡すなんて、いいの？ いや、彼にはそもそも時計がないのだから、古いものでも良いものになるだろう」と言って、私は彼に古い時計を渡してしまうのです。しかし、古いものを与えるとき、あなたの中にはまだ古びた人間が生きているのです。もし新しいものを与えるなら、あなたは生まれ変わった人間なのです。一方、古いものも新しいものも手元に置いておき、結局は何も与えないという状態は、地獄のようなものです。

—ゲロンダ、この状態から抜け出すにはどうすればよいのでしょうか？

—こう考えてみるべきです。「もしその物乞いの場所にキリストご自身がいたとしたら、私は彼に何を与えるだろうか？間違いなく、最善のものを与えるだろう。」そうして人は、真の愛とは何かを理解し、その原則に従うという確固たる決意を固め、次回是最善のものを捧げるようになるのです。最初は少し難しいかもしれないが、このように努力を重ねることで、他者を助ける際に古いものも新しいものも惜しみなく与える境地に達する。その人自身は時計を全く持たないかもしれないが、その内にはキリストがおられ、神の喜びに満ちて鼓動する自分の心臓の甘い音を聞くことができるだろう。もしあなたが衣を奪われ、持っているそのみすばらしい服さえも差し出したなら、¹⁰⁴ その後、キリストがあなたに衣を着せてくださる。もしあなたが何らかの不幸な人のことを思いやり、その人を助けるなら、もしキリストご自身がその人の立場にいらっしゃったとしたら、あなたはどのような犠牲を払ったでしょうか、と考えてみてほしい。こうして人は試練に合格するのだ。信者は、隣人の顔にキリストを見ます。そしてキリストご自身が、「不幸な者の一人に何かをすることは、すなわちわたしにそれをするることである」とおっしゃっています。¹⁰⁵ もちろん、各人にふさわしい敬意を払うべきですが、愛はすべての人に対して等しくあるべきです。大臣も物乞いも、将軍も兵士も、信者の心の中では同じ位置を占めています。

—ゲロンダ、なぜ時には、助けを受けた人が、自分を助けてくれた人に対して無礼な態度をとることもあるのでしょうか？

—悪魔が割り込んで、私たちが助けた人に、私たちが怒らせるために、私たちに対して悪い振る舞いをするようそそのかすのです。そうして、私たちが施した善行は失われてしまいます。その人は悪くないのです。悪魔が、私たちからすべてを奪うために、その人を煽っているのです。善行を行う際は、常に「これを行う義務がある」という意識を持ち、誘惑に直面しても、行った善行を失わず、その善行から得られるすべての恩恵が自分のものとなるよう備えておきなさい。例えば、ある人が、それを人前に誇示したくなく、ある金額を寄付したとします。しかし、誘惑者が割り込

¹⁰⁴ 参照：ルカによる福音書 6章29節。

¹⁰⁵ マタイによる福音書 25章40節。

み、他の人々にこう言わせるようにそそのかす。「お前は金に執着しているじゃないか。何も寄付していないのに、あの人もあれをしたし、この人も別のことをしたんだ」。こうして悪魔はその人に「謙虚に」こう答えさせる。「そうだな、私も少しばかりはしたよ。病院を……建てたんだ」。あるいは、敵は彼を怒らせ、「誰だ、俺が?! あれもこれも成し遂げた俺が?! 」と言わせるように仕向ける。そうして彼は……すべてを失ってしまう。あるいは、悪魔は、その人が恩恵を与えた相手に、「ケチめ! 搾取者め! 」と言わせるように仕向ける——そうすれば、恩人はこう答えるだろう: 「誰? 私が搾取者だって? 君に善行を施し、これほどの恩恵を与えた私が? 」——「ああ、彼は恩知らずだ」と彼は後で言うだろう。「もちろん、彼に『ありがとう』と言わせたかったわけではないが、せめて[私が彼の恩人であること]くらいは認めてくれてよかったのに! 」しかし、もし人が自分の功績を認められることを期待するなら、その人はすべてを失うことになる。一方、善意で恩恵を与えたが、「彼が私がした善行を忘れてしまったとしても、それはそれでいい」とか、「もしかすると、彼は動揺していたり疲れていたりして、そんな口調で話したのかもしれない」と言うなら、その人は隣人を許し、自分自身も何も失うことはない。報いを期待しないとき、私たちは清い報いを得る。キリストは私たちのためにすべてをなされたが、私たちは彼を十字架につけた。私たちは教会でどのように歌っているか。「マナに代えて苦い胆汁」。¹⁰⁶ それゆえ、報いを期待せずに、常に善を行うよう努めよう。

与える者は神の喜びを受け入れる

人には二つの喜びがあります。一つは受け取る時、もう一つは与える時です。与えることによって感じる喜びは、何かを受け取る時に感じる喜びとは比べものになりません。人は、自分が霊的な面で正しく成長しているかどうかを理解するために、まず第一に、受け取るのではなく与えるときに喜びを感じるかどうかを自ら試してみるべきである。誰かから何かをもらった時に落胆し、自分が与える時に喜びを感じるだろうか? そして、もしその人が霊的な面で正しく努力しているならば、何か善行をしてもそれを決して覚えてはいないが、自分に対してなされた、どんなに些細な善行でさえ決して忘れない。他者からの、自分に対する、どんなに取るに足らない善行でさえ、見過ごすことはできないのだ。彼自身、誰かにブドウ園全体を贈り、それを忘れてしまったかもしれない。しかし、自分が贈ったそのブドウ園から、たった一房のブドウを贈られたことだけは、決して忘れることができない。あるいは、誰かに多くの木彫りのイコンを贈ったが、それを覚えていないかもしれない。しかし、もしその「誰か」が、プラスチックに封入された小さな聖像を一つ彼に贈ったとしたら、彼はその聖像の価値がわずかであっても感動し、感謝の念を抱き、その後、どうお返しをしようかと考えるだろう。彼は教会を丸ごと建てたり、建設用地を寄付したりしても、そのことを忘れてしまうかもしれない。つまり、正しい霊的な道とは、自分がした善行は忘れ、他者から受けた善行を覚えることである。このような境地に達した者は、真の人間、すなわち神の人となる。もし誰かが、他者から受けた善行を常に忘れ、自分自身がした善行だけを覚えているな

¹⁰⁶ 「大金曜日」の早課の第12アンティフォンより。

ら、その行いはキリストが望まれるものとは正反対である。また、「あなたは私にこれだけくれたから、私はあなたにこれだけ返す」といった計算も、下品な市場取引に過ぎない。私は、より大きな困窮にある人に与えるよう努めている。私は、「あの人からこの本をもらったから、今は彼にこれだけ借りがある。返済するために返さなければならない」とか、「他人が私に何もくれなかったなら、私もその人には何も与えない」といった、市場のような細かい計算はしません。これは人間としての真実です。

何かを受け取る者は、人間的な喜びを受け入れます。与える者は、神聖な喜びを受け入れます。私たちは与えることによって神聖な喜びを受け入れるのです。例えば、誰かが私に本をくれたとき、その人は霊的かつ神聖な喜びを感じますが、私はその本を受け取って、人間的な喜びを感じます。この本を他の人に渡せば、私もまた神聖な喜びを感じ、私からそれを受け取る人は人間的な喜びを感じるでしょう。その人がさらに他の人に渡せば、その人も神聖な喜びを感じ、次にそれを受け取る人は人間的な喜びを感じるのです。しかし、その人もまた、誰かにそれを渡せば、神聖な喜びを感じ、その繰り返しとなります。たった一つの物から、多くの人々が神的な喜びと人間的な喜びの両方を味わうことができることがお分かりでしょうか？

与えることで喜びを感じることを学ばなければなりません。人は、与えることに喜びを感じる時、正しい立場に立っているのです。その時、その人はキリストの「ネットワーク」に「つながり」、神聖な喜びを得ているのです。何かを分け与えたり、何かを手伝ったりして感じる喜びには、神聖な「酸素」が含まれています。しかし、人が受け取るものや、他者が自分のために犠牲を払うことに喜びを感じる時、その喜びには悪臭と息苦しさがあります。自分の「自我」を顧みず、他者に身を捧げる人々は、まもなく私たちを裁くことになるだろう。彼らはなんと大きな喜びを感じていることか！彼らにはキリストの庇護がある。しかし、大多数の人々は、受け取ることに喜びを見出している。彼らは自ら神聖な喜びを奪い、それゆえに苦しみを感じているのだ。私たちが自分自身よりも隣人を愛するとき、キリストは心を動かされ、私たちを神聖な喜びで満たしてくださる。見よ、キリストは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という戒めに留まらず、¹⁰⁷、人のためにご自身を犠牲に捧げられたのである。

金に目がくらんだ男は、他人のために集めている

「ほら、ゲロンダ、二人の小さな兄弟がいます。弟は分け与えますが、兄はそうしません。」

— 両親が、年上の子にも与えることの喜びを学ばせてあげなさい。そして、もし年上の子がそのために努力すれば、生まれつき与えるのが好きな年下の子よりも大きな報いを受け、彼よりも優れた人間になるでしょう。

— ゲロンダ、他人に何かを与えることを妨げる心の躊躇いを、どうすれば取り除くことができますか？

¹⁰⁷ レビ記 19章18節； マタイによる福音書 22章39節； マルコによる福音書 12章31節； ルカによる福音書 10章27節。

— 何てことだ、ケチめ！ おまえを追い出してやる！ 例えば、奉仕の務めとしてアルコンダリクで働いているなら、¹⁰⁸ 将来のために、今すぐ「分け与える」という祝福を受け取っておきなさい〔そうすれば、その都度改めてお願いする必要がなくなる〕。ほら、神がどれほど惜しみなく皆に祝福を与えておられるか、わかるか？ もし与えることに慣れていなければ、やがてけちになる習慣がついてしまい、他人に何かを与えることはもはや容易ではなくなる。

金に執着する者は貯金箱のようなもので、他人のために蓄えているのです。そうすることで、彼は与える喜びも、神からの報いも失ってしまうのです。「なぜそれを貯め込んでいるのですか？」と、私はある時、ある金持ちに尋ねました。「君には何の義務もない。それらをどうするつもりだ？」——「死んだら、——と彼は答えた、——ここに残るだろう。」——「それなら、——と私は彼に言った、——君が貯めたものをすべて、あの世へ持って行くことを祝福しよう。」——「ここには、——と彼は言った、——ここに残るだろう。もし私が死んだら、他の人たちに分けさせればいい。」——「ここには——と私は言った——それらは残されるだろう。だが、重要なのは、あなたが生きている今、自分の手でそれらを配ることだ！」金に執着する者ほど愚かな人間はいない。彼は絶えず蓄え続け、絶えず欠乏の中で生き、結局はすべての貯蓄を費やして、自らに永遠の苦しみを買ってしまうのだ。金に執着する者は愚かさの極みに達している。なぜなら、彼は他者に物質的な恵みを分け与えず、それらに溺れ、キリストを見失ってしまうからだ。

人々はケチを嘲笑する。ある非常に裕福な地主がいた。ある地方に土地を持ち、アテネにも邸宅を構えていたが、彼はとてつもなくけちだった。ある日、彼は自分の畑で働く労働者たちのために、水っぽい豆のスープを鍋一杯煮た。当時、不憫な労働者たちは朝、日の出とともに働き始め、日没まで働き続けていた。正午、彼らが休憩のために腰を下ろすと、地主はスープを大きな天板に注ぎ、昼食をとるよう呼びかけた。貧しい労働者たちはその周りに座り、食べ始めた。スプーンで豆をひとすくい取ったり、ただの水っぽいスープをすくったりしながら。その労働者の一人は、スプーンを巧みに操る達人だった。彼はスプーンを置き、少し離れた場所に移動して、靴と靴下を脱ぎ、まるでスープの入った天板の中に足を突っ込もうとしているかのようなふりをした。「何をしているんだ？」と他の者たちが尋ねると、「ああ、そうさ」と彼は言う。「中に入って、もしかしたら豆が転がっているかもしれないから探してみたいんだ！」この不幸な地主は、まさにそんなケチだった。だからこそ、人間には吝嗇よりも、むしろ浪費の心が芽生えるほうが千倍も望ましいのだ。

— けちさというのは、ゲロンダ、病気のようなものです。

— とても恐ろしい病気です！ 人を支配する吝嗇ほど恐ろしい病気はありません。儉約は良いことですが、悪魔が吝嗇を利用してこっそりとあなたを支配しないよう、注意しなければなりません。

— でも、ゲロンダ、吝嗇のせいで飢えに苦しむ人もいますではありませんか。

¹⁰⁸ アルコンダリク——ギリシャの修道院にある客間。——訳者注

—ただ飢えるだけでしょうか？ある裕福な商人がいて、大きな店を経営していたのに、自分ではポケットナイフでマッチを三つに切り分けていたのです。また、ある大富豪の女性は硫黄を持っていたが、いつも燃えている炭を常備し、火を起こす際にはマッチを1本も使わずに、その炭で硫黄に火をつけていた。それなのに、彼女自身は家も土地も、豊かな財産を持っていたのだ。

浪費家になれと言っているわけではない。だが、浪費家なら、何かを頼めば、少なくとも気前よく与えてくれるものだ。一方、けちは、何かを与えるのを惜しむものだ。ある日、二人の隣人である主婦が、サラダや酢について話をしていたところ、そのうちの一人がこう言った。「私にはとても良い酢があるのよ。」しばらくして、もう一人の可哀想な女性が少し酢を必要とするようになった。彼女は隣人に頼みに行ったが、その女性はこう答えた。「ねえ、お嬢さん、もし私が自分の酢を配りまくっていたら、7年経っても手元に残らないわよ！」

儉約しつつも、人に分け与えることは良いことです。儉約家であることは、けちであるということではありません。私の父は、お金をため込むような人ではありませんでした。ファラサにはホテルがなく、その代わりが私たちの家でした。村にやってくる人は皆、村長宅に泊まりに行きました。客には食事を振る舞い、足を洗い、さらにきれいな靴下まで渡していました。

今、巡礼者が訪れる一部の教会でさえ、物置全体がランプで埋め尽くされているのを見かけますが、それでも「もう十分です」と言って、人々が持ち込むのを止めさせようとはしません。それらのランプを使うことも、売ることもできないのに、配ることもないのです。集め始めると、人はそれに縛られてしまい、もう手放せなくなってしまうのです。しかし、もし人が物を集めるのをやめて、それを配り始めたなら、その人の心は——本人も気づかぬうちに——キリストに結ばれることになる。ある未亡人には、子供たちの服を買うための布—アルシンを買うお金もないというのに、私が貯め込むなんて？　そんなの、どうして耐えられるだろうか？　私の小屋には皿も鍋もなく、ブリキの缶があるだけです。自分のために何かを買うよりも、ある学生に500ドラクマを渡して、ある修道院から別の修道院へ移動できるようにしてあげたいと思います。何も蓄えなくても、あなたは神からの祝福を受けている。他者に祝福を与えるとき、あなた自身も祝福を受け取るのだ。祝福は祝福を生む。

善意こそがすべてなのです

—ゲロンダ、もし誰かに助けを求められたのに、私に与えるものが何もない場合はどうすればよいのでしょうか？

—私が施しをしたいのに、与えるものが何もないときは、血をもって施しをします。何かを持っていて他者に物質的な援助をする人は喜びを感じますが、他者に与えるものが何もない人は絶えず苦しみ、謙虚にこう自分に言い聞かせます。『私は隣人に施しをすることができなかった』と。善意こそがすべてなのです。ある金持ちには与えるものがあるのに、与えません。一方で、ある貧しい人は与えたいと願っているのに、与えるものが何もないため、与えることができません。両者は異なる。金持ちは施しをすることで満足感を覚える。一方、貧しい人は心が痛む。善行をしたいと願っているが、隣人に与えるものが何もないのだ。彼は精神的に苦しんでいるが、もし何かを持

っていれば、それを与えて苦しまずに済んだだろう。善意は行いによって現れる。もし誰かが貧しい人に施しを求め、その人が自らも困窮しているにもかかわらず施しをすれば、その施しを受けた人がそのお金を酒代に費やそうが費やさなかろうが、施しをした貧しい人は心の喜びを得ることになり、神はさらに誰かを啓発して、その慈悲深い貧しい人を物質的にも助けてくださるでしょう。ところで、時には、どのような不公正が起こるかご存知ですか？ ある人が隣人を助けるために、自分の持っているものを差し出すのに、別の人がその行為を自分の都合の良いように解釈してしまうのです……

—ゲロンダ、どういう意味でしょうか？

— ある不幸な男が、ポケットにたったの5,000ドラクマしか持っていないとしよう¹⁰⁹。彼は道で物乞いに遭遇し、その金を物乞いの手に押し付けて逃げ去る。物乞いはそれが5,000ドラクマだと気づき、喜ぶ。ちょうどその時、ある大富豪が通りかかり、他人が5,000ドラクマを施しとして渡したのを見て、心の中でこう思う。「あいつが5,000ドラクマも配っているなら、一体どれほどのお金を持っていることか？ きっと大富豪に違いない！」そして、その大富豪は物乞いに五百ドラクマを渡し、自分の義務を果たしたとして心を落ち着かせた。ところが、その不幸な男が持っていたのは、その五千ドラクマだけだったのだ。物乞いを見た途端、彼の心は躍り、それを手渡してしまったのである。もしあの金持ちが少しでも精神的な修養を積んでいれば、善意を抱き、「ほら、最後の1枚を差し出した」とか、「自分にはもともと1万ドラクマしかなかったのに、そのうちの5枚を乞食に与えた」と言うはずだった。しかし、精神的な修養を積んでいなければ、どうしてそんな善意が湧いてくるだろうか？ そこで彼はこうコメントする。「あいつがあれほど金をばら撒いているということは、シャベルでかき集めているに違いない。」

一方で、ある人々は物乞いに500や1000ドラクマを施す一方で、自分たちのために働いていた貧しい労働者に対しては、たった5や10ドラクマを巡って、まるでユダヤ人の市場のような大騒ぎを起こす。私には理解できない。まあいい、見知らぬ人に500ドラクマや1000ドラクマを施すのは構わないが、その一方で、自分のそばにいて助けてくれている人を飢えさせたままにするのか？ それどころか、まず第一に、その人を愛し、助ける義務があるはずだ。しかし、どうやらこうした人々の施しは、称賛されるために行われているようだ。そして、世俗的な論理に駆られたこうした人々は、他人の目には笑いものにならないようにという名目で、ある労働者を裁判に引きずり出すことさえある。教会に通っていたある女性が、¹¹⁰ ある時、森から村までラバで3時間もかけて薪を運んできたおばあさんから薪を買おうとした話を私に語ってくれた。その日、そのおばあさんは、森林警備隊に捕まらないよう見張り所を迂回したため、さらに30分余分にかかり、合計で3時間半もかかってしまった。「それで、いくらですか？」と、その女性は尋ねた。「15ドラクマです」と老婆は答えた。「いいえ」と奥様は言った。「それは高すぎます。11ドラクマで買いましょう。」「そうなんです」と彼女は後で私に言った。「私たちのような聖職者を、馬鹿扱いされないようにする

¹⁰⁹ 約15米ドル。——訳者注

¹¹⁰ 1958年

ためなんです。」その後、私は彼女をこっぴどく叱ってやった！ おばあさんはラバを二頭飼っていて、二十二ドラクマを稼ぐのに二日も費やした。なぜ彼女に二十ドラクマ上乘せしてあげなかったのか？！ いや、そうはせず、その代わりに、正真正銘のユダヤ流の商売を繰り広げなければならなかったのだ。

施しは故人に大いに役立つ

富は、私たちの魂の健康と救い、あるいは亡くなった愛する人々の魂の安らぎのために貧しい人々に施されなければ、人間に破滅をもたらす。病者、未亡人、孤児、その他の不幸な人々に施される施しは、故人にとっても大いに助けとなる。なぜなら、故人のために施しがなされると、それを受け取る人々はこう言うからだ。「神は彼を赦してくださるでしょう。彼の遺骸が祝福されますように。」もし誰かが病に苦しみ、働けず、借金に追われているような状況で、あなたがそのような困難な立場にある人を助け、「このお金は、某氏の魂の安息のために受け取ってほしい」と言えば、その人はこう言うでしょう。「神は彼を赦してくださるでしょう。その遺骸が祝福されますように。」施しを受ける人々は、故人のために心からの祈りを捧げ、それは故人にとって大いに助けとなる。

— もしある女性の夫が、聖体拝領も懺悔もせずに亡くなったり、あるいはその女性が子供を亡くしたりした場合、その女性の魂を助けるために、他に何ができるのでしょうか？

— 彼女自身が、できる限り、より良い人間になることです。当然、そうすることで彼女は自分自身を助けることになりますが、夫をも助けることになります。なぜなら、二人が教会で結婚している以上、亡くなった夫もまた、彼女の霊的な成長において一役買っているからです。最も重要なのは、自分自身をより良い人間にすることです。そうでなければ、彼女は善行を積むことはできても、自分自身は良くなることはないでしょう。『自分の義務は果たしたわ。他に私に何を求めているの？』と言って、改心しないまま、あるいはさらに悪くなってしまうかもしれない。

「ひそかに」行う施し¹¹¹

— ゲロンダ、教会に通いながらも、愛や犠牲の精神に欠けている人を、ファリサイ派的だと考える人もいます。

— えっ、彼らはそれをどうして知っているのですか？ 彼らはそれを確信しているのですか？

— そう判断しているのです。

— キリストは何とおっしゃいましたか？ 「裁くな」と。¹¹² ある人は、大きな困窮にある病気の人を知っていて、その人を助けるために、ジプシーに施しをしないかもしれません。通行人がジ

¹¹¹ マタイ6:4。

¹¹² マタイ7:1、ルカ6:37、ヨハネ7:24を参照。

プシートに遭遇して施しをしても、その病人に施しをする人は誰なのか？ 事情も知らずに、どうしてそのような結論を下せるのか？ ファリサイ主義とは、誰かが明らかに称賛されることを期待して施しをすることである。

1957年に私がとある独立修道院に滞在していた時のことを覚えている。¹¹³、各奉仕の難易度に応じて、修道士たちに金銭的な報酬が支払われていた。 当時は修道院で人手不足だったため、体力のある修道士の中には多くの奉仕を引き受け、より多くの報酬を受け取っていた者もいましたが、彼らはその報酬を貧しい人々に配っていました。 そこには、お金を分け与えなかったため「ケチ」と呼ばれていた修道士が一人いた。この修道士が亡くなったとき、葬儀に参列して彼を悼むために、この地、ハルキディキ地方——ヴェリキ・パナギア、パレオホリ、ネオホリ——から貧しい農民たちが集まった。¹¹⁴ これらの農民たちは牛を飼い、木材や木製の梁を運んでいた。当時はすべて牛で運んでいたのであり、今のようにダンプカーや木材運搬車で運ぶようなことはなかった。 さて、この修道士はこうしていた。自分が果たした奉仕の対価として与えられたお金を、 ひたすら貯め続け、ある家主や一家の親分が牛を1頭しか持っていない、あるいはその牛が死にかけているのを見ると、修道士はその人に牛を買ってあげたのだ。 当時、牛を買うのは並大抵のことではありませんでした。価格は5,000ドラクマもした上、当時の通貨は「堅実」だったのです。他の修道士たちは、ある物乞いに5ドラクマ、別の物乞いに10ドラクマ、さらに別の物乞いに20ドラクマを施し、その善行は人目にさらされていました。 しかし、亡くなったその人は全く目立たなかった。なぜなら、彼は他の者たちのように施しをするのではなく、お金を貯め、自分なりの方法で人々を助けていたからだ。そこで、彼は「ケチ」「守銭奴」と呼ばれた。ところが、彼が亡くなった時、貧しい人々が集まって泣きながらこう言った。「彼は私を救ってくれた！」と一人が言った。「彼は私を救ってくれた！」と、別の者が言った。当時、牛さえいれば木材を運んで家族を養うことができたのだ。修道院の兄弟たちは驚愕した。だからこそ、私はこう言うのだ。「他人が何をしているか、私たちにどうして分かるだろうか？」

— ゲロンダ、時には人は施しをしても、ある種の空虚さを感じてしまうことがあります。その原因は何でしょうか？

— 自分自身をよく見つめ直すべきです。もしかすると、彼らを動かしているのは人に好かれたいという気持ちなのかもしれません。動機が純粋であれば、人は喜びを感じます。ある町で、かつてこんなことがあったのをご存じですか？ 私の知人である、敬虔な人物で、職業は弁護士の人が、その話を教えてくれました。 クリスマスが近づき、あるキリスト教徒たちが様々な品を集めて包みを作り、さまざまな贈り物を用意し、町の広場で貧しい人々に配ろうと決めたのです。当時は、占

¹¹³ 修道士たちが共同生活を送っているが、共通の修道院長を持たず、霊的生活や物質的な生活において各自の規律に従っている修道院。

¹¹⁴ ハルキディキ半島の集落。——訳者注

領直後で¹¹⁵、人々は困窮していました。その弁護士はこう言いました。「誰が貧しいか〔そうでないか〕わかっているのだから、騒ぎ立てずにこっそりこれらの贈り物を配ったほうがいいでしょう。」—「いや」と彼らは答えた。「神の栄光のために広場で配ろう。そうすれば、人々は私たちが無関心ではないと分かるだろう。」—「一体、何のためにそんなことをする必要があるのか？」と、私の知人は再び反論した。「どの本に、そんなふうに施しを配ると書いてあるというのか？」彼らは「神の栄光のために」と主張した。彼はどうしても彼らを説得できず、そのことに気づき、疲れ果てたので、彼らが望むようにさせることにした。さて、彼らは贈り物を街の大きな広場に運び、そこで配ると宣言した。このことはすぐに知れ渡り、たちまち最も荒くれ者たちが、まるでゴリラのように押し寄せ、奪い取り、奪い取り、残りの者たちには何も残さなかった。贈り物は、野蛮で困窮していない者たちの手に渡り、不幸な貧しい人々は手ぶらで残された。そして、この行事を担当していた者たちがそこで秩序を取り戻そうとしたところ、彼らは「神の栄光のために」と、思い切り殴りつけられてしまったのです！ 霊的な法則がどのように作用するか、お分かりでしょうか？ 世俗的な人間にとっては、誇りを持ったり自慢したりすることには言い訳がありますが、霊的な人間にとって、そこにどのような言い訳があるというのでしょうか？

—ゲロンダ、信仰を持たないけれど、思いやりがあり、善行を行う人々もいるのですが……

—世俗的な人が、人に気に入られようとしてではなく、純粋な善意から施しをするなら、神はその人を見捨てず、ある時、その人の心に語りかけてくださるでしょう。スイスに住んでいた私の知人が、ある裕福な女性、無神論者について話してくれました。彼女は並外れて思いやりのある人でしたが、ついには全財産を貧しい人や不幸な人々に配り尽くし、結局、完全に無一文になってしまいました。そこで、かつて彼女が助けていた人々は、彼女を最高級の老人ホームに入所させようと手配しました。しかし、この女性が成し遂げた数々の善行にもかかわらず、彼女は依然として無神論者のままでした。キリストについて話そうとすると、彼女は会話を避け、「キリストは単なる善良な人であり、社会活動家だった」と言い、他にも同様の説を並べ立てた。彼女と対話したクリスチャンたちが彼女を助けることができなかった可能性もあり、彼女は彼らの生活に特別な何かを見出せなかったのかもしれない。「この魂のために祈ってくれ」と友人は私に言い、彼自身も彼女の回心のために熱心に祈り続けていました。しばらくして、彼はある日老人ホームを訪れた際、彼女がすっかり生まれ変わっているのを見た私に話してくれました。「私は信じます——」と彼女は叫びました。「信じます！」彼女には、彼女を変えた一つの奇跡的な出来事が起こり、その後、彼女は洗礼を受けたいと願うようになりました。

¹¹⁵ 1941年から1944年にかけての、ドイツ、イタリア、ブルガリアによるギリシャ占領のことである。——訳者注。

「このようにする者は、その人の頭に燃える炭を集めているのである」¹¹⁶

——ゲロンダ、もし人が困っていないのに、ただそう装っているだけなら、その人を助けるべきでしょうか？

— キリストは、試すことなく、私たちに求める者たちに与えるべきだとおっしゃいました。¹¹⁷ たとえ求める者が困窮していなくても、あなたはそれでも彼に与えるべきです。施しをする機会があることを喜びなさい。神は「義人にも不義人にも雨を降らせられる」のです。¹¹⁸ それならば、なぜ私たちは隣人を助けないのでしょうか？ そもそも、私たち自身が、神から与えられるすべての賜物に値する者なののでしょうか。神は「私たちの不義によって私たちが裁かれたのではなく、また私たちの罪によって私たちに報いたわけでもない」のです。¹¹⁹ ある貧しい人があなたに助けを求めてきます。たとえその人について疑念があったとしても、それでも、よく考えて、後で心に罪の思いがよぎらないように、その人を助けてあげなさい。 アッバ・イサアクがこう記していたことを思い出してください。「たとえ人が馬に乗ったままあなたに求めてきたとしても、与えなさい。」¹²⁰ あなたは真の実情を知りません。あなたのすべきことは、求めてくる人の言葉を信じ、その人が求めている分だけ与えることです。

例えば、私たちにたった千ドラクマしかなく、それを乞食に与える際に、もっと多く与えられないことを悔やむならば、私たちが与える祝福（つまりそのお金）に加えて、その乞食の良心にキリストと善意の気遣いを注ぎ込むことになる。私たちの行ったことは、その人の心を揺さぶることになるでしょう。なぜなら、その人の心は、ヒリアリコ（¹²¹）と共に、痛みで満たされた心を彼に捧げたあの慈悲深い人物へと、絶えず引き戻されるからです。その不幸な人は、最終的に、匿名で、その恩人から受け取ったお金の全額、あるいはそれ以上の金額を、その恩人に送り返すに至るでしょう。私にもかつて似たようなことがありました。ある時、テッサロニキにいた私は、一見するとジプシー風の女性に呼び止められ、夫が病気だからという理由で子供たちのために金をくれと頼まれました。手元には500ドラクマしかなかったのですが、それを彼女に渡してこう言いました。「申し訳ないが、これ以上はあげられない。もしよければ、私の住所を受け取って、ご主人の容体について手紙をください。聖山からもっと送れるよう努めます」と。ほどなくして、私は手紙を受け

¹¹⁶ ローマ12:20。

¹¹⁷ マタイ5:42、ルカ6:30を参照。

¹¹⁸ マタイによる福音書5章45節。

¹¹⁹ 詩篇102:10。

¹²⁰ 「もし誰かが馬に乗ったまま、施しを受けるためにあなたに手を差し伸べたなら、それを拒んではならない。その瞬間、その人は間違いなく、乞食の一人と同じように貧しいのだから」 参照：アッバ・イサアク・シリア人。『著作集』。セルギエフ・ボサド、1911年。第56説教。286ページ。

¹²¹ 千ドラクマ（口語）——訳者注

取りました。中には500ドラクマが入っており、次のような書き込みがありました。「あなたの親切に感謝します。あなたがくれたお金を返します。」もし痛みを伴って施しをすれば、施しを受ける者は愛、すなわちキリストに触れて心を動かされ、自ら施す者となり、集める者ではなくなるだろう。しかし、もし物乞いをする者が非常に冷酷な人間であり、集めたお金を貯め込むような人であれば、そのお金は彼に喜びをもたらすことはないだろう。神は、その人が集めたお金が、必要とされる場所へ届くように導かれる。一方、冷酷な物乞いに残されるのは、彼が「自ら気づかぬうちに」他者のために組織した、いわゆる「寄付の集め」から生じる疲労と消耗だけである。

—では、ゲロンダ、いくら寄付すればいいのでしょうか？

—後で良心が痛まない程度の額です。分別が必要です。100を施して、50しか施さなかったと後悔してはいけません。人が熱意や情熱に満ちた愛を持っている場合は、特に注意が必要です。そのような場合は、自分の愛と情熱を少し抑えるべきです。そうしなければ、後で「あの不幸な人に多く与えすぎてしまった。もっと少なくすべきだったのに、今や自分は手ぶらで座らなければならない」と後悔することになります。そうして、その人は少しずつ経験を積み、自分の中にある自己犠牲の精神に見合った形で施しをするようになるでしょう。

—ゲロンダ、もし物乞いの要求が度を越している場合、それに応じるべきでしょうか？

—ここには分別、そしてさらに分別が求められる。誰かが、他人の前で手に入れたものを自慢するために何かをあなたに求めてきたら、それを与えてあげなさい。ほら、キリストはユダに対して、「お前は一体どんな使徒だ？ 金銭への執着を改めなさい！」とは言わなかった——むしろ、彼に献金箱を任せたのだ。しかし、もし誰かが、例えばジャムの瓶をあなたに求めてきて、あなたにもそれがあるものの、その求めている人自身には樽いっぱいのジャムがあり、一方で全くジャムを持っていない人もいと分かっているなら、すでに持っているのにさらに求めているその人にこう言いなさい。「兄弟よ、もし望むなら、あなたが持っているものの中から少しを、あの人に分け与えてあげなさい。」と伝えなさい。しかし、そのような困っている人がいないのであれば、頼んできたのだから、頼んできた人に与え、何も言わないでください。もしその人に感受性のある心があれば、この施しによって心を動かされ、改心するかもしれません。

つまり、このような場合、聖使徒パウロが記していることが起こるのだ。「もし敵があなたに悪を行っても、あなたが彼に善を行えば、あなたは彼の頭に燃える炭を集めていることになる。」これは、あなたが敵を焼き尽くすという意味ではなく、あなたが彼に善を行うとき、彼の中に愛が動き出すという意味である。愛とはキリストそのものであり、人の中で神の恵みが働き始めるのです。そして、その人は良心に責められて変わっていきます。つまり、自らの良心によって戒められるのです。しかし、誰かが良心に責められて正しい道に戻るために善を行うのは正しくありません。なぜなら、そうすることでその善も力を失ってしまうからです。愛をもって善を行いなさい。あなたが敵に善をもって「報いる」とき、その人は良い意味で変わり、改心するのです。

コニツァには、家族を持つある酒飲みがいた。私は彼にいくらかのお金を渡していた。私がこの不幸な男を助けていることを知った人々（彼自身がそう話していた）が、私にこう言った。「彼にお金を渡すのはやめなさい、彼は酒を飲むから。」彼自身も私に「子供たちのためにくれ」と言

ってきたので、私は施しをする際、「子供たちのためにこれを受け取ってくれ」と言っていた。彼が酒を飲むことは知っていたが、私の言葉が彼を少しでも助けることも分かっていた。彼は酒を飲み続けるだろうが、子供たちのことも少しは考えるようになるだろう。もし私が彼にお金を渡さなければ、彼は妻を苦しめただろう。なぜなら、妻が稼いだお金（かわいそうな彼女は、他人の家で腰を曲げて働いていたのだ）を奪い取り、それを酒代に使い果たし、子供たちはさらに苦しむことになっただろうから。しかし、私が彼に「子供たちのためにこれを受け取って」と言うと、彼は自分の子供たちのことを少しは思い出すのです。わかりますか？ 私は彼を気の毒に思っていました。彼はそれを感じ取り、心の中で何かが動き始めたのです。多くの人がこのようにして改心しました。また、後に良心の呵責に苛まれて、お金を返してきた人もいました。

私たちは自分の論理によって、キリストが働くことを妨げています。もしあなたが伝道者（もちろん、プロテスタントではなく）になりたいのなら、今から真の福音を学びなさい。

第3部。 霊的な勇気について

「最高の喜びは犠牲から生まれる。犠牲を捧げることで初めて、人はキリストとの絆を保つことができる。なぜなら、キリストこそが犠牲そのものだからである」

第1章。 時代のしるしについて¹²²

反キリスト

—ゲロンダ、反キリストについて何かお話しください。

— それでは、今はキリストについて話しましょう……できるだけキリストに近づきましょう。もし私たちがキリストと共にいるのなら、なぜ反キリストを恐れる必要があるのでしょうか？ あるいは、今は反キリストの霊など存在しないのでしょうか？ いずれにせよ、悪を働かせるのは反キリストの霊です。そして、もし反キリストという怪物が現れて、様々な狂気じみた行いを働いたとしても、結局のところ、彼は（いずれにせよ）笑いものになるでしょう。しかし、多くの出来事が起こるでしょう。おそらく、あなた方も『ヨハネの黙示録』に記されていることの多くを、身をもっ

¹²² 本章に収録された内容は、1981年から1994年にかけて、長老によって語られた、あるいは記されたものである。

て経験することになるでしょう。少しずつ、多くのことが表面化してきています。そして、私という哀れな者は、何年も前から叫び続けてきました！状況は恐ろしく、狂気そのものです！狂気はあらゆる限界を超えています。背教が訪れ、¹²³、今や「滅びの子」が現れるのを待つばかりだ。¹²⁴ [世界]は狂人の巣窟と化すだろう。完全な混乱が支配し、その中で各 国家は、思いのままに振る舞い始めるだろう。神よ、大政を司る者たちの利害が、私たちにとって有利なものとなりますように。次から次へと新しい話を耳にすることになるでしょう。最も信じがたい、最も狂気じみた出来事が起こるのを目撃することになるでしょう。[幸いなことに、] これらの出来事は非常に速いペースで次々と起こっていくでしょう。

エキュメニズム、共通市場、一つの巨大国家、彼らの都合に合わせて仕立てられた一つの宗教——これらが、これらの悪魔たちの計画である。シオニストたちはすでに、ある人物をメシアとして準備している。彼らにとってメシアは王、つまりこの地上を支配する存在となる。エホバの証人たちもまた、地上の王を待ち望んでいる。シオニストたちは自分たちの王を提示し、エホバの証人たちはそれを受け入れるだろう。彼らは皆、その人物を王として認め、「そうだ、この人だ」と言うだろう。大混乱が起こる。この混乱の中で、誰もが自分たちを救ってくれる王を望むようになる。そしてその時、彼らはある人物を推し立て、その人物はこう言うだろう。「私はイマームであり、第五の仏であり、キリスト教徒が待ち望むキリストであり、エホバの証人が待ち望む者であり、ユダヤ人のメシアである。」彼には五つの「私」があるのだ。

福音書記者ヨハネは、第一ヨハネの手紙の中でこう述べている。「子らよ……反キリストが来る。今や、多くの反キリストが現れている……」¹²⁵ 彼が意味しているのは、待ち望まれる反キリストがマクシミアヌスやディオクレティアヌスのような迫害者たちに似ているということではなく、待ち望まれる反キリストは、そう表現しても差し支えないならば、悪魔の化身となるということである。¹²⁶ 彼はイスラエルの民の前にメシアとして現れ、世界を惑わすだろう。厳しい時代が訪れ、私たちには大きな試練が待ち受けている。クリスチャンたちは大いなる迫害に直面することになる。一方、人々は、私たちがすでに「終わりの」時のしるしを経験しており、反キリストの印が現実のものになりつつあることさえ理解していないのは明らかだ。まるで何も起きていないかのようです。それゆえ、聖書は、選ばれた者たちでさえ惑わされると語っています。¹²⁷ 善意を持たない者は

¹²³ Αποστασία（ギリシャ語）——背教、離反。——訳者注

¹²⁴ 参照：テサロニケの信徒への手紙第二 2章3節。

¹²⁵ 1ヨハネ2章18節。

¹²⁶ 「反キリストは、そう表現しても差し支えないならば、悪魔の化身である」と述べた際、長老は、反キリストがすべての悪魔的なエネルギーを宿した人間であり、サタンの計画を具現化するための従順な道具となることを意味しています。反キリストが人間であるということについては、聖なる教父たちも一致して証言しています。前述および後述の通り、長老パイシイは、反キリストが人間であることを明確に述べている。したがって、この問題に関する彼の見解は、教父たちの教えと完全に一致している。——訳者注

¹²⁷ マタイ24:24、マルコ13:22を参照。

、神からの啓示を受けられず、背教の時代に惑わされるでしょう。なぜなら、神の恵みを持たない者は、悪魔と同様に、霊的な明晰さを持ち合わせていないからです。

— ゲロンダ、シオニストたちは、反キリストやそれに関連する事柄を信じているのでしょうか？

— 彼らは世界を支配したいと望んでいる。その目的を達成するために、彼らは魔術やサタニズムを利用している。彼らはサタンへの崇拝を、自分たちの計画を実現させる助けとなる力として捉えている。つまり、彼らはサタンの力を借りて世界を支配しようとしているのです。彼らは神を全く考慮に入れていません。しかし、そのことで神は彼らを祝福されるのでしょうか？ これらすべての中から、神は多くの善を現わされるでしょう。かつてのサタンの理論は70年間支配してきましたが、現在のものは7年も持ちこたえることはないでしょう。

— ゲロンダ、反キリストの話聞いて、私は恐怖を感じています。

— 何を恐れているのですか？ まさか、彼が悪魔よりも恐ろしい存在になるというのですか？ 彼は人間です。ほら、聖マリーナは悪魔を打ちのめしましたし、聖ユスティナはどれほど多くの悪霊を退治したことでしょう！ しかし、最も重要なことを忘れてはなりません。私たちがこの世に生まれたのは、ただ快適に暮らすためではないのです。

ユダヤ人の地上の王

預言の成就が近づいているというしるしは、エルサレムにあるオマールのモスクの破壊である。そのモスクは、かつてその場所にあったと言われるソロモンの神殿を再建するために破壊されるだろう。再建された神殿で、シオニストたちは最終的に反キリストをメシアとして宣言するだろう。ユダヤ人たちはすでにソロモンの神殿の建設に向けて準備を進めていると聞いたことがあります。

— ゲロンダ、なぜユダヤ人たちは旧約聖書を読んでいるのに、キリストを信じないのでしょうか？

— なぜ、あなた自身が彼らに直接尋ねに行かないのですか？ ユダヤ人は古来より偏狭な信仰心を持っています。理解はしているのですが、利己心に目がくらんでいるのです。もし彼らがもう少し注意深ければ、ユダヤ人として残っている者は一人もいなかったでしょう。

— では、彼らは読んだものをどのように解釈していたのですか？

— 彼らがどう解釈していたか、そして今もどう解釈しているか！ 彼らは霊的な意味を物質的なものにすり替えているのだ。例えば、預言者イザヤの「ヨルダンの荒野は栄える」という言葉が、彼らによってどのように解釈されたか見てみる。¹²⁸ 砂漠が「栄えた」ことを示すために、彼らは川の流れを変え、段々畑や果樹園を作り、バナナやレモン、オレンジを植え、至る所を緑化しました。その結果、今では「砂漠が栄えた」と言われているのです。そして、彼らはあらゆることをこ

¹²⁸ イザヤ書35章2節を参照。

のように解釈しているのです。一方、この預言者の言葉は、聖なる洗礼——「再生の浴場」——を通じた世界の再生を指している。

— 彼らは今、地上の王を待っているのですか？

— ええ、反キリストです。ラビたちは、メシアが来られ、十字架にかけられたことを知っています。ある人から聞いた話ですが、ユダヤ人が死の床に横たわると、ラビが彼の元へ行き、耳元で「メシアは来られた」と囁くそうです。ご覧の通り、彼らの良心が彼らを責め、彼らは自分の罪を感じているものの、悔い改めようとはしないのです。

— 死にかけている人にその言葉を告げることには、どんな意味があるのですか？

— 何の役にも立ちません。彼らは単に良心に苛まれているからそう言うだけです。その言葉を言えば、すべてがうまくいくと思っているのです。

— 他の者たちはその言葉を聞いていないのか？

— いいえ、それは耳元で囁かれるのです。そして、ユダヤ人の若者たちはラビたちに反旗を翻しました。「メシアは、」と彼らは言います、「すでに到来したのです。一体、あなたがたはどのメシアを探しているのですか？」アメリカでは、歴史的観点から聖書を研究しているある若者グループが雑誌を発行しており、そこにはこう書かれています。「メシアは到来しました。メシアが来られたことを信じない人には、その人が信じるようになるよう、この雑誌を無料で送ります。もし信じるようになったら、雑誌を購読して、私たちが他の人にも送って、彼らも信者になれるようにしてください。」

— 彼らはユダヤ人ですか？

— はい、ユダヤ人です。

— それでキリスト教徒になったのですか？

— えーと、とりあえず彼らが信者になったという事実だけでも、すでに意味があることです。

— ラビが秘密のクリスチャンである可能性はあるのか？

— ラビが秘密のキリスト教徒？ キリスト教徒になった人が、まだラビであり続けられるだろうか？ それなら、彼はユダヤ人たちに「メシアはまだ来ていない」と教えながら、彼らが死ぬ時には「メシアは来た」と言い始めることになるのか？

666の刻印

— ゲロンダ、これらの出来事はいつ頃起こるのでしょうか？

— それらはあなたと私のために遅らされているのです——私たちが健全な霊的状态を身につけるためです。神は私たちを忍耐してくださっています。なぜなら、もしこれらすべてが今起こったとしたら、あなたも私も終わりだからです。キリストの教えには具体的な時期について言及された箇所はどこにもありません。¹²⁹ しかし、聖書は、これらの出来事の到来が「時代のしるし」によ

¹²⁹ マタイ24:36、マルコ13:32、使徒言行録1:7、テサロニケの信徒への手紙一5:1を参照。

て予告されると述べています。¹³⁰ 常に備えを怠らず、その時が近づいたら——その時にわかるでしょう。そうすれば、私たちはより確信を持てるようになります。聖アンドレイ・ケサリウスはこう言っています。「自制心のある者には、時と経験がそれを明らかにするでしょう。」¹³¹

ある本が私の手元に届いたのですが、その表紙には大きな「6」が3つ描かれていました。なんと厚かましいことでしょう！ 彼らは数字の「6」を美しく見せ、人々に慣れさせるためにそうしているのです。そうして、じわじわと「印」もやってくるのです。

— ゲロンダ、服のボタンや留め具も、666という数字が書かれたような段ボール箱で売られているんですよ。

— ああ、悪魔め！ クレジットカードにはとくに3つの「6」が刻まれているのに、今度はボタンにまで！ 多くの企業が、自社製品を選んでもらうために「666」を商標として使っている。互いに支え合っているのだ。つまり「666」は「まるで合言葉のように」、「666」を受け入れるのだ。「自分の尾を食う蛇」のエンブレムが広まれば、それはユダヤ人が全世界を支配したことを意味すると書かれています。現在、この印は一部の紙幣に刻印されています。数字の666は、すでに中国やインドでも広まっています。

— ゲロンダ、彼らはなぜこの数字を知っていて、物に刻印しているのですか？

— 福音書記者ヨハネは、悪魔が何をするかを知っていた。それは、預言者たちが、キリストが「三十枚の銀貨」で売られること、¹³² 酢を飲まされること、¹³³、その衣が分けられることなどをあらかじめ告げていたのと同様である。¹³⁴ 二千年前、『黙示録』には、人々が「666」という数字で刻印されると記されていた。「知恵のある者は、獣の数を数えよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。」¹³⁵ 「666」はユダヤ人にとって経済の象徴である。聖書が述べているように、ユダヤ人は様々な戦争で征服した諸民族に特定の税を課した。年間の税額は666タラントの金に相当した。¹³⁶ 今、全世界を征服するために、彼らは再び、自らの輝かしい過去と結びついたこの古い税の数字を導入している。だからこそ、彼らはこの数字を他の数字に置き換えようとはしないの

¹³⁰ マタイ24:29以下、マルコ13:24以下、ルカ21:25以下を参照。

¹³¹ 「印の数字および（反キリストについて）書かれたその他すべての事柄を綿密に研究すれば、徹醒し、健全な判断力を持つ者たちにとって、試練の時が明らかになるであろう」参照：聖アンドレイ、ケサリアの大司教。『黙示録』。サンクトペテルブルク、1909年、120頁。

¹³² 参照：ゼカリヤ書11章1～13節

¹³³ 参照：詩編68篇22節。

¹³⁴ 詩編21:19を参照。

¹³⁵ 黙示録13章18節。

¹³⁶ 『列王記下』10章14節および『歴代誌下』9章13節を参照。

だ。つまり、「666」はマモンの象徴である。¹³⁷ これは金の単位から取られたものである。聖ヨハネ・テオロゴスが語っていることについては彼らは知らなかったが、マモンはマモンのままである。「神に仕え、マモンに仕えることはできない。」¹³⁸

すべては順調に進んでいる。アメリカでは犬にチップが埋め込まれている。送信機を通じて電波を発し、それによって各犬の居場所が特定され、把握されている。タグのない野良犬は、レーザー光線で殺される。そしてやがて、人間も殺し始めるだろう。何トンもの魚に印が付けられ、衛星からそれがどの海にいるかを監視している。そして今、新たな病気が現れ、それに対するワクチンはすでに開発されている。その接種は義務化され、人がワクチンを打つ際、同時に印も押されることになる。アメリカではすでに、どれほど多くの人々がレーザー光線で刻印されていることか。額に刻印される者もいれば、手に刻印される者もいる。そしてやがて、数字の「666」の刻印を受けていない者は、物を売ること、買うこと、借金をすること、就職することさえできなくなるだろう。私の直感では、反キリストはこのシステムを通じて全世界を支配下に置こうとしているのだ。人々——赤人であろうと、黒人であろうと、白人であろうと——このシステムの外にいる限り、働くことができず、社会から疎外されることになる。このようにして、世界経済を支配するシステムを通じて[反キリスト]が押し付けられ、666という数字が刻まれた印を受け入れた者だけが、取引を行うことができるようになるのだ。

しかし、その「印」を受けた人々は、いったいどのような被害を受けることになるのだろうか！ ある専門家が、レーザー光線は人体に非常に有害だと私に話していました。印を受けた人々は、太陽光線を体内に「吸収」し、その害によって痛みのあまり舌を噛みちぎってしまうほどになるでしょう。¹³⁹ 印を受けない人々の方が他の人々より恵まれているでしょう。なぜなら、彼らにはキリストが助けてくださるからです。これは決して些細なことではありません……

—キリストはいつ彼らを助けてくださるのですか、ゲロンダ？ その後ですか？

—いいえ、まさにその時です。

—ゲロンダ、でも、彼らは売りも買いもできなくなるのに、どうして他の人たちより恵まれるのでしょうか？

—いずれわかるでしょう。神はご存知です。私も知っています。そういうことなのです……この疑問に私は深く心を奪われていましたが、神が私に……電報を送ってくださったのです。神はなんと私たちを気遣ってくださるのでしょうか！ ああ……！

—教えてください、ゲロンダ、なぜ「印」は「刻印」とも呼ばれるのですか？¹⁴⁰

¹³⁷ マモナ——富、利益、世俗的な恵み。——訳者注

¹³⁸ マタイによる福音書 6章24節。

¹³⁹ 黙示録16章10節を参照。

¹⁴⁰ 刻印 — χάραγμα（ギリシャ語）は、動詞 χάρασσω（刻む、彫る）に由来する。——訳者注

— それは、それが表面的なものではなくなるからです。「刻む」とはどういう意味でしょうか？ 深くまっすぐな線を引くことではありませんか？ その印は「刻印」となり、最初はすべての商品に押されるようになり、やがて人々は額や手にそれを押されるよう強制されることになるでしょう。2年前、私はトロントのある医師にこの印について話しましたが、最近、彼が新聞で、クレジットカードの代わりにすでに手の指紋が要求されていると読んだと教えてくれました。彼らは前進していますが、何が起るかは断言できません。最近ギリシャに持ち込まれた一部のテレビには、テレビを見ている人を監視する特別な装置が搭載されている。まもなく、テレビを持っている人はテレビを見る一方で、他の人たちはその瞬間、彼ら自身を監視することになるだろう！ 人々は、他者を監視する一方で、自らも監視されることになるでしょう。彼らの生活全般、発言や行動のすべてが、コンピューターによって管理されるようになるのです。悪魔がどのような独裁体制を企んでいるか、お分かりでしょうか？ ブリュッセルでは、[中央]コンピューターの上に、3つの6が並んだ巨大な宮殿が建てられています。このコンピューターは、数十億もの人々を管理することができるのです。60億人——それはほぼ全世界に相当する。ボタンを押すだけで懺悔が済むのだ！ 一部のヨーロッパ人は、世界的な独裁体制を恐れて抗議の声を上げている。そして私たち正教徒は、反キリストを望まないから、そしてもちろん独裁体制も望まないからこそ、これに反対しているのだ。私たちに[重大な]出来事が待ち受けているが、それらは長くは続かないだろう。共産主義下で正教が消滅したとされたように、今また正教は「消滅」するだろう。

新しい身分証明書

— ゲロンダ、ある人がこう言いました。「では、5,000ドラクマの紙幣はどうなるのですか？ そこには3つの『6』が描かれています、私たちはそれを使っていますよね？ 身分証明書でも同じことになるでしょう」……

— 5,000ドラクマは紙幣です。イギリスのポンド紙幣にもヴィクトリア女王が描かれています、私はそれを気にしていません。「カエサルのはカエサルに。」しかし、身分証明書の話となると話は別です。それはお金ではなく、個人的なものです。「タウトティタ (tautotita)」という言葉には、¹⁴¹ という文字通りの意味があります。つまり、人は自分が宣言するものと同一視されるのです。彼らは悪魔をすり込もうとしているのに、私がそれを受け入れると署名するのですか？ どうしてそんなことに同意できるのでしょうか？

— ゲロンダ、新しい身分証明書と印にはどのような関係があるのですか？

— 新しい身分証明書は印ではありません。それは印の導入なのです。

¹⁴¹ ギリシャには、市民の身元を証明する2種類の書類がある。国内で使用する身分証明書と、海外渡航用のパスポートである。ギリシャ語での身分証明書の名称は：ταυτότητα。Ταυτότητα — 「1) 同一性（数学）、同一、同一性、一致 2) パスポート、身分証明書 3) 人格」（I. P. ホリコフ、M. G. マレフ『現代ギリシャ語-ロシア語辞典』モスクワ、1980年、743頁）。シェンゲン協定で計画された、獣の数字を基にしたバーコードを記載した新しい身分証明書の導入は、エラダ教会、聖山アトス、そしてギリシャ国民の圧倒的多数から激しい抗議を引き起こした。——訳者注。

—ゲロンダ、人々は、新しい身分証明書の強制について、どうすべきか尋ねています。

—もし質問されたら、自分の霊的指導者に相談し、教会がどのように対応するかを見極めるまで忍耐強く待つよう勧めてください。¹⁴² というのも、多くの人が質問をしますが、その答えを理解できる人はほとんどいないからです。パンフレット『時代のしるし』¹⁴³ では、これらすべてについて極めて明確に述べています。各人はそれぞれの良心に従って行動すればよい。もちろん、「ああ、これは一人の修道士の意見に過ぎない。教会の立場ではない」と言う人々もいる。しかし、私が表明した意見は私個人のものではなかった。私はただ、キリストの言葉、福音書の言葉を述べたに過ぎない。なぜなら、私たち自身の意見は、福音書に表されている神の御心に服従させなければならないからである。また、私の言葉とは正反対のことを言い、[私の意見を盾にして]、これはパイシイ神父が言ったことだと主張する者たちもいる。そして、それを聞く第三の者たちは、これらの問題が極めて深刻であることを考慮に入れず、私が実際にそのようなことを言ったのかどうかを尋ねることさえせず、ただそれを鵜呑みにしてしまう。私は恐れることなく、遠慮なく言います。ある人々が私のカリヴァ（小部屋）を訪れ、箱に6ルーブル硬貨を投げ入れます。それならまだしも、どうでもいいことです。しかしある日、門の向こう側に一枚の紙が投げ込まれていました。誰かが訪ねてきて、私が家にいないのを見て、他の人たちのために「彼はいない」と書き残したのだと思いました。ところが、それを読んでみると、こんなことが書いてあったのです！... 世間の人が聞くのも憚られるような、ひどく下品な罵り言葉だ！この汚物すべてに対する一掃の 때가、必ずやってくる。だが、我々は嵐を乗り越えていく。人々はすでに闘いの旗を掲げている。我々も、多くの祈りを捧げながら立ち上がらなければならない。

身分証明書の問題を心配している人々がいる一方で、それを悪用して困難を作り出している者たちもいる。教会は正しい立場をとり、信者たちに語り、説明し、新しい身分証明書を受け入れることが墮落につながることを理解させなければならない。同時に、教会は国家に対し、少なくとも新しい身分証明書が義務化されないよう働きかけるべきだ。もし教会が真剣な姿勢を示し、信徒の自由が尊重され、希望する者は新しい身分証明書を受け取り、望まない者は古いものを保持できるならば、「三つの六」を受け入れないのは、確固たる信念を持つごく少数の人々だけとなるでしょう。彼らには試練が待ち受けている。なぜなら、他の人々は彼らに敵対するからだ。大多数の人々は「獣の数字」が記された身分証明書を受け入れるだろう。平穏と安楽を求める人々は新しい身分証明書を受け入れ、一方、不運な敬虔な人々は古い身分証明書を使い続けることになるため、彼らは苦しめられることになる。

現在、大臣が「666は身分証明書に明示的にも暗示的にも記載されない」と約束していることも、何かを意味している。忍耐強く待とう。時が答えを示すだろう。「三つの6」は記載されないと

¹⁴² 長老パイシオスの死去後に採択されたギリシャ正教会の聖シノドの決定は、反キリストの数字が記載された文書が正教徒にとって容認できないものであることを明言している。この問題の議論において、故長老の意見は、ギリシャ正教会の聖職者、司祭、信徒にとって決定的な要素の一つとなった。——訳者注

¹⁴³ 1987年、至福の長老パイシオスは、このテーマに捧げられた小冊子『時代のしるし——666』を刊行した。——訳者注

いう彼らの言葉は、すでに一つの進展だ。彼ら自身が拒否し始めているのだ。最終的に身分証明書に何が記載されるか、様子を見よう。そして、新しい身分証明書が配布されるようになるまでの間に、神の怒りが爆発するかもしれない。それに、誰もが24時間以内に新しい身分証明書を受け取れるわけではないのだ。最初の身分証が出回り、それが精査され、もし大臣が嘘つきだと判明すれば、その闘いは正当なものとなるだろう。しかし、もし我々が今、抗議を続ければ、このすべてを仕切っている連中はこう言うだろう。「ほら、見てごらん、正教徒たちが騒動を起こしている。問題すら提起されていないのに、彼らは大声で叫び、抗議している」と言うでしょう。良い番犬は、泥棒が来ると吠えます。泥棒が逃げれば、吠えるのをやめます。もし犬が絶え間なく吠え続けるなら、それを良い番犬とは呼べません。

— それから、ゲロンダ、宗教的寛容がある以上、新しい身分証明書には宗教が記載されないとされているのですが。¹⁴⁴

— ええ、彼らには関係のないことかもしれませんが、私にとっては重要なことです。なぜなら、それは私の身分証明書だからです。そこには、私がどこから来たのか、どんな人間なのかが記されています。もし宗教が記載されていなければ、問題が生じます。例えば、誰かが婚姻届を提出しに来た場合です。その人の身分証明書に「正教徒」と書かれていれば、どの宗派かは関係なく、何の問題もありません。しかし、宗教が記載されていなければ、どうやって結婚の許可が下りるのでしょうか？ 教会側も混乱するでしょう。しかし、宗教の記載を希望制にすれば、それは信仰の告白のようなものになってしまいます。ヨーロッパはヨーロッパです。我々の状況は異なる。

狡猾な印の押印手法

身分証やIDカードの導入、つまり個人ファイルの作成を経て、彼らは徐々に、狡猾な方法で「刻印」を押し始めるだろう。様々な策略を用いて、人々に額や手に印を受け入れるよう強制するようになる。彼らは人々に不便を強いて、「クレジットカードのみを使用しなさい。現金は廃止される」と言うだろう。何かを購入する際、人は店での販売員にカードを渡し、店主はその人の銀行口座からお金を受け取るようになる。カードを持たない人は、売りも買いもできなくなる。一方で、彼らは「完璧なシステム」として、目には見えない形で額や手に刻まれた数字「666」を宣伝し始めるだろう。同時に、テレビでは、誰かが他人のカードを盗んで銀行から現金を引き出した様子が放映されるようになる。彼らは絶え間なくこう言い続けるだろう。「額や手にレーザー光線で刻印する方がより確実だ。なぜなら、その番号を知っているのは所有者だけだからだ。刻印は完璧なシステムだ。泥棒はあなたの頭も手も盗むことはできず、番号を覗き見ることもできない。」だからこそ、今、犯罪者や悪党たちに自由に活動する機会を与えているのだ。アフォン山では、カリエスの周辺で 15の修道室が強盗に遭い、その際、一人の修道士が強盗の最中に殺害された。このようにして、誰もが他人のものを横取りし、欲しいものを何でも盗むことができるようになるのだ。例えば

¹⁴⁴ ギリシャでは、身分証明書の「宗教」欄が、つい最近まで必須項目となっていた。——訳者注

、誰かが詐欺を使って農地を手に入れようとしたとしよう。その人は、その土地が自分の祖父のも
のだったとか、あるいは自分自身がかつて牧草地としてその土地を借りていたなどと主張するだろ
う。これを見極めることなどできるだろうか！そして、当局の代表者はこう言うだろう。「残念な
がら、彼らを監視することはできません。監視はコンピューターを通じてのみ行われます。」そし
て、彼らは登録作業に着手する。コンピューターには、あなたが登録されているかどうかが表示さ
れ、それに応じてサービスを受けられるかどうかが決まる。

この3年半は過酷なものになるだろう。¹⁴⁵ このシステムに同意しない者たちは、厳しい目に遭
うことになる。彼らは、常に何か新しい口実を見つけては、その人々を刑務所に送り込もうとする
だろう。1年が過ぎると、彼らは別の都市へ尋問のために連行され、別の裁判所で事件が審理され
ることになる。その都市からまた別の都市へと移送されるだろう。そして最後にこう言われるのだ
。「申し訳ないが、君は無罪だ。もし君が登録されていれば、1分で身元を確認できたはずだ。しか
し今回は、確認を行うことができなかった。」

—ゲロンダ、彼らが力づくでスタンプを押すことはできないのでしょうか？

—彼らは礼儀正しさゆえに、そこまですることはないでしょう。彼らは、ヨーロッパ人らしく
礼儀正しく振る舞うはずで。彼らは最高の気高さを示してくれるでしょう！彼らは人々を苦しめ
たりはしないでしょうが、印がなければ人は生きていけません。「印がないせいで苦しんでいるの
ですよ」と彼らは言うでしょう。「もしそれを受け入れていれば、苦勞することはなかったでしょ
うに」と。たとえ金貨やドルを持っていたとしても、それを使うことはできません。ですから、今
から質素で節度ある生活に慣れれば、その時代を乗り切ることができるでしょう。少しばかりの土
地を持ち、小麦やジャガイモを少し栽培し、数本の油用樹木を植え、さらにヤギや数羽の鶏といっ
た家畜を飼えば、[キリスト教徒]は家族を養うことができるだろう。なぜなら、備蓄品もあまり役
に立たないからだ。食品は長く持たず、すぐに腐ってしまう。しかし、もちろん、こうした苦難は
長くは続かないでしょう。3年か3年半ほどです。¹⁴⁶ 選ばれた者たちのために日々は短縮され、¹⁴⁷ 彼
らは、これらの年がどのように過ぎていくのかさえ気づかないでしょう。神は人間を助けなしには
置き去りにしません。

—ゲロンダ、キリストは、この困難な年々に起こる出来事に介入してくださるのでしょうか？

—はい。ほら、見てください。善意を持ちながらも不当な扱いを受けている人のところには、
その人を救うために、聖人たちや至聖なる聖母マリア、キリストがしばしば現れるのです。不幸な
人々がこれほど困難な状況にある今、主はどれほど大きな助けを与えてくださるのでしょうか。まも
なく一つの嵐が吹き荒れ、反キリストであるサタンの短期間の独裁が始まります。そしてその後、

¹⁴⁵ ダニエル書9章26-27節、黙示録12章6節、13章5節を参照。また、聖イレネウス・リオンスキイ『著作集』（モスクワ：
パロムニク、ブラゴヴェスト、1996年）も参照。『異端反駁五書』第5巻、第25章、500・501頁および第30章、512頁。

¹⁴⁶ 同上。

¹⁴⁷ マタイによる福音書24章22節、マルコによる福音書13章20節を参照。

キリストが介入し、この反キリストの体制全体を徹底的に打ちのめし、悪はキリストによって踏み
にじられ、最終的には善へと変えられるでしょう。

封印は背教に等しい

聖ヨハネ・テオロギス（神学者）が『黙示録』の中で「刻印」について極めて明確に記してい
るにもかかわらず、¹⁴⁸、それを理解できない者もいる。そんな彼らに、一体何と言えよいのだろ
うか。残念ながら、現代のグノーシス主義者たちの頭からは、とんでもない愚かな言葉が山ほど聞
かれる。「私は『3つの6』が書かれた証書を受け取り、その上に十字架を描くつもりだ」と、ある
者は言う。別の者はそれに同調して、「私は額に刻印を受け、その額に十字を切るつもりだ」と言
う。そして、彼らはこのような愚かなことを山ほど繰り返している。彼らは、そのようにして聖化
され则认为しているが、そのような考えは惑わしに他ならない。ある司教が私にこう言った。「私
は身分証明書の署名欄に十字架を描くつもりだ。キリストを否定するわけではない。私は単に、私
を支えてくれるシステムの利用者であるだけだ。」——「まあいいでしょう」と私は彼に言った。「
あなたは主教ですから、その特別な立場ゆえに、名前の前に十字架を付けるのですね。もう一人は
大修道院長で、彼もまた特別な立場にあり、やはり名前の前に十字架を付けます。では、一般の人
々にはどうするよう命じるのですか？」汚れは聖化されません。清らかな水は恵みを受け入れ、聖
水となる。しかし、尿は聖水にはなり得ない。石は奇跡的にパンへと変わる。しかし、不浄なもの
は 聖化を受け入れない。したがって、悪魔、すなわち反キリストが、私たちの身分証明書や額、あ
るいは手にその象徴として存在している場合、たとえそこに十字架を刻んだとしても、聖化される
ことはない。「尊き十字架」——この聖なる象徴の力、すなわちキリストの神聖な恵みを、私たち
が得ることができるのは、聖なる洗礼の恵みを保っているときだけである。その洗礼において、私
たちはサタンを拒絶し、キリストと結ばれ、聖なる印——「聖霊の賜物の印」——を受けるのであ
る。ところが、彼らは、ご覧の通り、すべてを[そんな単純な]論理で説明してしまうのです！...十
字架の印を横に描けば、それで万事解決だ！ しかし、私たちは、聖使徒ペトロが外見上はキリスト
を否認したものの、それもまた否認であったことを知っています。¹⁴⁹ 彼らは、反キリストの印を受
け入れることで、聖なる洗礼において与えられたキリストの印を否認しているのに、さらに自分た
ちの中にキリストが宿っているなどと言っているのです！

——もし、ゲロンダ、誰かが無知のゆえにその印を受け入れてしまったらどうでしょうか？

——むしろ、「無関心」と言ったほうがよいでしょう。すべてが極めて明白であるのに、無知な
どあり得るのでしょうか？たとえ人が知らなかったとしても、自ら問い合わせて確かめるべきです。
仮に私たちが知らず、それゆえに印を受け入れてしまったとしましょう。しかし、そのときキリス
トは私たちにこう言われるでしょう。「偽善者たちよ、天のことは論じられるのに、時代のしるし

¹⁴⁸ 『黙示録』13章16節以降、14章9節以降、16章2節、20章4節を参照。

¹⁴⁹ マタイ26:69-75、マルコ14:4-72、ルカ22:54-62、ヨハネ18:16-18、25-27を参照。

は理解できないのか (уцкycúmu) 」。¹⁵⁰ たとえ無知によるものであっても、印を受け入れた人は神の恵みを失い、悪魔の影響を受けることになるのです。ほら、洗礼の際に司祭が子供を聖なる洗礼槽に浸すとき、その子はそれを理解することなく聖霊を受け入れ、その後、その子の中に神の恵みが宿るのです。

預言の解釈

— ゲロンダ、ある人々はこう言います。「神によって定められたことは、いずれ起こるものだ。私たちには関係のないことだ！」これについてどうお考えですか？

— そうだな、わが子よ、彼らはそう言うが、実際にはそうではないのだ！私もまた、ある人々からこう言われるのを耳にすることがある。「ユダヤ人たちは、黙示録で福音書記者ヨハネが書いているように、三つの六で自分たちを暴露するような愚か者ではない。もしそうなら、彼らはもっと賢く、秘密裏に事を進めていたはずだ。」さて、では、律法学者やパリサイ人たちは旧約聖書を知らなかったというのか？ アンナやカイアフアは、キリストが「三十枚の銀貨」で裏切られると書かれていることを、誰よりもよく知らなかったというのか？¹⁵¹ なぜ彼らは「ユダに」三十一や二十九の銀貨ではなく、三十枚を与えたのか？ しかし、彼らは目がくらまされていたのだ。神は、すべてがまさにそのように起こることを知っておられた。神は予知されるが、運命を定めてはいない。運命やキシュメットを信じるのはトルコ人だけだ。¹⁵² 神は出来事がこのように起こることを知っておられ、人間は自らの愚かさゆえに、神があらかじめ知っておられたことを行ってしまう。それは、神が何かを命じたからではない。いや、神は人々の悪意がどこまで及ぶかを見通しており、彼らが自分の考えを変えないことを知っておられるのだ。これは、神が出来事をあらかじめ定めているという意味ではない。

また、他の人々は預言に没頭し、それに独自の解釈を加えています。少なくとも「これは私の考えです」と前置きすることなく、「これは事実だ！」と断言し、自らの意見を山ほど並べ立てます。自分の欲望を正当化するために、預言を好き勝手に解釈する者さえいます。例えば、聖キリルの「私たちの時代には、反キリストのしるしが現れないほうがよい」という言葉（¹⁵³）について、自分自身や自分の臆病さを正当化したい人はこう言うだろう。「ほら、見ろ？ 聖キリルは、自分がキリストを否認してしまうことを恐れていたのだ！ それなのに、私が聖キリルより優れているというのか？ したがって、たとえ私がキリストを否認したとしても、それには何ら恐ろしいことはな

¹⁵⁰ マタイによる福音書 16章3節。

¹⁵¹ ゼカリヤ書 11章1～13節を参照。

¹⁵² キシュメット、キスメット（アラビア語、文字通り「与えられたもの」）——各人に摂理によって定められたもの。
——訳者注

¹⁵³ 「ああ、たとえそう言われていたとしても、神よ、どうかこれが私たちの上に実現することのないように！」 参照：聖キリロス・エルサレムス。著作集。モスクワ、1855年。説教第15、第18。262頁。

い！」と。しかし実際には、聖人は「起こらないほうがよい」と述べているのは、自分の目で反キリストを見ることを避けるためであり、決して恐れていたからではない。悪魔が何をしているか、お分かりだろうか？

残念ながら、現代のグノーシス主義者たちの中にも、自分の霊的な子らを、彼らが動揺しないように、まるで赤ん坊のように包み込んでしまう者たちがいる。「それは重要ではない——彼らは言う——恐れることはない、ただあなたがた 心の中に信仰を持っていればよいのだ。」あるいはこう嘆く。「証明書や封印といった話題は、人々が動揺しないように、口にしないでください！」と。それよりも、もし彼らが人々に「もっと霊的に生き、キリストに近づき、何も恐れないように努めましょう。せいぜい殉教者になるだけですから」と語っていたなら、少なくとも来るべき困難に備えるよう、彼らを何らかの形で準備させていたはずだ。真理を知れば、人は深く考え込み、眠りから覚めるだろう。起きている事態に心を痛め、祈りを捧げ、罠に陥らないよう警戒するようになるはずだ。

では、今何が起きているのか？ そのような「解説者」たちが、自分なりの方法で預言を解説するだけでなく、世俗の人々と同様に、彼ら自身も臆病になっているのだ。彼らはむしろ、霊的な懸念を示し、クリスチャンたちが信仰を強め、神からの慰めを感じられるよう、彼らに健全な懸念を植え付けるべきだったはずだ。私は驚かされる。一体、今起きていることすべてが、彼らに考えさせるきっかけにならないのだろうか？ そして、なぜ彼らは自分の頭で考えた解釈をした後、せめて疑問符を付けることさえしないのだろうか？ もし彼らが、反キリストとその印を手助けし、他の魂たちをも滅びへと引きずり込んでしまったらどうなるのか？！ 福音書で「もし可能なら、選ばれた者たちまでも惑わそうとする」¹⁵⁴ と語られているように、主は、自分の理性を頼りに聖書を解釈する者たちが惑わされることを念頭に置かれているのです。

つまり、「完璧なクレジットカードシステム」やコンピュータのセキュリティの背後には、世界的な独裁体制、すなわち反キリストの支配が潜んでいるのである。「……彼らの右の手か、あるいは顔に印を刻ませ、その印、すなわち獣の名、あるいはその名の数字を持っている者以外は、誰も買いも売りもできないようにする。ここに知恵がある。知恵のある者は、獣の数を計算せよ。それは人の数であり、その数は六百六十六である。」^{155 156}

¹⁵⁴ マルコによる福音書 13章22節。

¹⁵⁵ 黙示録 13章16～18節。

¹⁵⁶ 1997年、ギリシャでニコポリスおよびプレヴェザのメレティオス大主教による著書『正教の伝承における反キリストの印』が刊行された。そして2001年、モスクワにおいて、聖殉教者エリザベータ大公妃の姉妹会により、そのロシア語訳が刊行された。

ギリシャ正教会の敬虔な聖職者、修道者、そして神を愛する信徒たちからは、この本は否定的に受け止められた。本書に対する書評では、著者の大主教が聖書や教父たちの著作を歪曲し、1997年4月7日および1998年2月9日付のギリシャ正教会聖シノドの回勅、聖アトス山の聖キノトの声明、ならびに祝福された長老パイシオスの見解に示された教会全体の評価に反する結論に至っていると指摘された。メレティオス大主教の著書に対する、最も完全かつ的確な神学的反

第2章。

犠牲が人に喜びをもたらすことについて

現代において、犠牲の精神は稀なものとなっている

「子供なんて、ただの手間ばかりよ」と、すべてを手にしていたある女性が私に言った。彼女にとって子供は重荷だったのだ！ もし母親がそのような考えを持つなら、彼女は母親として不適格である。なぜなら、愛を持つことは母親にとって自然なことだからだ。ある娘が結婚するまでは、母親は午前10時まで彼女を起こさないこともあるだろう。しかし、彼女自身が母親となり、自分の子供に食事を与え、体を洗い、世話をしなければならないようになれば、夜でさえ眠れなくなるだろう。なぜなら、その「エンジン」が動き出したからだ。犠牲の精神を持っていれば、人は愚痴をこぼしたり、負担に感じたりせず、喜びを感じる。すべてはここにある。犠牲の精神がなければならぬのだ。そして、もしこの女性が「ああ神様、どうすればあなたに感謝すればよいのでしょうか？ あなたは私に子供たちだけでなく、数多くの恵みも与えてくださいました。何も持たない人がどれほど多いことでしょうか。それなのに私には家もいくつかあり、父からの遺産もあり、夫の給料も高く、さらに二か所から家賃も入っています！ 私には何の苦勞もない。神様、どうすればあなたに感謝すればよいのでしょうか？ 私はこれらすべてに値する者ではありませんでした」と語っていたなら、賛美とともに 不幸福感も消え去ったでしょう。つまり、彼女がただ昼夜を問わず神に感謝してただけで、それだけで十分だったのです。

— 犠牲は、ゲロンダ、喜びをもたらします。

— ああ、それは一体どんな喜びなのでしょう！ この犠牲的な喜びの味わいは、現代の人々には知られておらず、だからこそ彼らはそれほど苦しんでいるのです。彼らには理想がなく、生きていること自体に重荷を感じています。勇気や自己犠牲こそが、人間にとっての原動力なのです。もしその力がなければ、人は苦しむことになります。昔、村々では、人々が夜、物音を立てず、誰にも見られないように気を配りながら、何らかの道を切り開いていました——それは、死後に他の人々が自分たちを偲んでくれるようにするためでした。今では、このような犠牲の精神はめったに見られなくなりました。かつてアトス山で、十字架行列の最中に、小道を歩く修道士たちが、マントの裾を茂みの枝に引っかけているのを目撃した。しかし、後ろを歩く人々の道を楽しむために、

論は、聖メテオロスの山の修道士たちによって、『Παραχάραξη του χαράγματος. Ἀναίρεση των θέσεων του Σεβασμιωτάτου Μητροπολίτου Νικοπόλεως καὶ Πρεβέζης κ. Μελετίου στο βιβλίο του „Τό χάραγμα του ἀντιχρίστου στην ορθόδοξη παράδοσή“.— 訳者注

その枝を折る者は一人もいなかった。皆、引っかからないように身を屈めていたのだ。まるで茂みに頭を下げているかのようだった！もしそれが「燃え尽きぬ藪」ならまだしも！しかし、誰もが「それは他の誰かにやらせればいい、自分はただ通り抜けられればいい」と考えていた。だが、その枝を最初に目にしたのは自分なのだから、なぜそれをやらないのか？それはまさに、神を信じない世俗の人々の振る舞いではないか。そんな人生など要らない。それなら、死んだ方が千倍ましだ。大切なのは、他の人、その人の苦しみを思いやるということだ。

この世はすでに自制心を失ってしまった。人々からは慈愛や犠牲の精神が失われてしまった。以前、聖山にあるカリヴァでヘルニアの発作に襲われた時の私の状態について、皆さんに話したことがある。誰かが門のそばでハンマーで叩くと、私は雪の中（そして寒さの中）に出て行って門を開けていた。その人が深刻な問題を抱えていると、たとえ直前に（文字通り）ベッドに押し付けられていたとしても、自分の痛みなど感じなくなっていました。私は来訪者に何かを振る舞いました。片手で振る舞い、もう片方の手でヘルニアを押さえていたのです。私たちが話している間、私は激しい痛みにもかかわらず、相手に私が痛がっていることに気づかれないよう、何にも寄りかからずにいた。そして、訪問者が帰ると、また痛みにのたうち回った。痛みが引いたわけでも、奇跡的に回復したわけでもなかった。私は相手が苦しんでいるのを見て、自分の痛みを忘れていたのだ。他者の痛みに関心するとき、奇跡は起こる。大切なのは、その人を兄弟として感じ、その人のために心が痛むことである。その痛みは神の心を動かし、奇跡が起こる。なぜなら、高潔な寛大さ、すなわち自己犠牲ほど、神を深く感動させるものはないからだ。しかし、私たちの時代において、寛大さは稀なものとなっています。なぜなら、利己主義や私利私欲が蔓延しているからです。「自分の順番を他人に譲り、自分は待とう」と言う人は稀です。他人のことを考える、そのような祝福された魂は、なんと少ないことでしょう！霊的な人々の中にも、この忌まわしい精神、すなわち無関心の精神が存在するのです。

善行は、それを行う者が自分の何か——睡眠や安らぎなど——を犠牲にして初めて、真の善となる。だからこそ、キリストはこう言われたのだ。「……自分のものを犠牲にして……」¹⁵⁷ 休息をとった状態で善行を行うなら、その代償はさほど高くない。しかし、もし私が疲れていて、例えば道を尋ねてきた人に道案内をしに出かけるなら、それは大きな代償を伴う。十分に眠った上で、私の助けを必要としている場所で一晩中眠らずに過ごすなら、その代償はさほど大きくない。もしその上、会話が私の好みに合えば、私は単に交流を楽しんだり、少し気分転換をしたりするために、それをする事ができる。一方、疲れ果て、他者を助けるために犠牲を払うとき、私は天国のような喜びを感じる。その時、私は神の祝福に溺れるほど満たされる。

一方、もし人が他人を助けることだけでなく、自分自身のために何かをすることさえも重荷に感じるなら、その人は休息することさえも疲れてしまう。しかし、隣人を助ける人は、疲れからも休息を得ることができる。もし人に犠牲の精神があるなら、例えば、肉体的に力尽き、働き疲れてしまった人を見かけたとき、「座って、少し休んでください」と言い、その人の仕事を自ら引き受

¹⁵⁷ ルカ 21:4。

けるだろう。力尽きた人は体を休めることができ、助けた人は精神的な安らぎを感じるだろう。人がどんなことをするにせよ、心から行わなければならない。そうでなければ、行う人は精神的に成長しない。心から行うことは、疲れさせない。心とは、まるで自己充電式の装置のようなものです。働けば働くほど、より多く充電されていくのです。ほら、チェーンソーが腐った切り株に当たると、「フーッ」と音を立てて……エンジンが止まってしまいます。しかし、堅い木に当たると、と力強く働き続け、エネルギーを充電しながら切り進みます。与えることだけでなく、何かを受け取る場合であっても、私たちは自分のことばかり考えてはならず、常に他者の魂に安らぎをもたらすものを目指すべきです。私たちの中に貪欲があってはなりません。自分が欲しいだけ取る権利があると思い込み、他者には何も残さないような考えを持ってはなりません。

— やはり、ゲロンダ、すべては犠牲の精神に帰着するのですね。

— そう、それこそがすべての霊的生活の基盤なのです！そして、人は自分を犠牲にする時、どのような喜びを感じるか、ご存知ですか？その喜びは言葉では言い表せないほど深いのです。至高の喜びは犠牲から生まれるのです。犠牲を捧げることで初めて、人はキリストと一体となるのです。なぜなら、キリストこそが「犠牲」そのものだからです。さらに、ここで人は天国や地獄を先取りして体験し始めるのです。善を行う人は喜びます。なぜなら、その行いに対して神からの慰めが与えられるからです。一方、悪を行う人は苦しみを受けるのです。

私自身の安らぎは、他者に安らぎを与えることから生まれる

— ゲロンダ、人はまだ犠牲の喜びの味わいを知らないのに、どうして犠牲を払うことができるのでしょうか？

— 相手の立場に立って考えればよいのです。私が軍にいた頃、私たちの塹壕は頻繁に水浸しになりました。無線機のバッテリーを交換する必要がありましたが、回線が混雑していたため、それは非常に骨の折れる作業でした。私は腰までずぶ濡れで、オーバーコートを絞って水を絞り出せるほどだった。しかし、他の者が苦勞しないように、私はこの仕事を自ら引き受けることを選び、それをしながら喜びを感じていた。指揮官は私にこう言った。「お前がこの仕事をしていると、私は安心するが、お前のことが気の毒だ。誰か他の者にやらせるように言え。」「いいえ、指揮官、」と私は答えた。「私は[この仕事を]喜んでやっています。」私たちの半大隊にはもう一人の無線手がいたが、作戦に出る際、彼を危険にさらさないよう、私は彼にバッテリーも無線機も運ばせなかった。たとえ自分にとって重くても。彼は私にこう頼んできた[不機嫌そうに]：「なぜ俺にそれを渡さないんだ？」——「君には」と私は答えた。「妻と子供たちがいる。もし君が殺されたら、私は神の前でその責任を負わなければならない。」そしてこうして、神は私たち二人を守ってくれた。彼も私も、神は殺されることを許されなかったのだ。

感受性の豊かな人間にとって、愛の気持ちから他人を庇って一度だけ自ら命を落とす方が、不注意や臆病さを露呈し、その後の人生を通じて絶え間ない良心の呵責に苛まれるよりもましだ。ある時、内戦中、反乱軍の一斉行動によって、私たちは一つの村を挟んで他の部隊から切り離されてしまった。兵士たちは、誰が村へ食料を調達しに行くか、くじ引きをしようとしていた。「私が行

く」と私は言った。もし経験が浅く不注意な者が行けば、殺されてしまうかもしれないし、そうなれば私はその後、良心の呵責に苛まれることになるだろう。「誰か他の誰かが殺されるよりは、私が殺されたほうがましだ。そうでなければ、その後一生、良心の呵責に苛まれることになる。そんなの耐えられるだろうか？」——「君なら彼を救えたはずだ」と、私の良心は語りかけるだろう。「なぜ彼を救わなかったのか？」と。それに、私は断食中で、空腹の状態だったし…… まあ、いいや。そこで指揮官が私に言った。「俺も、お前が行くほうがましだ。そうすれば水から乾いたまま上がれるし、力をつけるために食事もできるだろう。」私は自動小銃を手に取り、歩き出した。反乱軍は私を味方だと勘違いして、通り過ぎることを許してくれた。村に着き、ある二階建ての家に入った。そこには一人の老婆がいて、彼女は私に食料をくれた。そして私は仲間のところへ戻った。

[山の中で]雪に囲まれた冬、私はこの上ない喜びを味わった。ある夜、目が覚めたことを覚えている。皆が眠っている中、私たちのテントは雪に埋もれていた。私はテントから這い出し、無線機を掴んで雪を振り払った。見ると、動いている。指揮官のところへ駆け寄り、状況を報告した。その夜、私は鍬を使って雪の中から凍傷を負った26人を掘り出した。

キリストのためには、私は何も成し遂げなかった。もし私が戦争でやったことの10パーセントでもキリストのためにやっていたら、今頃、奇跡を起こしていたはずだ！ だからこそ、その後、修道生活の中で、私はこう言ったのです。「軍隊では祖国のためにあれほどの苦難に耐えたのに、キリストのために私は何をしているのか？」言い換えれば、軍隊で経験したあの苦難に比べれば、修道生活では自分は王子のようだと感じていました。そこでは、乾パンがあるかないかなど、もはや問題ではなかったのです。というのも、あの頃、作戦中、私たちがどんな断食を強いられていたか、わかるだろうか？ 雪を食べていたのだ！ 他の連中はせめて辺りをうろついて何か食べられるものを見つけられたが、私は無線機に縛り付けられていて、そこから離れることができなかった。ある時、私たちは13日間も食事なしの状態が続いた。配給されたのは、兵士用のパン1個とニシンの半分ずつだけだった。水は蹄の跡から飲んでいたが、それもきれいな雨水ではなく、泥が混じったものだった。そしてある時、「レモネード」を味わう機会さえあった！ その時は喉の渇きが限界に達していたところ、蹄の跡に水が溜まっているのを見つけた——黄色い水だった！ 私はそれをがぶがぶと飲んだ！ ……それゆえ、修道生活を送るようになってからは、たとえ水の中に虫がうようよしていても、それは私にとって大きな恵みのように思えた。少なくとも、それは水のように見えたからだ。

ある晩、通信用のケーブル線が切れてしまった。1948年12月のことだった。周囲は雪の吹きだまりだらけだった。午後4時、我々は命令を受けた。村へ行き（徒歩で2時間）、回線を復旧させて戻ってくるというものだった。2時間後には暗くなる。兵士たちは疲れ果ててまるで死人のようであり、歩く気力さえ湧かなかった。ましてや、あんな雪の吹きだまりの中でケーブルなど見つけれられるはずがない！

「ゲロンダ、道やケーブルの敷設経路を知らなかったのですか？」

— えー、道の大まかな場所は知っていたが、それでも夜になる前に戻ることはできなかっただろう。要するに、数人の兵士を連れて、私たちは出発した。まず、まだ自部隊の駐屯地にいる間に

、指揮官を安心させるためにシャベルで道の雪を払い、少し先まで進んだ。それから私は彼らに言った。「さあ、行こう。だって、まだ戻らなきゃいけないんだ！」他の連中は終始不平を言っていたので、私が先頭に行くことにした。「エラダなら——」と彼らは私に言った。「死ぬはずがないのに、俺たちは死ぬんだ！」同じことを延々と繰り返していた！そうして私たちは前進していった：私は雪に足を取られ、彼らが私を引き上げ、また足を取られ、また引き上げ……私はサーベルを持っていて、どこに足を踏み出せるか探るために、頻繁にそれを使って前方の雪を突いていた。絶えず確認しなければならなかった。私は先頭を歩きながら彼らに言った。「さあ、行こう。ここには家畜は通らないし、ケーブルを切断することもない。ケーブルが地面から浮いているような谷間まで行ったら、そこで確認しよう」と。ようやくある村に着いたが、その手前には雪の吹きだまりに隠れて見えなかった段々畑があり、私はその段々畑の一つから雪の中へ転落してしまった。残りの連中は、先へ進むことも、私を助け出すことも怖がってしまった。結局、私たちは段丘から段丘へとよじ登りながら——その方法は、聞かないほうがいい——下りていき、夜遅くに村に入った。ある溪谷の1、2カ所で断崖を見つけ、ケーブルをつなぎ合わせて指揮官と連絡を取った。「引き返せ」と指揮官は言った。だが、どうやって引き返せばいいというのか？夜が更けただけでなく、さらに何とかして上へ、段丘へと登らなければならないのだ！下りてきた時は転げ落ちるように降りてきたのに！どうやって道を見つけれられるというのか？「でも、どうやって戻ればいいんですか？」と私は指揮官に尋ねた。「下りるのはなんとかできたけど、今さらどうやって登るんですか？明日の朝に戻ったほうがいいです。村の反対側から出て、一周回って戻りましょう。」——「『明日の朝』なんて言わないで」と指揮官は言った。「今日だ！」幸運なことに、この会話を指揮官の副官が耳にし、村に一晩泊まることを許可するよう指揮官に懇願してくれた。こうして私たちは村に留まることになった。ある家では、分厚いウールの毛布を二、三枚もらった。私は震え始めた。何しろ先頭を行き、道を切り開いていたせいで、全身ずぶ濡れだったからだ。仲間たちは、いわば私が他の誰よりも過酷な目に遭ったことを気の毒に思い、私を真ん中に寝かせてくれた。その夜、私たちは兵士用のパンをひと切れずつ分けて夕食とした。人生で、あの時ほど大きな喜びを感じたことは、他にないと思う。

私がこれらの例を挙げざるを得なかったのは、皆さんに「犠牲」とは何かを理解してほしかったからです。私がこれらを語ったのは、皆さんに拍手をもらうためではなく、真の喜びがどこから生まれるのかを理解してほしかったからです。

その後、通信課では、同僚たちに騙された。「父が訪ねてくるから、会いにいかなきゃ。代わりに当直を頼むよ」と一人が言った。「俺のところには姉が来たんだ」と別の奴が嘘をついた（彼にとってその女は姉などではなかった）。他にも何かと用事で席を外す者が現れるたびに、私は犠牲になって、いつも誰かの代わりに当直を務めていた。当直が終わると、床を掃き、片付けをした。通信小隊の部屋には、他の者——他の部署の将校でさえ——立ち入ることが禁じられていたし、何しろ戦時中だった。だから、掃除婦を雇うこともできなかった。私はほうきを手に取り、すべての部屋を掃いた。そこで掃き方を覚えたのだ。「ここは」と私は言った。「業務用の部屋であり、ある意味で神聖な場所だ。散らかしたままにしておくわけにはいかない。」掃除をする義務はなかったし、そもそもその方法も知らなかった。実家では、ほうきを手に取ったことなど一度もなかつ

たのだ。仮に手に取ろうものなら、姉にそのほうきで即座に叩きつけられていただろう！ 「掃除係」と、同僚たちは私をからかった。「永遠の犠牲者だ」と。私はそれを気にも留めなかった。そして、それをしたのは「ありがとう」と言われるためではなく、それが必要だと感じ、喜びを感じていたからだ。

— ゲロンダ、あなたには「不純な考え」はまったくなかったのですか？ 例えば、「あの人、遊び回っているのに、自分の姉とは会わないのか」などとは思いませんでしたか？

— いいえ、そのような考えは私にはありませんでした。誰かが私に「お願いだ、私の代わりに少しの間、座ってくれないか？」と言う瞬間から、それで話は終わりでした。また、ある人は子供たちのためだと称してお金を私からせがんでいましたが、実際には子供たちに送るどころか、自分のために使うお金を妻からもせがんでいたのです。わかりますか？ そして、私がそうしたのは「よくやった」と言ってもらうためではなく、必要に迫られてのことでした。部隊の配置から外れることはなく、他の連中はそれを利用して、すべての仕事を私に押し付けてきました。私は小隊全体の仕事をこなさなければなりません。山ほどのコールサイン、リレー機は止まることなく鳴り響き……。その頃、私はボロボロになっていた。しばらくの間、39.5度の高熱が続いていたが、誰にもそのことは言わなかった。しかしその後、過労で倒れ、意識を失ってしまった。担架に乗せられた時、同僚たちの声が聞こえた。「さあ、ヴェネディクト、¹⁵⁸、大修理に行くぞ。今、担架で古い車を修理する場所まで運んでやるよ。」そして彼らは私を病院へ運んでいった。そこでは私は誰の世話も受けられなかった——私の面倒を見る人は誰もおらず、皆が負傷者の世話に追われていた——が、私は喜びを感じていた。それは犠牲から生まれる喜びだった。なぜなら、私が他者に安らぎを与えることによって、私自身にも安らぎが生まれるからだ。

私たちが自分自身を忘れれば忘れるほど、神は私たちを覚えていてくださる

犠牲の精神と神への信仰を持つ者は、自分自身を計算に入れない。もし人が自分の中に犠牲の精神を育まなければ、その人は自分のことばかりを考え、他の人にも自分のために犠牲になってほしいと望む。しかし、自分のことばかり考えている人は、人々からも神からも孤立し——二重の孤立に陥り——神の恵みを受け入れることができない。そのような人は何の役にも立たない。考えてみてほしい。常に自分のこと、自分の困難などばかり考えている人は、いざという時に、人間的な意味でも誰からも支えられないのだ。その人が神からの支えを得られないことは、言うまでもありませんが、人間からの支えもまた得られないのです！ その後、その人はあちこちで助けを求め、つまり人々からの助けを見つけようと苦悩するでしょうが、それを見つけることはできないでしょう。逆に、自分のことは考えず、常に他人のことを考えている人——そのような人については、神は常に思いを巡らせている。そして、他の人々もまたその人のことを考えるようになる。人が自分自身を忘れれば忘れるほど、神はその人をより深く心に留めてくださるのだ。例えば、共同生活の修

¹⁵⁸ その地方で有名な説教者の司祭の名前であり、同僚たちは長老をからかうために、彼をベネディクトと呼んでいた。

道院では、愛に満ちた人は自らを犠牲にし、他者に身を捧げる。他の人たちはそれに気づかないと思いますか？ 他人のために全身全霊を捧げ、自分自身のことなど考えもしないその魂について、彼らが考えずにはいられるでしょうか？ そして、神がその魂のことを考えずにはいられるでしょうか？ これは偉大な行いです。そこには神の祝福が見え、神の御業の姿が見て取れます。

困難な状況に直面したとき、人は試練にさらされます。真の愛や犠牲の精神は、まさにそのような瞬間に現れるのです。誰かに「犠牲精神がある」と言うとき、私たちは、危険な状況においてその人が自分自身を顧みず、他者のことを考えていることを指しています。畢竟、ことわざにも「友は患難にあって知る」とある通りです。もし、神よ、どうかお守りください、例えば今、爆弾が落ち始めたとしたら、誰が他者のことを考え、誰が自分のことだけを考えているのかが明らかになるでしょう。しかし、自分のことしか考えない習慣がついている人は、困難な時にもやはり自分のことしか考えず、神はその人のことを顧みられることはないでしょう。一方、あらかじめ自分のことではなく他人のことを考えるように学んでいる人なら、危険な時でもやはり他人のことを考えるでしょう。そうして初めて、誰に真の犠牲精神があり、誰に自己愛があるかが明らかになるのです。

もしクリスチャンが、今から何か——自分の欲望や利己心など——を犠牲にし始めなければ、困難な時に自分の命を捧げるという境地に、どうして達することができるだろうか。そして、もし今、労苦を恐れ、他の人より多く働きすぎないようにと気にかけているなら、他人のために自分の命を捧げようと駆け出すような境地に、どうして達することができるだろうか。もし今、些細なことで自分ばかりを気にかけているなら、自分の命が危険にさらされるその瞬間、どうして他人のことを考えられるだろうか？ その時は、さらに困難になるだろう。もし厳しい時代が訪れ、そのような人が、高熱で道端に倒れている隣人を見かけたとしても、彼はその人をそのまま放置して立ち去り、「私も横になっておこう。さもないと、自分も倒れてしまうかもしれないから」と言うだろう。

しかし、戦争では、自分や他の誰かの命をかけた闘いが繰り広げられている。勇気とは、他人の助けに駆けつけることにあるが、犠牲の精神が欠けていれば、誰もが自分自身の救いを求めるだけだ。しかし、次のようなことが観察されている。戦争では、砲弾や地雷は逃げ出そうとする者を狙いつける。そのような人は一見、危険を避けようとしているように見えるが、かえって自らの命を縮めてしまう。したがって、危険から逃げ出そうとしてはならない。とりわけ、他人の犠牲の上に逃れようとしてはならない。アルバニア戦争で起きたある出来事を覚えている。¹⁵⁹ ある兵士が石板を持っており、その陰に頭を隠して銃弾や破片から身を守っていた。何かを取りに少し横へ移動する必要が生じたとき、彼はその石板を塹壕の底に置き、壁に立てかけた。それを見た隣の兵士は、すぐにその石板を掴んで持ち去ってしまった。「今こそ、これを自分のものにできる絶好のチャンスだ」と彼は考えた。しかし、まさにその瞬間、地雷が爆発し、彼には生き残る余地さえ残され

¹⁵⁹ アルバニア戦争（またはアルバニア戦線）——1940年から41年にかけてギリシャとファシスト・イタリアの間で戦われた戦争。——訳者注

なかった。周囲で砲弾が炸裂するのを目の当たりにし、その不幸な兵士は石板を手を取ったが、持ち主が戻ってくることなど考えもしなかった。彼は自分のことしか考えず、自分の行いにこう言い訳をした。「あいつが離れたんだから、このコンロを自分のものにしてもいいんだ。」確かに、彼はその場を離れたが、コンロはあくまで持ち主のものだったのだ。また、ある男は戦争が続く間ずっと兵役をサボり続けていた。誰のことも考えなかった。他の人たちは祖国のために命を捧げていたのに、彼だけは家にいた。事態が深刻化した最後の瞬間まで、彼は危険を避けようとしていた。その後、イギリス軍がやってくると、彼は彼らの陣地に紛れ込もうと努め、ゼルバスに「¹⁶⁰」と名乗り、アメリカ国籍も持っていたため、その機会を利用してアメリカへ逃亡した。しかし、アメリカに到着するやいなや、彼はすぐに亡くなってしまった！彼の妻、かわいそうな彼女は、「神から逃げようとしたのよ！」と言っていた。こうして彼は亡くなったが、一方、戦場にいた他の人たちは生き残った。

英雄的に死ぬ者は、決して死ぬことはない

軍隊では、私たち全員に一つの共通の目標があったことを覚えている。私も努力したが、他の人々もまた、来世を信じるかどうかにかかわらず、犠牲の精神を持っていた。「なぜこの人が死ななければならないのか、彼は一家の大黒柱なのだから」と彼らは言いながら、自ら危険な任務へと向かっていった。こうした人々が払おうとしたその犠牲は、信仰を持つ者が払おうとしたものよりも大きな価値を持っていた。信仰者は神の真理と神の報いを信じていたが、非信者たちは、自分たちが決意したその犠牲が無駄ではなく、来世でその報いを受けることになるなどとは知らなかったのだ。

占領下、ダヴァキスの時代、¹⁶¹、イタリア軍は若い将校たちを逮捕し、船に乗せ、その船を沈めた。その後、彼らは民間人の捕縛を始めた。最初に捕まった者たちは、家に武器を隠している他の住民の名前を吐かせるために拷問を受けた。あの時、一般の人々がどれほど献身的な姿を見せたか、あなたにも見てほしかった！コニツァの私たちの家の近く、現在聖コスマス・エトリアスの教会が建てられている場所には、かつてモスクがありました。逮捕された人々はモスクに閉じ込められ、一晩中、とげ付きの鞭や被覆を剥がしたケーブルで殴打されました。外へワイヤーを伸ばし、その先端に鉛の塊を結びつけ、そのワイヤーで人々を殴ったのです。

鋼鉄のワイヤーが皮膚を剥ぎ取った。そして、悲鳴が聞こえないように、イタリア兵たちは歌を歌ったり、音楽を流したりした。ここから「音楽付きの拷問場」という表現が生まれたのだ。さ

¹⁶⁰ ナポレオン・ゼルバス（1891–1957）——エピロスやギリシャの他のいくつかの地域でナチスに対抗して活動した反ファシスト運動「ギリシャ国民民主同盟」の指導者。——訳者注

¹⁶¹ ダヴァキス・コンスタンティノス（1897–1942）——ギリシャ陸軍大佐。有能な軍事指揮官であり、1940年11月にはピンドス独立旅団の司令官を務めた。K・ダヴァキスによるピンドス山地でのイタリア山岳歩兵師団「ジュリア」に対する勝利は、第二次世界大戦におけるファシスト陣営にとって最初の重大な敗北となった。——訳者注

らに、犠牲者たちは足を逆さまに吊るされ、口から血を流していた。しかし、彼らは黙り込んでいた。「もし私たちが自白すれば（彼らは誰がライフルを持っているか知っていたのだ）、その後、他の全員も同様に殴打され、自白を強要されるだろう」と考えていたからだ。そのため、最初に捕らえられた者たちは、「他の人々がライフルを持っていないことを証明するために、私たちが死ぬほうがましだ」と決意した。一方、他の者たちは、1回か5回の¹⁶²の拷問の末、敵に武器を隠している人物を告発した。飢餓が蔓延し、人々は裏切り者となっていった。非嫡出子で編成された大隊に所属する一部のイタリア人は、あらゆる野蛮なコンプレックスを抱えた、まさに野蛮人そのものだった。彼らはその憎しみを他人にぶつけていた。幼い子供たちを連れ去り、その哀れな子供たちの服を脱がせ、白熱した鉄のトングの上に座らせ、足で押し付けて体を焼いた。彼らは、親に「誰がライフルを持っているか」を自白させるために、子供たちを拷問したのだ。「持っていない、持っていない！」と大人たちは叫んだが、拷問者たちは彼らの子供たちを焼き続けた。私が言いたいのは、世俗的な人々であったにもかかわらず、他人を苦しめたり殺したりしないために、多くの人が死を選ぶことを選んだということだ。それによって彼らは多くの人々を救った。こうして、数人の英雄のおかげで、私たちは民族として生き延びることができたのだ。

英雄的に死ぬ者は、決して死ぬわけではない。しかし、英雄主義が欠けていれば、良いことは何も期待できない。また、信仰を持つ者は勇敢でもあることを知っておいてほしい！マクリアニス、¹⁶³、彼はなんと悲惨な体験をしたことか！しかも、あの時代に！

—彼はかつてこう言いました、ゲロンダ：「私の目は煤で曇ってしまった」と。

—ええ、彼の目は煤けていました。彼が経験した緊張と不安のせいで、まるで目から煙が出ているようでした。過酷な時代を生き抜き、痛みと愛のために絶えず自分を犠牲にしていました。自分のことは考えず、決して自分を優先しませんでした。祖国のために戦い、死を恐れませんでした。マクリアニスは霊的な境地を経験していたのです。もし彼が修道士になっていたら、アントニオス大聖人と大差なかっただろうと思う。傷や障害を抱えながらも、彼は[一日に]三千回も拝礼を行っていた。拝礼をする際、傷口が開き、内臓が外に飛び出しても、彼は自らそれを元の位置に戻していた。私の三回の礼拝は、彼の礼拝一回に匹敵する。彼の前の床は涙で濡れていた。もし私たちの立場が彼と同じだったらどうだろう？ 私たちは医療処置を受けるために病院へ駆け込んだだろう！ 世俗の人々は私たちを非難するだろう！

自分を顧みない者こそ、神の力を受け入れるのだ

—ゲロンダ、戦争中、危険にさらされたことはありましたか？

¹⁶² オカ——1280グラムに相当する重量単位。——訳者注

¹⁶³ イオアニス・マクリアニス（1797-1864）——少将、エラダの国民的英雄。ギリシャ革命（1821-1830）の時代、トルコに対する最も献身的な闘士の一人。革命と解放闘争に関する『回想録』の著者。イ・マクリアニスの生涯は、神、隣人、そして祖国に対する、犠牲的なキリスト教的愛の素晴らしい模範である。——訳者注

— ああ！ 一度や二度だけでしょうか？ 今こうして、神がどのように私を助けてくださったかを振り返ると、胸が熱くなります。しかし当時は、そんなことは考えていませんでした。特に死については——それについては全く考えていませんでした。死を決意した時、何も恐れることはありません。死を決意する覚悟は、その力において千人の護衛に匹敵するのです。死——それこそが安全なのです。戦争において、聖なる志願兵部隊の紋章は髑髏です。それは、彼らが死ぬ覚悟を決めたことを意味します。他者のため、あるいは公共の利益のために自己を忘れる者は、神の力を受け入れるのです。そしてごらん下さい、もし人が犠牲の精神に動かされているなら、神はその人を守ってくださるのです。ある時、私たちが岩の陰に身を隠したのを覚えている。私は小さな塹壕を掘り、そこに少し身を潜めた。一人が這って来て「俺も入れてくれ」、もう一人が這って来て「俺もだ」と言う。彼らがそう頼んできたので、私は彼らを塹壕に入らせたが、自分は外に残った。夜、激しい砲撃が始まったとき、一枚の破片が私の頭をスッと掠めた。ヘルメットは被っておらず、フードだけを被っていた。「みんな！」と叫んだ。「破片が当たった！」手で頭を触ってみるが、血の感触はない。もう一度触ってみるが、何もない！ 破片は頭をほんの少し掠めただけで、額から頭頂部にかけての髪を刈り取っただけだった。私の頭には、幅6センチメートルのきれいな帯状の跡が残った。

皆さんは、困難な時代や占領下での生活を送ったことがなく、戦争や敵、悲しみを見たこともない。私は皆さんに、そうしたものを目にすることのないよう願っているが、だからこそ、それがどのようなものか理解できないのだ。しかし、私たちの時代は、沸き立ち、シューシューと音を立てる大釜のようなものです。鍛えられ、勇気と度胸が必要です。もし何かが起きたとき、全く準備ができていない状態にならないよう気をつけてください。困難に立ち向かえるよう、今から準備を始めてください。キリストもこう言われました。「…備えよ」と、¹⁶⁴、そうではありませんか？ 今日、これほど複雑な時代に生きる私たちは、単に準備ができていだけでなく、三倍の準備をしておかなければなりません。それ以上言うまでもありません！ 私たちは、突然の死だけでなく、他の危険にも直面することになるかもしれません。ですから、安楽に過ごそうとする欲求を自分の中から追い払いましょう！ 私たちの中に愛が働き、犠牲の精神が宿るようにしましょう。

今、何かが準備され、もうすぐ起きるはずなのに、絶えず先送りされているのが見えます。いつもほんの少しの延期ばかり。一体誰がこれらの期限をずらしているのでしょうか？ 神様が延期させているのでしょうか？ 「さあ、あと1ヶ月、さあ、あと2ヶ月！」…… そうやって物事は進んでいくのです。¹⁶⁵ しかし、私たちに何が待ち受けているのか分からない以上、できる限り、愛を育んでください。これが最も重要なことです。あなたたちの間に、偽りの愛ではなく、真実の、兄弟のような愛があること。善意、思いやり、愛があれば、人は常に正しい行動をとることができます。優しさ、愛——これこそが力です。できる限り秘密を守り、率直になりすぎないようにしましょう。だって、もしその秘密が「あなたと、私と、彼と、鐘を鳴らすシメオンだけ」が知っているものな

¹⁶⁴ マタイ24:44、ルカ12:40。

¹⁶⁵ 1984年11月に発表。

ら、一体どうなるのでしょうか？ 単なる愚かさからでも悪事を働いてしまい、後で頭を壁に打ち付けて後悔することになりかねません。軍隊でいかに秘密が守られているか、一度見てみるといい。捕虜になる可能性があることを悟ったなら、真っ先にコールサインを破棄しなければならなかった。記録を細かく切り刻んで飲み込むのだ。ある時、危険な状況に陥った際、私はまさにそうしました。なぜなら、もしコールサインが反乱軍の手に渡れば、彼らは「あの場所に[我々の]部隊がいて、食糧が不足している」といった情報を把握してしまうからです。そうなれば、彼らは[我々の]司令部に無線電報を送り、[我々の]航空機を呼び寄せて彼らに食糧を投下させ、その一方で我々の頭上には爆弾を投下させるだろう。分かるか？ [コールサインを知っていれば]、彼らは政府軍を名乗って司令部と連絡を取っただろう。もし君が無線手として捕虜になったなら、コールサインを吐かせるために、ペンチで爪を剥がされただろう。そして君は、爪を剥がされても、裏切り者になるよりはましだと選んだはずだ。ある無線手は、無線メッセージの内容を吐かせるために脇の下を火で焼かれたが、まるで感覚が麻痺したかのように、決して白状しなかった。彼は敵に秘密を漏らさず、それゆえ殉教者となった。また、女性たちはラバの鞍に軍の文書を載せて運び、死を覚悟していた。

戦場での死は、神を大いに和らげることができる。なぜなら、勇敢な死を遂げた者は、他者を守るために自らを犠牲にするからだ。純粋な愛から、同胞や隣人を守るために自らの命を捧げる者たちは、キリストに倣っているのだ。こうした人々は最も偉大な英雄であり、死そのものも彼らを恐れ、戦慄する。なぜなら、彼らは愛ゆえに死を軽んじ、それによって不死を得て、墓石の下に永遠への鍵を見出し、難なく永遠の至福へと入っていくからである。

修道者の生涯そのものが犠牲である

修道者の生涯そのものが、自然に彼に愛と犠牲の精神を持たせる助けとなる。彼はキリストのために死ぬためにその道を歩み始めたのだ。つまり、彼は犠牲のためにその道を歩み出したのである。修道士には[世俗的な]義務がないため、自らの中に犠牲の精神を育む必要がある。一般信徒はキリストのために死ぬつもりはなく、また世俗的な義務も負っている。家族や子供たちの世話をしなければならぬため、彼に対する要求はそれほど厳しくなく、彼には正当な理由があるのだ。例えば、戦争において、家族を持つ人は、自分の子供たちが路頭に迷わないように、危険を避けようとします。もし自分が危険を回避すれば、同じく子供を持つ他の誰かが殺されるかもしれないということについては、その人は考えません。まあ、これはまだしもだ。ここには、少なくとも家族への思いやりが存在している。「私の子供たちは路頭に迷ってしまう」と、そのような人は言うだろう。彼は、来世を全く信じていなくても、この現世の命を救おうと努めるかもしれない。

— つまり、ゲロンダ、修道士は常に自分を犠牲にしなければならないということですか？

— すでに申し上げた通り、修道士の人生そのものが犠牲なのです。そうでなければ、なぜ私たちは修道士になるのでしょうか？ もし修道士がこの点で不十分であれば、その人は修道士ではありません。そのような場合、どのような霊的な闘いについて語ることができるのでしょうか？ 犠牲がなければ、霊的な闘いの余地などありません。そして、犠牲がなければ、修道士がどれほど霊的に生

きようと努力しても、すべては無駄になってしまう。聖山では、そのような霊的生活は菜園の scarecrow に等しいと言われている。そのような霊的生活を送る修道士は、悪霊を追い出すどころか、カラスさえ追い払うことさえ、それだけで達成と言えるほどなのだ。人がこの人生で果たすべき偉業に熱心に取り組み始めるとき、その人の中にも神聖な炎が燃え上がる。もしこの神聖な炎がなければ、その人は何の役にも立たない。この炎こそが、その人に喜びを与え、勇気を与え、愛の心を与えるのだ。これこそが、主が「火を投げ込むために来た……」と語られたことである。¹⁶⁶ この神聖な火があれば、詩篇の詠唱も、修道士の祈りも、それが自分自身のためであれ他者のためであれ、実を結ぶ。とりわけ女性の心は、清められたとき、大きな力を持ち、祈りにおいても大いに成功し、「レーダー」のようになるのです。しかし、愛や犠牲の心を持たない者は、世俗的な喜びか、あるいは世俗的な動揺のいずれかしか得られず、そのような人は霊的な喜びを感じることはできません。

だからこそ、私はあなた方にこう言うのです。犠牲の精神と兄弟愛を育んでください。あなた方一人ひとりが、困難な状況に陥ったとき、自らの力でそこから抜け出せるような霊的な境地に達するようにしてください。霊的な境地になれば、人は自分自身を愛しているがゆえに臆病になります。その人はキリストを否定することさえあり、キリストを裏切ることさえあり得ます。あなた方は死を覚悟しなければなりません。ほら、あそこにいる世俗の人々でさえ、天国を信じていないのに、自らを犠牲にしている。それなのに、私たちは、何事も無駄にはならず、私たちの犠牲には意味があると信じている。世俗の人々は、全くの無知の中にありながら、他者を守るために自らを犠牲にし、命を危険にさらすのに、修道士たちが自らを犠牲にしないというのか？ 私たちは、キリストの愛のために死ぬために旅に出るのです。世俗的な義務など私たちにはありません。もしそこに犠牲の精神さえなければ、一体私たちは何をしているのでしょうか？ そうすれば、アリでさえ私たちを嘲笑うでしょう！ アリが人間を嘲笑うのを見たことがありますか？ 怠け者を嘲笑うのです！

— ゲロンダ、こんなことはあり得るでしょうか。他人を助けようという気持ちはあるのですが、その動機が純粋ではない場合です。

— それは常に明らかです。動機が純粋でないとき、魂は安らぎを見出せず、それを理解して、その動機を清めようと努めます。先日、ある女性の魂に私は強い感銘を受けました。誰かが病気で苦しんでいると知ると、彼女は眠れなくなり、苦しみ、泣いてしまうのです。それなのに、彼女自身は世俗的な生活を送っています。彼女は自分の状況を誰かに打ち明けたところ、「もしかすると、それは敵の誘惑かもしれません」と返されました。しかし、そんなことが誘惑から生じるはずがあるのでしょうか？ 悪魔が人を欺くことができるのは、その人が見せびらかすためにそのようなことをしている場合だけであり、その場合はその体験は偽りのものとなります。

自分の行動から「自我」を取り除きなさい。人は「自我」から抜け出すとき、この地を離れ、別の次元へと進むのです。人が自分の中に留まっている限り、天の者になることはできません。犠

¹⁶⁶ ルカ12:49。

牲のない霊的生活などあり得ないのです。死というものが存在することを、せめて少しは心に留めておいてください。 どうせ死ぬのなら、あまり自分を過保護に扱わないようにしましょう。健康を害するほど無茶をするという意味ではなく、安逸にひざまずくようなこともしないということです。危険な冒険に飛び込むよう呼びかけているわけではありませんが、兄弟よ、ほんの少しの英雄心くらいは持たなければなりません！ 戦争中、英雄たちはどれほど勇敢に死を迎えたことか！ コンディリスと共に戦ったある修道士¹⁶⁷（コンディリスは愛国者であり、英雄だった）が、小アジア戦争の際、ギリシャ軍がコンスタンティノーブル近郊に海上上陸部隊を投入した時、コンディリスは船上にいて、遠くからコンスタンティノーブルを目にした途端、狂ったように振る舞い始めたと私に語ってくれた。「さあ、みんな！」と彼は叫んだ。「死ぬなら死ぬさ！ 今日でも明日でも！ 死ぬなら、男らしく死のう！ おい、みんな！ 祖国のために英雄として死のう！」彼は、船が岸に着くのを待てなかったのだ。緊張と強い願望のあまり、船がまだ岸にたどり着いていないことに気づかず、飛び降りて海に落ちてしまった。それほど彼の心は燃え上がっていたのだ！ 彼は泳げなかったが、他の者たちが駆け寄って、彼を水から引き上げた。

— ゲロンダ、あなたは、私たちのあらゆる行動から「自我」を取り除くよう努めるべきだとおっしゃいました。どうすればよいのでしょうか？

— あなたはすべてが整った状態で提供されるのを待っている。自分の「私」を取り除くとはどういうことか？ いつ、私は自分の「私」を取り除くのか？ どうすれば愛の中から自分の「自我」を追い出せるのか？ どうすれば愛を清めることができるのか？ 自分を考慮に入れなければ入れないほど、それだけ自分の「自我」を追い出しているのだ。そして、自分の意志や弱さ、安らぎを切り捨てていくことで、私たちもまた自分の「自我」を取り除いている。従順と沈黙のおかげで、私たちの自我から多くのものが消え去っていく。私たちの愛が利己的でないとき、私たちもまた自分の「自我」を追い出しますが、私たちの愛には犠牲もまた含まれていなければなりません。これはお分かりになりますか？ 例えば、ある修道女が修道院長のもとへ行こうとしたとき、別の姉妹もまた修道院長に会いたいと思っているのを見かけます。もし最初の修道女が、その姉妹に特に問題がないことを知りながらも、すぐに自分の順番を譲ったなら、彼女には従順や犠牲精神などが備わっていることになります。そして、彼女が心から自分の場所を相手に譲り、修道院長と話をしなかったとき、キリストご自身が彼女に語りかけてくださるでしょう。しかし、彼女はそれが必要であることを自覚し、心がそう告げたから、¹⁶⁷「聖なる父たちがそう言っているから」というだけの理由ではなく、そうしなければならない。そうしてこそ、彼女は神の二重の恵みを受け入れることになる。そしてこの場合、一方の修道女は人間的な方法で霊的な助けを受け、もう一方の修道女は神的方法で、キリストから直接助けを受けるのである。

また、修道士たちでさえ持ち合わせていないような犠牲の精神を示す、世俗の人々にも注目してみてください。私は、世俗の世界では、人々が信仰を持たず、弱さや情欲を抱えているにもかか

¹⁶⁷ コンディリス・ゲオルギオス（1879–1936）——ギリシャの著名な軍人および政治家。1920年代の小アジアにおける戦闘に積極的に参加した。その後、ギリシャの国防大臣、内務大臣、首相を歴任した。——訳者注

わらず——神がそう定められたがゆえに——優しい心を持っていることに気づきます。彼らは困っている人を見かけると、たとえ見知らぬ人であっても、その人に助けの手を差し伸べます。天国など存在するとさえ信じていない多くの人々が、何らかの危険を目撃すると、悪を警告するために駆けつけ、他者が生き残れるよう自ら命を捧げようと急ぎ、自分の財産を他者に分け与えようと急ぐのです。何年も前、ある工場で、作業員が機械に引っかかり、巻き込まれそうになりました。周囲には多くの男性がいたにもかかわらず、彼を助けに駆けつけたのは一人の女性だった。いわゆる「勇敢な」男性たちは、ただ立ち尽くして見ているだけだった。しかし彼女は彼を機械から引きずり出したが、その際に自身のドレスが引っかかり、機械に巻き込まれて命を落とした。殉教者だ！これは偉大な行いだ！

そのような人々は自分のことなど考えない。彼らは自分の中の「自我」を捨て去るのだ。そして、彼らがそれを捨て去るとき、キリストが彼らの内に飛び込んでくる。

第3章。

勇気は神への信頼から生まれるということ

勇気には野蛮さはない

偉業を成し遂げるのは、体格の大きな者ではなく、勇気と寛大な心、そして自らを犠牲にする決意を持つ者たちである。そして戦争においても、勇気を持つ者たちは優しさを持ち、他者を殺さない。なぜなら、勇気には野蛮さがないからだ。そのような人々は敵を狙って撃つのではなく、敵の周囲を狙って撃ち、敵を降伏させるのだ。善良な人は、殺すよりも殺されることを選ぶ。そのような心構えを持つ人は、神聖な力を受け入れる。一方、邪悪な人々は臆病で気弱であり、その恐怖を厚かましきで覆い隠し、自分自身も他者も恐れているため、恐怖のあまり絶え間なく発砲する。私が内戦中に兵役についていた時、ある時、ある村に入ったことがあった。「ここには山賊は誰もいませんよ」と地元の人々は言った。「みんな逃げました。残っているのは、狂った女一人だけです。」仲間の一人が遠くからその女性を見つけ、軽機関銃で彼女に向かって二発の連射を浴びせた。「私に何をしたの？」と、その不幸な女性は叫び、地面に倒れ込んだ。

「彼は恐怖のあまりそうしたのですか？」

「ああ、恐怖からだ。そういう気質の者は、自分にとって楽な解決策を求める。『敵は殺したほうがいい』と彼らは言い、そうすればもう迷うことはない。臆病でない人間は、それほど悪意も持たない。敵を戦闘不能にしようと努めるだろう——例えば、手や足を傷つけるようなことはするが、殺すことはしない。

勇気や度胸は一つのことだが、悪意や犯罪行為は全く別物だ。敵を捕らえて喉を切り裂くこと——それは勇気ではない。真の勇気とは、敵を捕らえ、そのライフルを壊し、自由の身にしてやる

ことだ。私の父はまさにそうしていた。ファラシに襲撃を仕掛けていたチェトたち¹⁶⁸を捕らえたとき、父は彼らからライフルを奪い取り、それを壊してこう言った。「お前たちは男ではなく、女同然だ」。その後、父は彼らを自由の身にしてやった。ある時、父は裕福なトルコ人女性の装いをし、彼らの陣営に現れて首領に尋ねた。あらかじめ、彼は仲間たちと、合図を聞いたらすぐに攻撃を開始するよう取り決めておいた。チェティたちが彼を首領の元へ案内すると、父は首領にこう言った。「お前の部下たちを退かせ、二人きりにしてくれ。」二人きりになると、父は首領からライフルを奪い取り、それを折って、強盗にこう言った。「今からお前は女だ。そして俺はエズネビディスだ！」¹⁶⁹そこで父は合図を送り、仲間たちが襲いかかり、チェトたちを村から追い出した。

成功するためには、良い意味での「狂気」の血筋が必要だ。その「狂気」の血筋をどう使うかによって、人は聖人にも英雄にもなる。しかし、もしそのような人が道を踏み外し、悪に溺れてしまえば、犯罪者になりかねない。その「無鉄砲な気質」を持たない者は、聖人にも英雄にもなれない。だからこそ、私たちの内なる原動力をかき立て、心と勇気を働かせなければならない。心は無謀になるべきだ。私は、退役して落ち込み、居場所を見出せない多くの将校たちを知っている。その中には、戦いが始まって戦場に立ちたいと願う者もいる——それほど彼らの内面は燃え上がっているのだ。一方で、徴兵令状を受け取っただけで全身が震え上がる者もいれば、軍隊に行かなくて済むように狂人を装う者もいる。どれほど多くの退役軍人が、ボスニアに行って戦いたいと私に語ったことか！ 霊的な生活において自らの勇気を活かすことなく、彼らは戦争の話を聞くと、戦う機会を喜ぶのだ。もしこの力強い人々が霊的な生活を知っていたなら、どのような偉業を成し遂げ、どのような霊的な闘いを繰り広げただろうか？ 彼らはきっと聖人になっていただろう。

昔は、なんと勇気があったことか

—ゲロンダ、以前、ご自身の祖母について何かお話してくださいましたね……

—私の祖母はとても勇敢な人でした。万が一に備えて、安全のため、彼女はいつもヤタガン¹⁷⁰を身につけていました。¹⁷⁰ ほら、未亡人で子供も二人、周りにはトルコ人がいたけれど、生きていかなければならなかったのです……大変な時代でした……誰もが彼女を恐れていました。本当に立派な女性でした！ ある時、一人の強盗が墓地のそばにあるブドウ畑に忍び込んだ。人々を怖がらせるために、彼はかかとまで届く長い白いシャツを着ていた。その後、ブドウ畑から出てくると、その白いシャツのまま墓地に入り、そこをうろつき始めた。ちょうどその時、私の祖母が墓地を通りかかった。山賊は彼女を見ると、地面に倒れ込み、死んだふりをした。そうすれば、彼女が彼を吸血鬼だと勘違いして怖がるだろうと思ったのだ。しかし、祖母は彼のそばに近づき、こう言った。「

¹⁶⁸ トルコの山賊。以下の書籍も参照のこと：長老パイシイ・スヴィャトゴレツ著『カッパドキアの聖アルセニオス』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1997年。22頁、74頁

¹⁶⁹ 長老の姓。

¹⁷⁰ 大きな湾曲したトルコ製の短剣。——訳者注

あなた、まともな人間だったら、とっくに土に還っていたはずよ！」 そう言うと、祖母はヤタガンの鈍い部分でその悪党を殴り始めた！ 彼を傷だらけにした。それが誰なのか、祖母は知らなかった。後になって、村で「あの人がひどく傷つけられた」という話を聞き、初めてそれが誰だったのかを知ったのだ。

現代において、勇氣は稀なものである。人々は腰が引けている。それゆえ、もし、神よ、そんなことがあってはならないが、戦争が始まれば、ある者は恐怖のあまり死ぬだろうし、またある者は、ほんの少しの試練でさえ手を引いてしまうだろう。なぜなら、彼らは安楽な生活に慣れきっているからだ。しかし、昔はなんと勇氣があったことか！ 小アジアのフラヴィアノフ修道院で、トルコ人が一人のキリスト教徒を捕らえて殺害した。その後、彼らはその妻にこう言った。「キリストを否定するか、さもなくば子供たちも皆殺しにするぞ。」 「私の夫は——」と彼女は答えた。「キリストが連れ去ってくださいました。私の子供たちはキリストにお任せします。私自身、キリストを否定することはありません！」 なんと勇敢なことか！ もし人の内にキリストが宿っていなければ、どうしてそこに勇氣が宿るだろうか？ しかし今日、キリストのない人々は、自分の人生全体をゴミの上に築いている。

あの頃の母親たちは立派だったし、子供たちも立派だった。コニツァで、妊娠中の隣人が一人でトウモロコシの土寄せに畑へ行ったことを覚えている。徒歩で1時間半もかかる道のりだった。そこで彼女は赤ちゃんを産み、その子をスカートの裾に包んで村へ戻ってきた。「私、赤ちゃんを産んだのよ！」 ——彼女は私たちの家の前を通りかかるとき、そう自慢げに言った。占領下で、厳しい時代だった。ところが今、たった一人の子供を産むために、恐怖のあまり6〜7ヶ月もベッドで過ごす女性たちがいる。もちろん、病気のためにそうしている人たちのことではない。

自然な恐怖は足かせとなる

— ゲロンダ、私はとても臆病です。もし困難な状況に陥ったら、どうすればいいのか分かりません。恐怖はどこから来るのでしょうか？

— 誰かには、おそらく幼少期に何かが起こり、それが原因で恐れているのかもしれません。多くの場合、恐怖は自然なものではありますが、信仰の欠如や、神への信頼の欠如から生じる恐怖である可能性もあります。しかし、恐怖は[必要な]ブレーキでもあります。なぜなら、それが人が神にすがりつく助けとなるからです。恐怖の中で、何かにすがりつくものを探し求める中で、人は神にすがらざるを得なくなるのです。例えば、未開人が暮らす暑い国々には、野生動物や大きな獣、ボアなどが生息しています。これは、人々が神に助けを求め、神にすがり、自分の指針を見出さざるを得ないようにするためです。もしこれがなかったら、一体何がこれらの人々を少しでも抑え止めることができたのでしょうか？ 神が整えられたすべてのものには、何らかの意味があるのです。

— では、真の神を知らずに、恐怖から助けを求める人々は、その助けを得られるのでしょうか？

— ほら、彼らは顔を天に向けています。それだけでも、すでに何かを意味しています。幼い子供たちにとっても、恐怖は抑制の役割を果たします。少し怖がらせないと、母親にも父親にも全く

言うことを聞かないような子供たちがいます。私も幼い頃、「今、ブムブルが来るよ！」と言われていました。幼い子供には、怖がるのが自然なことなのです。しかし、子供が成長し、心も成熟するにつれて、その恐怖は薄れていく。自然な恐怖は、子供の頃だけ役に立つものだ。大人になってから、何もない場所を恐れるような人は、哀れな存在だ。私のカリヴァには、霊的な人々が訪ねてきて、こう言うのだ。「ほら、私たちのそばで誰かが亡くなってしまう、そのせいで私たちは常に恐怖を感じているのです」と。そして、その恐怖が消えるよう祈ってほしいと頼んでくる。「いや、ここにいる人たちは死を常に心に留めようとしているのに、君のそばで誰かが亡くなったからといって、その恐怖を追い払いたいなんて言うのか!」と私は答える。

女性には、生まれつき少しばかり恐怖心が強いものです。恐れない女性はほとんどいません。しかし、そのような女性は従順でないため、家庭内で問題を引き起こす可能性があります。また、生まれつき臆病ではなく、心に勇気を秘めている男性も、傲慢になってしまうことがあります。一方で、ひどい臆病者の女性もいる。生まれつき恐怖心を抱いている女性が奮起し、勇気を身につけることができれば、それは大いなる成果だ。女性には生来の犠牲精神があり、それゆえに多くの自己犠牲を払うことができる。これは、生まれつきの勇気があるにもかかわらず、男性にはない資質である。

死を恐れない者を、死は恐れる

—ゲロンダ、恐怖はどのようにして追い払うのですか？

—勇気です。人が恐れるほど、敵はより強く誘惑してきます。臆病さを持つ者は、それを追い払うよう努めなければなりません。私が幼い頃、コニツアの墓地のそばを通るのが怖かったことがあります。そこで、私は墓地で三晩寝たところ、恐怖は消え去りました。私は十字を切ってそこに入り、誰かを怖がらせないよう、懐中電灯さえ点けませんでした。もし人が勇敢になるために努力せず、真の愛を身につけなければ、何か困難な状況に直面したとき、鶏でさえその人のことを嘆くことになるでしょう。

—つまり、ゲロンダ、勇気を奮い立たせて恐怖を克服できるということですか？

—他者が死なないために自分が死ぬということを、喜ぶべきなのです。そのように心構えをすれば、何も恐れることはありません。多くの慈愛、愛、そして自己犠牲から、勇気が生まれるのです。しかし、今日の人々は死について聞くことさえ嫌がります。葬儀業を営む人々は、人々に死を連想させないよう、店の看板に「葬儀社」ではなく「葬儀サービス」と書いていると知りました。しかし、人々が死を心に留めていなければ、彼らは現実からかけ離れた生活を送っていることになります。死を恐れ、虚しい人生を愛する者たちは、細菌さえも恐れており、常に恐怖に打ち負かれ、精神的な停滞状態に陥っている。一方、大胆不敵な人々は決して死を恐れず、それゆえに熱意と自己犠牲の精神をもって奮闘する。死を目前に置き、日々それについて考えることで、彼らはより霊的に死に備え、より大きな大胆さをもって奮闘する。そうして彼らは虚飾に打ち勝ち、すでにこの世において永遠と天国の喜びの中で生き始めるのである。そして、自らの理想、信仰、そして祖国のために戦場で戦う者は、十字架の印を胸に刻み、恐れることなく戦え。なぜなら、彼には神

という助け手がいるのだから！もし人が十字架の印を胸に刻み、自らの命を神の御手に委ねるならば、その人が生きるべきか死ぬべきかを、後に神が裁かれるのである。

—では、人は軽率さから生じる恐怖を感じずに済むものなのでしょうか？

—それははるかに悪いことです。なぜなら、危険な状況に陥ったとき、そのような人は深刻な窮地に陥り、その軽率さの代償を余すところなく払わなければならないからです。ですから、を少しは恐れる人は、注意深く、無謀に危険に飛び込むことはありません。善を行うよう自らを奮い立たせ、¹⁷¹、しかし自分自身ではなく、神を信頼しなければなりません。

大胆さには大きな意味がある

極限状況では、パニックに陥り始めることが最大の害となる。危険に直面した時、何よりも大切なのは動揺しないことだ。ほら、鶏が鷲と戦いを挑み、猛然と襲いかかるではないか！そして、子猫を守るために犬と戦う猫の姿を見てごらん！尻尾を筒のように立て、威嚇するようにヒス音を立て始めるのだ！動物は命がけで挑むのに、人間は臆病者になってしまうのだ！...

パニックに陥ってはいけません。特に女性はパニックに陥りやすいものです。占領中、コニツァから徒歩2時間の場所へ出かけた時のことを覚えている。仲間たちは[少し]先へ進み、そこでギリシャ兵のヘルメットと軍服を見つけ、それを身につけて聖コンスタンティヌスの礼拝堂へ向かった。私もイコンに祈りを捧げるためにそこへ向かった。当時、私は十五歳だった。母親たちは遠くから軍服姿の子供たちを見るやいなや、「イタリア軍が来る！」と叫び始め、逃げ出す準備をした。誰なのかさえ確認もしなかったのだ！いたずらっ子たちはギリシャのヘルメットをかぶっていただけなのに、怯えた母親たちは彼らをイタリア兵と勘違いし、自分の子供たちから逃げ出したのだ！

大胆さには大きな意味がある。もし、身体は健康だが臆病な人に「あら、あなた、顔色が悪いわね！どうしたの？」と言ったら、その人は医者に行くだろう。しかし、顔色が悪いのは、睡眠不足だったり、歯が痛かったりといった理由によるものかもしれないのだ。ギリシャ人は、前に突き進むか、パニックに陥るかのどちらかだ。臆病者は何の役にも立たない。戦争において臆病者は誰にも必要とされず、信頼もされない。問題を起こさないよう、任務や前線には連れて行かれない。臆病な兵士一人でも、作戦計画を知らなければ、一師団全体を崩壊させるほどのパニックを引き起こしかねない！恐怖は臆病者の想像力をかき立て、彼はこう叫び出すかもしれない。「あいつらだ！ああ、近づいてくる、もうここにいる、切りつけてくる！ああ、一体どこへ逃げればいいんだ？！敵が山ほどいる！あいつらに飲み込まれてしまうぞ！」そのような人間は多くの悪事を働くことになる。なぜなら、人は他人の影響を容易に受けてしまうからだ。一方、勇敢な人は敵を見ても、「ふん、これって人間か？まるで蟻のようだ！」と唾を吐き捨てるだけであり、他の者たちも[その言葉に]勇気づけられて果敢に攻撃へと駆け出す。だからこそ、軍隊では「困難な任務は、二十人の臆病者よりも、五人の勇敢な者が冷静に遂行するほうがよい」と言われるのだ。

¹⁷¹ マタイによる福音書11章12節を参照。

— つまり、ゲロンダ、困難な状況において、外的な危険は内的な危険ほど恐ろしいものではない、ということですね。

— ええ、その通りです。スーリ¹⁷² も、スーリ出身のピリ・ユスが裏切らなければ、トルコ軍は占領できなかったでしょう。彼はトルコ軍を秘密の小道へと案内したのです。 例えばこうだ。5つの村が仲良く、団結して、アリ・パシャそのものと対峙したのだ。¹⁷³ 彼は、スルタンにさえ反旗を翻すほど強大だった。¹⁷⁴ スリの住民たちはアリ・パシャのすぐそばにいたが、彼に手強い抵抗を見せた。そして、あの地の女性たちはどれほど勇敢で、互いに団結していたことか！彼女たちもカービン銃を手にとったのだ。

規律

— ゲロンダ、もし集団の中で規律の欠如が常態となっている場合、困難な状況が生じた時に、その構成員たちは規律を守ることができるでしょうか？

— 火災の際、誰もが思いつきで行動するのではなく、むしろ全員が指示に従って行動します。責任者は状況を把握し、他の人たちに何をすべきかを指示します。そうでなければ、人々はパニックに陥り、火を消すどころか、かえってさらに火を煽ってしまうでしょう。ある時、私は聖山へ戻る途中でした。私たちの小船がヴァトペドス修道院とパントクラトール修道院の間を航行していたところ、北東の風が吹き始め、嵐が巻き起こりました。船頭は、そうしなければ沈んでしまうため、船を波に逆らうように操った。すると、イエリッソス出身の臆病者で、¹⁷⁵ 船や航海のことなど何も分からず——彼はロバの世話係だった——が、こう叫び始めた。「一体何をしているんだ？俺たちを沈めるつもりか！ 見えないのか？ このままじゃカヴァラ¹⁷⁶まで運ばれちゃうぞ！」すると乗客全員が飛び起きて船頭に群がり、かわいそうな彼はただ「放っておいてくれ、俺の仕事は分かっているんだ！」と繰り返すばかりだった。幸いなことに、乗客の一人が船乗りで、他の乗客たちをなだめた。「彼を放っておいてくれ、彼は自分の仕事をわかっている！波を横切るように進まなければならないんだ。」もしあの船乗りがいなかったら、船は沈んでいただろう。なぜなら、乗客

¹⁷² スリ——エピロス（ギリシャの地方）のいくつかの村からなる連合体。トルコ支配下においても独立を保ち、1790年から1893年にかけて征服者たちに対して武力闘争を展開した。——訳者注

¹⁷³ アリ・パシャ（テベレンリ）、1714-1820年——ヤニナの有名なパシャ。山賊の首領ヴェリスの息子であり、スリオットたちに対して苛烈な戦争を繰り広げ、スルタンと対立し、1820年に殺害された。——訳者注

¹⁷⁴ スルタン——トルコの統治者。もともとはオスマン帝国の指導者の称号であり、後にあらゆるイスラム国家の首長を指すようになった。

¹⁷⁵ イエリッソス——ハルキディキ半島の東海岸にある港で、アトス山の北東海岸沿いを航行する旅客船がここに就航している。——訳者注

¹⁷⁶ カヴァラ——北ギリシャにある都市および港で、アトス山から肉眼で見渡せる範囲内にある。——訳者注

たちが船長に仕事をさせなかったからだ。ご覧の通り、一人の臆病者が現れたことでパニックが起こり、そこにいた全員が飛び上がって、船を沈没させかねなかった。しかし、こうした事態に備えて、船長が[本当に]船を操縦できない場合には、舵輪を握る第二機関士が常に待機しているのだ。

ギリシャ人はそもそも従うのが苦手だ。ローマ・カトリック教徒は教皇の無謬性を信じるが、我々ギリシャ人は自分の考えを信じている。つまり、我々全員が.....無謬性を備えていることになる！なぜトルコ人の政治は優れていると考えられているのか？それは、トルコ人の中に賢い人が少なく、その大半があまり頭の回らない人々だからだ。そのため、トルコでは数少ない賢い人々が指導者となり、残り的人々は自然と彼らに従うことになる。一方、ギリシャ人は圧倒的多数が非常に賢いため、一人残らず指揮を執り、物事を決定したがるが、従うのは苦手だ。

イタリア人もこう言っていた。「ギリシャ人10人のうち5人は指揮官になりたがる！」例えば、私たちがどこかへ行くことになるでしょう。ある人はもっと近道を知っていて、別の人は反対側からの別の道を知っていて、また別の人はさらに別の道を知っているかもしれない.....「いや、こっちへ行こう、そっちの方がいい」と一人が主張する。「いや、あっちへ行こう」と、別の人が反論するだろう。結局のところ、誰か一人が命令を下さなければ、数時間、あるいは数日もの時間が経過しても、旅人たちは依然としてその場から一步も動かず、同じ場所に留まり続けることになる。しかし、道を知っている誰か一人が指揮を執れば、たとえその人が提案した道がほんの少し遠かったとしても、いつかは目的地にたどり着くでしょう。もちろん、指揮を執る人が最短ルートを知っているのが一番です。しかし、たとえその人が知っている道が最も長い道だったとしても、命令に従えば、旅人たちはやはり目的地にたどり着くのです。

神は人の心構えを見守り、助けてくださる

— もし時が私たちを深刻な困難に直面させ、霊的な備えがない場合、ただ善意があるだけで耐え抜くことができるでしょうか？

— どうして耐えられないというのか？神は人の心構えを見て、助けてくださるのだ。それに、困難な局面において、一見すると勇気などなさそうに見える人々でさえ、しばしば偉大な勇気を発揮するものだ。覚えているが、私たちの軍隊には、これまで一度も犠牲精神も勇気も見せたことのないある中尉がいた。しかしある日、反乱軍に捕らえられそうになった時、彼は礼拝堂の陰に身を隠し、自動小銃一本で、私たちが撤退するまで彼らの進撃を食い止めた。そのおかげで、私たちは助かったのだ。彼はそこから、上下左右へと連射を浴びせ、反乱軍が前進するのを阻止した。そして、私たちに気づかれないよう、その場を逃げ去った。

しかもその後、彼は自分の英雄的な行為を自慢するために、「俺が奴らを引き止めたから、君たちは助かったんだ...」などとは一言も言わなかった。当時、私たちは皆「あの自動小銃が私たちを救った！」と言っていた。彼も「あの自動小銃が私たちを救った」と繰り返していた。皆が言う通り、彼もそう言っていたのだ。しかしその後、私たちは彼の正体に気づいた。あの人が皆と一緒にいたこと、あの人もいたことを思い出し、ただこの中尉だけがそこにいなかったことに気づいたのだ。そうして、それが彼だったと判明した。ところで、もし彼が反乱軍に捕らえられていたら、

どうなっていたと思う？ 彼らは彼を容赦しなかっただろう。彼にすべての憎しみをぶつけ、「お前は俺たちにこれほど多くの害を与えた。さあ、こっちへ来い。ペンチでお前の爪を一つずつ引き抜いてやる！」と言ったに違いない。世俗的な人間でありながら、あのような犠牲を払ったのだ！ 彼が犠牲を払ったのは、私たち全員よりも大きな危険に身をさらしたからだ。さて、あなたたちは、のような犠牲を払う覚悟があるだろうか？ この中尉は、聖父たちの著作も読んでいなかったし、霊的な生活についても知らなかった。私は彼と面識があったが、彼には素朴さと誠実さがあった。一方で、殺された反乱者を見つけると、その首を切り落とし、村中を練り歩き、自分たちを勇敢な男たちであるかのように振る舞う者たちもいた！ だからこそ、勇気だけでは不十分であり、その勇気が魂の中で確固たる根拠を持つためには、人には犠牲の精神も備わっていなければならないのだ。

精神的に危険に立ち向かおう

危機的な局面では、常に機転と勇気が必要だ。占領中、イタリア兵たちは5、6頭のラバを連れて私たちの畑に来て、そのラバにメロンを積み込んでいた。ある日、私は彼らにこう言った。「このメロンは種用にとっておいたものだから、あっちのメロンを持って行ったほうがいいよ。」すると、あるイタリア兵が鞭を掲げて私に尋ねた。「これが見えるか？」私はその鞭に手を触れ、じっと見つめてから言った。「ボネ！」——つまり、「いい鞭だ！」という意味だ。まるで、それがどれほど美しいものか私に見てほしくて、彼が見せてくれたかのようにだった！ イタリア人の怒りはたちまち消え、彼は笑って立ち去った。内戦当時のもう一つの出来事も覚えている。二人の〔我々の〕兵士が、メロンやトマトを頼みに農園の主人のところへやって来た。彼らは自分のライフルを脇に置き、農園の奥へと入っていった。家主は遠くから彼らに気づくとすぐに銃を手に取り、彼らを狙い始めた。すると、一人の兵士が赤いトマトを掴んで叫んだ。「武器を捨てろ！ さもないと今すぐ手榴弾を投げつけるぞ！」家主は武器を捨て、飛び起きて逃げ去った。

— なんとという機転と勇気だろう！ ...

— もう一人の兵士は、野生の梨の木に自分のブルカを掛けました。ほどなくして、山から反乱軍の一人が降りてきて、その兵士を捕まえようとしてました。すると兵士は、少し離れたところにブルカが掛かっている方向を向き直して、「指揮官、こいつをどうしろってんだ？」と叫びました。そして、まるで指揮官から合図を受けたかのように、山賊に向かって「武器を捨てろ！」と怒鳴りつけた。山賊からライフルを奪い取り、武装解除したのだ。

「指揮官は、ゲロンダ、あのブルカだったのですか？」

「そうだ、ブルカだ！ ほら、兵士はたった一人、ブルカも一枚しか持っていなかったのに、武装した男からライフルを奪い取ったんだ！ 彼はそのようにして、反乱者たちから山ほどのライフルを奪い取った。勇気が必要なんだ！ 聖山にいたあるロシア人のケリオット修道士のことを覚えている。ある日、強盗たちが彼を襲いに来た。奴らが壁をよじ登ろうとした時、彼は上から飛び降りてこう叫んだ。「さあ、コルトで撃ってやろうか、それともナガンでか？！」奴らは慌てて逃げ出した。また別の修道士は、自分の独房に強盗が押し入ってきた時、フライパンを手に取り、まるで電

話で話しているかのように装ってこう言った。「もしもし、強盗に襲われた！」——といった具合に。強盗たちは、彼が警察に電話していると思い込み、逃げ去った。また、こんな出来事もあった。屈強な大男、まさに巨人といった男が、ある羊飼いの喉元をつかんで絞め殺そうとした。恐怖のあまり、その羊飼いは目を丸く見開いたため、その大男は「なんでそんなに不気味に俺をじろじろ見てるんだ？」と尋ねた。「どの木に君を放り投げようか、見てるんだ」と、羊飼いはかすれた声で答えた。悪党は怖くなって、彼を放した！...

だからこそ、慌てふためいてはいけないと言うのだ。冷静さを保ち、頭を使って行動すべきだ。なぜなら、頭を使わなければ、単なる愚かさから裏切りさえ犯してしまうかもしれないからだ。何が起ころうとも、祈り、考え、行動しなければならない。最善の策は、困難な状況に常に霊的に立ち向かうよう努めることだ。しかし今日、その両方の勇氣は欠けている。聖性と神への大胆さから生まれ、困難を霊的に乗り越える助けとなる霊的な勇氣もなく、危険な状況で怯えないために必要な自然な勇氣もない。何らかの大きな悪を食い止めるためには、深い聖性が必要であり、そうでなければ悪を克服する根拠は見つからない。もし修道院の兄弟団の中に霊的な勇氣を持つ者がいれば、悪意を持ってやって来た者を、その場で釘付けにする様子を目にすることになるだろう。その者は、片足を修道院の中庭に、もう片足を塀の外に置いたまま、身動きが取れなくなるのだ！彼は霊的な意味で、悪意ある者の頭に「一発」放つのだ。拳銃ではなく、数珠からである。彼がほんの少し祈るだけで、悪人は動けなくなる。衛兵のように凍りついてしまうのだ！¹⁷⁷ もし修道会の中に霊的な境地にある者がいれば、その人は悪を食い止め、人々を助け、修道院の守護者となるだろう。香油を携えた女性たちは、何にも怯えなかった。なぜなら、彼女たちは霊的な境地にあり、キリストに身を委ねていたからだ。もし彼女たちが霊的な境地になかったなら、果たしてキリストに身を委ねたり、あの時のような行動をとったりできただろうか？

霊的な生活において、最も臆病な者でさえ、キリストと神の助けに身を委ねれば、大きな勇氣を得ることができる。その人は最前線へ進み、敵と戦い、勝利を収めることができるだろう。一方、悪を行おうとする不幸な人々については、たとえ勇氣があったとしても、彼らは恐れている。なぜなら、彼らは自らの罪悪感を抱えており、ただ自分の野蛮さにのみ依拠しているからだ。しかし、神の人は神の力を持ち、正義もまたその人の味方である。ほら、小さな犬がほんの少し吠えるだけで、狼はすでに逃げ出してしまう。それは、自分に罪悪感を抱いているからだ。神は、たとえ狼でさえ小さな雑種犬を恐れるように仕組まれた。なぜなら、主人の家では正義がその犬の味方だからだ。ましてや、キリストをその内に宿す者に悪を働こうとする者は、なおさら恐れるに違いない！それゆえ、私たちはただ神だけを恐れ、たとえ人がどれほど邪悪であろうとも、人を恐れてはなりません。神への畏れは、最も臆病な者でさえも勇敢な者へと変えます。人が神とどれほど結びついているかによって、その人にとって恐れるものは何もなくなるのです。

¹⁷⁷ 参照：長老パイシイ・スヴィャトゴレッツ著『カッパドキアの聖アルセニオス』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、1997年、72頁。

神は困難の中で助けてくださる。しかし、神が神の力を与えてくださるためには、人間もまた、自分にできる限りの小さなことを捧げなければならない。

第4章。 信仰を持つ人にとって、 殉教は勝利であるということ

この状況を打開するためには、一部の者が戦いで倒れなければならないだろう

厳しい時代がやってくる！...私たちには「激動」が待ち受けている。その「激動」とは何か、ご存知だろうか？ もしあなたが少しでも霊的な状態にないなら、それに耐えられないだろう。主よ、私たちをお守りください。しかし、私たちは信仰を否定するに至る事態さえ迎えることになるだろう。兄弟として団結し、霊的な生活を始め、キリストと一つになるよう努めてください。もしあなたがたがキリストと一つになれば、悪魔も苦しみも恐れることはありません。この世では、人々は至る所で圧迫され、脅かされています。しかし、キリストの御許にいれば、何を恐れる必要があるのでしょうか？ 聖キリクスを覚えていますか？¹⁷⁸ 彼は生後3歳でしたが、「啓蒙」しようとした暴君に蹴りを食らわせました。聖人の伝記を読んでください。それらは魂にとって大いに助けとなります。なぜなら、それらを読むことで人は聖人たちとつながり、その心の中に畏敬の念と犠牲への志が燃え上がるからです。

この人生は、ただ安楽に過ごすためのものではありません。死ぬなら死ぬのですから、せめて、ふさわしい形で死にましょう！ どうせ他に何もしていないのですから、もし神が私たちに殉教の栄誉を授けてくださるなら、それが悪いことでしょうか？ ある日、一頭のラバの御者が、涙を流しながら私のカリヴァを訪ねてきて、こう言った。「今夜は一人きりでいるな。お前を殺そうとしているんだ。」「誰が？」と私が尋ねると、「あいつらだ」と彼は言った。「五、六人くらいだ。」彼は五、六人の無神論者たちを案内していたのだ。彼らが聖山に滞在する目的が何だったのか、誰にもわからない。彼らは彼を間抜けだと思い、彼の目の前で話し合っていたのだが、彼はそれを耳にただけで、駆けつけて私に警告してくれたのだ。夕方、私が寢床についた途端、犬の首輪の鈴の音が聞こえた。¹⁷⁹ 窓の外を見ると、3人の若者がいた。「おい、おじいさん、開けろ！」と彼らは叫ぶ。私は言った。「君たち、何がしたいんだ？ こんな時間にうろついているなんて、頭がおかしいんじゃないか？ 君たちに疑いの目が向けられるぞ！ 他の人たちはもう投獄されてしまったんだ

¹⁷⁸ 聖殉教者キリコの記念日は7月15日である。

¹⁷⁹ 狩猟犬の首輪に吊るされ、獲物を驚かせて逃がすための鈴。――訳者注

。それに、俺にはお前たちと話す気はない。」——「じゃあ、俺たち——」と彼らは尋ねた。「明日来てもいいか？何時に来ればいい？」——「お前たちは明日、好きな時間にきてくれ。俺も、もしできたら会ってやるよ。」そう言って彼らを追い返した。見ると、懐中電灯の光が遠ざからない。彼らは少し上の場所で立ち止まっていた。¹⁸⁰ 私は起き上がり、服を着て、修道服を身にまとい、彼らを待つことにした。心の中は平穏だった。翌日、3人ずつのグループが3組やってきたが、あの夜に来た連中からは誰も 現れなかった。彼らもちろん、私からお金は見つからないことを知っている。なぜなら、私にはお金がないからだ。彼らが私に反旗を翻すのは、もっぱら精神的な理由からに過ぎない。

また別の時、ゴリラのようにがっしりとした大男が私のカリヴァを訪れ、隅っこに座った。その時、私はちょうどあるグループと話をしており、彼らにこう言っていた。「お前たちはパレードには向いているが、戦いには向いていない！キリストはご自身を犠牲に捧げられたのだ！我々には正教がある！聖人たちは殉教の道を歩み、今も我々を助けてくれている。もし彼らが殉教していなかったら、我々がどうなっていたか誰にも分からない。」この言葉の数々に、その男は激怒した。人々は次々とやって来ては去っていったが、彼は何かを思案しているようで、ずっと同じ場所に座り続けていた。彼からは冷たい気配が漂っていた。ついに最後の人たちも去っていった。「さあ、行こうよ」と私は彼に言った。「もう暗くなったし、どこへ行くつもりなんだ？」——「その質問は」と彼は答えた。「私には興味がない。」——「それは」と私は言った。「私には興味があるんだ。さあ、行こう！」すると彼は私に飛びかかり、喉元を掴んだ。「どうだ、——」と彼は唸った、「お前、その『神々』と一緒に！」この「その『神々』と一緒に」という言葉は、まるで彼が神を冒涇したかのように、私の心を深く傷つけた。まさか、私が偶像崇拝者だということか？「一体どんな『神々』のことだ、無神論者め？」と私は言った。「私は三位一体の唯一の神に仕えている！さっさとここから失せろ！」私は彼を突き飛ばすと、彼は地面に倒れ込み、うずくまった。彼がいつの間にドアの外に出ていたのか、私にはさえわからなかった。「もし俺を逆さ吊りにされたら——と、その時思った——せめてヘルニア¹⁸¹ が元の位置に戻るだろう。」その無神論者は最後まで居座り、どうやら俺を始末しようとしていたようだ。彼は俺の喉元を掴んで、絞め殺そうとしたのだから。

死を覚悟した者は、何も恐れない

今日、困難に立ち向かうためには、人は自分の中にキリストを宿していなければならない。キリストから、自己犠牲を捧げるための神聖な慰めを受けることになるのだ。もしそれがなければ、

¹⁸⁰ 至聖なる神母の降誕を記念する「パナグダ」という修道室は、至福の長老パイシイが晩年を過ごした場所であり、人里離れた森に囲まれた場所にある。そのすぐ近くには、他の修道室や住居はない。——訳者注

¹⁸¹ ここで述べる出来事は、1987年に、長老がヘルニアに苦しんでいた時に起こった。

困難な瞬間に何が起こるだろうか？ どこかで読んだのだが、アブドゥル・パシャ¹⁸²が聖山から五百人の若者たちを連れ去ったという。その中には修道見習いもいれば、トルコ人から逃れて聖山に身を隠していた者もいた。どうやら当時、ギリシャ独立戦争のさなか、若者たちはトルコ軍に連れ去られてイエニチェリにされるのを避けるため、聖山に避難してきたようだ。¹⁸³ 若者たちがキリストを否定しなければ、アブドゥル・パシャは彼らをウラヌボリスの塔で絞首刑に処した。彼は聖山でこれほど多くの若者たちを捕らえたが、そのうち殉教の道を選んだのはわずか5人だけだった！ 残りの者たちはキリストを否定し、イエニチェリとなった。勇気が必要だ。これは冗談ではない。もし人が不当に傷つけられたと感じたり、自尊心を持っていたりすれば、その人には神の力が宿っていない。そのような人が、これほど困難な状況に置かれたとき、どのように振る舞うだろうか？

ある総主教庁の司教の話に、私は深く感銘を受けた。最初は彼にこう言った。「一体どういうことなのか？ 一方ではエキュメニズムが迫り、他方ではシオニズムやサタニズムが台頭している。まもなく、双頭の鷲の代わりに、二本の角を持つ悪魔に敬意を払うことになるだろう！」——「今日では」と彼は私に答えた。「ケサリアの主教パイシオス2世のような主教を見つけるのは容易ではない。」¹⁸⁴ では、パイシオス2世は一体何をしたのか。彼がスルタンに嘆願に行く際、腰に縄を巻いていた。つまり、トルコ人に絞首刑にされることをあらかじめ覚悟していたのだ。まるでスルタンにこう言っているかのようなようだった。「縄を探す必要はない。時間を無駄にするな。私を絞首刑にしたいのなら、縄は用意済みだ。」彼は困難な問題を抱えてスルタンの元へ遣わされ、しばしば厳しい状況下で総主教庁を救った。彼が年老いて、再びスルタンの元へ赴かなければならなくなった時、馬の鞍越しに、互いに結びつけられた二つの大きな籠が投げ渡された。一方の籠には何かを積み込み、もう一方の籠に彼を乗せ、そうして彼はコンスタンティノーブルへと旅立った。ある時、トルコ人は、ギリシャ人をトルコ軍に徴兵するという勅令¹⁸⁵を發布した。キリスト教徒にとって、トルコ人と共に兵役につくことは困難であった。なぜなら、彼らは自分たちに必要な宗教的欲求を満たすことができなかったからである。さらに、その少し前、ロシアもトルコに対し、ギリシャ人がキリスト教の義務を果たすことを妨げないように要求していた。そこで総主教はメトロポリタン・パイシイを招き、スルタンの元へ遣わした。メトロポリタンは縄で身を縛られ、再びスルタンの前に現れた。スルタンは彼にこう言った。「ギリシャ人は祖国に奉仕するために軍隊に入らなければならない。」「はい」とパイシオス大主教は答えた。「私も、ギリシャ人が軍隊に奉仕することに

¹⁸² メフメト・エミン・アブドゥッラー・パシャは、1821年から1823年にかけてテッサロニキを統治した。

¹⁸³ イェニチェリ——オスマン帝国における懲罰部隊で、通常、トルコに征服されたキリスト教諸民族の若者たちが選抜されて編成された。特別な訓練と教育を受けたイエニチェリは、並外れた狂信性と残虐性で知られていた。——訳者注

¹⁸⁴ パイシイ2世——ケサリアの総主教。カッパドキアのファラシ村に生まれた。フラヴィアノス修道院付属の聖ヨハネ洗礼者神学校で学び、その後コンスタンティノーブルで学び、そこで助祭および司祭に叙階された。1832年、ケサリアの総主教に叙任された。自身の教区におけるヘレニズムの保存のために、恐れを知らぬ闘士として活動した。

¹⁸⁵ フィルマン——スルタンの勅令。——訳者注

は賛成です。なぜなら、これらの土地は古くからギリシャ人のものだったからです。しかし、我々の信仰は異なるため、ギリシャ人だけの独立した軍隊は、別の軍事キャンプに駐屯し、独自の将校などを置くべきです。これは、ギリシャ人も自らの宗教的義務を果たせるようにするために必要なことです。彼らはあなた方と一緒に祈ることはできません。あなた方はラマダン中ですし、¹⁸⁶、我々は主の顕現祭の時期だからです。」——「キリスト教徒に武器を与えるのか？——とスルタンは考えた。——それは危険だ！」「いいえ、いいえ、——と彼は大主教に答えた、——彼らには軍隊に入らないほうがよいでしょう。」別の機会には、アルメニア人たちがスルタンにバルクリを譲ってほしいという請願書を提出し、¹⁸⁷ 好意的な回答を得た。その後、この件についてスルタンと話し合うため、メトロポリタン・パイシイが赴いた。「バルクリは、——スルタンは彼に言った——アルメニア人が受け取るべきだ。なぜなら、その場所は彼らの先祖の遺産だからだ。」——「はい」とパイシイは答えた。「彼らはそこを受け取るべきです。ある場所が我々の先祖の遺産であると知れば、我々はそれを取り戻さなければならないからです。バルクリの譲渡に関する文書をください。私もそれに署名します。私は総主教庁の代表としてここに来たのですから。」彼は文書に署名すると、金製のコンスタンティヌス・ドゥカート¹⁸⁸を取り出し、こう言った。「では、アルメニア人にバルクリを譲り渡そう。だが、その代わり、我々は聖ソフィア大聖堂を取り戻さなければならない。なぜなら、それは我々のものだからだ。それは我々の先祖のものであり、君たちはそれを我々に返還しなければならない。」そう言うと、彼は聖コンスタンティヌスの像が刻まれた金貨をスルタンに見せた。スルタンとの謁見に際し、大主教は証人として、当時船でコンスタンティノーブルに到着したロシア人将校の一人を連れて行った。こうして、スルタンは困難な立場に追い込まれ、バルクリに関する決定を取り消した。「いや、いや」とスルタンは彼に言った。「バルクリはあなたたちのままにしておこう。」というのも、彼には自らの決定を撤回するか、あるいはアヤソフィアをギリシャ人に譲り渡すかの二者択一を迫られていたからだ。お分かりだろうか？メトロポリット・パイシイはトルコ人を思いのままに操ったのだ！それは彼が死を覚悟していたからである。死を覚悟しなければ、何も成し遂げられない。すべてはそこから始まるのだ。

信仰からの逸脱は殉教によって洗い流される

今日、大多数の人々は、穴から蛇を引きずり出すのは他人に任せたいと思っている。自分たちで取り出さないのなら、せめて他人に「注意！そこに蛇はいないか？」と警告し、考えさせるべきだ。しかし、彼らはそれさえもしない。もし私たちが殉教者の時代に生きていたなら、私たちの合

¹⁸⁶ ラマダン——イスラム暦の9番目の月。この期間中、イスラム教徒は毎日朝から夕方まで厳格な断食（飲食、喫煙などの完全な禁欲）を守る。日没から日の出までは、ラマダンの禁制は解除される。

¹⁸⁷ バルクリ——コンスタンティノーブルにある「命の泉」修道院が位置する地域。——訳者注

¹⁸⁸ 聖コンスタンティノスと聖ヘレナが描かれた金貨で、装飾品や護符として身につけられていた。

理主義からこう言っただろう。「私は外見上は神を否定するが、心の中では否定しない。そうすれば、ある役職に任命され、貧しい人々を助けることができるだろう。」しかし、殉教者の時代、教会は偶像の祭壇の火に香を投げ込んだ者たちに聖体拝領を許さなかった。そのような人々は『嘆き悲しむ者たち』の階級に属していたのである。¹⁸⁹ キリストを否認した者たちは、殉教によってその背信を洗い流さなければならなかった。また、偶像破壊運動の時代には、キリスト教徒はイコンを燃やすか地面に投げ捨てるよう要求されたが、彼らはそれを投げ捨てるよりも、殉教者となることを選んだ。もし私たちに「イコンを投げ捨てろ」と言われたら、こう言うでしょう。「まあ、投げ捨ててしまおう。これはルネサンス様式で描かれているから。後でビザンチン様式のものを注文すればいい」と。

— ゲロンダ、教会は隠れキリスト教徒をどのように見なしているのですか？ 彼らはキリストを否定しなかったのですか？

— 真の隠れキリスト教徒たちは、信仰を捨てたりはしませんでした。例えば、トルコ人がカッパドキアのファラス派に属する二十七の集落を焼き払った際、一部の住民はそこから遠く離れた他の地域へ逃げました。そこでは地元の住民は、彼らがキリスト教徒であることさえ知りませんでした。彼らはイスラム教徒だと見なされていたのです。そして、誰かが彼らに「あなたはキリスト教徒か？」と直接尋ねられ、「はい、私はキリスト教徒です」あるいは「いいえ、私はイスラム教徒です」と答えなければならないような状況は、一度も起こりませんでした。こうした人々は「隠れキリスト教徒」である。しかし、誰かが捕らえられ、「お前がキリスト教徒だと分かった」と言われた瞬間、その人は「はい、私はキリスト教徒です」と言わなければならない。つまり、決して自分がムスリムだと言ってはならないのである。古代教会の時代にも、密かに洗礼を受けた信者たちがおり、周囲からはキリスト教徒ではないと思われていた。それでも、必要とされた時には、これらの隠れキリスト教徒たちは公然と信仰を告白した。例えば、聖セバスティアンは軍司令官であり、密かにキリスト教の洗礼を受けていた。他の人々は彼を偶像崇拝者だと考えていたが、彼はキリスト教徒であった。彼は密かにキリスト教徒たちに多大な援助を行っていた。しかし、彼がキリスト教徒であることが明らかになると、彼は信仰を告白し、殉教の道を歩んだ。

あるトルコの村には多くの隠れキリスト教徒がおり、村長は司祭だった。彼の名前はゲオルギ神父だったが、人々は彼をハサンと呼んでいた。ある日、トルコ人が彼のもとを訪れ、ある場所、すなわちカタコンベにキリスト教徒が隠れていると密告した。「心配しないでください」と彼は言った。「私が行って見てきます。」彼は仲間を連れてそのカタコンベへ向かい、そこに集まっていたすべてのキリスト教徒たちを目の当たりにした。すると彼は聖堂の扉へと歩み寄り、フックからエピトラヒルを外して身に着け、彼らに晩課を執り行った！「適切な措置を講じてください」と彼はその後彼らに告げ、トルコ人に対してはこうなだめた。「そこには誰もいない。それはデマだ。

¹⁸⁹ 「嘆き求める者たち」は教会の扉の前に立ち、教会に入る信者たちに、自分たちのために主へ祈ってほしいと懇願した。聖グリゴリオス・ネオケサリウスの『規則』第12条を参照。『規則集』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ。1992年。294頁。——訳者注

」そのような人々は背教者ではない。しかし、キリスト教徒が疑われ、「お前が洗礼を受けているのを見たぞ！お前はキリスト教徒だ」と言われ、彼が「いいえ、私はイスラム教徒です」と答えたその瞬間から、彼は背教者となるのだ。

殉教と謙遜

殉教者となるにふさわしい者は、深い謙遜の心を持ち、キリストを深く愛していなければならない。もし人が利己的な動機で殉教に向かうならば、恵みは彼を見捨ててだろう。サブリキウスを思い出してほしい。¹⁹⁰ 彼はすでに処刑場まで連れて行かれたにもかかわらず、キリストを否認してしまったのではないか。「なぜ私をここに連れてきたのか？」と彼は処刑人たちに尋ねた。「何のことだ、——と彼らは尋ねた——お前はキリスト教徒ではないのか？」——「いいえ」——と彼は答えた。しかも彼は司祭だったのだ！私の内なる声は、彼が謙虚さではなく、利己的な心で殉教に向かったのだと告げている。彼は信仰のためでも、キリストへの愛のためでもなく、殉教を望んだ。だからこそ、神の恵みは彼を見捨てたのだ。なぜなら、人が利己的に振る舞うならば、神の恵みを受け入れることはできないからだ。当然のことながら、困難に直面した瞬間、彼はキリストを否定することになる。

— ゲロンダ、私たちはよく、試練の困難な時に神が力を与えてくださると繰り返していますが……

— 神は、謙虚で、清い心と善意を持つ人に力を与えてくださいます。もし神が真の善意と謙虚さを見出されたなら、豊かな力を与えてくださいます。つまり、神が人に力を与えるかどうかは、その人自身の心構えにかかっているのです。

— ゲロンダ、人は謙遜と善意を持つべきだとおっしゃいました。では、高慢でありながらも善意を持つことは可能なのでしょうか？

— 謙遜について言えば、ここでは少なくとも殉教に際しては、人がそれを持つ必要があるという意味です。高慢であっても構いませんが、決定的な瞬間にこう言うのです。「神よ、私は高慢です。しかし、今、少しばかりの力を与えてください。そうすれば、苦しみの中であなたへの愛を証しし、私の罪を贖うことができますように。」そして、もし人が謙虚な心持ちで、悔い改めの心を持って殉教に向かえば、神はその人に豊かな恵みを与えてくださいます。誇り高い心持ちで、自分が殉教者になることや、自分の伝記が書かれ、礼拝式が執り行われ、光輪を戴いたアイコンが描かれるだろうといった考えを抱いて、殉教に向かつてはなりません。ある人が私にこう頼んだ。「神父様、私が第五の天に到達できるようお祈りください。」「そうか」と私は彼に言った。「使徒パウロは第三の天に到達した、¹⁹¹ それなのに、あなたは第五の天に到達したいというのか？」「まあ、

¹⁹⁰ サブリキアについては、参照：『聖人伝』第6巻。モスクワ、1905年。180–185頁。

¹⁹¹ 参照：コリントの信徒への手紙二 12章2節。

」と彼は答えた。「私たちが『より大きなもの』を求めるべきだと書かれていないか？」¹⁹² 聞いてごらんよ！ もし人が、樂園で栄光を得るために殉教に向かうのなら、その人は殉教など考えないほうがよい。真の、本物のキリスト教徒は、たとえ樂園で再び苦しみや拷問に遭うことを知っていたとしても、それでもなおそこに入りたいと切望するだろう。この地上である種の苦しみを耐えれば、天国ではもっと良くなるなどと考えてはならない。こうした世俗的な計算は捨て去らなければなりません。私たちが望むのはキリストです。殉教があろうとも、毎日それに直面しようとも、毎日、いや一日に二度、三度と打たれようとも——私たちにはそんなことはどうでもいいのです。私たちにとって重要なのはただ一つ、キリストと共にいることだけです。

— ゲロンダ、人は怠惰な生活を送りながら、必要な時には大胆にキリストを告白することはできるのでしょうか？

— そのような人がそうするようになるためには、その人の心の中に慈愛と犠牲の精神がなければならない。だからこそ、私はあなたに、自分の中に高潔さと犠牲の精神を育む必要があると言ったのだ。一人は他者のために自分を犠牲にしなければならない。聖ヴォニファティウスと聖アグライダを覚えていますか？ ローマで、彼らは不品行な生活を送っていましたが、食事の席に着くとき、彼らの心は貧しい人々へと向いていました。まず彼らは飢えた人々を急いで養い、それから自分たちが食事をとったのです。彼らは情欲に支配されていたにもかかわらず、心には慈愛と貧しい人々への憐れみがありました。彼らには犠牲の精神があり、だからこそ神は彼らを助けてくださったのです。アグライダは、罪深い生活を送っていたにもかかわらず、聖なる殉教者たちを愛し、彼らの聖遺物を大切にしていた。彼女はヴォニファティウスに、家の他の使用人たちと共に小アジアへ赴き、そこで殉教者たちの聖遺物を買取り、集めてローマへ持ち帰るよう命じた。すると、のちの殉教者となる彼は微笑みながら彼女にこう言った。「もし私の遺骨が運ばれてきたら、受け取ってくれるか？」——「そんな冗談は言わないで」とアグライダは答えた。ついに聖ヴォニファティウスはタルススに到着し、殉教者たちの遺骨を買戻そうと、円形闘技場へ向かった。

そこで、キリスト教徒たちの拷問の様子を目の当たりにし、彼は彼らの忍耐強さに深く感銘を受けた。彼らのもとへ駆け寄り、その縄や傷に口づけをしながら、ヴォニファティウスは、公の場でキリスト教徒であることを告白する強さをキリストが与えてくださるよう、彼らに祈ってほしいと懇願した。こうして、彼は殉教によって自らの信仰を証し、同行者たちは彼の遺骨を買取り、ローマへと運び帰った。そこでは、主の天使がすでにアグライダに、この出来事を伝えていた。こうして、ヴォニファティウスがローマを去る前に冗談めかして予言していたことが、現実のものとなったのである。その後、アグライダは財産をすべて施し、さらに十五年間、苦行と貧しさの中で生き、聖人としての境地に達した。¹⁹³ ご覧の通り、彼らの人生は、当初は情欲に溺れ、正しい道から外れてしまった。しかし、彼らには犠牲の精神があり、神は彼らを見捨てなかった。

¹⁹² 参照：コリントの信徒への手紙一 12章31節。

¹⁹³ 聖ヴォニファティウスと聖アグライダの記念日は12月19日である。

聖人たちはなんと勇敢だったことでしょう

— ゲロンダ、もし私が聖エカチェリーナの車輪を目にしたなら、恐怖のあまり死んでしまうと思います！

— もしあなたが車輪刑に処される前に死んでしまったなら、それは良いことでしたし、神の祝福だったでしょう。車輪刑が始まったのに、それを耐えられなかったとしたら、それは苦しみだったでしょう。殉教者たちは神に好意を持たれており、キリストが彼らを助けてくださったので、彼らはその痛みを耐え抜くことができたのです。

聖なる殉教者たちは、なんとキリストへの愛に満ち、なんと勇敢だったことか！ 聖ソロモニアは、7人の子供たちと共に¹⁹⁴ — 一人また一人と、全員が拷問の末に殉教した。聖ロンギン¹⁹⁵ は、自分を捕らえに來た兵士たちのために饗宴を催し、彼らを自宅に迎え入れた。やって來た者たちは、ロンギンの首を刎ねるために彼を早急に引き渡すよう迫りましたが、彼は「私が彼をお見せしましょう！」と言いました。彼が「私がロンギンその人です」と告げると、彼らは躊躇しましたが、聖人は彼らに命じられたことを遂行するよう説得しました。そして、彼らは彼の首を刎ねました。聖ゲデオン・カラカルスキーの忍耐力はなんと並外れていたことか。¹⁹⁶ 「手を切り落とせ」と彼は処刑人たちに言った。「足も切り落とせ、鼻も切り落とせ！ 余計な言葉を交わさないために、すべてを切り落とせ！」驚くべきことだ！ しかし、この境地に達するためには、人は自分自身を愛さず、神を愛さなければならない。母親は、自分の子供を救うために火の中へ飛び込む。彼女は痛みを感じない。なぜなら、彼女の愛は炎の灼熱よりも強いからだ。子供への愛が痛みを凌駕するのだ。それならば、キリストへの愛は、どれほど痛みよりも強くなければならないことか！

殉教へと向かう聖人にとって、キリストへの愛は苦痛を上回り、その苦痛を和らげる。拷問人のナイフは、殉教者たちにとってはバイオリンの弓よりも優しいものでした。キリストへの愛が燃え上がるとき、殉教は祝祭となります。その瞬間、火は水浴びよりも心地よく感じられるのです。なぜなら、その灼熱感は神の愛の炎の中に消え去ってしまうからです。皮膚が剥がされる感覚さえ、愛撫のように感じられるのです。神の御手は心を捉え、頭を捉え、人は「狂人」となる。その心はキリストの中にあり、その心は喜びで満たされているため、痛みも、その他何も感じないのだ。そして、どれほどの聖人たちが殉教の場へと向かい、まるで祝宴に向かうかのような喜びを味わったことか！ 聖イグナティウス¹⁹⁷ は殉教の場へと駆け寄り、こう叫んだ。「私に殉教を許してください、私に獣に食い殺されることを許してください！」彼が感じたような喜びは、次のように言う恋

¹⁹⁴ 聖マカベオの殉教者たちの記念日は8月1日である。

¹⁹⁵ 聖殉教者ロンギヌス百人隊長の記念日は10月16日である。

¹⁹⁶ 聖ゲデオン・スヴィャトゴルツの記念日は12月30日である。

¹⁹⁷ 聖司祭殉教者イグナティオス・テオフォロス（神を運ぶ者）の記念日は12月20日である。

する若者でさえ味わうことはない。「彼女と結婚したい。母も父もどうでもいい！」と言う恋する若者の喜びさえも、聖イグナティウスの「狂気」には及ばなかった。

すべての聖人は、キリストへの愛のために偉業を成し遂げた。聖なる殉教者たちは自らの血を流した。敬虔な父たちは汗と涙を流し、良き薬草の達人のように、自らを霊的な実験台とした。神と、神の像である人間への愛から、彼らは自らを消耗させ、私たちに霊的な処方箋を残してくれたのである。彼らの助けを借りて、私たちは悪を未然に防いだり、自らの霊的な病を癒やしたりして、健全な状態になるのです。そして、もし私たちがさらに熱意を持って彼らの偉業に倣おうと努めるならば、聖性に達することさえできるでしょう。

しかし、もちろん、聖人たちのあらゆる功業、断食、徹夜祈祷など、さらにはすべての聖なる殉教者たちの苦しみでさえ、私たちの主の苦しみとは比べものになりません。なぜなら、キリストは御自身のために苦しんだすべての人々を神聖な力で助け、一人ひとりの痛みは、キリストの偉大な愛によって和らげられたからです。しかし、ご自身に関しては、キリストはご自身の神聖な力を全く用いず、ご自身の被造物への深い愛ゆえに、ご自身の感覚ある御体をもって多くの苦痛を耐え忍ばれた。真に人間となること——[外見だけでなく]内面においても——は、キリストの人類へのこの愛を体感して初めて可能となる。そうでなければ、あなたは神の被造物よりもさらに無感覚な存在となってしまいうだろう。なぜなら、主の苦しみを感じた太陽は、それを見るに耐えられず、その輝きを曇らせてしまったからである。そして大地はこれを見て恐怖に震え、岩々は粉々に砕け散った。墓も激しく揺れ動いたため、長い間眠っていた多くの死者たちを目覚めさせ、彼らを墓から解き放った——それは、人々が神、すなわち自らの恩人であり救い主である方に対して、いかに恩知らずな態度をとったかへの抗議の表れであった。

修道士と殉教

—ゲロンダ、もし人がふさわしい形で霊的な行いに励んでいないなら、困難に直面した際、神が助けてくださると十分に信じ、神に助けを求めることができるのでしょうか？ それとも、試練の時には、準備の労力を避けるためだけに神が助けてくださるのだという考えで、自分を慰めているだけなののでしょうか？ — 備えなければなりません。種を蒔かなければ、神がどのようにしてあなたの畑に実りを与えてくださるのでしょうか。人は種を蒔くべきであり、神は人が蒔いたものに応じて与えてくださいます。軍隊でも「準備せよ！」と言うではありませんか。

—ゲロンダ、私たちはどのように備えればよいのでしょうか？

— 人はいつ、何かに備えができたとみなされるのでしょうか？ 軍隊が戦闘態勢にあるとき、兵士たちは常に準備ができています。彼らはすでにブーツを履き、自動小銃と弾薬を携え、命令を待っているのです。

— その戦闘準備態勢は、どれくらい続くものなのでしょうか？

— 場合によります。修道士は常に準備ができていなければなりません。そうすれば、何も恐れることはありません。何を恐れるというのか？ 死か？ しかし、死は彼のために天国の扉を開く。なぜなら、墓石の下には永遠への鍵が隠されているからだ。さらに、修道士はいつ死のうとも、悔い

改めのうちにいる。世からの離脱と修道服が、それを物語っている。修道士は悔い改め、その後、繊細な霊的实践へと移っていく。神と隣人への愛が増すほど、自分自身への愛は減っていく。そしてその時、使徒パウロが記した言葉が現実のものとなる。「何ものも、私たちをキリストの愛から引き離すことはできない。」¹⁹⁸

世俗の人々は、苦しみへの思いから恐怖に駆られ、神にすがり、「わがキリストよ、至聖なる神の母よ！」と叫ぶ。一方、修道士は神を愛しているからこそ、常に神と共にありたいと願うのである。世俗の人々の多くは、永遠の苦しみを受けることを恐れて善行を行う。一方、修道士は、恩人である神に感謝を捧げるために、感謝の気持ちから善行を行うのである。

—ゲロンダ、殉教と修道生活とはどのようなものか、どうすれば理解できるでしょうか？

—殉教とは何かを少しでも理解するためには、せめて他者からの軽蔑を喜んで受け入れなさい。また、修業とは何かを少しでも悟りたいのなら、キリストのように40日間断食できなくても、せめてキリストが裏切られた水曜日と、十字架にかけられた金曜日だけは断食しなさい。¹⁹⁹ 殉教によってキリストへの愛を証ししたいと願う者たちは、殉教の機会がない場合でも、自分たちを燃え尽きさせるほどのその愛を、亡き人々の燃えるような魂のために肉体の苦行という形で示し、彼らが少しでも安らぎを得られるようにすることができる。修業生活は、殉教と同様に栄光に満ちたものです。なぜなら、[どちらの場合も]人はあらゆる人間的な慰めを避け、神からの慰めを得るからです。

聖なる殉教者たちは、苦難に耐えるという恵まれた機会を与えられたことに、大きな喜びを感じていた。霊的生活における苦行は、殉教から始まったのである。コンスタンティヌス大帝が権力を握ると、彼は（その中には傷つけられた者もいた）死を待っていた牢獄からキリスト教徒たちを解放した。苦難は終わった。しかし、解放された者たちは深く落胆した。なぜなら、牢獄にいる間は殉教の順番を待ち望んでいたのに、今や聖コンスタンティヌス大帝がすべてを台無しにしてしまったからである。彼らは喜びをもって殉教を待ち望んでいたのに、得たのは自由だった。そしてその時——神への愛と、キリストのために苦難を受けるといふ彼らの中に燃え盛る熱烈な願望から——彼らはこの世を去った。そして、ディオクレティアヌスやマクシミリアンが彼らに課したであろう拷問を、彼らは自ら修業として自らに課した。ある者は木に登り、縄で両手を吊るした。彼は痛みの中で祈りつつも、神聖な喜びに満たされていた。またある者は、キリストへの愛ゆえに自らを縛った。「そう、ディオクレティアヌスなら、私をこのように縛っただろう」と彼は言った。そして、このように自らを苦しめることで、彼らは大きな喜びを味わった。この神聖な狂気、この神聖な無謀さから、最初の人々が始め、キリストへの愛のために修業の道に身を捧げた。その後、他の人々も彼らの偉業を模倣するようになった。こうして、私たちの信仰に禁欲主義が入り込んだ。そして、三番目の、最も「奇行にふける」者たちは、「我らはキリストの羊だ！」と言い、地面の

¹⁹⁸ ローマ人への手紙8章35節を参照。

¹⁹⁹ 長老が指しているのは、一日を通して飲食を控えることである。

草だけを食していた。これがいわゆる「ヴォスキ」たちである。²⁰⁰ 彼らは神の恵みと自らの無力さをあまりにも強く感じていたため、「私は恩知らずな動物だ。一生、草だけで生きていく」と言った。そして、彼らは実際にそうした。彼らの心は、キリストへの愛によって高揚していた。「私は、キリストの羊ではないのか？」と彼らは言った。「それなら、草を食べよう。」²⁰¹ しかしその後、この習慣は教会によって禁止された。なぜなら、狩人たちがこれらの隠者たちを野生の動物と間違え、その多くを殺してしまったからである。

今日の人々はこれを理解できず、狂気だと考えている。「なぜ動物のように草を食べるのか？」と彼らは言う。「そんなふうに縄にぶら下がり、自分の体を苦しめることに、いったいどんな意味があるというのか？」しかし、アッバ・イサアクがこう言っていることを覚えているだろうか。「ああ、もし神が私たちに、そのような『無謀な行い』を行うことを許してくださるなら。」どうか神が、私たちにもこの霊的な『無謀な行い』²⁰² に到達させてくださいますように。

第4部。 天への依存

「神の助けを妨げることができるのは、人間でも悪魔でもありません。神にとっても、聖人にとっても、難しいことなど何一つありません。妨げとなるのは、私たち人間の信仰の薄さだけです。その信仰の薄さによって、私たちは偉大なる神の力が私たちに近づくのを妨げているのです」

²⁰⁰ ヴォスキ（ギリシャ語）——文字通り「牧される者たち」。アルヒマンドリト・ケルヴィム（カラムベラス）は著書の中で、「聖山の伝承によれば、彼らは聖山で最も聖なる修道士たちであり、誰にも知られずに完全に隠遁生活を送っている……」と記している。同じ伝承によれば、地上で行われる最後の聖体礼儀は、この目に見えない12人によって執り行われる。その数は常に一定である。なぜなら、もし彼らのうちの一人が亡くなれば、その席は聖山の最も優れた修道士の一人が引き継ぐからである。」（ヘルーヴィム（カラムベラス）、大修道院長。『聖母マリアの御国より』。キエフ、1998年。164頁。）——訳者注

²⁰¹ 参照：ソゾメノス、PG 67、1395以降、エウアグリオス、PG 86、2480、モスコス、PG 87、2868B、およびレオティオス、93、1688。

²⁰² アバ・イサアク・シリア人。『著作集』。セルギエフ・ボサド、1911年。説教第73篇。370頁。

第1章。

神が人のために御計画を立てられていることについて

「まず神の御国を求めなさい……」²⁰³

—

ゲロンダ、アバ・マカリオスは、神が私たちに天の恵みを与えてくださると言っています（²⁰⁴）、そして私たちはそれを信じています。神が、それほど重要ではない地上の恵みも与えてくださるということを、信じるべきでしょうか？

— どのような地上の恵みのことですか？

— 私たちが必要としているものです。

— そう、その通りです。神はご自身の被造物、ご自身の姿を愛しておられ、その必要とするものを顧みておられます。

— それを信じて、心配しなくていいの？

— もし人がそれを信じず、自らその恵みを獲得しようと苦闘するなら、その人は苦しむことになるでしょう。しかし、霊的に生きる人は、たとえ神が地上の物質的なものを与えなくても、落胆することはありません。もし私たちがまず神の御国を求め、その御国を求めることが私たちの唯一の関心事であるならば、他のすべてのものは与えられるのです。神がご自身の被造物を運命のなすがままに放り出すことなどあるのでしょうか？ イスラエルの民が、荒野で神から与えられたマナを翌日まで残しておく、それは腐り始めました。²⁰⁵ 神は、彼らが神の摂理を信頼するようにと、このように仕組まれたのです。

「まず神の御国を求めよ……」という言葉さえ、私たちはまだ理解していません。信じるか〔神に身を委ねるか〕、信じないか〔それゆえに必要なものは自分で用意しなければならない〕。私がシナイ半島へ移り住んだとき、手元には何もありませんでした。しかし、見知らぬ人々に囲まれた荒野で、自分がどうなるのか、何を食べてどう生きていくのかなど、全く考えていなかった。私が住むことになった聖エピステイミオスの独房は、すでに長い間荒れ果て、人影もなかった。修道院に負担をかけたくなかったのも、私は何も求めなかった。ある時、修道院からパンが届けられたが、私はそれを返した。キリストが「まず神の国を求めよ」とおっしゃったのだから、私がわざわざ気にする必要などあったのだろうか。水もほんのわずかしかなかった。手仕事など、私は何も知らなかった。さて、今になって、私がどうやって暮らし、どうやって生計を立てていたのか

²⁰³ マタイによる福音書 6章33節。

²⁰⁴ 参照：聖マカリオス・エジプト人。『霊的対話集』。STSL、1904年。

²⁰⁵ 参照：出エジプト記 16章19～20節。

と尋ねてみてほしい。私が持っていた唯一の道具はハサミだった。私はそれを二つに分け、石で研ぎ、小さな板を取り出して、聖像を切り抜き始めた。働きながら、イエスの祈りを唱えていた。私はすぐに彫刻の技術を身につけ、いつも同じ模様を彫り続け、五日分の仕事を十一時間で終えるようになった。不自由を感じるどころか、ベドウィンの子供たちまで助けていた。ある時期、私は1日に何時間もこれに没頭していたが、やがて手仕事に取り組みたくないという状態になった。しかし同時に、ベドウィンの子供たちがどれほどの困窮に耐えているかも目の当たりにしていた。彼らにとって、帽子やサンダル一足をプレゼントされることは、大きな祝福だった。そして、私の中にこんな考えが浮かびました。「私はベドウィンたちを助けるためにここに来たのか、それとも全世界のために祈るために来たのか？」そこで、気を散らす時間を減らし、もっと祈りに専念するために、手仕事を減らすことにしました。私が誰かが助けてくれるのを待っていたと思いますか？どこから？ベドウィンたち自身、食べるものさえなかったのです。修道院は遠く、反対側には人里離れた場所が広がっていた。しかし、祈りに多くの時間を割くために仕事を減らしたまさにその日、一人の男が私のところにやって来た。私はその時、独房の近くにいたのだが、彼は私を見てこう言った。「ほら、この百ゴールドを受け取ってくれ。これでベドウィンの子供たちを助け、自分の日課を守り、祈りにも励めるだろう」と。私は我慢できず、15分ほど彼を一人にして、独房へ戻った。神の摂理と愛が私をそのような状態に導き、涙をこらえることができなかった。ほら、人の心に善意があるとき、神がすべてをいかに整えてくださるかがわかりますか？だって、私がこの不幸な人たちにどれほど与えられたというのでしょうか？一人に与えると、すぐに別の人がやって来て、「父は私にくれなかった!」と言い、その次に三番目の人も、「父は私にくれなかった!」と言うのです.....

—ゲロンダ、なぜ私たちは、神の全能を何度も実感しているにもかかわらず、私たちに対する神の摂理を見ることができないのでしょうか？

—それは悪魔の罠です。悪魔は、人が神の摂理を見られないように、人の目に灰を投げかけるのです。なぜなら、もし人が神の摂理を見れば、その花崗岩のような心は和らぎ、感受性豊かになり、賛美に満ちるからです。そして、それは悪魔にとって都合が悪いのです。

人はしばしば、神抜きで物事を進めようとする

ある人が魚の養殖を始め、一日中「神よ、あなたに栄光あれ!」と口にしていた——それは、常に神の摂理を目の当たりにしていたからである。彼は私にこう話してくれた。魚は受精した瞬間から、まだピン頭のほど小さなうちに、液体の入った小さな袋を持っており、成長して水中の微生物を自力で食べることができるようになるまで、その液体を栄養として生き延びるのだ。つまり、魚は神から「乾食」を授かっているのだ!もし神が魚たちのことさえも顧みてくださるのなら、人間のことなどどれほど深く顧みてくださるだろうか!しかし、人間はしばしば、神抜きで物事を決め、解決しようとしてしまう。「私には」と人は言う。「子供が二人いれば[それで十分だ]。」「神の存在を全く考慮に入っていないのです。だからこそ、これほど多くの不幸な事故が起こり、これ

ほど多くの子供たちが命を落とすのです。ほとんどの家庭では、2人の子供が生まれます。しかし、一人は車に轢かれ、もう一人は病気になって亡くなり、両親は子供を失ってしまうのです。

神の共同創造者である親たちが、どんなに努力しても子供たちを養うのが困難なときは、天に向かって両手を挙げ、謙虚に偉大なる創造主の助けを請うべきである。そうすれば、助けてくださる神も、その助けを受け入れる人も共に喜びを得る。ストミオン修道院にいた頃、私は多子家庭の父親と知り合った。彼はエピルスのある村で野見番をしており、家族はコニツァに住んでいた——徒歩で4時間半の距離だ。彼には9人の子供がいた。その村への道は修道院を通っていた。礼拝に行くときも、家に帰る際も、野見番は修道院に立ち寄っていた。帰り道に立ち寄る際、彼は私に、自分でランプに火を灯してもいいかと許可を求めてきた。ランプに火を灯す際、床に油をこぼしてしまうにもかかわらず、私はそれを許していた。後で床を拭く方がましだと思い、彼をがっかりさせないようにしたのだ。彼は修道院を出て300メートルほど歩くと、毎回、自分の銃で一発発砲していた。その理由が分からなかった私は、次に彼が教会に入る瞬間から、コニツァ街道に出るまでを観察してみることにした。そうして私は、彼がまず教会でランプに火を灯し、それからナルテックス²⁰⁶）に出て、入り口の上にある聖母マリアのイコンの前にあるランプに火を灯すことを知った。それから彼は指にランプの油を付け、ひざまずいて、両手をイコンに向かって伸ばし、「聖母よ、私には九人の子供がいます。彼らに少しばかりの肉をください!」と言った。そう言うと、彼は指についた油で銃身の照門に油を塗り、立ち去った。修道院から300メートルほど離れた、ある桑の木の下で、一頭の野生の山羊が彼を待っていた。すでに述べたように、彼は銃を撃って山羊を仕留め、少し離れた場所にある洞窟へ運び、そこで解体して、その肉を子供たちに持ち帰った。これは彼が家に帰るたびに繰り返されていた。私は、その野番の信仰と聖母マリアの御加護に感銘を受けた。それから二十五年後、彼は聖山を訪れ、私を探し出してくれた。会話の中で、私は思わず彼に尋ねた。「子供たちはどうしている? どこにいるの?」すると彼は、まず北を指さして「一人はドイツにいます」と言い、次に南に向かって手を伸ばし、「もう一人はオーストラリアにいます。神に感謝、二人とも元気です」と付け加えた。この人は、不敬虔なイデオロギーから自分の信仰と自分自身を清く守り抜いたからこそ、神は彼を見捨てなかったのだ。

奇跡的な神の摂理の祝福

—時々、ゲロンダ、私にある願いが湧いてくるのですが、神は私がお願いもしないうちにそれを叶えてくださいます。これはどうして起こるのでしょうか?

—神は私たちを慈しんでおられます。神は私たちの必要や願いを見抜き、それが私たちの益となるならば、それを与えてくださるのです。もし人が何か助けを必要としているなら、キリストと聖母マリアが助けてくださいます。フィラレート長老²⁰⁷）に「ゲロンダ、何かお手伝いできるこ

²⁰⁶ ナルテックス——教会の西側部分、玄関。——訳者注

²⁰⁷ 参照: 長老パイシイ『アトス山の聖父たちとアトス山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年。62–65頁。

とはありますか？ 何が必要ですか？」と尋ねられたとき、彼はこう答えました。「私に必要なものは、神の母が送ってくださるでしょう。」そして、まさにその通りになったのです。

私たちが主にお委ねするとき、私たちの慈愛に満ちた神である主は、私たちを見守り、私たちを顧みてくださいます。慈愛に満ちた管理人として、主は私たち一人ひとりに必要なものを与えてくださいます。主は、私たちの物質的な必要の細部に至るまで配慮してくださいます。そして、私たちが主の配慮、主の摂理を理解できるよう、主は私たちに必要な分だけを与えてくださいます。しかし、まず神があなたに何かを与えてくださるのを待つてはいけません。いいえ、それ以前に、まずあなた自身が神にすべてを捧げなさい。なぜなら、もしあなたが絶えず神に何かを求めながら、自分自身を信頼をもって神に委ねていないのであれば、それはあなたが自分の家を持っており、永遠の天の住まいから遠ざかっていることを示しているからです。すべてを神に捧げ、自らも全身全霊で神に身を委ねる人々は、神の偉大な天蓋の下に守られ、神の御摂理によって守られている。神への信頼とは、尽きることのない神秘的な祈りであり、必要な瞬間に、神の力を静かに、それを必要とする場所へと引き寄せるものである。そしてその時、神を愛する御子たちは、絶えることなく、深い感謝を込めて神を賛美する。 ティホン神父が「聖なる十字架」のカリヴァに定住したとき、そこには彼が必要としていた教会がなかった。建設のための資金さえ持っていなかった——神への偉大な信仰以外には何もなかった。ある時、祈りを捧げた後、彼は、教会建設に必要な資金を神が助けてくださるという信仰を持って、カリエスへと向かった。 カリエスへ向かう途中、遠くからイリインスキー・スキートの住職が彼を呼び止めた。ティホン神父が近づくと、住職はこう言った。「アメリカのある善良なキリスト教徒が、教会を持たない修道者に渡すよう、このドルを送ってくれました。君にはちょうど教会がないのだから、このお金を受け取って建てなさい」と語った。ティホン神父は、感動と、神——人の心を御存知の御方——への感謝に涙を流した。神は、ティホン神父がお願いする前からすでに教会のことを気にかけてくださっていたのだ。つまり、彼がそのことを祈った時には、お金はすでに用意されていたのである。

人が神に身を委ねれば、神はその人を決して見捨てない。そして実際、もし明日10時に何かが必要になったとしても（その必要性が理性の範囲を超えず、その物が本当に不可欠であるならば）、10時15分前か10時30分頃には、神はそれをあなたに与えるために用意しておいてくださる。例えば、明日9時にマグカップが必要だとしましょう。9時5分前には、すでにあなたの手元にあるでしょう。500ドラクマが必要だとしましょう。それが必要になるまさにその時間に、きっかり500ドラクマが現れます。510ドラクマでも、490ドラクマでもありません。私は気づいたのです。例えば、明日何かが必要だとすれば、神はすでに今日、そのことを手配してくださっているのだと。つまり、私がそれについて考える前から、神はすでにそれを考え、必要なものをあらかじめ用意しておき、必要な時にそれを与えてくださるのです。ある物が、私が必要とするまさにその時間に、どこから私の元へ届くまでにどれほどの時間がかかるかを目の当たりにして、私はこのことを理解しました。したがって、神はあらかじめそのことを備えておられるのです。

私たちが神を愛する心から、自分の人生をもって神を喜ばせるとき、神は、その愛に満ちた子供たちが必要とするその瞬間に、誰にも羨まれない祝福を与えてくださいます。そうして、人生全

体が神の摂理による祝福の中で過ぎていきます。私は、神の驚くべき摂理の例を何時間も挙げていくことができます。

私が戦争に出て、戦闘作戦に参加していた時、福音書を持っていましたが、それを誰かに譲ってしまいました。その後、私は「ああ、もし私に福音書があれば、どれほど助けになっただろう！」と言っていました。クリスマスの時、当時山中に駐屯していた私たちの部隊に、メソロンギから200個の小包が送られてきました。²⁰⁸ 200個の小包のうち、福音書が入っていたのは、私に回ってきたものだけだった！それは古い版の福音書で、パレスチナの地図が載っていた。小包の中には、「他にも本が必要なら、手紙を書いてくれれば送ってあげる」というメモも入っていた。

別の時、私がすでにストミオン修道院にいた頃、礼拝堂用のランプが必要になった。ある朝、夜明け前に、私はコニツァへと下りていった。ある家の前を通りかかったとき、少女が父親に「お父さん、修道士さんが来てるよ！」と言っているのが聞こえた。すると、その父親が私を迎えに出てきて、こう言いました。「神父様、私は聖母マリアにランプを捧げるという誓いを立てました。このお金を受け取って、ご自身で買ってください。」そして、彼は私に500ドラクマを渡してくれました——それは1958年当時のランプの値段とちょうど同じ額でした。

そして今も、私に何か必要なことが生じると、神はすぐにそれを満たしてくれます。例えば、薪を切りたいのに切れない時、あっという間に薪が勝手に手に入ります。皆さんのところへ来る前に、小包を受け取りましたが、中には5万ドラクマが入っていました——まさに私が必要としていた額そのものでした。もう一つの例を挙げましょう。ある人に祝福として「ドストイノ・エス」のイコンを贈ったところ、翌日、「イヴェルスカヤ」のイコンが私のところに届けられたのです！そして今年の夏、²⁰⁹ 雨が降るまでは、私には水が全くありませんでした。今は少し雨が降ったので、1日に（せいぜい）1.5缶分の水を汲むことができます。貯水槽には去年の水が残っていたが、腐ってしまっていた。しかし、神はなんとすべてをうまく整えてくださるのだろう！私には水が入った樽がある。毎日たくさんの人がやって来て、水を飲んだり顔を洗ったりする。彼らは汗をかいてやってくるのに、水位はたったの4～5本の指分しか下がらないのだ！1つの樽で150人から200人を賄っても、空になることはありません！その上、ある人は蛇口を勢いよく開けすぎたり、別の人は閉めるのを忘れたりして水が流れ出ても、それでも尽きることはないのです！

神の摂理に身を委ねる

神の恵みに目を向ける人は、神の摂理に身を委ねることを学ぶ。そしてやがて、その人はまるで揺りかごの中の赤ん坊のように感じるようになる。母親が少しでもその場を離れると、泣き出し、母親が再び駆け寄ってくるまで泣き止まないのだ。自分を神に委ねることは、なんと偉大なことか！私がストミオン修道院に来たばかりの頃、住む場所がありませんでした。修道院全体が建設廃

²⁰⁸ ギリシャ中部の都市。——訳者注

²⁰⁹ 1990年夏に発表された。

材で埋め尽くされていたのです。塀のそばに隅っこを見つけ、上から少し覆いをかけ、夜はそこで座って過ごしていました。横になると、その場所には収まりきらなかったからです。ある日、知り合いの修道士が私のところに来て、「ねえ、一体どうやってここで暮らしているんだ？」と尋ねました。「えっ、」と私は返しました。「世俗の人たちの暮らしが、私たちより豊かだったのですか？ カナリス²¹⁰が借金を頼んだとき、『君には祖国がない』と言われたが、彼は『祖国は我々が勝ち取る』と答えたのです。」と答えた。世俗の人ですらそのような信仰を持っていたのなら、私たちに神への信頼がないはずがないではないか。聖母マリアが私をここに導いてくださったのだから、時が来れば、聖母がご自身の修道院のことはお世話してくださらないはずがないだろう？」そして、実際、少しずつだが、なんと聖母マリアがすべてを整えてくださったことか！ 覚えているのは、職人たちが焼失した修道室の天井スラブにコンクリートを打設していた時、セメントが底をつきかけたことだ。スラブの3分の1をまだコンクリートで固める必要があった。職人たちが私のところにやって来て言った。「セメントが底をつきそうです。全部をコンクリートで固めるためには、砂を多めに、セメントを少なめに混ぜる必要があります。」「いや」と私は彼らに言った。「薄めずに、始めた通りに続けてくれ。」セメントをさらに運んでくることは不可能だった。なぜなら、すべてのラバが畑にいたからだ。職人たちはコニツァまで2時間歩き、さらに畑まで2時間歩いて、牧草地でラバを探さなければならなかった。どれほど時間を無駄にしまうことか……それに、彼らにもそれぞれの用事があったし、別の日に来ることはできなかつただろう。見ると、床の3分の2が打ち終わっていた。私は小さな教会に入り、「私の聖母よ、これからどうすればよいのでしょうか？！どうか、私たちをお助けください！」と祈った。それから、私は教会から出てきた……

— それで、その後どうなったのですか、ゲロンダ？

— 床のコンクリート打設が終わり、セメントが余ってしまったんです！

— 職人たちはそれを理解したのですか？

— もちろん気づきましたよ！ 神と至聖なる聖母マリアの助けは、時になんと偉大なのでしょうが！

神はすべてを善きものへと用いてくださる

— ゲロンダ、時々、何かを始めると、山ほどの障害が現れることがあります。それらが神からのものかどうか、どうすれば分かるのでしょうか？

— そこに私たちの過ちがないか考えてみましょう。もし私たちに非がないのなら、その障害は神からのものであり、私たちの益となるのです。ですから、仕事が完了しなかったり、完了が遅れ

²¹⁰ カナリス・コンスタンティノス（1795年頃～1877年）。エラダの国民的英雄であり、伝説的な船乗りで、ギリシャ革命（1821年～1830年）の時代にトルコ軍に対して果敢に戦った。1822年6月7日、K・カナリスが率いる勇敢な一団が漁船に乗り込み、ヒオス島近海でトルコ艦隊に対して大胆な襲撃を敢行し、その結果、トルコ艦隊の旗艦が撃沈され、トルコ海軍提督カラ・アリが戦死した。その後、K・カナリスは提督、海軍大臣、ギリシャ首相を務めた。——訳者注

たりしても、落胆する必要はありません。ある時、急ぎの用事で、私はストミオン修道院からコニツァへと下りていました。道の険しい一か所（私はその場所をゴルゴタと呼んでいた）で、修道院の知人であるアナスタシオおじさんと、荷を積んだ3頭のラバに出くわした。急な上り坂で荷鞍が横にずれてしまい、一頭のラバが崖の端に立っていて、今にも転落しそうだった。「神があなたを遣わしてくださったのです、神父様！」と、アナスタシオおじさんは喜びの声を上げた。私は彼がラバの荷を組み直すのを手伝い、それから二人でラバを道まで連れ出した。そこで彼と別れ、私は旅を続けた。かなりの距離を進んだところで、小道が土砂崩れに遮られていた。ちょうどその直前に、長さ300メートルにも及ぶ大規模な土砂崩れが発生し、小道を押しつぶしていたのだ。木も石も、すべて下方の川へと流されてしまった。もし私がラバの世話で足を止めていなければ、ちょうど土砂崩れが起こった瞬間にこの場所にいたことになっていただろう。「アナスタシオおじさん、」と私は言った。「あなたは私を救ってくれた。神様があなたを遣わしてくれたんだ。」

キリストは高みから、私たち一人ひとりの行いを見守り、いつ、どのようにご自身が私たちの益のために働かれるかをご存知です。私たちがキリストに助けを求め、キリストの前で自分の願いを打ち明け、すべてをキリストご自身に委ねさえすれば、キリストは私たちをどのように、どこへ導くべきかをご存知なのです。私がアトス山のフィロフェイ修道院にいた時、荒野へ去りたいと思った。ある人里離れた島へ身を隠そうと考え、船頭と、彼が船で迎えに来て私を連れて行ってくれるようすでに取り決めをしていたが、結局彼は現れなかった。これは神の御心だったのです。なぜなら、私はまだ未熟で、人里離れた島に行けば大いに傷つき、そこで悪魔の餌食となってしまったでしょうから。そこで、島への計画が頓挫した私は、カトゥナキへ行くという強い願望に燃え上がりました。カトゥナキの荒野は私の心に響き、そこにたどり着けるよう祈り、その準備を進めていました。私は、高潔な霊的生活を送る長老ペトロのそばに住み、修行に励みたかった。しかし、ある出来事が起こり、私はカトゥナキではなくコニツァへ向かうことを余儀なくされた。ある晩、晩課の後、私は自分の独房に引き上げ、遅くまで祈りを捧げていた。11時頃、少し休むために横になった。深夜2時半、修道院の鐘の音が鳴り響き、兄弟たちを真夜中の礼拝のために教会へ呼び集める音で目が覚めた。起き上がろうとしたが、できなかった。目に見えない力が私を縛りつけ、身動き一つ取れなかった。何か特別なことが起きていると悟った。正午まで、私はベッドに釘付けのままだった。祈ったり考えたりすることはできたが、全く体を動かすことはできなかった。そのような状態にある中、まるでテレビを見ているかのように、片方にはカトゥナキ、もう片方にはコニツァにあるストミオン修道院が見えた。強い思いを抱き、私はカトゥナキの方へと視線を向けた。すると、ある声がはっきりと私にこう告げた。「あなたはカトゥナキへではなく、ストミオン修道院へ行くのだ。」それは聖母マリアの声だった。「神の母よ」と私は言った。「私はあなたに荒野を願ったのに、あなたは私をこの世へ送るのですか？」すると、再び同じ声が厳かに私に語りかけた。「行けば、ある人物に出会えるだろう。彼はあなたを大いに助けてくれる。」私はたちまち、その目に見えない束縛から解放され、私の心は神の恵みで満たされた。その後、私は霊的指導者のもとへ行き、この出来事を話した。「これは神の御心だ」と、霊的指導者は私に言った。「しかし、このことは誰にも話すな。健康上の理由（当時、私は出血に悩まされていた）でアトス山を離れなければならないと伝え、そこを去りなさい。」

私の望みは別でしたが、神には神のご計画がありました。当時、私は神の御心とは、コニツアの修道院を再建することにあるのだと考えていました。そうすることで、戦時中に聖母マリアに立てた誓いも果たすことになる。「聖母マリアよ」と、私は当時彼女にこうお願いしました。「私が修道士になれるよう助けてください。そうすれば、3年間働いて、焼失したあなたの修道院を修復します。」しかし、後に明らかになったように、至聖なる神の母が私をそこに遣わされた主な理由は、プロテスタントに転向してしまった87世帯が正教会に戻れるよう助ける必要があったからでした。

神は、多くの人々の益のために、しばしば何かが起こることを許されます。神は決して一つの善だけを行うのではなく、三つや四つの善をまとめて行われます。また、そこから多くの善が生まれない限り、神は決して悪が起こることを許されません。すべて——過ちも危険も——を、神は私たちの益のために用いておられます。善と悪は互いに混ざり合っています。それらが別々であれば良いのですが、人間の個人的な利害が介入し、それらを混同させてしまうのです。

しかし、神はこの混乱さえも有益なものに変えてくださる。それゆえ、神はご自身の被造物を愛しておられるからこそ、善が生まれる可能性のあることだけを許されると信じるべきである。例えば、神は、私たちをより大きな誘惑から守るために、ある程度の小さな誘惑を許されることもある。ある時、ある信徒が、ある聖山の修道院で行われた主座の祝祭に参加していた。そこで彼は酒を飲み、ほろ酔い気分になった。修道院からの帰り道、彼は道端で倒れてしまった。雪が降り始め、彼は雪に埋もれてしまったが、酒の匂いのせいで、彼の上の雪の塊に穴が開いていた。その場所を通りかかった通行人がいた。雪の中の穴を見て、彼は驚いてこう言った。「これは一体何だろう？ 湧き水だろうか？」——そして、棒でその穴を叩いた。「うっ！」——酔っ払いは叫んだ。こうして、神は彼が命を落とすのを防いでくださったのである。

神の恵みは心に道を開く

—ゲロンダ、神は私たちに何を求めておられるのでしょうか？

—神は、私たちの自発的な意志、そしてたとえわずかであっても、愛に満ちた行いによって表される善意を求めておられます。また、私たちが自分の罪深さを自覚することも求めておられます。それ以外はすべて神が与えてくださいます。霊的な生活には上腕二頭筋など必要ありません。謙虚に精進し、神の憐れみを願い、すべてに感謝しましょう。何の計画も持たずに自分自身を神の御手に委ねる人の上に、神の御計画が成就します。人が自分の「自我」にどれほどしがみついているかによって、それだけその人は取り残されてしまいます。その人は霊的に成長できないのです。なぜなら、神の恵みを妨げているからです。成長するためには、神への深い信頼が必要です。

神はあらゆる瞬間に、その愛をもってすべての人々の心を優しく撫でておられますが、私たちの心は垢に覆われているため、それを感じることはできません。心を清めた人は、すべての人を等しく愛しておられる神の恵みと慈しみを見て、心を打たれ、心が溶け、狂おしいほどの感動に包まれます。苦しむ人々のことを思うと、そのような人は心を痛め、霊的な生活を送る人々のことを思うと、喜びを感じる。もし愛に満ちた魂が、神の恵みだけについて思いを巡らせたとしても、それ

だけでその魂は天へと舞い上がるかもしれない。ましてや、自らの数多くの罪や、神の計り知れない慈愛について思いを巡らせたなら、なおさらのことである！もし人の心の目が清められたなら、その人は、神の（自分や他者への）配慮を見て、その敏感でさらけ出された心で神の摂理のすべてを感じ、体験し、感謝のあまり胸が熱くなり、良い意味での「狂気」に陥るのです。なぜなら、神の賜物を人が感じると、それは心に裂け目を作り、心を引き裂くからだ。そしてその後、愛に満ちた心を優しく撫でるように、神の御手がその裂け目に触れると、人は内面から高揚し、神への感謝はさらに深まるのである。自らの罪深さと神の恵みの両方を自覚しつつ、神の偉大な慈愛に身を委ねる者たちは、より確かな確信をもって、そして肉体的な労苦を少なくして、自らの魂を樂園へと高めていくのである。

些細なことにも大きなことにも神への感謝

「神は私を助けてくださる」と口では言いながら、実際には何の不自由も味わわないよう、お金を貯めようとする人々がいます。そのような人々は、神ではなくお金に身を委ねているため、神を嘲笑しているのです。もし彼らがお金を愛し、それに希望を置くことをやめなければ、神に希望を置くことはできないでしょう。私は、人々がいざという時のためにある程度の貯蓄を持つ必要がないと言っているわけではありません。しかし、お金に希望を託すべきではなく、お金に心を奪われてはなりません。そうすることで、人々は神を忘れてしまうからです。神を信頼せず、自分の計画を立て、その後で「これが神の御心だ」と言い、悪魔的な方法で自分の行いを「祝福」し、絶えず苦しんでいる人がいます。私たちは、神がいかに強大で慈愛に満ちているかを理解していません。神に主権を委ねず、神に私たちを導いていただくことを拒んでいるからこそ、苦しんでいるのです。

シナイ山で、私が住んでいた聖エピステミアの修道室には、水がほんのわずかしかなかった。修道室から約20メートル離れたある洞窟で、岩の裂け目から一滴ずつ水が滲み出ていました。私は小さな集水器を作り、一日に3リットルの水を汲んでいました。水を汲みに行く際、私は鉄製の缶を差し出し、それが満たされる間、至聖なる聖母マリアへのアカフィストを唱えていた。頭をほんの少し、額だけ濡らしていました。ある医師の助言で、それが役に立ったのです。飲み水として少し水を汲み、私の修道室の近くに住むネズミや小鳥たちのために、別の小さな瓶に少し水を汲んでおきました。洗濯やその他の用事には、洞窟から汲んだこの同じ水を使っていた。手元にあるわずかな水に対して、私はどれほどの喜びと感謝の念を抱いたことか！水があることを神に賛美した。

その後、聖山に到着し、イヴェルスクのスキートに短期間滞在した際、そこは日当たりの良い場所だったため、水に不自由することはなかった。そこには貯水槽が一つあり、そこから水が溢れ出していた。うわっ！私は頭も足も洗ったが……以前のことはすっかり忘れてしまっていた。シナイ山では、わずかな水への感謝のあまり、私の目には涙が溢れていたのに、ここスキートでは、水が豊富すぎるがゆえに、私は物事を忘れがちになってしまった。そこで私はその小部屋を出て、80

メートルほど離れた、小さな貯水槽がある場所に身を寄せた。人は、豊かさによって、なんと容易に自分を見失い、忘れてしまうことか！…

私たちは、完全に、無条件に、神の摂理、神の御心に身を委ねなければならない。そうすれば、神が私たちを顧みてくださる。ある晩、一人の修道士が晩課を捧げるために山の頂上へ向かった。道中、彼は白いキノコを見つけ、この珍しい発見に神に感謝した。帰り道、彼はそのキノコを切り取って夕食にしようと考えた。「もし信徒たちが『肉を食べるのか』と尋ねてきたら——と修道士は心の中で考えた——『毎年秋には食べている』と答えればいいのだ！」カリヴァに戻ると、修道士は、自分が晩課を唱えている間に、何かの動物がキノコを踏んでしまい、半分しか残っていないことに気づいた。「どうやら——」と修道士は言った。「これくらいが、私が食べるべき量なのだろう。」彼は残っていた部分を拾い集め、神の摂理と、その半分のキノコに感謝した。少し下の方で、さらに半分のキノコを見つけた。夕食の不足分を補おうと、それを切り取るために身をかめたが、そのキノコが腐りかけていることに気づいた（おそらく毒キノコだったのだろう）。修道士はそれをそのままにしておき、中毒から守ってくださった神に再び感謝を捧げた。カリヴァに戻ると、修道士はキノコの半分を夕食として食べた。翌日、家を出ると、彼の目に素晴らしい光景が広がっていた。カリヴァの周囲の至る所に美しいキノコが生えており、それを見た修道士は再び神に感謝を捧げた。ご覧の通り、彼はキノコ一つ分にも半分にも、良いものにも悪いものにも、一つにもたくさんにも、すべてに感謝したのだ。彼はすべてに感謝していた。

慈愛に満ちた神は私たちに惜しみない祝福を与えてくださり、その御業は私たちの益となるよう導かれています。私たちが持っているすべての恵みは、神からの賜物です。神はすべてのものを、ご自身の被造物である人間のために役立て、動物も、鳥も、小さなものも、大きなものも、さらには植物までもが、人間のために自らを捧げるようにしてくださったのです。そして神ご自身も、人間を救うためにご自身を犠牲にされた。だから、私たちはこれらすべてに対して無関心であってはならない。私たちの大きな恩知らずや無感覚さで神を傷つけることなく、むしろ神に感謝し、賛美を捧げよう。

第2章。 神への信仰と信頼について

神を誠実に信じなければならない

—ゲロンダ、自分の中に湧き上がる不信仰の思いに悩まされています。

—あなたが心を痛め、それらを受け入れないということは、それらの思いが悪者から来ていることを意味します。時折、神は私たちの心構えや愛の深さを確かめるために、疑いや不信仰の思いを抱かせることを許されます。しかし、私たちの神は、ゼウスやアポロン、あるいはそのような神々に関する神話のようなものではありません。私たちの信仰は真実で、生きたものです。使徒パウ

口が書いているように、私たちには「聖徒たちの雲」があります。²¹¹ これらの人々はキリストを知り、キリストとの交わりを個人的に体験し、キリストのために自らを捧げました。そして、私たちの時代にも、神に身を捧げ、天上の境地を体験している人々がいます。彼らは天使や聖人たち、さらにはキリストや神の母ともつながりを保っています。あなたを助けるために、私自身についても少しお話ししましょう。ほら、私だって「血を捧げている」のです——他の人を助けるために、いくつかの出来事について語っているのです。人が集めた知識が、その人から信仰を押し出してしまうのを見て、私は信仰を強めたいと願い、信仰の領域におけるいくつかの出来事について語っているのです。

私が子供の頃、私たちはコニツァに住んでいました。聖人の伝記をたくさん読み、他の子供たちにも読ませたり、仲間を集めて一緒に読んだりしていました。私は聖人たちの偉大な苦行や、彼らが守っていた断食に感嘆し、彼らに倣おうと努めました。断食のせいで、私の首はサクランボの茎のように細くなってしまいました。子供たちは私をからかって、「お前の頭、落ちちゃうぞ!」と言いました。あの頃、私はどんな思いをしたことか……。まあ、それはいいとして。さらに、私の兄は、断食のせいで私が体調を崩しているのを見て、学校を卒業できなくなるのではないかと心配し、私が読んでいた聖人の伝記のパンフレットを取り上げてしまいました。その後、私はそれらを森の中の聖バルバラ礼拝堂に隠し、こっそりそこへ行って読んでいた。ある時、コスタスという名の近所の人が私の兄にこう言った。「あいつの頭を正してやる。読んでいる本を捨てさせ、断食や祈りもやめるようにしてやる。」さて、彼は私を見つけ出し（当時、私は15歳くらいだった）、ダーウィンの進化論を語り始めた。彼は私の頭が混乱するまで、延々と話し続けた。頭が混乱したまま、私はすぐに森の聖バルバラ礼拝堂へ向かった。中に入ると、私はキリストにこう祈り始めた。「私のキリストよ、もしあなたが存在するなら、私に姿を現してください!」私はこれを長い間繰り返し、休むことなく頭を下げ続けた。夏だった。汗が小川のように流れ落ち、私はびしょりと濡れ、すっかり力尽きてしまった。しかし、私は何も見えず、何も聞こえなかった。どうやら、神でさえも私を助けてはくれなかったようだ——たとえほんのわずかなしるしでも、何かの物音でも、何らかの影でもよかったのに——結局のところ、私はまだ子供だったのだから。この出来事を人間的な視点や論理で捉えれば、誰かがこう叫ぶかもしれない。「なんてことだ、この不憫な子め!」11歳の頃から岩山に登り、あれほど奮闘してきたのに、今や危機に直面している。馬鹿げた理論で頭を混乱させられ、家では兄に妨害され、神に助けを請うために森へ逃げ出したのだ!」と叫ぶかもしれない。しかし、何の答えもなかった。何もない、何もない、何もない!!! 何度も頭を下げて疲れ果てた私は、腰を下ろした。「まあいいや」と私はその時思った。「コスタスに、キリストについてどう思うかと尋ねた時、彼は何と答えたっけ?」——「彼は最も善良で、最も公正な人でした」と彼は答えた。「正義に関する教えによって、キリストはパリサイ人たちの利害を損ない、彼らは嫉妬からキリストを十字架につけたのです。」そしてその時、私は決心した。「キリストがこれほど善良で公正な人であり、彼のような人は他に誰もいなかったのだ。悪人たちが嫉妬と

²¹¹ 『ヘブライ人への手紙』12章1節を参照。

悪意からキリストを殺したのだ。それならば、この人のために、私がこれまでにしてきた以上のことをすべきだ。その方のために、死んでもいい。」そう決心した途端、キリストが現れた。キリストはまばゆい光の中に現れ、礼拝堂が輝きに包まれ、私にこう言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」²¹² キリストは片手に開かれた福音書を持っておられ、その中で私はまさに同じ言葉を読みました。私の心には大きな変化が訪れ、私は絶え間なくこう繰り返していました。「さあ、コスタス、今すぐこっちへ来い。さあ、話そうじゃないか。神はいるのか、いないのか！」ほら、キリストは私に現れるために、私自身の誠実な決断を待っていたのだ。もしキリストが子供にさえ誠実な決断を求めるのなら、大人に対してはどれほど強くそれを求めていることか。

—ゲロンダ、神の摂理そのものを疑う人々もいます。

—キリストに関するこの一連の出来事を、どうして童話だと受け止められるのでしょうか？キリストより七百年も前に生きていた預言者たちが、これほど詳細にキリストについて記していたという事実こそ、そうした人々に考えさせられるべきではないでしょうか？旧約聖書には、キリストがいくらで裏切られるかについてさえ正確に記されています。²¹³ また、その金は血の代価であるため、ユダヤ人たちはそれを神殿の宝庫には入れず、その金で旅人の埋葬用の土地を購入することになるとも記されています。²¹⁴ ザカリヤや他の預言者たちが預言したことが成就したのです。すべてがこれほどまでに明確です！細部に至るまで！聖書には、キリストの衣がどうなるかさえ記されています。²¹⁵ そして、これらすべては、キリストの誕生の何年も前に語られていたのです。これほど多くのことが示されているのに、どうして私が不信仰の思いを抱くことができるのでしょうか？そして、使徒パウロの事例を見てみましょう。彼はキリスト教徒を迫害する者であり、その目的でダマスカスへ向かっていた。道中、主が現れてこう言われた。「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。」²¹⁶ —「主よ、あなたはどなたですか？」とサウロは尋ねた。「わたしは、あなたが迫害しているキリストである」と主は答えた。その後、キリストはアナニアに告げ、アナニアはかつての迫害者であるに洗礼を授けた！そしてその後、使徒パウロはどれほどの苦難を味わい、あらゆる異邦の地で宣教する中で、どれほど多くの偉業を成し遂げたことか！その後、殉教者たちが現れた。1100万人の殉教者たちだ！まさか、彼ら全員、頭がおかしかったというのか？どうしてこれらすべてを忘れることができるだろうか？福音書をほんの少しでも読んだ人間が、どうして信じないことができようか？もし福音書にさらに詳しい記述があったなら、それはすべての人々が信じる上で大いに助けになっただろう。しかし、神はあえてそうされなかった。それは、人々をふるいに

²¹² イザヤ書 11章25～26節。

²¹³ ゼカリヤ書 11章1～13節を参照。

²¹⁴ エレミヤ書18章2節、32章9節、マタイによる福音書27章7～9節を参照。

²¹⁵ 詩篇21:19を参照。

²¹⁶ 使徒行伝9章1～18節を参照。

かけ、誰が神を愛し、誰が奇跡やそれに類するものを期待することなく、神のために自らを犠牲にするのが明らかになるためだ。私は、誠実な人がどんな神への冒瀆を耳にしたとしても、それらはその人に触れることもなく、影響を与えることもないと考える。

神を誠実に信じるべきであり、そのために奇跡を要求してはならない。大人たちがやって来て、「信じるためには何か奇跡を見たい」と言うとき、私がどれほどがっかりするか、わかるだろうか？ もし彼らが子供であれば、年齢ゆえに多少の言い訳はできたかもしれない。

しかし、「信じるためには何かを見なければならぬ」と言いながら、自分ではキリストのために何一つ行わないというのは、実に安っぽいことではありませんか！ たとえ彼らが奇跡を見たとしても、それが彼らのためになるのでしょうか？ 彼らはそれを魔術か、あるいはその類いの何かだと説明してしまうでしょう。

「私たちに信仰をお与えください」²¹⁷

——ゲロンダ、なぜ一部の聖人たち——古くからの聖人も現代の聖人も——は、自分の最期の時がいつ来るか、あるいはある出来事がいつ起こるかを知っていたのでしょうか？

— 彼らの特徴づけていたのは、深い慈愛、偉大な謙虚さ、謙遜、そして信仰でした。彼らは、信仰を揺るがすような論理を自分の人生に持ち込みませんでした。信仰とは、なんと偉大なことでしょうか！ ご覧の通り、使徒ペテロも信仰によって波の上を歩きましたが、²¹⁸ 論理が介入した途端、沈み始めてしまいました。ハラランピイ神父の話をしたことがあったでしょうか。²¹⁹ 彼はつい最近までクトルムシュ修道院に住んでいました。彼はとても質素で、勤勉で、霊性の高い修道士でした。年老いた頃、重いインフルエンザに倒れ、寝たきりになってしまいました。医師は、彼の余命がごくわずかであるとして、修道院の兄弟たちに彼のそばを離れないよう命じました。ハラランピオ神父は、布団の中からそれを聞いてこう答えました。「一体何を言っているんだ？ 私は、復活祭が来て『キリストは復活された』と言うまでは、死なないよ。」そして実際、ほぼ二ヶ月が過ぎ、復活祭が訪れると、彼は「キリストは復活された」と言い、聖体拝領を受けて安らかに息を引き取りました。この素朴で敬虔な長老は、真の神の子となり、神と共に自らの死の日を定めたのです！

— ゲロンダ、信仰はどのように強められるのでしょうか？

— 信仰は祈りによって強まります。幼い頃から信仰を育ててこなかったが、その素質がある人は、キリストに信仰を増してくださるよう祈り求めることで、信仰を育むことができます。私たちもキリストに、信仰を増し加え、倍增させてくださるようお願いしましょう。使徒たちはキリストに何

²¹⁷ ルカによる福音書 17章5節。

²¹⁸ マタイによる福音書 14章30節を参照。

²¹⁹ 参照：長老パイシイ『聖山（アトス）の聖父たちと聖山の物語』。聖三位一体セルギエフ・ラヴラ、2001年、9頁

を求めたでしょうか？「私たちに信仰を与えてください」と。もし「与えてください」と言うなら、それは自分が神に身を委ねていることを意味します。なぜなら、もし人が神に身を委ねなければ、神はその人に何を授けるといえるのでしょうか。私たちが神に信仰を増し加えてくださるよう願うのは、奇跡を起こすためではなく、神をより深く愛するためなのです。

神への信仰を深めるのに役立つものはすべてあります。花も、イナゴも、星も、稲妻もです。私たちはこれらすべてを見ているのですが、誰の役にも立ちません。なぜなら、私たちは敵から送られてくる「電報」——つまり、敵によってもたらされる思い——を受け入れているからです。例えば、もし塩がなかったら、海は腐ってしまっていたでしょう。しかし、信仰のない人が自分の研究室で海水を分析したとしても、そこから何の益も得られないでしょう。なぜなら、彼は自分の心の塩を取り除いていないからです。しかし、もし人が愛と善意を持って努力するならば、たとえ最も大きな不条理であっても、神の啓示によって、別の視点からそれを見ることができるでしょう。そして、神を賛美するのです。

すべては私たちが神へと導くべきである

—ゲロンダ、あなたは「すべてが私たちが神へと導くべきだ」とおっしゃいました。どうすればそれを実現できるのでしょうか？

—それは、[人生の道で]出会うあらゆるものから益を引き出すことによって達成できるのです。あらゆるものから霊的な意味を引き出すことで、人はどのような霊的な益や霊的な経験を得るか、ご存知ですか？例えば、セメントを扱う仕事をしていても、レンガに触れることで神を見出すことができ、神に触れることができるのです。あれやこれや、さまざまなものに触れるたびに、神に触れることができるのです！そうです、あらゆるものを通して神に触れてください！もし人がそのような姿勢で物事に取り組まず、あらゆるものに神を見出さなければ、たとえ教会に連れて行かれたとしても、その人は神から遠く離れたままです。聖歌隊で歌わせても、その人は神から遠く離れたままです。霊的な本を読ませても、やはり神から遠く離れたままです。どんな霊的な仕事を任せたとしても、それはその人を神へと導くことはないでしょう。

人は誰でも、何を見ようとも、何をしようとも——縫い物をしていようが刺繍をしていても——そこから霊的な益を引き出さなければならない。花を見たか？神を見たのだ！豚を見たか？そう、兄弟よ、また神を見たのだ！あなたは問うだろう。「では、つまり、私は豚を通してでも神を見ることができるということか？」そう、豚を通してだ。神がどれほど見事にそれを創造されたか、見てごらん！神は豚に鼻を与え、土を掘り起こし、手探りで植物の球根を見つけられるようにした。その鼻は、鋭い鉄の破片やガラス片、とげなどには全く動じないほど頑丈だ。美しい香りのする花を見たときだけでなく、「神はなんと英知に満ちてこれを創造されたことか！」と言わなければならないのです。豚を見たときも、同様に神を見出さなければなりません！さらに良いのは、神が私を豚として創造することもできたのに、人間として創造して下さったということ深く考えることです！これはあなたにとって奇妙に思えますか？まさか、神が私たちが豚にすることなどできなかったというのですか？獵師たちは野生のイノシシを撃ち傷つけるが、しばしば

その傷ついた個体を見つけられない。すると、肉食獣がやって来て、その哀れなイノシシを生きたまま食い尽くしてしまう。医療の助けもないため、イノシシは苦しむことになる。にもかかわらず、そのイノシシは自分の創造主に対して何の悪事も働いていないのだ。それに対して、人間は自分の創造主を傷つけ、今も傷つけ続けており、しばしば恩知らずな振る舞いをしている。だからこそ、私はあなたがたに正しい霊的な行いをするよう説いているのだ。神はなんと見事にすべてを整えてくださったことか！そして動物たちを見てごらん。神は彼らにどれほどの力を与えておられることか！医師たちは、強い筋肉をつけるためには肉を食べるべきだと言います。しかし、牛を見てください。あの哀れな牛たちは草を食べているだけなのに、なんとたくましい筋肉をしていることでしょう！そこに神の御業が見えないでしょうか？つまり、神は彼らが食べる草というたった一つのものを通して、彼らに力を与えておられるのです。それならば、人間にはどれほど多くのものを与えてくださっていることでしょう！これはお分かりになりますか？

もし人がこのように自分自身を鍛えれば、聖人だけでなく、罪人からも益を得られるような境地に達するのです。聖人は、その聖なる模範によって私たちを強めてくれます。罪人は、その墮落の例によって私たちを抑制し、抑制し、ブレーキをかけてくれます〔そして私たちは罪を避ける〕。しかし、それは他人の目には墮落しないようにするためではなく、神を悲しませないためなのです。

信仰の力

— ゲロンダ、子羊の印とは何ですか？

— 子羊とは誰のことですか？

— キリストです。

— では、キリストにはどのような印があるのですか？洗礼の際、司祭はキリスト教徒の額に聖油を十字架の形に塗って、「聖霊の賜物の印」と唱えます。その後、クリスチャンが十字の印を切るたびに、主の救いをもたらす受難を礼拝し、すなわち私たちのキリストの十字架の死の力である十字架の力を呼び求めているのです。「キリストの十字架よ、その力によって私たちを救ってください」と言うとき、私たちは主の十字架の犠牲の力を呼び求めているのです。それゆえ、十字架には偉大な力がある。例えば、雷雨が降り出したとしよう。稲妻が走り、鐘楼にある大きな鉄の十字架にも稲妻が落ちるかもしれない。しかし、その鉄の十字架の下に立っているキリスト教徒が、このような小さな十字架を身につけ、「キリストの十字架よ、汝の力によって我を救いたまえ」と唱えれば、稲妻は彼を傷つけることはない。前者の場合、自然の法則が働きます。稲妻が十字架に当たり、それを地面に倒してしまうのです。後者の場合、このごく小さな十字架が、十字架の力を助けを求めた信じる人を守ってくれるのです。

— ゲロンダ、私が信仰を持って何かを願っているにもかかわらず、なぜ神はそれを与えてくれないのでしょうか？

— あなたは信仰を持って願い求めています、もし謙遜さがなかったり、あるいは高慢になりやすい傾向があるならば、神は願いを叶えてくださらないのです。信仰は、「一粒のからし種」²²⁰だけでなく、一キログラムのからし種ほどの大きさであっても構いませんが、その信仰に見合った謙遜さがなければ、神は働きかけられません。なぜなら、それは人のためにならないからです。高慢があれば、信仰は働きません。

もし人が疑いなく信仰を持って人生を歩み、神の助けを求めるならば、その人には少しずつ「奇跡的な」出来事が起こり始める。最初は小さなこと、次第に大きなこととなり、その人はますます信仰深くなっていく。神の神秘を自ら体験することで、人は神学者となる。なぜなら、頭で理解しようとするのではなく、実際に体験しているからである。その信仰は絶えず増し加わっていく。なぜなら、その人は別の次元、すなわち神の御業の領域へと進んでいるからだ。しかし、神の神秘を実際に体験するためには、古い自分を脱ぎ捨て、ある意味で墮落前の状態に戻らなければならない。信仰を揺るぎないものにするためには、悪意を持たず、純真でなければならない。神にできないことなど何一つない、ということを実無条件に信じなければならない。そして、神の助けに関わる事柄について、誰かが信じなかったり疑ったりしていると聞いたとき、あなたがどれほど苦しむか、わかるだろうか？

— ゲロンダ、もし人が信仰を持っていれば、祈りによって何らかの出来事の成り行きを変えることはできるのでしょうか？

— 偉大な信仰を持っていれば、多くのことを変えることができます。たとえ山岳河川の川床の真ん中に家を建て、その上から激しい流れが押し寄せようとも、その人が深い信仰を持ち、神に熱心に願い求めれば、その流れは引き返すでしょう。しかし、その人は、ある奇跡（例えば、海が干上がり、トラクターで耕され、魚がトラックで運び出されているといった話）を耳にしたとき、それを信じられるほどの信仰を持っていなければなりません。それが本当かどうか確かめに行くことさえしないだろう。たとえ海から百メートルのところに住んでいて、家からは何が起きているか見えなくても、それが本当かどうか確かめに行かない。なぜなら、彼は疑わないからだ。彼は、神にとってはすべてが可能であり、神の力は何ものにも制限されないことを知っており、それゆえ、それ以上のことには何の関心も持たない。それが彼の信仰である。真に信仰を持つ人だけが、真に生き、真に神の人なのである。

神への信頼の源は信仰である

— ゲロンダ、どうすればいいのでしょうか。安心できず、不安でなりません。

— 神の中に身を委ねなさい、私の愛しい子よ。それとも、あなたは車のシートベルトしか知らないのですか？ 神の安全があなたには分からないのですか？ 十字を切って、何かをする前にこう言いなさい。「私のキリストよ、私の主よ、至聖なる聖母マリアよ、私をお助けください。」神への

²²⁰ マタイによる福音書17章20節；ルカによる福音書17章6節。

信頼以上に大きな安全などあるでしょうか？ 神に身を委ねる人は、常に神から「スーパー」ガソリンを補給され、その霊的な車は決して止まることなく、ひたすら走り続けるのです。できる限り注意深くあり、祈り、自分を神に委ねなさい。そうすれば、どんな困難においても、神はあなたを助けてくださいます。不安や動揺を取り除くために、神への無条件の信頼をもって、自分の生活をシンプルにしてください。

— ゲロンダ、私はいつも恐れや迷いを感じながら、言われたことを始めます。そして、その恐れから、本来あるべきようにできないことがあります。

— 十字を切って、私の愛しい子よ、言われたことを行いなさい。「私たちの聖なる父たちの祈りによって……」とあなたが言うなら、これほど多くの聖人のうち、一人もあなたを助けてくれないというのでしょうか？ 決して神への信頼を失ってはなりません。貧弱な人間の論理に自分を縛り付けてはいけません。そうすれば、あなた自身も苦しむだけでなく、神の助けを妨げてしまうのです。分別ある人間としての行動をとった後、自分自身と自分の行いすべてを神に委ねるなら、それはあなただけでなく、他の人々にとっても大いに助けとなるでしょう。神への信頼は偉大なことです。ある時、4人の女性医師が私の採血をしてくれました。最初に来た人は、私を苦しめたものの、静脈を見つけることができませんでした。2人目も同様でした。三番目の医師——この分野の専門家——が来ましたが、やはりうまくいきませんでした。その時、四番目の医師が通りかかり、彼女たちが私を苦しめているのを見て、自分も試してみることにしました。まず十字を切ってから、彼女はすぐに静脈を見つけました。それは、神の助けを求めたからです。一方、他の医師たちは、ある意味で自分たちだけに頼っていたのです。

自分自身を神の御手に委ねることは、偉大なことである。人々は目標を掲げ、それを達成しようと努めるが、神の御心が何であるかに耳を傾けず、自分の行動をそれに合わせようとしめない。物事の成り行きを神に委ね、自らは熱意を持って自分の義務を果たすべきである。人は、自分自身を完全に神の御手に委ねるほどに神を信頼しなければ、苦しむことになるだろう。通常、人々はまず人間的な慰めに頼り、人々に失望してから初めて神に救いを求める。しかし、もし私たちが苦しみを避けたいのなら、神からの慰めを求めるべきです。なぜなら、それこそが唯一の真の慰めだからです。神への信仰だけでは不十分です：²²¹ 神への信頼も必要です。神への信頼は、神の助けを引き寄せます。クリスチャンは信じ、死ぬまで自分自身を神に委ねます。そうして初めて、自分を救う神の御手をはっきりと見ることができるのです。

使徒パウロは、信仰とは目に見えるものだけでなく、目に見えないものを信じることを意味すると語っています。²²² 自分の未来を神に委ねることで、私たちは神に私たちを助けてくださるよう義務づけるのです。神への無条件の信頼の源は信仰です。そのような信仰を持ち、ひそかに祈ることで、人は希望の果実を収穫するのです。神への信頼とは絶え間ない祈りであり、必要な時にそれ

²²¹ この場合、「信仰」とは、単に神の存在を受け入れることを意味しており、キリストにあって生きるには不十分である。

²²² ヘブライ人への手紙11章1節を参照。

は神聖な結果をもたらします。そしてその時、人は当然ながら天使のような人生を送り、「聖なる、聖なる、聖なる主サバオット」と賛美に満ち溢れるのです。²²³ なぜなら、神を信頼することで、人は自分の人生を樂園のようにすることができるからです。人はあらゆることに神を賛美し、慈愛に満ちた父のように、神の導きを受け入れるのです。そうでなければ、人は自分の人生を地獄の苦しみへと変えてしまうでしょう。この世のうちに、少しでも天国の喜びを感じられることは、実に偉大なことです。

— ゲロンダ、肉体的あるいは精神的な健康に関して、どの程度まで神の御手に身を委ねるべきでしょうか？

— まずは神に身を委ね、その次に、私たちを助けてくれる有能な人に身を委ねるべきです。

信仰と愛

— ゲロンダ、信仰と愛の間にはどのような関係があるのでしょうか？

— まず信仰があり、その後に愛が訪れます。愛するためには、信じなければなりません。人は、信じていないものを愛することはできません。ですから、神を愛するためには、神を信じなければなりません。その信仰に応じて、神と隣人のための希望、愛、そして犠牲が生まれるのです。神への熱烈な信仰は、神への、そして神の御姿である私たちの隣人への熱烈な愛を生み出します。そして、哀れな動物たちでさえ、私たちの愛のあふれる恵みを浴びるのです。その愛は、心には収まりきれず、あふれ出るほどに満ち溢れているのです。深く信じるほど、私たちは深く愛するようになる。もし私たちの信仰が冷めかっているとすれば、私たちの愛もまた冷めかったものとなる。もし私たちの信仰が熱ければ、私たちの愛もまた熱くなる。

私たちの信仰には、愛の心が必要だ。愛に満ちた行いは、そこから始まる。人が愛をもって精進すればするほど、その信仰と愛はますます増し加わる。愛に満ちた行いにおいて、神の恵みについて思いを巡らすことは、人にとって大いに助けとなる。神を信じる人は、天国があるかどうかなどとは考えない。人は、神を信じ、神を愛しているからこそ、精進するのです。愛のない人はこう考え始めます。「一体、なぜ精進しなければならないのか？ そもそも天国が存在するのか、最後の審判があるのかどうかも疑問だ……」もし人が恩知らずであれば、何をしても、その人は恩知らずのままであるでしょう。神を愛する人は、試練の中でも神を賛美し、次第に常に神に感謝するようになる。そうしてその魂には神聖な変容が訪れ、絶えず喜びと楽しみを覚えるようになる。一方で、試練など全くなく、祝福ばかりに恵まれているにもかかわらず、決して満足しない人もいる。

神への愛の後に、犠牲が訪れる。そして、無私の犠牲があるとき、その人には神聖な出来事や奇跡が起こり始める。犠牲を払うのは、他の何のためでもなく、ただこの宇宙を創造し、私たちにこれほど多くの祝福を与えてくださる神のためだけである。あの偶像崇拝者たちを見てごらん。彼らは自然を神格化し、太陽や川を崇拝し、自らの信仰のために自らを犠牲にすることさえあった。

²²³ イザヤ書 6章3節。

もし彼らが被造物のために自らを犠牲にしたのなら、創造主のために、私たちはどれほどもっと自らを犠牲にすべきだろうか！

人々は信じないからこそ、自分を犠牲にしないのです。あらゆる無関心はここから始まります。ある者は神を冒瀆し、ある者は中途半端に信じて苦悩しています。真に喜びを得るためには、信じ、愛さなければなりません。

「わたしなしには、あなたがたは何もできない」²²⁴

もし人が苦悩することなく生きたいと願うなら、キリストが言われた「わたしなしには、あなたがたは何もできない」という言葉を信じなければならない。つまり、その言葉の肯定的な意味において、自分自身を見限り、神の力を信じなければならないのである。良い意味での「自分自身を見限る」ことによって、人は神を見出すのだ。「わがすべての望みを、あなたに委ねます。」²²⁵最も霊的な人々でさえ、自分の人生について確信を持つことはできないため、彼らは決して神への確信の範囲から踏み出すことはありません。彼らは神に希望を置き、ただ自分の「私」に対してのみ絶望するのです。なぜなら、「私」こそが人間にすべての霊的な不幸をもたらすからです。

自己への確信は、私たちにとって最大かつ最も邪悪な敵である。なぜなら、私たちが予期しない時に、それは容赦なく、私たちが築き上げてきたものを粉々に打ち砕き、私たちを哀れなまま、露わな空の下に置き去りにしてしまうからだ。自己確信を抱いていると、人は身動きが取れなくなり、何もできなくなったり、あるいは独りで闘わなければならなくなったりする。その結果、当然のことながら、敵に打ち負かされるか、あるいは失敗して自らの「自我」を打ち砕いてしまう。しばしば、慈愛に満ちた神は、ご自身の神聖な介入と、私たちが自信ゆえに被ったその失敗の両方を、非常に賢明な方法で私たちに気づかせてくださる。人生で起こる一つひとつの出来事を観察し、経験することで、私たちは知恵を身につけ、注意深くなり、そうして成功を収めるのです。

キリストはまず、神の力への信仰を求め、その後に奇跡を行われました。「もしあなたが神の力を信じるなら」と主は言われました、「あなたは癒やされるだろう。」²²⁶ 今日、一部の人々が誤って主張しているような、「人には力があり、それを信じれば何でもできる」というのとは違います。福音書にも『信じなさい』と書かれているではないか。したがって、私たちの言葉は福音書と一致している。」確かに、キリストは「あなたは信じるか？」と尋ねた——しかし、そう尋ねたとき、キリストが意図していたのは次のことだった。「あなたは神を信じるか？ 神がそれを成し遂げられると信じるか？」キリストは、人が神を信じていることを確認した上で、その人を助けようとしていたのです。福音書のどこにも、自分の利己主義を信じろとは書かれていません。福音書は、神を信じ、神が私を助け、私を癒やしてくださることを信じるよう呼びかけているのです。しか

²²⁴ ヨハネ15:5。

²²⁵ 大晩課における「聖母賛歌」、第6調。

²²⁶ マタイによる福音書 9:29、マルコによる福音書 9:23を参照。

し、こうした人々は福音の言葉の意味を歪曲し、「人には力があり、人は自分自身を信じなければならない」と言います。しかし、もし誰かが自分自身を信じるなら、そこには利己主義か、あるいは悪霊に取りつかれた状態のいずれかが存在します。

— ゲロンダ、こうした人々は、奇跡が起こると、「その人はそれが起こることを信じていたから、そうなったのだ」と言います。

— そのような利己的な問いかけの背後には、悪魔の働きが潜んでいます。彼らは、キリストが言われた「信じるか？」という言葉と、自分自身の「信じる」という言葉と混同しているのです。ここから、この世で起きているあらゆる悪霊に取り憑かれたような状態が始まっているのです。そして、彼らはあなたにこう言います。「偉大な者も小さな者も、誰をも尊重してはならない。そうしてこそ、真の自分になれるのだ。」だからこそ、「目標を達成するために、彼らを踏みつけ、打ち砕け！」といった呼びかけが聞こえてくるのです。尊敬という概念は時代遅れと見なされ、悪魔は勝利を誇っています。それなのに、たとえ子供が両親や年長者に少し無礼な口調で話しかけるだけでも、神の恵みは彼を見捨て、悪魔の影響を受けてしまうのです！ましてや、人が厚かましさを常套手段にしてしまったら、一体どうなるというのでしょうか！

— ゲロンダ、もしある人が、自分は神を信じていると主張しながら、神が私たちを守ってくださっていることを信じていないとしたら、どうでしょうか？

— それなら、その人は自分自身を神にしているのです。どうして神を信じていると言えるのでしょうか？

— 毎朝、十字を切って祈っているそうです。

— 彼はこう言います。「私は神を信じていますが、神は私たちが自分のやりたいことをできるようにするために、私たちに理性を与えてくださったのです。」あるいはこう言う。「私は神だ。聖書には『あなたがたはみな神であり、至高者の子らである』と書かれていないか？」²²⁷ しかし、恵みによって神となるためには、神の恵みが必要であり、そのような人はそのことについて考えていない。彼は自らの知性によって、自分自身を神にしているのだ。神の恵みを受け、恵みによって神となることと、自らを神に仕立て上げることとは、全く別物である。ここが混同されている点だ。人は自らを神に仕立て上げ、結局は不信心者へと変貌してしまうのである。

やがて、すべての人が信仰を持つ時が来るでしょう

— ゲロンダ、どうして信仰深い人々が無神論に至ってしまうのでしょうか？

— 二つのケースが考えられます。第一のケースでは、その人はかつて非常に信仰心が厚く、神の力がその人生に幾度も働きかけ、極めて明白な奇跡的な出来事を数多く経験していたにもかかわらず、後に信仰が曇ってしまうに至ったのです。このようなことは、例えば、人が理性を働かせずに利己的な修行に走った場合、つまり霊的生活に対して表面的な態度を取り、「あの聖人はどのよ

²²⁷ 詩編81篇6節。

うに修行したのか？ 私も同じようにしよう」と言うような時に起こります。そして、その人は無謀な修行を始める。しかし、徐々に——本人はそれに気づかないまま——「たとえあの聖人のレベルには達していなくても、少なくともその近くにはすでにいるはずだ」という誤った感覚が、その人の中に形成され始める。そして、その人は修行に励み続ける。しかし、それまではその思いに神の恵みが彼を支えていたが、これからは恵みが彼から離れ始める。なぜなら、神の恵みと高慢に何の共通点があるだろうか。それゆえ、人はもはや以前のように修行することができず、自らを無理やり追い込むようになる。しかし、この無理が彼の中に不安を生み出す。そして、高慢の霧が忍び寄り、彼を混乱へと陥れる。そして、彼がこれほど多くのことを成し遂げたにもかかわらず、神の恵みの働きや奇跡的な出来事があったにもかかわらず、彼の中には徐々に不信仰の思いが現れ始め、彼は神の存在を疑うようになる。

第二のケースは、教養のない者が教義学に取り組もうと決心してしまう場合だ。えっ、あいつ、頭がおかしいんじゃないか！ 私が言っているのは、ある教義をざっと目を通すことについてではない。しかし、たとえ教養のある者が、高慢な心で教義の分野に取り組もうとするなら、その高慢さゆえに神の恵みは彼を見捨て、彼の中に疑いが生じ始めるだろう。もちろん、私は敬虔な人々について話しているのではない。敬虔な人は教養がないかもしれないが、理性を働かせ、自分の理解力の範囲内で、ある教義に少し触れるだけで、それを理解することができる。しかし、霊的な生活を信じていない人が教義の領域に足を踏み入れた場合、たとえ以前少しは信仰を持っていたとしても、その後、信仰を完全に失ってしまうだろう。

—ゲロンダ、私たちの時代には、不信仰が極めて広まっています。

「ええ、でも、神を信じていないと言う人の中にも、隠れたわずかな信仰が潜んでいることがよくあります。ある時、ある少年が私にこう言いました。『僕は神がいるなんて信じないよ』——『ちょっとこっちへ来てごらん』と私は答えました。—ウグイスの歌声が聞こえるか？ その才能は誰から授かったんだ？」その哀れな若者は、たちまち心を打たれた。不信仰の冷たさは消え去り、彼の表情が一変した。またある時、二人の訪問者が私のカリヴァを訪れた。彼らは45歳前後で、非常に世俗的な生活を送っていた。私たち僧侶が「この世の生活は虚しいのだから、すべてを捨てよう」と言うのに対し、この二人はまだ若い頃から、まったく正反対の結論——「この世以外に人生はない」——を下していた。そのため、彼らは学業を放棄し、世俗的な生活に身を投じた。その結果、心身ともに廃人のようになってしまった。一人は、その父親が悲しみのあまり亡くなってしまった。もう一人は、母親の財産を浪費し、母親を心臓病に追い込んでしまった。私たちが彼らと話をした後、彼らは物事を別の視点から見直し、「私たちはもはや何の役にも立たない」と嘆いた。そのうちのひとりに、私は彼の母親への贈り物としてイコンを渡した。もう一人にもイコンをあげたかったのですが、彼は受け取りませんでした。「あの、君が切っている板を一つくれ」と彼は言いました。「神は信じないが、聖人は信じる。」そこで私は彼にこう答えた。「人が鏡であろうと缶詰の蓋であろうと、太陽の光が当たらなければ輝かない。聖人たちは、天体が太陽の光を反射するように、神の恵みの光に照らされて輝いているのだ。」

不幸な若者たちは、様々な理論によって惑わされている。カリヴァで来客をもてなしている際、私は、たいてい50歳前後のマルクス主義者たちが若者たちのグループに加わり、彼らを惑わして

いることに気づいた。マルクス主義者たちは信仰を持たず、もしあなたが彼らに神の存在を証明しようものなら、彼らは神を裁き始め、「なぜこれはこうで、あれはああなのか？」と質問を浴びせてくる。預言者イザヤは、救われようとしめない者たちは理解できないと語っている。²²⁸ ある時、私は彼らにこう言いました。「あの天体が見えますか？ それらは上部にナットで固定されているわけではありません。誰かが天の穹蒼にそれらを支えているのです。預言者たちがキリストについて予言したことは、すべて成就しました。私たちには、かつては恐ろしい不信仰者や処刑人、偶像崇拝者であったが、後にキリストを信じ、殉教によってその信仰を証した聖人が数多くいます。そのうちの何人かは、キリストについて語れないように舌を切り落とされましたが、舌を切り落とされても、彼らは以前よりもさらに雄弁に語ったのです！ 教会は毎日、これほど多くの聖人の記念を執り行っています！ 彼らの存在は生き生きとしています。たとえ私たちが彼らを見つけられなくても、彼らの方から私たちを見つけてくれるのです。砂漠の多くの修道士たちは、聖人暦を持たず、教会がどの聖人の記念を執り行っているのかを知らないまま、祈りの中でこう言います。「今日の日を司る聖人よ、私たちのために神に祈ってください。」すると聖人たちは彼らの前に現れ、自らの名を明かしてくれます。しかも、その聖人たちの名前は難解なものばかりです。その後、修道士たちは聖人暦を確認し、その日に現れた聖人たちが祝われていたことを確信するのです。²²⁹ 「これをどう説明しますか？」その後、彼らは私に尋ねた。「なぜ聖人たちは修道士たちのところへやってくるのに、困窮している人々を助けようとしないのですか？」——「君たち、」と私は返して尋ねた。「ここへ飛行機で飛んできたのか？」——「いいえ、」と彼らは言った。「車で来ました。」——「よし、じゃあ、ここへ来る道中、何軒の礼拝堂を見かけた？」²³⁰ それらは雨上がりのキノコのように、勝手に生えてきたわけじゃない。聖人たちが人々を助け、人々は敬虔な心からこれらの小さな礼拝堂を建て、その中でランプを灯しているのだ。霊的な人々は、物質的なものを捨て去るほどに、高みへと昇っていくのだ。唯物論者たちも、たとえわずかなものであれ、利益を得ずにいるわけではありません。例えば、これだけの数のマグカップを作れば、これだけの金が入り、もっと作れば、もっと得られるのです。あなた方はただ宣伝活動に専念し、それだけに留まっています。どこからも利益を得る見込みなどありません。あなたたちは誰よりも不幸だ。なぜなら、もし望むものを手に入れたとしても、あなたの理想はすべて、マルクス主義的奴隷制の苦しみの中に収まってしまうからだ。」最後に彼らは私にこう言った。「君はとても良い人だ。賢く、公正だ……」

²²⁸ 参照：イザヤ書 6章9～10節。

²²⁹ 1979年6月3日、長老パイシイは数珠を数えながら、「聖なる日々よ、私たちのために神に祈ってください」と唱えていた。彼はその日がどの聖人の記念日であるかを覚えておらず、月暦を確認するための眼鏡も見つからなかった（長老はほんの数日前に「パナグダ」の独房へ引っ越したばかりで、まだ荷物の整理が終わっていなかった）。その時、6月3日に記念される聖殉教者ルキリャンが彼を訪れ、その発音にくい名前を三度繰り返した。

²³⁰ ギリシャの敬虔なキリスト教徒の間では、通常、神、至聖なる聖母、あるいは聖人への感謝、あるいは交通事故で亡くなった愛する人々の追悼として、道路沿いに小さな礼拝堂を建てる伝統が広がっている。——訳者注

いずれにせよ、人々がそれを望もうと望まざろうと、行き詰まりに直面したとき、彼ら全員が信じる時が来るだろう。そしてその時、キリストが介入するのだ。

第3章。 神は、 神が助けてくださる

神は、人間の力では成し得ないことに助けてくださる

「あれは一体どんな煙ですか？」

— 不要なものを燃やしているんです、ゲロンダ。

— こんな風の強い日に、焚き火なんてしたんですか？

— ゲロンダ、今朝は雨が降りましたから……

— 雨も洪水も通り過ぎたとしても、その後風が吹けば、すべては火薬のように乾いてしまう！

「雨は止んだ」なんて、とんでもない言い訳だ！以前、あなたの愚かさのためにあそこ、下の方で火事が起きたことを、もう忘れてしまったのか？一度水たまりに足を踏み入れてしまった者は、その後は細心の注意を払わなければならないのだ。神は、神の助けが必要な場所、つまり人間として何もできない場所で助けてくださる。しかし、私たちの愚かさに対しては、神は助けてはくださらない。そうして私たちは、聖人たちさえも世の笑いものにしてしまうのだ。

— ゲロンダ、人間として行動すべき限界がどこまでなのか、常に分かるものなのでしょうか？

— まず、それがはっきりと見て取れるという点から始めましょう。しかし、たとえその人ができることをしようという気はあったものの、何かの妨げがあって実行できなかったとしても、困難な時には神が助けてくださいます。ところが、力はあるのにその気がない場合は、神は助けてはくださらないのです。例えば、夜にはドアの門を閉めるように言われているのに、あなたは怠けて鍵をかけず、「神様が守ってくれる」と言う。あなたが鍵をかけないのは、神様に頼っているからではなく、単に怠けているからだ。では、そんなあなたに神はどのように助けてくださるのでしょうか？神は怠け者を助けてくださるのでしょうか？もし誰かに門をかけるよう言われたのに、それをしないのであれば、その不従順という理由だけで罰せられるべきです。

人間としてできることは自分で行い、人間としてできないことは神に委ねるべきだ。もし、自分の能力の少し上に行くことを——それは利己心からではなく、まだ自分の人間としての力をすべて使い果たしていないと信じ、神への愛から——行うならば、神はそれをも見てくださるだろう。そのような愛の心は神に喜ばれ、神は急いで助けに来てくださる。神は私たちを助けるために、私たち自身の努力をも求めておられる。ノアのように：百年にわたり、箱舟を建造するのに苦労した。木を切るには木製の鋸を使った。他の木よりも硬い木を見つけ、それを鋸の材料にしたのだ。さ

て、神は何か手を差し伸べて、箱舟の建造を早めることはできなかったのでしょうか？「できたでしょう——しかし」、神はノアや彼と共にいた者たちに箱舟の作り方を教えた後、そのための力を彼らに与えてくださったのです。²³¹ ですから、私たちにはできないことを神がしてくださるよう、私たちにできることを行いましょう。

ある時、ある人が私のカリヴァを訪ねてきて、こう尋ねました。「なぜ修道士たちはここに座っているだけで、世に出て人々を助けに行かないのですか？」——「もし彼らが世に出て人々を助けていたら——と私は答えました——その時は、あなたは『なぜ修道士たちは世をさまよっているのか』と尋ねていたでしょう。今は世に出ないのに、なぜ出ないのかとあなたは尋ねているのです。」すると彼は私にこう言いました。「なぜ修道士たちは医者に頼るのですか？　なぜキリストや聖母マリアが彼らを癒やしてくれないのですか？」——「同じ質問を、あるユダヤ人の医師が私に投げかけたことがあります」と私は答えました。——「彼はユダヤ人ではない」と、彼と一緒に来ていた一人の男が私の話し相手を擁護した。「彼がユダヤ人でないことは問題ではない」と私は答えた。「その質問自体が純粋にユダヤ的なものだからだ。そして、状況が似ているので、あのユダヤ人に答えたのと同じ答えを、あなたにも繰り返そう。」「君は——と私は当時彼に言った——ユダヤ人である以上、旧約聖書を暗記しているはずだ。預言者イザヤの書には、非常に善良だったヒゼキヤ王に、神がさらに十五年の寿命を授けたことが記されている。神は預言者イザヤを王のもとに遣わし、彼は王にこう告げた。『あなたが偶像の犠牲を捧げる森を根絶やしにした功績により、神はあなたにさらに十五年の命を与える。そして、あなたの腫れ物（王には腫れ物があつた）については、神は、そこに乾燥したイチジクの束を当てれば、あなたは健康になる、とおっしゃっている』神が彼に十五年の命を与えられたのなら、その腫れ物も癒やすことはできなかったのだろうか？「もちろん、できたはずだ」しかし、その腫れ物はイチジクの房によっても癒やされたのだ。」²³² 人の手によって成し遂げられることを、神に求めるのはやめよう。人々の前で謙虚になり、彼らの助けを求めよう。

人はある限界までは人間として行動すべきですが、その後はすべてを神に委ねるべきです。人間の手では成し得ないことに助けようとしたりするのは、利己的です。そのような頑固さは、その人を機能不全に陥らせるために悪魔が働いている結果であることを、私はよく目にします。私は、人間としてどこまで助けられるか、そしてどの時点で全てを神に委ねるべきか、おおよそ理解しています。ですから、人間的な力では状況を改善できないと分かると、私は嘆きの祈りを捧げ、ろうそくを数本灯し、その困難を神に委ねます。すると、すぐに解決するのです。神は、私が人間的な行動をとるのが面倒だからそうしているのではないことをご存知です。

ですから、私たちの助けを求められるときは、分別を持って行動し、できる限り手助けをすべきです。そして、私たちにはできないことについては、せめて一回の祈り、あるいはすべてを神に委ねることで手助けをしましょう。それもまた、ある種の神秘的な祈りなのです。

²³¹ 創世記6章13節以降を参照。

²³² イザヤ書38章4節以降を参照。

神は私たちの益のためにすべてを顧みておられる

神は本質的に善であり、私たちの益となるようすべてを顧みておられます。もし私たちが神に何かを願うなら、それが私たちの益となるものであれば、神はそれを与えてくださいます。神は、私たちの魂の救いと肉体の健康を維持するために必要なものを惜しみなく与えてくださり、その祝福が私たちの上にとどまります。もし神が私たちに何かを与えない場合——それは私たちが試すためか、あるいは私たちを守るためである——私たちはそれを喜んで受け入れるだけでなく、そこから益を得るために深く考えよう。神は、いつ、どのようにしてご自身の被造物を助けるべきかを知っておられ、必要な時に、神のみがご存知の方法で助けてくださる。しかし、多くの場合、主の弱き被造物には忍耐が足りず、今すぐ求めたものを手に入れたいと願う。まるで、母に焼き足りないベーグルをねだり、それが出来上がるまで待てない幼子のようなものだ。私たちの務めは願い求め、忍耐することである。そして、私たちの慈愛に満ちた母、至聖なる聖母マリアが、それが出来上がった時に、私たちが求めたものを与えてくださるのだ。

—ゲロンダ、聖人たちはどのような場合に助けてくれるのですか？

—聖人たちは、そこに真の必要性がある時に助けてくださいます。単に私たちが必要だと考えているだけでは助けてはくれません。つまり、それが私たちにとって有益な時に助けてくださるのです。わかりますか？例えば、子供が父親に原付バイクをねだりますが、父親は買ってくれません。「原付バイクが欲しいよ」と子供はぐずります。「歩いていくのは疲れるし、つらいんだ。」しかし、父親は息子が事故に遭うのを恐れて、原付を買ってあげません。「後で車を買ってあげるよ」と息子に言い、お金を銀行に預け、十分な額が貯まったら車を買ってあげます。聖人たちもそれと同じで、私たちを助けるべき時を心得ているのです。

—ゲロンダ、私たちはどのようにして神の慈悲を感じるのでしょうか？

—神の慈悲とは、私たちが心の奥底で感じる神聖な慰めです。神は、私たちが人間の慰めに安らぎを見出さず、神の慰めに頼るようにと、このように仕組んでおられるのです。例えば、オーストラリアのギリシャ人たちは、完全に独りきりになったことで、他の国、例えばドイツなどへ移住した人々よりも、神に近づくことができました。ドイツでは、ギリシャ人は祖国にも近く、同胞に囲まれているからです。オーストラリアへ移住した人々にとって、困難は神にすがりつくための大きな助けとなりました。彼らは皆、スーツケース一つで旅立ち、祖国からも家族からも遠く離れた場所で、仕事や子供たちの先生、その他多くのことを見つけなければなりませんでした。助けを期待できる場所はどこにもありませんでした。そのため、彼らは神に身を委ね、信仰を守り抜いたのです。一方、ヨーロッパのギリシャ人たちはそのような困難を経験しなかったため、神にこれほど強くすがってはいないのです。

「求めなさい。そうすれば与えられます」²³³

— ゲロンダ、神様は私たちの必要を知っておられるのに、なぜ神様に助けを求めなければならないのですか？

— そこには自由があるからです。それに、隣人のために心を痛め、神にその人を助けてくださるよう願うとき、神は深く心を動かされます。なぜなら、そのとき神は、人間の自由意志を侵害することなく介入してくださるからです。神は苦しむ人々を助けることに、心から喜んでおられます。しかし、神が彼らを助けるためには、誰かが神にそうお願いしなければなりません。なぜなら、もし誰もお願いしていないのに神が誰かを助けたとしたら、悪魔は異議を唱えてこう言うでしょう。「なぜ彼を助け、人間の自由意志を侵害するのですか？彼は罪人であり、つまり私のものなのですから。」このことから、悪魔でさえ異議を唱える権利を与えないという、神の偉大な霊的高潔さうかがえます。それゆえ、神は介入するために、私たちが神にそうお願いすることを望んでおられます。それが私たちの益となるのであれば、神はすぐに助けに来たいと願っておられます。神は、ご自身の被造物たちの必要に応じて助けを与えたいと願っておられるのです。一人ひとりに対して、神は個別に働きかけられます——それは、その人にとって最も益となるようにです。

さて、神や聖人たちが助けてくれるためには、その人自身がそれを望み、願い求めなければならない。そうでなければ、彼らは助けてはくれない。「癒されたいか？」²³⁴——キリストは麻痺した男にこう尋ねた。もし人が望まないなら、神はその意思を尊重される。また、もし誰かが天国へ行きたくないと望むなら、神は無理やりそこへ連れて行ったりはされない。ただし、[霊的な]無知の中にいた人が不当に傷つけられた場合、その人は神の助けを受ける権利を持つ。それ以外のケースでは、神は干渉しようとはされない。人は助けを求めるか？神と聖人たちはそれに応えてくれる。まばたきする間もなく、彼らはすでに助けてくれている。時にはまばたきする暇さえなく、それほど速やかに神はあなたのそばに現れるのだ。

「求めよ、そうすれば与えられる……」と聖書は語っている。神に助けを求めなければ、私たちは完全な失敗に終わる。しかし、もし私たちが神の助けを求めるならば、キリストは細い紐で私たちを御自身の恵みと結びつけ、支えてくださる。風はあちこちから吹き荒れますが、私たちはしっかりと結びつけられており、危険から守られています。しかし、誰が自分を守ってくれているのかを理解していない人は、その紐をほどいてキリストから離れ、四方八方から吹き荒れる風に翻弄され、苦しむことになります。

知っておいてほしいのは、私たちに属するのは情欲と罪だけだということです。私たちがどんなに良いことをしても、それは神からのものであり、どんなに愚かなことをしても、それらは私たち自身のものです。

²³³ マタイによる福音書 7章7節。

²³⁴ ヨハネによる福音書 5章6節。

神の恵みが私たちからほんの少しでも離れると、もう私たちには何もできなくなります。自然界の生活において、神が私たちから酸素を奪うやいなや、私たちは即座に死んでしまいます。霊的な生活も同様です。神が私たちから神の恵みをほんの少しでも取り去るだけで、私たちは終わりです。ある時、祈りの最中に私は喜びを感じました。数時間立ち続けていたが、疲れを微塵も感じなかった。祈っている間中、言葉では言い表せない、ある種の甘美な安らぎを感じていた。しかし、しばらくすると、私の中に人間的な考えが浮かんだ。「私には肋骨が二本足りないから、すぐに風邪をひいてしまう。この状態を失わず、それが続く限り味わうためには、行って暖かいスカーフを取ってきて身を包まなければならない。さもないと風邪をひいてしまうかもしれない。」この考えを受け入れた途端、私は床に倒れ込んでしまった。床に約30分ほど横たわった後、ようやく起き上がり、独房に戻って横になることができた。その直前、祈りに深く没頭していたとき、私はまるで言葉では言い表せないような、ある種の軽やかさ、浮遊感、喜びを感じていた。しかし、その考えを受け入れた途端、床に倒れ込んでしまった。もし私が傲慢な考えを抱き、例えばこう考えていたら——「さて、私と同じような状態にある人が、あと二人か三人はいるだろうか？」——と考えたなら、私はひどく傷ついていただろう。私の思いは悪魔的なものではなかった。それは、足の不自由な人が松葉杖を手にとろうと考えるのと同じように、人間として考えたに過ぎない。この思いは自然なものであったが、ご覧の通り、それだけで私に何が起きたか！

人間が持っている唯一のものは「心構え」であり、神はその心構えに応じて人を助けてくださる。だからこそ、私たちが持っているすべての恵みは、神からの賜物だと言うのだ。私たちの行いは無に等しく、私たちの美德は、ただひたすら続くゼロの列に過ぎません。ですから、絶えずゼロにゼロを足し続け、キリストにこの列の先頭に「1」を置いてくださるようお願い求めましょう。そうすれば、私たちは豊かになるのです。もしキリストが先頭に「1」を置いてくださらなければ、私たちのすべての労苦は水の泡となってしまいます。

神の恵みは謙遜によって引き寄せられる

— ゲロンダ、修業に励む中で、私は困難に直面しています。

— あなたはキリストに助けを求めているのか、それとも一人で戦っているのか？ 自分の弱さをキリストに打ち明けたか？ あなたは謙虚にならず、キリストに助けを求めず、その上で「霊的闘いをしていると、困難を感じます」と言うのだ。もし謙虚になり、キリストに少しの助けを求めれば、キリストは助けてくださる。多くの場合、人が注ぐ努力は利己的なものであり、それゆえキリストも助けてくださらないのです。自分の「自我」を捨て去り、それを考慮に入れないでください。そうすれば、神の恵みがあなたの中に宿るでしょう。私たちは魔法のような方法（苦労なしに）で聖性に到達したいと願っていますが、神は（霊的に）正しくない状態にある人を助けてはくださらないのです。少しでも利己心が混じっていれば、それは神の助けの妨げとなります。

— でも、もし私が改心する気があるなら、自分では気づけなかった自分の弱さを自覚できるよう、神は助けてくださるのではないのでしょうか？

— 神が助けてくださるためには、あなたの中に「努力しようという心」がなければなりません。「努力しようという心」とは、自分の弱さを克服するために、ほんの少しの努力を払うことを意味します。ほんの少しの純粋な意志を見れば、神は惜しみなく人を助け、惜しみなく御恵みをお与えになります。人は神の導きの中へと入っていくのです。

— ゲロンダ、霊的な闘いにおいて、神はどの程度まで私たちを助けてくださるのでしょうか？

— 私たちが、神が私たちを助けるのを自ら助けている限りです。長い間、神に何かを願い求めている、神が助けを与えてくださらない場合、その原因はあなたの高慢にあることを知ってください。もし私たちに、例えば、暴食、言葉の節制の欠如、怒り、嫉妬などの情欲があり、同時に高慢もあるならば、神は私たちがそれらから解放されるのを助けてくださらない。なぜなら、私たちが神の恵みを妨げているからだ。たとえ私たちの中に高慢への素地があるだけであっても、必要以上に精進し、祈りを捧げたとしても、やはり神が私たちを助けることを妨げてしまうのです。人がその助けを自分の手柄だと主張する恐れがなければ、神が助けを与えないということはありません。高慢への素地が消え去り、人が霊的に健全になれば、神はその人を苦しめている情欲から即座に解放し、その人が成し遂げた「並外れた」功績に対して報いてくださいます。したがって、助けを得るためには、私たちは謙虚な思いで神を助けなければなりません。こう言いましょう。「神よ、私はなんて無価値な人間でしょう！どうか私を救し、助けてください。」そうすれば、神は助けてくださいます。なぜなら、善良で謙虚な心持ちで自らを神の御手に委ねた魂には、神の助けを受ける権利があるからです。

キリストと至聖なる聖母マリアが、私たちが謙虚な心持ちさえ持っていれば、常に私たちを守り、助けてくださることを信じなければなりません。私たちの神は、私たちの声を聞き逃すほど耳が遠くないし、私たちを見逃すほど目が見えないわけでもありません。神はバアルのようなお方ではないのです。²³⁵

霊的闘争の始まりにおける助け

— ゲロンダ、神は人が霊的な闘いを始めたばかりの頃、最も力を貸してくださるといえるのは本当でしょうか？

— はい、人が霊的生活の第一歩を踏み出すとき、神は大変助けてくださいます。それは、子供がまだ小さい頃、親がより一層子供を守ってあげるのと同じようなものです。しかし、子供が成長すると、親は以前ほど過度に心配しなくなります。なぜなら、子供たちは自分の理性を用い始めるからです。霊的な闘いの初めには、人は神の恵みをはっきりと感じますが、その後、神は人が自ら奮起し、強くなるよう、少し距離を置かれます。以前、私の家庭菜園にトマトの苗を数株植えた時のことを思い出します。最初は毎日水をやっていたのですが、やがてやめて、葉が黄色くなり始めた時だけ水を与えるようにしました。水がないとトマトは苦しくなり、水分を求めて根を深く地中

²³⁵ 列王記上18章26節を参照。

へと伸ばさざるを得ませんでした。そうして実もなり始めました。もし私が絶えず水を与え続けていたら、トマトはただ上へ伸びるだけで、根は地表にとどまったままだったでしょう。

— ゲロンダ、あなたは、霊的な闘いの初めには人は神の恵みを感じるが、その後、その恵みが少し遠ざかるとおっしゃいましたね。

— そうです。神は、人が謙虚になり、神の助けを自覚するように、ご自身の恵みを取り去られるのです。

— そのような変化は、辛いことではないでしょうか？

— いいえ、神は人間を完全に見捨てたりはしないからです。人が霊的な働きを始めると、神は、まあ、例えば……チョコレートのようなものを与えてくださいます。そうして、少しずつ、人は働きながらチョコレートを食べることに慣れていくのです。しかし、もし神が人に甘いものを与えるのをやめ、その人が努力をやめて、「最初はチョコレートを食べられたのに、今は一つももらえない！…ああ、なんて不幸なことに！」と嘆き始めたら、そのような人は成長できません。つまり、人は[むしろ]それを喜ぶべきなのです。キリストに安易な助けを求めたり、寛容を乞うたりしてはならない。そうすれば、私たちは試練を経ず、訓練も受けられないままになってしまうからだ。軍隊でも、よく学ぶ者こそが生き残る。もし人が際限なく助けを受け続けていれば、結局のところ無力なままになってしまう。キリストが常に助けてはくれないという事実が、私には心温まるものとして映る。私は、厳しい教師たちのもとで学ぶ生徒のような気分になる。霊的な試験に合格するのは難しい。常に自分自身を律し、努力を続けなければならないが、そうしてこそ、人は霊的に成長するのだ。神にとって、すべての人に絶えず助けを与えることが難しいことでしょうか？もちろん、難しいことはありません。しかし、そのような助けだけでは、人は成長できません。もし親が甘やかされた子供に際限なくチョコレートをあげ続け、子供自身も「みんなにずっと食べさせてもらいたい」と望むなら、その子は怠惰で、反抗的で、情けない人間に育ってしまうでしょう。霊的な生活においても同様です。もし誰かが常に神の助けを受け入れ、自ら努力しなければ、その人は決して霊的な成熟に達することはできません。そのため、神は霊的な生活の初期に人を助けつつ、その後、その人が「自分の力の及ぶ範囲で自ら行動しなければならない」と理解できるよう、徐々に一步引いていくのです。ほら、赤ちゃんが歩き方を覚えているとき、親は常に手をつないでいるわけではなく、自分で歩いてみるよう促します。そして、転びそうになると、親は「さあ！」と素早く抱きかかえます！そうして、子どもは自分の力だけでは、何かにつかまりながら歩くことしかできないのだと理解するのです。もし、その子が手をつないでいるときだけ歩き、手を離されると、自分で歩くことを学び、少しずつ力を養うために何かに掴まろうとせず、床に座り込んでしまうなら、その子は決して歩くことを覚えられないでしょう。なぜなら、その子は自分にできることをしなかったからです。

— 人は、最初は神の助けがあったのに、その後それを失ったと実感するのでしょうか？

— もし人が自分自身に注意を払わなければ、何も感じないでしょう。

神の力は全能である

— ゲロンダ、多くの人が「この世で起きている様々な〔困難や誘惑〕は、結局どうなるのか」と不安に思っています。

— よく聞いてほしい。今、たとえ神が私たちを見捨てようとしても、それはできないのだ。

— ゲロンダ、どういう意味ですか？

— こうだ。親は子供に命を与え、その子を育てるために苦労すればするほど、その子を強く愛し、その子のことを心配するようになる。神も同様だ。神は私たちに命を与え、ある意味で苦労して私たちを育て上げ、そう言えるなら、私たちのためにあらゆることをしてきて、疲れ果てたのだ。そして今、たとえ神様がそう望まれたとしても、私たちを見捨てることはできません。なぜなら、私たちにほんの少しの愛さえあれば、神様は私たちのことを思い、心を痛めておられるからです。もし私たちにほんの少しの愛があるなら、私たちは楽園の外に取り残されることはないでしょう。

— ゲロンダ、あなたは、慈愛に満ちた神は私たちを見捨てないとおっしゃいましたね……

— そうです。神は決して私たちを見捨てません。見捨てるのは私たちの方です。もし人が霊的に生きていないなら、その人には神の助けを受ける権利はありません。霊的に生き、神に近づいてこそ、その権利が与えられるのです。そして、もし何かが起こってそのような人が死んだとしても、その人は来世への準備ができています。ですから、この世でも来世でも、その人は得をすることになるのです。

神の助けを妨げることができるのは、人間でも悪魔でもありません。神にとっても、聖人にとっても、難しいことなど何一つありません。障害となるのは、ただ私たちの人間としての信仰の薄さだけです。その信仰の薄さによって、私たちは偉大な神の力が私たちに近づくのを妨げてしまっているのです。私たちのすぐそばにはこれほど偉大な力が存在しているが、私たちの中には人間的な要素が強く存在しており、全世界の人間的な力をはるかに凌駕する神聖な原理を理解することはできない。なぜなら、神の力は全能だからである。

私たちはしばしば、何の役にも立たないまま何時間も座り込み、自分たちだけで何らかの状況からの抜け道を見つけようと、未熟な知恵を総動員して努力してしまう。頭が割れそうになり、目が痛くなり、強迫的な思考という「タンガラシュカ」に襲われて眠れなくなります。そして結局、私たちは解決策を見つけますが、その後、神は私たちのために別の、より良い解決策——私たちが思いもよらなかったようなもの——を見つけてくださいます。私たちに残されるのは、頭痛と眠れない夜だけなのです。もし私たちの前に神がいなければ、たとえ私たちの考えがどれほど正しくても、頭は疲れ、痛むものです。しかし、神への信頼を込めた祈りは、人の力を回復させてくれます。ですから、人間的な力では成し遂げにくいことを、信頼をもって神に委ねましょう。私たち自身の努力に頼るのではなく、神が最も有益なことをしてくださるのです。

何をするにしても、常に「神の御心ならば」と言ってください。そうすれば、ある自信過剰な男に起こったようなことが、あなたに起きることはありません。彼はぶどう畑で働くつもりで、妻にこう言いました。「明日の早朝、ぶどう畑へ行くよ。」 「『神の御心ならば』行けばいいわ」と

妻は言いました。「神の御心であろうとなかろうと」と彼は答えました。「私は行くつもりだ。」翌朝、まだ暗いうちに、彼は家を出ましたが、途中で激しい雨が降り出し、引き返さざるを得ませんでした。まだ夜が明けていなかった。彼はドアをノックした。「誰？」と妻が尋ねた。「神の御心ならば——」と彼は答えた。「それは私、あなたの夫だ！」

善意

—ゲロンダ、善意はあるが信仰のない人々はどうなるのでしょうか？

—彼らに信仰がないとお考えですか？ まあ、そうだとしましょう。しかし、彼らが幼かった頃、母親は彼らに聖体拝領をさせていなかったでしょうか？ たとえ聖体拝領をさせていなかったとしても、彼らは洗礼を受け、聖油の塗油を受けていなかったでしょうか？ 彼らは正教徒で洗礼を受けた母親から生まれたのではないのですか？ さあ、神がこうした善意を持つ人々をどのように助けてくださるかを、あなたは目にするだろう。試練や病気、災難や地震、稲妻、雷、洪水、ただ一言、あるいはその他何であれ。そして最終的には、神は彼らを楽園へと導いてくださるのだ。しばしば、そのような人には、たとえそれほど大きな祝福に値しないにもかかわらず、聖人や天使さえも現れることがある。キリストは、その前に他のあらゆる手段を尽くした上で、これさえもなされることもある。しかし、こうした人々にはしばしば次のようなことが起こる。悪魔が割り込み、彼らを欺き、これらの不幸な人々の多くは惑わされてしまう。なぜなら、悪魔は彼らにこう語り始めるからだ。「ほら、見ろ。神があなたにこれほど偉大な奇跡を示されたのは、あなたが世界を救うことができるからだ！」そして、その不幸な人は、悔い改める代わりに、「神よ、どうすればあなたに感謝すればよいのでしょうか？ 私はこれほど偉大な恵みに値する者ではありません」と言う代わりに、悪魔が持ち込む考えを受け入れ、高慢になってしまうのです。その後、悪魔は再びその人のもとを訪れ、「テレビ番組」のような演出を始めます。天使や聖人たちを見せつけ、「お前が宇宙を救うのだ」と告げるのです。もしそのような人が正気に戻れば、神は再びその人を助けてくださいます。

いずれにせよ、私たち全員が神からの遺産、賜物を持っていることを忘れてはなりません。だからこそ、すべての人々の心の奥底には善さが宿っているのです。しかし、そのすべてが悪魔に汚されてしまいます。それでも今、教会から離れてしまった人々の中にも、この遺産、この善さを保ち続けている者がいます。そうであるならば、神は彼らを助けてくださるでしょう。ですから、罪深い生活に陥ってはいるものの、思いやりのある人——例えば、病んで心苦しんでいる人を見たり、貧しい人を見て助けてあげたりするような人——に出会ったときは、神がその人を見捨てず、助けてくださることを知ってください。しかし、もしあなたが、神から離れてしまった人が冷酷で、慈悲がなく、他の情欲にも囚われているのを見たら、神がその人の心に「救いの部隊」を送り込み、その人が回心するように、昼夜を問わずその人のために祈らなければなりません。

神の裁きは深淵です。私が知っていることは一つだけです。世俗的な生活を送っている人々、神を知る好機を得られなかった人々、悪に魅了された人々、悪へと突き落とされた人々——こうした人々も、もし心に善意を抱いているならば、神の心を動かして、神は彼らを助けてくださいます

。神は、そのような人々が自分の道を見出せるよう、様々な手段を講じられ、決して彼らを見捨てられることはない。神は、死の瞬間でさえ、彼らが善き状態にあるように導いてくださるのだ。

第5部。 霊的な武器について

「もし誰かが、現在世界で起きていることに心を痛め、そのことについて祈っているなら、人々は助けを受けることができ、その際、彼らの自由意志は損なわれることはない」

第1章。 祈り、強き武器について

多くの祈りが必要である

かつて、世俗的な人は何かをしようとする際、その前に考えを巡らせたものだ。一方、霊的な人が何かをしようとする時は、考えを巡らせるだけでなく、祈りも捧げた。現代では、「霊的な」人々でさえ、祈らないばかりか、考えることさえしない。その事柄はしばしば重大な問題に関わるものなのに、彼らは実験を強行し、その実験の被験者は——人々である！ どのような場合でも、何かを行う前に、自分自身にこう問いかけよう。「私はこれを熟考したか？ これについて祈ったか？」考えも祈りもせずに何かを行うことは、サタンのような行いである。多くのクリスチャンは、自らの行動によって神の介入を妨げてしまうことがよくあります。彼らは自分たちだけで課題を乗り越えられると考えており、不信者でさえ「神の助けを借りて」と言うのに対し、こうした人々はそうは言いません。例えば、誰かがカーニバルに反対して闘っているが、²³⁶、祈れば、神は雹を降らせて、人々を散らし、すべての公演を中止させることができるはずだ。あるいは、ある人々が特定の司教を何かで告発し、他の人々が国家評議会でその告発に異議を申し立てるが、それだけでは終わらない。デモや騒ぎ、新聞記事などが続く……人間の努力は尽きることがない——こうした人々は神が働かれることを許さず、神が祈りを通して応えてくださるよう祈ることもない。是正されていないこと、是正不可能なことすべては、謙遜と祈りによって是正されるのだ。

²³⁶ ギリシャで毎年行われる、賑やかな見世物や民衆の祝祭を伴う謝肉祭のカーニバルという非キリスト教的な伝統を指している。——訳者注

今日、私たちは黙示録の時代に生きており、それを理解するのに預言者である必要はない。あらゆる出来事が次々と起こっている。私たちには何が待ち受けているのか分かりません。それは、世界に蔓延している状況を見れば明らかです。だからこそ今、かつてないほど、私たちは祈りに強く頼り、祈りをもって悪と戦わなければなりません。それが唯一の道です。たとえ私たちが神の憐れみに値しない者であっても、神に御自身の被造物を憐れんでくださるようお願い求めましょう。人々は互いに理解し合うことができなくなるでしょう。誰もが、頭に浮かんだままの行動をとるようになるのです。聖コスマ・エトリアスが預言したことが実現するでしょう：²³⁷ 「人に出会うためには長く歩かなければならないだろう。そして、生き残った者たちは金のスプーンで食事をするだろう。」 もちろん、「予言はいずれにせよ成就するのなら、祈りに何の意味があるのか」と考える人もいるだろう。確かに、神は事態がまさにそのように展開することをご存知だが、私たちは、悪がそれほど痛ましいものではなく、広まらないようにと祈っているのだ。だからこそ、福音書にも「選ばれた者たちのために、その日は短縮される」と記されているのである。²³⁸ 例えば、戦争において、祈りの力は奇跡を起こします。より多くの人々が生き残り、逆に犠牲者は少なくなるのです。これらすべてを通じて、人々は霊的な恩恵を受け、信仰を持つようになり、良い意味で変わっていくのです。

これは決して冗談ではない。世界が今なお空に吹き飛んでいないこと自体が、すでに奇跡である。神が御手を差し伸べてくださることを願う——全世界は三、四人の人間に依存しており、その運命は数人の狂人の手に委ねられているのだ。まさに「馬と馬が争えば、蹄の被害を受けるのは鶏たち」という諺の通りである。まさにその通りだ。大国同士の争いが始まると、不条理が不幸な小国の人々の頭上に降り注ぐ。大国が暴れ回れば、小国が崩壊するのだ。神が権力者たちの心を啓発してくださるよう、数え切れないほどの祈りが必要です。なぜなら、彼らには、望めば世界を破壊する力があるからです。しかし、神は彼らにもほんの少しの啓発を、極めて容易に与えることができます。もし神がたった一人を啓発してくださるなら、その人が適切な指示を出すだけで、すべてが変わるのです。

祈りにおける願い

—ゲロンダ、もしよろしければ、特に祈るべきことについて、いくつか教えていただけませんか。

²³⁷ 聖コスマ・エトリアの殉教者（使徒同等、†1779年；殉教記念日は8月24日）。18世紀に生きた。長い間、聖アトス山で修行に励んだ。神の召しを受けた後、世に出て、トルコに支配されていたギリシャの町や村を巡り、説教を行った。福音を教え、学校を開設し、ギリシャ人のイスラム化を阻止した。数多くの奇跡を行い、全人類の未来に関する非常に多くの預言を残した。新時代の偉大な預言者と正当にみなされている。2007年、出版社「聖山」より、アフアナシオス・ゾイタキス著『コスマス・エトリアスの生涯と預言』が刊行された。——訳者注

²³⁸ マタイ24:22、マルコ13:20を参照。

— まず第一に、私たちの祈りによって、今生きている人々も、これから生きる人々も、神を崇めるようになるよう願いましょう。私は祈りの中で、「御名を称える者たちに御慈悲をお示ください」と言う際、こう付け加えます。「……『……あなたを知らない者たちにも』」と付け加えます。さらには、「主よ、不義な者たちを救ってください」とさえ祈ります。（もちろん、教会が「主よ、敬虔な者たちを救ってください」という祈りを定めたのは正しいことです。そうでなければ、不義な者たちは、自分たちのために祈られているのを聞いて、不平を言うかもしれないからです。）その後、司祭が「私たちのような不適格な者たちに、彼らのために祈るよう命じられた方々」と唱えるとき、私はこう付け加えます。「……そして、命じられなかった方々のためにも」。なぜなら、私たちは、そう頼んできた人々のためにも、頼んでいない人々のためにも、知っている人々のためにも、知らない人々のためにも祈らなければならないからです。私たちの祈りを求めてきた人々よりも、はるかに大きな必要を抱え、より深刻な問題に直面している人々が、どれほど多くいることか！ 不正な扱いを受けた人々のためにも祈りましょう。そうすれば、真実が明らかになるでしょう。また、刑務所にいる人々が赦され、彼らが経験した苦しみは彼らの益となり、改心できるよう祈りましょう。

薪を火に投げ入れながら、私はこう祈ります。「神よ、暖かさを奪われた人々を温めてください。」私宛てに送られてきた手紙を燃やすとき（手紙を読んだ後、他人が知るべきではない内容、特に罪の告白が含まれているため、私はそれらを燃やします）、私はこう言います。「神よ、彼らのすべての欠点を焼き尽くしてください。神よ、彼らが霊的に生きられるよう助け、彼らを聖別してください。」また、私は聖人たちに、その名を持つ人々を庇護するようお願いする習慣があり、すべての聖人に対しては、守護聖人のいない人々のために執り成しをしてくださるようお願いしています。²³⁹

— ゲロンダ、どちらが良いのでしょうか。単に神の憐れみを求めることか、それとも、救い主の「求めなさい。そうすれば与えられる」という戒めに従い、²⁴⁰、祈りの中で具体的なことを求めることか？

— 一般的な祈りを捧げ、「主イエス・キリストよ、肉体と魂に苦しむ者たちを憐れんでください」と唱えなさい。この祈りは、亡くなった方々も包含しています。もし親族の誰かのことが頭に浮かんだなら、その人のために「あなたのしもべ（名前）」を憐れんでください、と祈り、すぐに全世界のための一般的な祈り、「あなたの全世界を憐れんでください」へと移りなさい。困窮している特定の人のことを思い浮かべ、その人のために少し祈った後、「主イエス・キリストよ、私たちを憐れんでください」という祈りを唱えてください。すべての人々のために心を痛めながら……列車がたった一人の乗客だけを乗せて発車してしまわないように。 たった一人の人に固執してはい

²³⁹ ギリシャ正教会では、非キリスト教的な名前を持つ人々の洗礼は許されないとは見なされていない。慣例により、そのような人々は「諸聖人の主日」に自身の名日（テゾイメニトス）を祝う。——訳者注

²⁴⁰ マタイによる福音書7章7節。

けません。そうしないと、後で自分自身にも、他の人にも、祈りによって助けを与えることができなくなってしまいます。例えば、がんを患っている誰かのために祈るときは、がんを患っているすべての人々のために祈り、さらに亡くなった方々のための祈りも加えましょう。あるいは、不幸な人を見かけたら、すぐに心の中ですべての不幸な人々を思い浮かべ、彼らのために祈りましょう。子供の頃、私たちの家から10メートルほど離れたトルコ人の家の玄関先で、ある物乞いが亡くなっているのを見たことを覚えています。彼の名前はピョートルでした。あるトルコ人女性が朝、家のポーチのそばに横たわっている彼を見つけ、揺さぶってみたら、すでに亡くなっていたことに気づきました。私は今でも彼のことを偲んでいます。世の中には、そんな「ペトロ」のような人々がどれほどいることか！ 祈る者にとって、具体的なことを願い、隣人が苦しんでいることを考えることは有益である。なぜなら、それによってその人の心は痛みで刺されるからだ。そして、心に痛みを抱えたまま、人は祈りの中で具体的なことから普遍的なことへと立ち返り、心のこもった祈りによって人々をより多く助けることができるのだ。

修道士は、自分の祈りを三つの部分——自分自身について、全世界について、そして故人について——に分けるのがよいでしょう。しかし、そのような分け方であっても、一見均等に見えても、修道士が自分自身に対して最も大きな配慮を払うのは、自分の魂は一つであるのに対し、生きている者や故人は何十億人もいるからです。

—ゲロンダ、私は奉仕の務めをしている時、たいてい自分自身のことだけを祈っています。

—それは間違っています。もし独房で自分自身の事だけを祈り、奉仕の務めにおいても自分自身の事だけを祈るなら、どうして心が痛みによって傷つくことができるのでしょうか？ 誰かに愛や痛み、犠牲の精神が芽生えるとき、他者へのある種のより高い関与も生まれ、それによって心は喜びに満たされるのです。

このようにして、人は仕事でも祈ることを忘れません。そうすれば、人々は真の助けを受けるだけでなく、祈り、霊的な喜びを味わう者自身も助けを受けるのです。自分の務めを果たし、「主イエス・キリストよ、私たちを憐れんでください」と祈りなさい。そうすれば、あなたの祈りはすべての人々の助けとなるでしょう。この「私たちを憐れんでください」という言葉は、全世界の運命を左右する、あの五、六人——その数が何人であろうとも——の「偉大な人々」さえも包含しているのです。働き、そして働く人々のために祈りなさい。この祈りは、肉体的に働く人々にも、霊的に働く人々にも助けとなります。なぜなら、多くの人々が、しかも熱心に働いているからです。ある人々は教会と国家の益のために働きます。他の人々は悪のために働きます。夜通し座り込み、世界を破壊する方法を考え出そうとしています。また、会議に集まり、前述の人々が悪を行うのを阻止する方法を模索する者たちもいます。さらに、人類共通の問題の解決策を見つけようと、昼夜を問わず働き、眠らずに努力する者たちもいます。神が悪を行う者たちを啓発し、彼らが犯す悪を減らすように、あるいは神が悪を完全に排除してくださるよう、祈ってください。また、神が善を行う者たちを啓発し、彼らが人々を助けることができるよう、祈ってください。働きたいのに病気のせいで働けない人々のために祈りなさい。また、健康なのに仕事が見つからず、困窮している人々のために祈りなさい。さまざまな状況を思い描き、それらのために祈りなさい。心がこれらす

べての人々に向けられるとき、胸は痛みで締め付けられ、祈りは心の底から湧き出るものとなる。一日を通して、どれほど多くの人々が祈りを必要としていることか！ だから、時間を無駄にしないでください。祈りを求めてきた人のために祈り始めたら（たとえその人が、それほど祈りを必要としていないにもかかわらず、必要だと考えているとしても）、祈る人はさらに先へ進み、もっと大きな必要に直面しているすべての人々のことを思い浮かべるのです。そうすれば、自分が祈りを必要としていると思っていた人さえも助けを受けることになる。なぜなら、その人がきっかけとなって、誰かが多くの人々のために祈るようになったからである。

祈りを通じて与えられる助け

— ゲロンダ、聖使徒ヤコブはこう言っています。「義人の祈りは、太いに力がある。」「力がある」とはどういう意味でしょうか？

— 誰かの祈りを求める人は、自分自身も助けを求め、救われたいと願っていなければなりません。その人は努力しなければなりません。つまり、義人の祈りから助けを得るためには、自分自身が善意を持っていなければならないのです。神は心から捧げられる祈りを聞き入れてくださいますが、祈られている側もまた、その助けを受け入れようという意志を持たなければなりません。もしその人がそれを望まないならば、祈る者は大聖パিশオスのような聖性を備えていなければ、その人の魂を地獄から救い出すことはできないでしょう。²⁴¹ ですから、まずは救われようとする意志のある人々のために祈ってください。

私は、様々な必要について神に願い求める際、こう言います。「わが神よ、あなたの助けがはっきりと現れるようにしてください。そうすれば、人々はそこから霊的な益も得ることができるようでしょう。もしそれが目に見えないものであれば、私たちを助ける必要はありません。」多くの人々は、神がどのような嵐から私たちを救ってくださっているのかさえ理解しておらず、そのことについて全く考えもせず、神を賛美することもあります。ですから、キリスト、神の母、聖人たちが人々に助けてくださるよう願いましょう。しかし、その助けが実感できるものであって、人々の益となるようにしてください。例えば、誰かが足場から足を滑らせたとしても、神は、つかまるものなど何もないような場所に偶然つかまるように導き、その人を生かしてくださる。あるいは、誰かが転んでも怪我をせず、自動車事故に遭っても無傷で済む。こうしたすべてのケースにおいて、その人が「神の助けによって救われたのだ」と理解し、その理解を通じて霊的な恵みを得られるよう、祈る必要があります。私の知人の一人は、橋から川に落ちたにもかかわらず、生き延びました。「どうだった？」と私が尋ねると、彼は「深さを測るために飛び降りたのか？」と返してきました

²⁴¹ 聖パিশオス大聖人の伝記には、次のような出来事が記されている。ある怠惰な修道見習いが、不従順のゆえにある罪を犯し、悔い改める間もなく亡くなってしまった。その長老の執拗な祈りの後、神は彼に、その見習いの魂が最後の審判の日まで地獄に留まり、その日に彼にふさわしい最終的な報いを受けると啓示された。そこで長老は聖パিশオスに目を向け、亡くなった者の救いのために神に祈ってほしいと頼んだ。尊者による熱心な祈りの後、キリストは悔い改めなかった見習い修道士の魂を地獄から解放された。

。聖人たちは私たちをその腕に抱いて守ってくれているのです。ある青年に、私は祝福として十字架を贈りました。彼はバイクで猛スピードで走っていたところ、バイクごとタクシーを飛び越え、空中で宙返りをして、そのまま道路を走り去りました——傷一つ負いませんでした。確実な死から救われる人は多くいますが、それを自覚し、自らを改める人はほとんどいません。

「もし私が誰かのために祈っても、その人自身が助けを求めている場合、その人は助けを受けるのでしょうか？」

— それは多くの要因に左右されます。まず第一に、その人に善意があったにもかかわらず、それを実践する好機が巡ってこなかった場合、その人は神の助けを受ける権利があります。たとえ他者がその人のために祈らなくても、時が経てば、神はその人に改心するための好機を与えてくださいます。しかし、もしその人が最初から助けを求めたなら、神は介入され、彼はより早く改心するでしょう。そうでなければ、改心するのは遅くなります。祈りによって、私たちは神に介入する権利を与えるのです。疑いの余地はありません。もし人が心から助けを求め、謙虚にこう言うなら：「父よ、私のためにも祈ってください」と謙虚に言うなら、その言葉はあなたの心を焼き付け、あなたは彼を忘れることができないでしょう。しかし、もし彼が「祈って、祈って、何か小さな助けをくれ」と、まるで「やあ！」と言うかのように、まったく表面的に言うなら、どうして彼を思い出せるのでしょうか？

世界の苦難に対して、痛みを伴う心からの祈りが捧げられるとき、その時に神に助けを求める人々は、即座にその助けを受ける。私は、極めて明白な例を数多く挙げることができる。何年も前、ある男が深い絶望に陥り、意識が朦朧とした状態で国境を越え、ある共産主義国にたどり着いた。そこで彼はスパイと間違えられ、捕らえられ、殴打された末に刑務所に送られた。刑務所の中で彼は祈りを捧げた。私の知人であるある修道士が彼の不幸を知り、こう祈った。「神よ、どうか彼を解放してください！ あなたなら簡単にできるはずです。」刑務所から彼は尋問のために連行され、尋問の後、彼は……ギリシャの領土にたどり着いた。その後、我々の捜査官に尋問された際、彼はこう答えた。「私は殴られ、刑務所に投獄され、自白を強要されました。その後のことは、覚えていません。いつの間にかギリシャの検問所にいたことさえ理解できず、どうしてそうなったのか分かりません。」これこそが祈りの力です。祈りは神を憐れみに導くのです。

助けを求めるすべての人に対応できるよう、私たちの「無線機」が絶え間なく稼働していれば理想的です。軍隊の通信中隊では、敵の無線機を監視するだけでなく、味方の支援も行いました。本部から遠く離れており、送信出力が不十分な部隊のために中継局を稼働させ、彼らの通信を受信してさらに先へ中継したのです。私たちは常に二人一組で、二交代制で24時間体制で無線機の当直にあたっていました。なぜなら、無線手が一人だけでは通信が途切れてしまい、助けを必要とする人が助けを得られず、そのメッセージが目的地に届かなくなってしまうからです。そのような無線機一台が、絶えず稼働していれば、メッセージが司令部に届かない人々を助けることができます。同じように、神に対して大胆に、隣人のために祈る人は、助けを求める人と神との間に、自分という中継の「無線機」を稼働させているのです。しかし、一方が助けを求めているのに、もう一方が自分の「無線機」をオフにしてしまったら、一体どうなるのでしょうか……

祈りの価値は、その質にある

— ゲロンダ、私たちが何か重大なことを願うとき、祈りには断食が伴うべきではないでしょうか？

— そんなことは言うまでもありません。それは必須のことです。断食や苦行は、祈りの前提条件です。しかし、祈りが真のものとなるためには、人々のために痛みを感じなければなりません。何しろ、現代の多くのキリスト教徒にとって、「心配しないこと」がすでに規範、お手本となってしまうのですから。一日中何もしないで座りっぱなしの年金生活者でさえ、見捨てられた子供を自分のそばに寄せようとはしません。その子が面倒をかけるからです。彼らはむしろ、食事をし、コーヒーを一杯飲み、散歩に出かけ、看護師や介護士がいる病院で病気の人を見舞いに行き、すべてが順調な場所へ出かけることを好む。なぜなら、それの方が楽だからだ。つまり、これらすべてが彼らにとっては楽しみであり、同時に、義務を果たしたということで自分の良心をなだめることになるのだ。私は、見捨てられた子供たちを助けてほしいと、どれほど多くの人々に頼んだことか！ しかし、すべて無駄だった。

聖山では、ある時、雨を祈願して十字架行列を行ったが、雨の代わりに火災が起きたのだ！ 十字架行進は、散歩のように気楽に参加できるものではない。そこに苦しみがあるべきなのだ。もし修道士たちが心から祈るなら、誘惑や困難が未解決のまま残るはずがないではないか？ しかし、私は、この困難な年月にもかかわらず、修道院にどのような精神が支配しているかを見抜いている。

「喜びましょう！」と。いや、世界は燃え上がっているというのに！ 例えば、ある病人のために徹夜祈りを執り行うよう頼まれることがある。私たちは「主よ、御手を広げてください」と歌い、喜び合う。人は死にかけているというのに、私たちは楽しそうに時間を過ごし、「病人のための徹夜祈りを執り行った」などと言う。一体、どんな徹夜祈りだというのか？！ 自分たちのために娯楽を仕組んだだけではないか！ そう、それは霊的な娯楽だ。そして時には、司祭が「病に伏す者たちよ」と唱えていても、私たちは病人のために祈らないことさえある。しかし、もし私たちがロザリオを少しばかり唱えて祈ったなら、私たちの助けはもっと効果的だっただろう。私は、教会の規定で定められた祝日の徹夜祈りを廃止するよう呼びかけているわけではありませんが、先ほど挙げたような場合には、少なくとも一、二回ロザリオを数えながら、「主イエス・キリストよ、あなたのしもべを憐れんでください」と祈るための時間を少し見つける必要があります。

すべては祈りの質にかかっています。祈りは心からのものであり、苦しみから生まれるものでなければなりません。神にとって重要なのは、祈りの量ではなく、その質なのです。修道院では祈りの量はありますが、それだけでは不十分で、質も伴わなければなりません。これほど多くの人々が、これほど多くの時間、祈っているのですから！ もしその祈りが心の底から湧き出るものであったなら、世界はとっくに変わっていたでしょう！ だからこそ、教会の礼拝が心から捧げられることが目的なのです。

心のこもった祈りは、他者だけでなく私たち自身にも役立ちます。なぜなら、それは私たちの内に内なる善が芽生えるのを助けるからです。私たちが他者の立場に身を置くと、愛、痛み、謙虚さ、そして神への感謝と絶え間ない賛美が、自然と私たちの内に湧き上がってきます。そうして、

神に喜ばれる存在となったとき、隣人のための私たちの祈りは、その人を助けることになるのです。

「そして、その人の必要を」²⁴²

—ゲロンダ、どうすればよいでしょうか。祈りの最中、私の心は冷たいままです。

—それは、心が心に電報を送っていないからです。それに加えて、祈りには努力が必要です。心が全くそれてしまわないような状態に、一瞬にして達することは不可能です。忍耐が必要です。ドアをノックする時を想像してみてください。一度ノックし、もう一度ノックし、それから待つ——そうしてドアが開くのです。それなのに、あなたは一度ノックしてすぐに中に入ろうとしている。そんなことはあり得ない。祈りを始めるとき、あなたにはそれに対する願いがないのか？

—自分は弱いと感じているので、助けが必要だと感じています。

—ああ、まさにそこから始まるのです。祈りには粘り強さが不可欠です。「彼らは主を必要としていた」と、エマオへの道で主に出会った二人の弟子について、福音書は語っています。キリストが彼らと共に留まったのは、彼らがキリストと[霊的な]絆で結ばれており、その権利を持っていたからです。彼らには謙虚さ、素朴さ、優しさ、そして（良い意味での）大胆さがありました。キリストが彼らと共に留まるためのすべての条件が整っていたからこそ、キリストはそうされたのです。

求めるすべての事柄について、信仰をもって祈り、忍耐すれば、神は語りかけてくださいます。なぜなら、信仰をもって祈る時、人はある意味で、その信仰ゆえに神に願いを叶える義務を負わせるからです。ですから、神に何かを求める時は、「疑ってはなりません」そうすれば、祈りは聞き入れられるでしょう。「信仰を持ち、疑ってはならない」²⁴³——と主は言われた。神は、私たちが求めるものを、私たちに霊的な害を及ぼさないように、いつ与えるべきかをご存知である。時には、神に何かを願うものの、忍耐が足りず、不安になることもある。もし私たちの神が力強くなければ、不安になるのも無理はありませんが、私たちには全能の神がおられ、その愛は計り知れないほど大きく、御自身の血によって私たちを養ってくださるのですから、私たちの不安には何の正当性也没有ありません。時には、ある困難の解決を神の御手に委ねず、人間的な方法で行動してしまうことがあります。神に何かを願いながら、信仰が揺らぎ、神が私たちの願いに答えてくださるのを待たずに、人間的な方法で達成困難なことを成し遂げようとするのは、まるで王である神に願いを捧げながら、神が御手を伸ばして行動しようとした瞬間に、その願いを取り戻してしまうようなものです。その後、私たちは再び神に願い出ますが、信仰はまた揺らぎ、再び不安になり、同じことを繰り返してしまいます。こうして、私たちの苦しみは長引いてしまうのです。つまり、私たちはまるで省庁に請願書を提出したものの、すぐに気が変わってそれを引き戻してしまう人のように振る

²⁴² ルカ24:29。

²⁴³ マタイによる福音書21章21節を参照。

舞っているのです。その後、また気が変わって再び提出し、少し時間が経つと、また引き戻してしまうのです。しかし、請願書は順番が回ってくるまでその場に置いておく必要があります。

苦しみと共に捧げる祈り

— ゲロンダ、何か願い事があるときは、どのように祈られるのですか？

— すべては、心が痛むことにある。心が痛まなければ、何時間でも数珠を数え続けても、その祈りには何の結果も生まれない。もし人が、祈っていることに対して心を痛めているなら、ただため息ひとつでさえ、心のこもった祈りとなるのだ。多くの人は、他者から祈りを頼まれた際、時間がなく、その人々の必要のためにただため息一つで祈ることがあります。祈る必要がないと言っているわけではありませんが、もし時間が取れないという状況であれば、他人の苦しみを思うための一息こそが心の祈りなのです。つまり、その力は数時間にわたる祈りに匹敵するのです。例えば、手紙を読んでその人の困り事を知り、ため息をついてから祈るのです。ああ、これはなんと素晴らしいことでしょうか！ あなたはまだ受話器を取ってもいないし、番号をダイヤルしてもいないのに、神はすでにあなたの声を聞いておられるのです！ そして、そのような祈りが捧げられている当の本人こそ、それをどれほど深く理解していることか！ 見てください、悪霊に取りつかれた人々は、どこにいても、私が彼らのために祈っていることを察知し、叫び声を上げるのです！

真の祈りとは、快樂でも「涅槃」でもなく、痛みから始まるものです。それはどのような痛みでしょうか？ 人は、良い意味での「苦しみ」に苛まれています。痛みを感じ、うめき、苦しむのです。何を祈ろうとも。あなたは「苦しむ」とはどういうことか、ご存知ですか？ そうです、人は、人類全体の痛み、あるいは特定の誰かの痛みに共感し、共に苦しむからこそ、苦しんでいるのです。その共感、その痛みに対して、神は神聖な喜びをもって報いてくださいます。もちろん、人は神聖な喜びを求めているわけではありません。それは、他者の痛みに共感し、共に苦しむ結果として訪れるものなのです。

— では、何から始めればよいのでしょうか？

— 人は何かを知ります。例えば、不幸な出来事が起きたという事実です。「ああ！」と彼はため息をつきますが、神はその小さなため息に対して、即座に慰めを与えてくださいます。誰かが苦しんでいるのを見て、すぐにその人に共感し、神からの神聖な慰めによって自らも慰められ、その痛みの苦しみにとどまることはありません。そうして、隣人はその人の祈りによって助けを受けるのです。あるいは、こう考えることもあります。「神は私たちにこれほど多くのものを与えてくださったのに、私は神のために何をしたらろうか？」とある人が私に、次のような、私の心に深く響いた言葉を語ってくれました。「神聖な聖体拝領の秘跡が行われるとき、天使たちは顔を覆いますが、私たちはキリストの御体を拝領します。それなのに、私はキリストのために何をしたでしょうか？」このように、魂は良い意味で苦しむのです。

— ゲロンダ、祈る者は、自分の祈りが隣人の助けになったことを、どのようにして知ることができるのでしょうか？

— 祈る者は、心から、苦痛に満ちた祈りを捧げた後に、自らの内に感じる神聖な慰めによって、それを知ることになります。しかし、まずは他者の痛みを自分の痛みとして受け止め、その後に心からの祈りを捧げる必要があります。愛は神聖な性質であり、それは隣人に伝わるものです。病院でも同様です——もし医師や看護師が患者のために心から苦しんでいるなら、それは彼らが患者に与えるあらゆる薬の中で最も効果的なものとなります。患者たちは自分たちへの思いやりを感じ取り、確信、安心感、慰めを覚える。苦しんでいる人にとって、私たちの多くの言葉も、説教も必要ない。その人は、あなたが自分のために心を痛めていることを理解し、それが助けとなる。痛み——それこそがすべてだ。他者のために心を痛めるとき、私たちは自分自身や自分の欲求を忘れてしまう。

神からの慰め

— ゲロンダ、私が他人のために苦しむとき、不安に襲われて祈ることができません。

— その不安こそが、あなたの中に人間的な本性が生き生きと息づいている証拠です。私は、他人のために大きな痛みを感じるほど、より多く祈り、霊的に喜びを感じます。なぜなら、私はすべてをキリストに語り、キリストがすべてを正してくださるからです。そして私は、年を重ねるにつれて、肉体の活力が衰えていく一方で、魂の活力が増していくのを感じています。なぜなら、愛、自己犠牲、そして隣人のための痛みが、多くの魂の力を与えてくれるからです。ほら、見てください。昨日の夜、皆さんが徹夜祈祷を行っていた時、私にはそれほど活力がありませんでしたが、他人の痛みから力を得ていました。聖体礼儀が始まるまで、一晩中立ちっぱなしで人々を迎え入れました。²⁴⁴ その後、教会でもまた立ちっぱなしでしたが、それにもかかわらず疲れを感じませんでした。人々のために心が痛んでいたからです。その痛みが私に力を与えてくれたのです。あなたもそうしてください——祈り、喜びなさい。神がすべてを整えてくださいます。

もし人が痛みを霊的な視点から受け止めるなら、その人には悲しみはない。少なくとも、私のところに来てくれた人々を例に挙げよう。彼らのために、私はどれほど胸が痛んだことか！ 私は彼らの話を適当に、片耳で聞くようなことはしませんでした。私は苦しみ、ため息をつきましたが、そのため息ひとつひとつで困難を神に委ね、神は私が隣人のために感じていたその痛みの中で、私を慰めてくださいました。つまり、他人の痛みに対して霊的な関わりを持つとき、神からの慰めもたらされたのです。なぜなら、その痛みの中に神への希望があるならば、そこには神からの慰めもあるからです。そうでなければ、どうしてこれらすべてに耐えられましょうか！ もしこの慰めがなかったら、私が耳にしなければならぬすべてのことを抱えて、どうして生きていけたでしょうか？ 私は痛みを感じますが、苦しんでいる人々への神からの報いについても考えています。私たちは神の御手の中にあります。神の正義があり、神の報いがある以上、何事も無駄にはなりません。どれほど多くの人が苦しんでいるか、それに見合った報いが与えられるのです。神は、地上にこれ

²⁴⁴ 長老が言及しているのは、1993年11月9日から10日にかけて行われた徹夜祈祷のことである。彼は癌に蝕まれていたが、それにもかかわらず、立ち上がり、椅子に寄りかかりながら、その日訪れた約3万人の信者たちに祝福を与えた。

ほど多くの苦しみがあるのを見て、私たちの知覚では捉えきれないことさえ見ているにもかかわらず、それでも絶望には陥りません。「あなたはもっと苦しんでいるのか？ それなら、来世でさらに多くのものを与えよう」と神は語り、それを喜びとしています。そうでなければ、神は、いわば、これほど多くの不公正や悪を、どうして耐え忍ぶことができますでしょうか？ しかし、苦しむ者たちへの報いを念頭に置いているからこそ、神は、そう表現しても差し支えないならば、この大きな痛みを耐え忍ぶことができるのです。そして、私たちの隣人がどのような栄光を受けるのか見ることのできない私たちに、その人のために苦しむ私たちに、神は神聖な慰めを与えてくださる。

— ゲロンダ、隣人のために心を痛めることは、人を疲れさせはしないでしょうか？

— いいえ。あらゆる問題を霊的な視点で捉えるならば、消耗することはありません。最初は、誰かが苦しんでいると聞くと、人は苦々しさを感じますが、その後、報いとして神聖な慰めが訪れ、その人の心身は損なわれることはありません。世俗的な悩みによる苦しみは、胃出血などの病気を招きますが、他者の痛みに対する苦しみには神の癒しの力が宿っており、体に害を及ぼすことはありません。

無感覚の危険性

— ゲロンダ、時々、信徒たちが自分の問題が解決されるよう祈ってほしいと頼んでくることがあります。私は祈りますが、痛みは感じません。

— これには二つの原因が考えられます。一つには危険が潜んでおり、もう一つには問題に対する霊的なアプローチがあります。最初のケースは、修道士が自分の身近な人々を忘れるだけでなく、他の人々のことも考えず、つまり人々のために祈らない場合です。これは非常に悪いことです。つまり、私たちは身近な人々を置いて修道院に来て、時が経つにつれて彼らのことを忘れてしまうのです。しかし、その一方で、他の人々を忘れることは、それよりもはるかに簡単です。確かに、私たちは霊的生活の第一歩を踏み出しましたが、他者の苦しみに対して霊的に共感を示すようにはなっていません。他者の必要を感じ取れるようになるために霊的に成長していないため、そこから無感覚に陥る危険性があります。少しずつ、修道士は無関心になり、その心は石のようになっていきます。二番目のケースでは、祈る者は全世界のために心を痛めますが、苦しむ者は神から報いを受け、殉教者となることを理解することで、慰めも感じています。この思いは彼に深い確信をもたらし、内なる喜びを味わわせます。この場合、彼の心は石のようではなく、神の愛に満ちています。

もし修道士たちが注意を怠れば、彼らの心は極めて冷淡なものになってしまうかもしれない。世俗の人々は、身近な人々の苦難や不幸を目にし、彼らのことを案じる。私たちはそれを見ず、つい自分自身の利益だけを求めるところにまで至ってしまうかもしれない。そして、他者の不幸を深く感じ取り、彼らのために心からの祈りを捧げるという繊細な行いに励まなければ、私たちは冷酷な心を持つ者になってしまう。私たちは自分の利益ばかりを追い求めるようになり、無関心から心は石のようになってしまいます。これは福音に反するものです。修道士は、すべての人々に対して

思いやりを示し、その苦しみを共有し、彼らのために祈らなければなりません。それは修道士の気を散らすものではなく、むしろ祈りを通じて、自分自身と他者の両方を助けることになるのです。

— ゲロンダ、私は自分の罪深さをすべて自覚しているにもかかわらず、他者のために祈ることが多くなっています。もしかすると、他者のためではなく、自分自身のためだけに祈ったほうがよいのでしょうか？

— それは「深い」謙遜からですか？ もし謙遜からなら、深い謙遜をもって神にこう言いなさい。「わが神よ、私のような者には、お聞き入れになるべきではありません。しかし、私のせいで他の人々が苦しむことになれば、それは不公平ではないのでしょうか？ だって、もし私が霊的な状態にあり、祈りに大胆さを持っていたなら、あなたは私の祈りを聞き入れ、彼らを助けてくださったでしょう。誰かが苦しんでいることには、私にも責任があります。しかし、私の隣人は何の罪を犯したのでしょうか。なぜ私のせいで苦しむ必要があるのでしょうか。どうか、彼を助けてください。」

つまり、すべては、他者に対して自分という存在をどのような位置に置くかによって決まるのです。あなたは自分の不甲斐なさを自覚していますが、他者の苦しみを目の当たりにすると、心を痛め、同情し、祈りを捧げます。例えば、私は盲人を見ると、そのことについて自分自身に罪悪感を抱きます。なぜなら、もし私が霊的な境地にあったなら、その人を癒すことができたはずだからです。神は私たちに、神のように聖なる者となり、奇跡を行う機会を与えてくださいました。そして私たちは、自分の霊的な病が重大であれ軽微であれそれを認め、その病の原因である自分自身の罪を自覚しつつ、隣人である同胞の肉体の健康を謙虚に祈ります。なぜなら、もし私たちが霊的に健全であったなら、その人はとっくに癒やされ、苦しむこともなかったはずだからです。他者に対して正しい姿勢を保ち、この世で起こるすべてのことに自分たちが責任があると自覚しつつ、私たちは「主イエス・キリストよ、私たちを憐れんでください」と祈ります。そうすれば、全世界が助けを受けるのです。そして、自らの罪深さについては——そのために痛みを感じ、神の憐れみを求める必要があります。しかし、もちろん、もし人が霊的な境地に達しているならば、自分自身のために何も求めはしない。

私たちは、「主イエス・キリストよ、私を憐れんでください」という言葉の意味をしばしば誤解しており、偽りの謙遜から「私たちを憐れんでください」と言わず、他者のために祈るのではなく、ただ自分自身のためだけに祈っていることがわかります。そのため、世俗の人々も時折、私たち修道士を誤解し、腹を立てて、「自分たちは利己的で、ただ自分自身の救いばかりを気にかけている」と言うのです。「私を憐れんでください」というのは、高慢に陥らないためである。自分が誰よりも劣っていると信じる謙虚な人の一つの祈りは、高慢な思いで執り行われる徹夜祈祷全体よりも、はるかに大きな価値を持つ。高慢な心で祈ることは、自分自身を嘲笑うことに他ならない。

戦いの準備態勢

私たちが困難な時代を生きていること、そして多くの祈りが必要であることを忘れないでください。今、人々が抱えているその大きな苦難を心に留め、神が私たちに求めておられる祈りへのその大きな熱意を心に留めてください。全世界を覆っているこの普遍的な狂気について祈り、破滅に近づいている神の被造物を、キリストが憐れんでくださるよう祈ってください。世界が混乱、狂気、行き詰まりへと導かれている今、私たちが経験しているこの狂気の時代に、神が神聖な御業をもって介入してくださいますように。

神は私たちに、この世界のために祈るよう呼びかけられました——これほど多くの問題を抱えた世界のために！哀れな人々よ、彼らは十字を切る暇さえありません！ 私たち修道士が祈らなければ、誰にこの役目を任せるといえるのでしょうか。戦争中、兵士は戦闘態勢にあります。すでに軍靴を履き、命令を待つばかりです。修道士もまた、同じ態勢でなければならないのです。ああ、もし私がマカベウスであったなら！²⁴⁵ 山へ籠もり、人々のために絶えず祈り続けることでしょう。

私たちは祈りによって全世界を助け、悪魔が思いのままに振る舞えないようにしなければならぬ。悪魔は今、ある種の権利を手に入れている。神が彼に何でも好き勝手にさせるというわけではないが、単に神は自由意志を侵害したくないだけなのだ。だからこそ、私たちは祈りによって世界を助けなければならない。もし誰かが、今世界で起きていることに心を痛め、そのことについて祈るなら、人々は助けを受け、その一方で彼らの自由意志は損なわれることはありません。もし神の恵みによって皆さんがもう少し成長してくださるなら、私たちは祈りに関して特別な取り組みを行い、この事業をしっかりと軌道に乗せたいと思います。皆さんは「レーダー」となるでしょう。というのも、周囲で起きている出来事が私たちにそうせざるを得ない状況に追い込んでいるからです。私たちは祈りのチームを組織します。皆さんはロザリオで戦うことになります。祈りは痛みを伴って行われなければなりません。そうしてこそ、祈りがどれほどの力を持つか、お分かりでしょうか？

神を通じ、祈りによってではなく、人間的な方法で——人間的な力では到底成し得ないようなことをしようとする修道士たちを見るたびに、私は深く傷つきます。神はすべてを正しい秩序に導くことができます。正しい霊的实践があれば、祈りだけで修道院を建て、必要なものをすべて供給し、全世界を助けることができるのです。働く必要さえありません。ただ祈るだけでよいのです。修道士は、それが自分自身に、隣人に、あるいは世界の一般的な状況に関わるものであろうと、あらゆる困難について頭を悩ませないように努めなければなりません。彼は祈りに頼り、神を通じて多くの神聖な力を世界に送り出す必要があります。何しろ、いずれにせよ、これこそが修道士の務めであり、もし彼がこれを理解していなければ、その人生には何の意味もない。したがって、修道

²⁴⁵ 「マカベウス」という異名（この言葉は、おそらく「敵を打ち砕く者」を意味する）は、紀元前166年のユダヤ人反乱の指導者ユダ、そしてその後継者たちに与えられた。この反乱は、セレウコス朝を率いていたアンティオコス4世エピファネスに対して行われた。マカベアたちは、先祖代々の信仰とイスラエルの国家独立のために献身的に戦った。（『マカベア記』参照。）

士は、様々な困難において人間的な解決策を求めさせ、彼を苦しめ、頭痛の種となるあらゆる動揺が、悪霊に由来するものであることを知らなければならない。もし、人間的な手段では解決できない問題があなたを悩ませているのに、それを神に委ねていないと気づいたら、それは、あなたが祈りを放棄するように仕向ける悪霊の策略であることを知ってください。祈りを通じて、神は単なる神聖な力だけでなく、多くの神の力を送ってくださるものであり、その時に与えられる助けは単なる神の助けではなく、神の奇跡となるのです。私たちが不安を感じ始めたその瞬間から、私たちは神が事態に介入することを妨げてしまいます。私たちは神や神の御心ではなく、論理を優先させてしまうのです。もし神の御心を優先していれば、神の助けを受ける権利を得られたはずなのです。悪魔は、修道士の愛を巧みに奪い取り、彼を世俗的な愛、世俗的な認識、そして世俗的な隣人への奉仕の中に留めようとします。一方、修道士は自身の修道生活という領域で行動することができ、自身の専門である「通信係」としての働きを行うことができます。なぜなら、それこそが神が彼に課した従順だからです。それ以外のすべて、すなわち人間の努力によって成し遂げることはすべて、より低い次元に属する。

さらに、修道士は言葉ではなく、祈りによって他者を助けるほうがよい。もし悪を行う者を制止する力がなければ、遠くから祈りによってその人を助けるべきである。そうでなければ、自分自身を傷つけてしまう恐れがあるからだ。言葉が他者に届かない時、一つの善意に満ちた心からの祈りは、千の言葉よりも大きな力を持つ。私のことについては、私を訪ねてくる人々を助けていると言われる。しかし、私が世界への真の捧げ物だと考えているのは、詩篇を朗読するその1時間半である。それ以外のことはすべて、単なる気晴らしだと捉えている。不幸な人々がやって来て、私に自分の苦しみを打ち明ける。そうすれば、私は彼らに多少の助言を与えるだけだ。だからこそ、私は「助け」を自分自身の捧げ物とは考えていない。人々を助けるのは祈りなのだ。もし私がすべての時間を祈りに捧げることができたなら、世界にもっと貢献できただろう。仮に、一日に二百人の苦しむ人々を受け入れたとしよう。しかし、世界で苦しんでいるのはたった200人だけでしょうか？誰一人とも会わずに、その間に全世界のために祈ることで、私は全世界と出会っているのです。だからこそ、私は人々にこう言います。「私はあなたたちについて神と語り合いたいのであって、あなたたちと神について語り合いたいのではありません。そうするほうがあなたたちのためになるのですが、あなたたちは私のことを理解してくれないのです。」

この困難な時代において、祈りを軽んじてはなりません。祈りとは安全であり、祈りとは神とのつながりなのです。アバ・イサアクが書いていることを覚えていますか？「神は、私たちが祈りを捧げなかったことではなく、キリストとのつながりを持ち得ず、悪魔に欺かれたことについて、私たちに問いただされるのです。」²⁴⁶

²⁴⁶ 「その日、神は私たちを詩篇のことで裁かれるだろう。祈りを怠ったからではなく、それを怠ったことによって悪魔に侵入の隙を与えてしまったからである。」参照：アッバ・イサク・シリア人。『著作集』。セルギエフ・ポサド、1911年。第71説教。362頁。

第2章。

修道院は教会の要塞であることについて

修道士は、岩の上に築かれた灯台である

—ゲロンダ、修道士の仕事とは何でしょうか？

—修道士の務めとは、聖霊の器となることです。彼は自分の心を、金箔の一枚のように繊細で敏感なものにしなければなりません。修道士のすべての行いは愛であり、その歩みもまた、隣人への愛を内包する神への愛から始まるのです。修道士は人類の不幸について思索し、その心は痛みに刺され、絶えず心を込めて平和を祈ります。こうして修道士は祈りによって世界を慈しむのです。世の中の誰よりも多くの人々を助ける修道士たちがいます。例えば、世俗の人間は貧しい人に米1キロとオレンジ2個を施すが、それも多くの場合、他の人に見られるためだけであり、その一方で、その人たちはけちだと非難さえしている。しかし、修道士は祈りを捧げ、その祈りによって、沈黙の中で、隣人たちに何トンもの助けを送っているのだ。

修道士は、独自の行動計画を立てたり、世俗的な宣教プロジェクトを策定したりはしない。彼は何の計画も持たずに前進し、慈愛に満ちた神が彼を御自身の神聖な計画に組み入れてくださる。そして、必要とされれば、神は御自身の御心に従って、彼を使徒的な偉業へと遣わされることもある。神は修道士たちに、世に出て行って人々を手取り足取り導くことを求めてはおられない。神は、修道士たちが自らの生き様を通じて人々に光を与え、それによって彼らを永遠の命へと導くことを望んでおられる。つまり、修道士の奉仕とは、世の中に留まりながら世を助けることではない。修道士が世から遠く離れるのは、世を憎んでいるからではなく、世を愛しているからだ。世から離れて暮らすことで、修道士は自らの祈りによって、人間的な力では助けられず、神の介入によってのみ可能となる事柄において、世を助けることができる。それゆえ、修道士は神と絶えずつながりを保ち、神からのしるしを受け取り、人々に神への道を指し示さなければならない。

私は長い間、カトリック教徒がなぜある事柄を正当化するのか理解できなかった。しかし先日、ローマから来た二人のカトリック教徒の建築家が私のカリヴァを訪ねてきて、私の疑問は解消された。彼らは正教会とは何かを理解していなかったが、心根は善良だった。「なぜ——と彼らは私に尋ねた——修道士たちはここに座っているのですか？なぜ彼らは世に出て、社会奉仕に励まないのですか？」——「それは——と私は答えた——灯台は岩の上に立つべきではないのですか？まさか、彼らに街へ移り住んで、街灯の仕事に加わるように命じるつもりですか？灯台には灯台の務めがあり、街灯には街灯の務めがあるのです。」修道士とは、街の歩道の上にぶら下がり、歩行者がつかずかないように照らす電球のようなものではない。修道士とは、岩の上に高く据えられ、その輝きで海や大洋を照らし、船が正しい道を進み、目的地である神のもとへたどり着けるように導く、遠く離れた灯台なのである。

修道士の静かな説教

.....さあ、祈ってみよう。あなたたち三人の修練生が、決して大人にならないように！いつまでもこのままでいてほしい。この青いスカーフを身にまとい、この小さな背丈のまま、この年齢のまま！ 人々があなたたちを見ることで、どれほど静かな恩恵を受けているか、ご存知ですか？ 何しろ、今日の世界では、まっとうな若い女性を見つけるのは容易なことではありませんから。ほとんどの娘たちは荒っぽい振る舞いをしている。手にタバコを持ち、何者か分からないような仕草をしている.....しかしここでは、人々は神に身を捧げた乙女たちが教会で歌い、喜びを分かち合う姿を見ることができる。「これは一体何だろう？」と人々は驚いている。「ここには何か不思議な点がある。彼女たちを愚かだと言うのか？ いや、そうは言えない。彼女たちに何かが欠けていると言うのか？ いいえ、彼女たちにはすべてが揃っている。どうやら、本当に、何かより高次なものが存在しているようだ！」そう、本当に、これにはどんな益があるか、ご存知ですか.....？

世俗の人々、たとえ無信仰者であっても、修道院を訪れて本物の修道士たちを見れば、もし彼らに善意があれば、信者になるのです。多くの無神論者の学者たちが、単なる観光で聖山を訪れただけで、人生を変えました。人々は前向きな意味で考えを巡らせ、霊的な生活を知ることになります。彼らは、世俗において成功するためのあらゆる条件を備えていたにもかかわらず、富や地位を捨て、祈りと徹夜祷に励みながら修道生活を送る、喜びに満ちた若者たちを目にします。これらすべてを見て、人々はこう自問するのです。「では、一体どうなのか？ もし本当に神が存在し、あの世があり、地獄の苦しみがあるのなら、なぜ私はこんな生き方をしているのか？」と。そして、彼らは罪を犯す頻度を減らしたり、あるいは生活そのものを改めたりし始めるのです。私はそのような事例の一つ知っています。ある20歳の女性が自殺未遂を図り、手首を切りましたが、間一髪で救われました。その後、ある修道士が彼女を女子修道院に連れて行った。当初、その不幸な女性はすべてに苛立っていたが、やがてその修道女たちと親しくなるにつれ、正気を取り戻し、「ここでは別の世界が見えます。私、皆さんと一緒にいさせていただけませんか？」と言った。

これこそが、その修道士の静かな説教である。説教をする者は多いが、その言葉と生活が一致していないため、人々から信頼を得られる者は少ない。しかし、この修道士は、他人に聞かれることを狙った大げさな説教を口にはしない。彼は自らの生き様をもって黙ってキリストを説き、祈りによって隣人を助けている。彼は自らの経験を通じて福音を生きており、神の恵みが彼を際立たせている。こうして修道士は、最も信頼できる方法で福音を説くのである。そして、それこそが、特に今日の世界が渴望しているものなのだ。修道士が語る時、彼は単なる考えではなく、経験を表現している。しかし、修道士が口にする考えもまた、光を宿している。

— ゲロンダ、一部の人々は、若者たちが修道院に入る理由は、失望から、あるいは何らかの身体的な障害があるから、あるいは知力の低さからだと言っています。

— どうやら、そうした人々は一、二件のそのような事例を記憶に留め、今や悪意や嫉妬から、残りの90パーセントを占める他の修道士たちを中傷しているようです。しかし、事情を詳しく調べ

て、実情がそうではないと分かれば、彼らは「より高次な何か、すなわち神が存在する」と認めるでしょう。

だからこそ、修道士は常に世の人々にとって良き手本でなければならない。「あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。」²⁴⁷ 真の修道士とは、世の光である。聖ヨハネ・クライストロフォロス（『霊の梯子』の著者）がこう記していることを思い出してほしい。「修道士たちにとっての光は天使であり、一般の人々にとっての光は修道士である。」²⁴⁸ 修道士の助けが実を結ぶのは、彼が世俗の人々と一線を描いているときである。なぜなら、虚しい事柄に苛まれている世俗の人々を助けるものは、聖性だからである。その聖性は、その簡素さによって、彼らに人生の最も深い意味を理解させ、彼らの心を重く圧迫する重荷を取り除いてくれるのである。

修道士と世界の再生

修道士たちはキリストの正規の軍隊であるため、その奉仕に対して金銭を受け取らない。ほら、見てごらん、多くの人々は聖山アトスを忘れられない。他のどんな場所へ行っても、金銭などを要求されるが、聖山では訪問の許可を得るだけでよく、その後は無料で、好きな場所へ自由に歩き回ることができる。食事代も宿泊費も一切請求されない。人々は聖山で全く異なる何かを見つけ、そこから恩恵を受けている。ある時、私が「聖なる十字架」のカリヴァに住んでいた頃、²⁴⁹、ある男性が自分の悩みについて相談しにやって来た。私たちは1時間半ほど話をしました。帰ろうとしたとき、彼は500ドラクマの紙幣を取り出しました。「これは何ですか？」と私が尋ねると、「これだけの金額を、医師の診察1回につき支払っているんです。すみません、もう少し足したほうがいいでしょうか？」と彼は答えました。

聖山での前回の火災の後、EEC（欧州経済共同体）から数人の高官が現地を訪れ、何が必要かを視察し、支援を割り当てるためにやってきました。彼らは私のカリヴァにも訪れた。会話の中で、私は彼らにこう言った。「私たちはここへ、与えるために来たのであって、奪うために来たのではない。」「そんな話は初めて聞きました」と彼らは認め、すぐにその言葉をノートに書き留めた。²⁵⁰ まさか、私たちが物質的な恩恵を受けるために修道士になったというのか？ 私たちは、物質的な見返りを得ることなく、霊的なものを与えるために修道士になったのです。霊的なことに心を注ぐためには、世俗的なものから自由でなければなりません。キリストへの愛のために、私たちは山へと逃げ込み、自らを情欲の束縛から解放し、他の人々をもそこから解放するために来たのです。

²⁴⁷ マタイによる福音書 5章16節。

²⁴⁸ 聖ヨハネ・クライマトス。『梯子』。セルギエフ・ボサド、1908年。第26説教、第31説教。181頁

²⁴⁹ 聖十字架のカリヴァで、長老パイシイは1969年から1978年まで暮らした。

²⁵⁰ 1991年5月に説かれた。

私たちの使命は、私たちの祈りと模範を通じて、人々が助けを受け、霊的に再生することです。世を離れて修道院に入ること、人は「父」あるいは「母」、すなわち霊的な父または母となります。少女が修道女になると、彼女はキリストに嫁ぎ、キリストの花嫁となり、霊的な母として人々の霊的再生を助けます。彼女の祈りによって、例えば、堅固なキリスト教家庭が築かれるよう促されます。しかし、祈り以外にも、人々が人間的な助けを必要とする場合があります。真の修道女は皆、世界のための祈りに加え、自身の振る舞い、様々な問題への向き合い方、あるいはアーコンダリクで巡礼者に人生の最も深い意味を理解してもらうためにかける一言、あるいはある母親を励ますためにかける一言などを通じて、世の人々を助けているのです。しかし、もちろん、尼僧自身が世俗の人々との交流などを求めているのであれば、それは全くもって好ましくありません。なぜなら、世俗的な欲求は霊的な法則と衝突し、それが私たち尼僧を苦悩へと追い込むからです。可能な限り、他者から目立たないように努めてください。一部の修道士たちは、教会の祝日に外出し、互いに訪問し合い、霊的な友人を求めようとします。しかし、私は、霊的な用事でどこかへ行かざるを得ない時、まるで殉教に向かうかのような気分になり、それを時間の無駄だと考えています。この二つの事実を照らし合わせると、心が痛むのです。

— ゲロンダ、すでに若くはない修道女が霊的に未熟であるのは、どのような理由からでしょうか？

— 彼女は自分自身を律しておらず、ふさわしい霊的な修行にも励んでいないからです。悪はそこから始まります。仮に、あなた方のうち誰かが、キリストによって修道生活へと召されなかったとしましょう。その少女は世俗に残り、結婚して母親になっていたでしょう。そうすれば、彼女は他人に要求するのではなく、他人が彼女に要求することになるでしょう。彼女は自分を犠牲にし、それによって多くのものを与え、多くのものを受け取っていたはずですが。しかし、修道院では、彼女は霊的な母にならなければなりません。彼女の召命は、母親としての役割よりも高いのです。ところが、今、何が起きているのでしょうか？ 彼女は若くして修道院に入り、本来あるべき霊的な修行に励むことなく、自分はまだ子供だという考えを抱いている。しかし、彼女は自分が子供ではないことを理解しなければならない。そうでなければ、「私たちにはお母さんがいるし、家もあるし、心配事なんて何もないし、何にも関心が持てない」といった子供じみた考えを抱いてしまうからだ。彼女は与えるべきであり、自らの振る舞いによって年下の修道女たちの霊的再生を助けるべきです。アーコンダリクや聖堂での奉仕を通じて、修道院を訪れる信徒たちを助けるべきです。あらゆる面で自己を犠牲にすることで、彼女は求めずとも受け取ることになるのです。もし修道女がそのような心構えを持っていなければ、すべてが台無しになってしまう。彼女は未熟な状態にとどまり、自分からは何も与えずに、年下の者からも年上の者からもただ受け取ることばかりを望む。彼女は自分の中に歪んだ精神を育み、他者に自分を捧げないがゆえに、成熟することができないのだ。

私は、ある僧侶たちの状態が、私がシナイで出会ったあるベドウィンの状態と全く変わらないのを見ます。彼は六十五歳でしたが、「私には父親がいない。私は完全な孤児だ!」とっていました。六十五歳になれば、すでに孫がいるものです。すでに二、三代も経っているのに、「私には父親がいない」などと言い、つまり父の愛を求めるなど、どうしてあり得ようか！そして私たち

修道士も、不注意なまま子供のままである——これこそが悪である。しかし、彼らがその年齢で世俗の世界で何をしているかを考えてみれば、修道女や修道士はこう言うべきだ。「今、私は人間的な慰めを求めてはならない。私は自分を犠牲にすべきであり、他者に不満をぶつけてはならない。」大半の人は若い頃に修道院に入り、そこで霊的な両親を見つけ、そのまま子供のままの状態、子供のような不満を抱えたまま留まってしまうことがある。それに対して、世俗にいれば、彼らはすでに自分自身が親になっているはずである。つまり、彼らは子供時代から抜け出せないのだ——良い意味ではなく、子供っぽく、未熟なままに。こんな光景も見られる：人は年をとっても、頭を使って考えることを始めなければ、飴やTシャツに喜びを見出すのだ。「お父さんがセーターを買ってくれたんだ」——あるアトス山の年老いた修道士が自慢げに語り、師匠から贈られた暖かいセーターを見せてくれた。まるで、お母さんに肩章付きのジャケットを買ってもらった小さな男の子のようだ！...

悪に対してこそ、心は幼子のようにありましょう。ただし、知性においてはそうではありません。²⁵¹ そうでなければ、私たちの人生に勇気はどのようにして入ってくるのでしょうか？ どうすれば私たちに勇気が訪れるのでしょうか？ 修道士が成功するためには、自分の中にあるその硬さを和らげなければなりません。つまり、自分の心をほんの少し母性的なものにしなければならないのです。一方、修道女が成功するためには、少しばかりの勇気を身につける必要があります。

私たちの霊的な謙虚さは、他者を変えていくのです

— ゲロンダ、誰かが修道院に入っても、その思考様式がまだ世俗的であり、頭の中にまだ世俗の風が吹き荒れている場合、どうすればそこから解放されるのでしょうか？

— 修道院に入ったら、世俗のことを忘れなければなりません。そして、自分が修道院にいることを決して忘れてはなりません。家庭では、まあ、霊的な生活を始めるための好機が見つからなかったり、正しい教育を受けられなかったりすることもあるでしょう。しかし、今は非常に注意を払う必要があります。ここで、修道院で、あなたはどのような教育を受けるのでしょうか？ 修道院での教育です。修道院は神聖な場所です。世俗の世界は別物です。自分が聖なる場所にいることを深く考えれば、謙虚さは自然と身についてくるものです。しかし、もし人が我を忘れ、自分が世俗にいたいと思いついてしまったら、どうして謙虚さが生まれるのでしょうか？ 修道女は、自然体で、素朴に、謙虚に振る舞うべきであり、「不幸な運命」の化身を装ってはなりません。それは嫌悪感を呼び起こし、人を遠ざけてしまいます。

一部の修練修道女たちが世俗的な振る舞いをしているのを見かけます。キリストの花嫁としてではなく、まるで孔雀や世俗の花嫁のように闊歩しています。一方、他の者たちは謙虚に歩んでおり、彼女たちの中には何か神聖なものが宿っているのがわかります。この違いはなんと大きいことでしょう！ そして、修道生活とは何かがすぐに理解できます。小麦の穂に注目してみてください。

²⁵¹ 参照：コリントの信徒への手紙一 14章20節。

高くそびえ立ち、まっすぐに立っている穂には、何も入っていないことがわかります。一方、パンで満たされた穂は、下の方へ頭を垂れています。

畏敬の念を持つ修道士は、彼を見る人々の心さえも変えてしまう。今日、ある修道司祭が訪ねてきたが、彼とは古くからの知り合いだ。彼は美男子ではない、つまり外見的な美しさを備えてはいないが、それにもかかわらず、彼が聖体拝領をするたびに、その顔が輝いているのを見てきた。そして、聖体拝領をしていない時でさえ、私は彼の顔に輝き、霊的な輝きを見ていました。まるでアスファルトのように——本質的には樹脂ですが、夏に遠くから眺めると、しばしば輝いているものです。ここでも同じで、容姿の整わない人の顔に輝きが見えるのです。もちろん、アスファルトの例はあまり適切ではないかもしれませんが、他にどんな例えを挙げればよいのでしょうか？ 私が言いたいのは、人が置かれている霊的な状態が、その人に外見的な輝きを与えるということだ。それは霊的な美しさであり、恵み、神の恵みなのだ。しかし、外見は美しいものの、内面には世俗的な精神を持ち、世俗の風に翻弄されている他の聖職者たちは、どれほど人々を遠ざけていることか！ 目の前には、完全に世俗的な人間がいるのが見える。

聖職という肩書きを除けば、霊的なものは何一つ見えない！ 人の顔はその人の霊的な状態を映し出している。これこそが、キリストが語ったことである。「目は体の灯である。もしあなたの目が清ければ、あなたの全身は明るい。」²⁵² 人に純真さがあり、謙遜があれば、そこには神聖な啓示があり、その人は輝いている。まさにその通りだ。修道士はまさにこれを達成しなければならないのだ。

— ゲロンダ、聖ニロス・カラブリアスは、修道士になると、人は天使か悪魔かのどちらかになると言っています。²⁵³ つまり、中間的な状態はないということでしょうか？

— 聖人は、修道士が自分自身に対して行う修行は正しいものでなければならない、と言いたいのです。だからこそ、神は致命的な罪を犯した大修道士に対して、その罪を贖うために厳しい罰を下されるのです。私たちは時々、何か外的なもの、つまり人工的あるいは魔術的な手段によって恵みを得られると考えてしまいます。しかし、それは神にも、内面的な自分自身にも、他者にも満足をもたらしません。例えば、一部の修道士は、幅広で足元まで届く長いスキマを自ら縫い、その上に赤い十字架やバラ、深紅の枝、山ほどの文字を刺繍しています……。そして、その美しさをすべて見せつけるために修道服の襟を広げています。まるで、自分たちがどれほど熱心に祈っているかを示そうとして、服の裾を広げていたファリサイ派の人々のように、²⁵⁴ かつては、修道士のスキマは修道服の下からほんの少ししか見えませんでしたし、それも歩く時だけでした。多くの者は、そもそも下衣の下に小スキマを身に着け、それが全く目立たないようにして歩いていたものだ。しかし今は、実のない花のようなものだ。果たして彼らは、このような方法でスキマから恵みを受けら

²⁵² マタイによる福音書6章22節。

²⁵³ 参照：'Ο Όσιος Νείλος ὁ Καλαβρός. Ἐκδ. Ἱερου Μετοχίου Εὐαγγελισμοῦ της Θεοτόκου, Ὁρμούλια, 1991年。252ページ

²⁵⁴ マタイによる福音書 23章5節を参照。

れるだろうか？スキマは彼らを嫌悪し、恵みは去っていく。 重要なのは、修道士が内面から大スキマ修道士になることである。そして、内面から大スキマ修道士となる者は、自らのスキマを隠す。外見的なものは内面の変化にはつながらない。そうして人々は表面的なままであり、最終的にはキリストから「あなたたちを知らない」と言われることになるだろう。²⁵⁵

修道院には霊的な使命がある

修道士は、自らの救いと、すべての生ける者およびすべての故人の救いを切に願う。修道士にとって、真の、神聖な愛とは、自らの魂の救いのための苦しみと、全世界の救いのための苦しみの中に宿っている。神に捧げられた修道士の魂は、その親族だけでなく、同郷の人々の救いにも寄与する。そのため、小アジアでは、各一族から少なくとも一人の修道士を輩出し、その者が皆のために執り成しを行うという良き慣習があった。ファラスでは、誰かが修道士になると、村全体で祝宴が開かれた。「彼は、」人々は言った、「これからは私たちの村も助けてくれるだろう。」

もちろん、修道士は決して「私が世界を救う」などとは言わない。彼は、自身の救いを祈ると同時に、世界の救いも祈っているのだ。そして、慈愛に満ちた神がその祈りを聞き入れ、世界を助けてくださったとき、修道士は「私が世界を救った」とは言わず、「神が世界を救われた」と言うのである。修道士は、「わが神よ、私を見ず、私を憐れまないでください。世界を守り、世界を憐れんでください」と祈れる境地に達しなければならない。修道士がこのような祈るのは、自分自身が神の憐れみを必要としていないからではなく、世界に対して深い愛を抱いているからである。

— ゲロンダ、修道士は人々を助けるにあたり、どこまで自己を忘れてよいのでしょうか？

— 人々にそれによる益があることがわかる限りです。しかし、もし私が完全に信徒たちの手に身を委ねてしまえば、私自身も世俗の人となってしまう。修道士が、世俗の人々を助けるという名目で、修道生活にふさわしくないことを行うならば、それは人々にとって何の助けにもなりません。例えば、ある修道士が素晴らしいタクシー運転手になるかもしれない。運賃は取らないし、乗客とは霊的な会話を交わすだろう……しかし、それは修道士の仕事ではない。時には、僧侶の中に世俗的な精神を見かけたり、世俗の人の中に修道的な精神を見かけたりすることがある。だからこそ、キリストは来世においてこう言われるだろう。「お前は修道服を脱ぎなさい。そして、お前はお前を身につけなさい。」世俗の人で、修道生活を望む者は、聖化される。しかし、もし僧侶が世俗の生活を望むならば、彼は永遠の苦しみへと向かうことになる。

— もし修道士が誤った心構えをしている場合、本人はそれを自覚しているのでしょうか？

— たとえ自覚がなくても、何かで過ちを犯していれば、その者の中には完全な平安や安らぎは生まれない。修道生活にふさわしくないことにおいては、修道者の魂は安らぎを見出せない。そし

²⁵⁵ マタイによる福音書 25章12節。

て、その魂が安らぎを失ったその瞬間から、彼はその原因を探し出し、見つけ出さなければならない。

私の知人がある修道院を訪れた後、こう話していました。「あそこはまさにアトリエだ！そして修道院長様とは、なんという人物だろう！もし彼女がアテネのモナスティラキ²⁵⁶でボタンを売っていたら、まさにその場にふさわしかっただろうに！彼女には、そういうことに関しては本当に手腕があるんだ！」つまり、修道院はアトリエだ。やがてそれは工場になり、スーパーマーケットになり、そして市になる！哀れな世俗の人々は、私たち修道士に、何かより高次なものを求めている。しかし、より高次なものを達成するためには、私たちはあらゆる人間的な慰めを避けなければならない。

修道院には霊的な使命がある。そこには世俗的な要素はあってはならず、人間の魂を天国の甘美さで満たすために、霊的なものだけが存在すべきなのだ。さて、世俗的なことでどうして私たちが出家者でない人々と競い合えるというのか！どう考えても、彼らには私たちよりも多くの可能性があるのだから。もし修道院が霊的に生きているとすれば、それが世の人々にどれほど深く考えさせるか、お分かりだろう！畏敬の念や神への畏れがあり、世俗的な論理も商売気もないとき、それは一般信徒の心を和ませるものです。しかし、残念ながら、商売気は静かに修道生活の中に、骨の髄まで浸透しつつあります。ある日、ある修道士が私のカリヴァを訪ねてきました。私は数珠を編んでいた。「君は」と彼は私に言った。「33の結び目があるこんな数珠を、祝福として配っているんだな。でも、俺なら、そんな数珠一本を500ドラクマでも売れるんだぞ！」私も君と同じように、無駄遣いはしない。結び目を終えるとすぐに端を切り落とし、羊毛を無駄にしないよう、少し結び合わせてまとめている。十字架の残った糸も、私は有効活用している——それを縫い付けているのだ。ビーズも使わない。私の利益はあなたよりずっと多いんですよ！」——「ねえ、」と私は答えた。「一体、恥ずかしくないのか！あなたの中に商売人の魂が宿っていることに気づかないのか？私は1950年から修道士だが、こんな話は初めてだ！」

—ゲロンダ、霊的に成熟し、世を助けることのできる人は少ないのです！

—ああ、残念ながら、彼らは少ない！それでは、この先、世界はどうなってしまうのか？私が、世界に貢献できる真の人々を神が遣わしてくださるよう、どれほど神に祈っているか、君は知っているか？不幸な人々にとっては、君が彼らのことを少しでも気にかけ、自分の利益のために彼らを利用しないこと——それだけで十分なのだ。それ以上のことは望んでいない！世の中では、彼らは絶え間ない争いに巻き込まれ、安全を感じることができません。正しく生きる修道院を訪れると、彼らは安心感を得て助けを受け、それが闘いを続ける力を与えてくれるのです。

この厳しい時代、人々が求めているのは、肉体的な糧というより、むしろ精神的な糧です。つまり、彼らが必要としているのはパンではなく（残念ながら、まもなくパンさえも人々に提供できなくなるでしょうが）、精神的な助けなのです。

²⁵⁶ アテネの地区。

それでは、祈りを通じて全世界を助けようではありませんか。例えば、ある家族が崩壊するのを防いだり、ある母親が不幸な子供たちを適切に育てられるよう助けたり、敬虔な心を持ち合わせている人々を少しでも支え続けたりしましょう。

精神的な状態——それは精神的な強さ

今日からすでに、私たちの魂を準備すべき時です。なぜなら、もし何か深刻なことが起これば、それが何をもたらすか私には分からないからです。ああ、もし神が困難な日々の到来を許さなかったら！しかし、もしそれらが到来すれば、たった一つの小さな地震、たった一つの動揺によって、兄弟団全体、修道院全体が崩壊してしまうでしょう。なぜなら、誰もが自分だけ生き残ろうと必死になり、それぞれが自分の道へ逃げ出すからです。

神が私たちを見捨てないよう、私たちは極限まで注意深くならなければなりません。魂の中には、何か霊的なものが存在していなければなりません。もしそれがあれば、それはあなた方の名誉となります。激しい揺れが訪れるでしょう。私はこのことについてどれほど繰り返し話してきたとか、あなた方は私からどれほど厳しい言葉を聞いてきたことか！もし私自身がそのようなことを言われたら、私は深く考え込み、頭をひねってこう考えるだろう。「なぜ私にこんなことを言ったのか、私に何を求めているのか？」と。一晩中、いや、それ以上の夜を眠れずに過ごすだろう。もし、厳しい年が迫っているという現実が見えていなければ、これほどまでに心に深く受け止めることはなかっただろう。しかし、私は、あなたがたにとって非常に厳しい時期が来ることを見通しています。今は私の言っていることが理解できないでしょうが、その時には理解してくれるでしょう。

—ゲロンダ、もし人がその困難な時代に一人きりになってしまったら、その時はどうすればいいのでしょうか？

—君はまず第一に、従順を実践し、分別を身につけることに専念しなさい。あとはその時になってから考えよう。だからこそ、何よりもまず欠点を断ち切らなければならないと申し上げたのだ。もし修道士に欠点があるなら、起きている出来事に立ち向かうことはできないだろう。もし彼が今でさえ何にも満足せず、自分を驚だと思い、他の皆を虫けらだと思っているなら……さあ、改めなさい、改めなさい。そうして初めて、神の助けを受ける資格が得られるのです。神の中で、さらにしっかりと自分を確立しなさい。これからもっと厳しい時代がやってきます。果実はまだ青く、熟していません……あなたがたが霊的に成熟したとき、あなたの修道院が何になるか、ご存知ですか？要塞になるのです！そして、それは地域的な意味にとどまらず、あなたの助けはさらに遠くまで及ぶでしょう。そうでなければ、あなた自身が人間の助けや庇護を必要とするようになるでしょう。そして、多くの修道女を擁する修道院が、信徒たちの助けを必要とするようになったら、それがどれほど残念なことか、お分かりでしょうか？

今日の修道士には、困難を乗り越える準備ができるよう、霊的に生きるべきです。彼は、苦難によって翼を折られないよう備えなければなりません。さもないと、キリストからの背きにまで至りかねません。やがて川が干上がり、誰もが渇きに苦しみ、皆が苦しむ時が来るでしょう。私たち

修道士にとって、それはそれほど恐ろしいことではありません。渇きに苦しむ？ そう、私たちは渇きに苦しむべきなのです。なぜなら、私たちは苦難を求めてこの道を歩み出したのですから。「修道士として自発的に行わなかったこと——その時、私はこう言うでしょう——を、今や不本意ながらも行い、修道士とは何かを理解しよう。わが神よ、感謝します！」しかし、この世、哀れなこの世よ！人を殺すが建物を破壊しない爆弾まで発明するに至っているのだから、何と言おうか！キリストが「一つの魂は全世界に匹敵する」と仰せになったのに（²⁵⁷）、彼らにとっては建物が全世界よりも貴重だなんて、それは恐ろしいことだ！

—ゲロンダ、これから私たちを待ち受けていることに対して、不安や恐れを感じています。

—その恐れこそが、私たちがキリストにすがりつく助けとなるのです。だからといって、私たちを待ち受けるすべてのことを喜ぶべきだということにはなりません。喜ぶべきなのは、キリストのために奮闘する機会が与えられるということです。つまり、私たちを待ち受けているのは、ヒトラーやムッソリーニのような者への隷属ではなく、キリストへの忠誠を試される試練なのです。勝利するために、私たちには機関銃も、さらに近代的な原子爆弾也没有ありません。今や戦いは霊的なものとなるのです。私たちには、悪魔そのものとの戦いが待ち受けています。しかし、私たち自身が悪魔に権威を与えない限り、悪魔には何の権威也没有ありません。何を恐れる必要があるのでしょうか？もしヒトラーやムッソリーニがいたなら、事態は違ったものになっていたでしょう。恐れがあってはなりません。戦いが霊的なものであることを喜びましょう。

もしあなたが修道士のように、父のように生き、注意深くあるならば、敵からのあらゆる攻撃に対して、あなたは神の介入を受ける権利を持っています。祈りの人々、謙虚な人々、痛みと愛を持つ人々が存在するならば、それらはまさに霊的な資本であり、霊的な戦略的拠点なのです。もし修道院に、他者の苦しみを思い、祈りを捧げる人が二、三人いるなら、彼らは霊的な要塞となります。そのような霊的に成熟した人々は、敵のあらゆる力を封じ込めるのです。

祈り、正しい生活、個人的な模範

—ゲロンダ、今日の困難な状況に対して、修道士はどのような正しい姿勢をとり、それを表現すべきでしょうか？

—第一に、祈り、正しい生活、そして自らの模範を重んじなければなりません。そして、必要に応じて、適切な場所で、自分の立場を述べるべきです。

—つまり、何かきっかけがあれば、修道士は発言すべきということですか？

—もちろんです！修道士でなければ、誰が語るというのですか？修道士に恐れることはありません。他の人々は叱られるのを恐れています。私たち——神に身を捧げた者たち——以外、誰が真っ先に戦いに赴くというのですか？

²⁵⁷ マタイによる福音書16章26節を参照。

私の内なる声が、神は私たちを見捨てない、決して見捨てないと告げています！ 状況は明らかになるでしょう。今の状況は、まるで大きな引き網にたくさんの魚が引っかかったようなものです。しかし、網は腐っています。一匹の魚がこちらへ、もう一匹があちらへと暴れ回り、結局、網は破れてしまいます。破れるのは魚が大きいからではなく、網自体がすでに腐っているからです。

— ゲロンダ、その魚たちとは、キリスト教徒のことですか？

— ええ、キリスト教徒です。ウナギやヘビは、それ以外の者たちです。しかし、私たちも、今起きていることについて神に答えを問われることになるでしょう。私は今、これらすべてについて遠慮なく話しています。もう自分を抑えきれません。

— では、私たちは何をすべきでしょうか、ゲロンダ？

— 何よりもまず、自分自身を磨くことです。なぜなら、修道士である私にとって、次の課題が課せられているからです。すなわち、自分の中にある世俗的な人間性を根絶し、まず自分自身を整え、霊的な人間になること。そうでなければ、私の修道生活には意味がありません。その後、必要が生じれば、真剣に意見を述べましょう。そうすれば、神が私たちを助け、この件を良い結末へと導いてくださるでしょう。

— しかし、ゲロンダ、沈黙と祈りの方が望ましいと言う人もいます。

— 周囲がすべて燃え上がっている時、無関心でいるわけにはいきません！ 火を消さなければなりません。その痛みが、あなたに沈黙を許さないのです。もちろん、最も重要なのは、できる限り霊的に生きようと努めることです。もし何らかの重大な問題について自分の見解を述べなければならないのであれば、神があなたに示されることを語るべきです。

謙虚に、質素に、霊的に生きなさい——そうすれば、困難な時に妥協を強いられることはないでしょう。さらに、修道生活への素質を備えた若い女性たちを修道院に迎え入れ、彼女たちが真の修道女になれるよう努めてください。優れた修道士になれば、人はある問題に対してどこまで身を捧げるべきかを知ります。何をすべきか、何をすべきでないかを知り、どう振る舞うべきかを理解しています。もし彼が立派な修道士になれなかったなら、すべてが台無しになってしまいます。このことはお分かりでしょうか？ もしあなたがたが真の修道女となれば、分別を持って行動することになるでしょう。もし真の尼僧になれなければ、誰かを用事で送り出す際、「この件については余計なことと言わないように、あれについても口外しないように」と細かく指示しなければならず、そうしないと、その人は馬鹿げたことを言い散らすかもしれません。しかし、そのような状態は未熟なものです。 そうなった後、私たちを待ち受けるあらゆる事柄に、どうやって対処できるというのか？

ですから、修道生活を送る素質のある者は、真の修道女となるよう努力し、困難な局面において、どこまで話すべきか、何を話すべきか、そしてどう行動すべきかを理解しなければなりません。そうすれば、彼女たちは服従の範囲から逸脱することはないでしょう。なぜなら、彼女たちの精神は、イグメニア修道院長様の精神と調和しているからです。 必要に応じて、イグメニアはただ合図を送るだけで、彼女たちはそれを理解するでしょう。なぜなら、彼女たちはイグメニアと同じ波長で働いているからです。そうでなければなりません。もしあなたがこれを学ばなければ、その同

じ波長に他の誰かが乗り込んでくる可能性があります。その人はあなたに必要なこととは異なることを語り、あなたはそれを識別できず、その人は少なからぬ害をもたらすことになるでしょう。

修道生活は危機に瀕している

今日の世界は燃え盛っているのに、修道生活は力を失い、衰退し、尊厳を失いつつあります。もし修道生活から霊的なものが失われてしまえば、そこには何も残らないのです。聖山で、ある巡礼者がある修道士に尋ねた。「ねえ、ここには、一体、修行者の精神なんてないのかい？」——「今や」と、その修道士は彼に説明した。「新しい時代だ。古い時代はすでに終わりを告げた。」まあいい、仮に彼が頭がおかしい人だったとしよう。彼のような者があと5人か10人、頭がおかしいのかもしれないが、もし彼らがそのような戯言を吹聴するなら、塔に閉じ込めてしまえばいい！彼らには、口先だけで現代の修道生活を誹謗し、人々を惑わす権利などないのだ！何しろ、それを待ち構えている者もいるのだから。

ご覧なさい。やがて、一部の修道院では、非難されないようにと、こっそりと聖父たちの著作の朗読が廃止されるでしょう。社会学的な本が読まれるようになるでしょう。まるで、現代においてそれらが有益であるかのように。そう、私たちはまさにその方向へ向かっているのです！そして、哀れな信徒たちは助けを求めて聖なる修道院を訪れるのですが…… 世俗において敬虔な人が軽蔑されるように、まもなく善良な修道士も軽蔑されるようになるでしょう。もし私たちが世俗的な精神の危険性を過小評価すれば、それは私たちにとって悲劇です。そうすれば、近い将来、修道院を訪れ、正しく、修道士らしく生きたいと願う若者に、他の者たちはこう言うことになるでしょう。「お前、ここで何をしに来たんだ？」 俗人と何ら変わらない修道士たちを見て、人々は修道生活に失望してしまう。多くの人が私のところに来て、ある修道院に惑わされた話を語る。今、私はどうすれば彼らの考えを正せるだろうか？

修道生活に世俗の精神が深く浸透しており、悪は止まることを知りません。修道士たちは、一般信徒ではなく、修道士としての姿を現さなければなりません。私たちは、かつての世代に備わっていた素朴さを失ってしまった。今の若い修道士たちは、世俗的な論理と世俗的な驕に動かされている。彼らは自分の評判を落とさないよう努め、しばしば世俗社会の法に準拠しようとする。それなのに、ほんの数年前までは、修道院の共同生活の中で、『ラヴサイク』に描かれたような光景を見ることができたのだ。²⁵⁸ ある者は神への熱意から、またある者は悔い改めのために修道院に入った。彼らを修道院へと導いた事情は様々だった。ある者は妻の死後に修道院に入り、またある者は以前の世俗的な生活を悔い改めてそこに入った。また、修道院では悪霊に取り憑かれた人々にも出会うことができた。彼らは助けを求めてそこへやって来て、修道士たちの祈りによって癒やされ、そのままそこに留まって修道衣をまとうこともあった。しかし、その後で何らかの悪行を犯すと、

²⁵⁸ 「ラヴサイク」とは、エジプトおよびパレスチナの聖人たちの伝記を指す。この書物は、おそらく5世紀半ばに、ピフィンのヘレノポリス司教パラディオスによって編纂され、ビザンツの貴族ラヴスに献呈された。この人物の名にちなんで、この著作自体も「ラヴサイク」と呼ばれるようになった。

再び不浄な霊が彼らに取り憑いた。そのため、共同生活を送る修道院には悪霊に取り憑かれた人々もいた。 惑わされた者もいれば、キリストのために狂人となった者もあり、透視の賜物や癒しの才能を持つ修道士もいた。実に多様性に富んでいたのだ！しかし今日では、透視者も、奇跡を行う者も、悪霊に取り憑かれた者も、キリストのために狂人となった者も、どこにも見かけない。 私たちには別の「聖なる狂気」——この世の「狂気」がある。私たちは自分の頭を最優先にしてしまい、それによって精神を損なってしまった。私たちの中には多くの世俗的な論理が入り込み、その多くの論理がすべてを破壊してしまった。そして、私たちがそれを理解していないことが問題なのだ。

一部の修道院の修道士たちは、今日、自分の生活を様々な便利さで埋め尽くし、それを重荷にしている。必要のない物事に過度に気を取られ、本来取り組むべき霊的なことを後回しにしているのだ。もし若者たちが修道院に入っても、世俗の落ち着きのなさを世俗的な施設の雰囲気へと置き換えてしまうなら、彼らは安らぎを見出すことはできないだろう。 やがて、気晴らしを求めて、彼らは「霊的観光」に興じたり、遠足に出かけたりしたくなるだろう。「僕は休暇を取りたい」と言う者さえ現れるかもしれないが、修道士たる者は、心を痛めつつ自らの独房を離れるべきなのである。

私は多くのことに憤りを感じており、だからこそ、こうした苦々しい言葉が口をついて出てくるのだ。 胸が痛む。かつて貧しい修道士たちは、霊的な書物も持たず、修道生活とは何かという概念さえなかったにもかかわらず、彼らは見事に成長していたのだ。修道院に入ってきた者の30パーセントは生まれながらの修道士だったが、残りの者たちは未開の状態のままやって来た——まるで様々な畑から摘み取られた果実のような者たちだったが、それでも彼らは見事に成長していた。 人は、霊的なことについて何の知識も持たずに修道院に来て、そこで一、二ヶ月暮らしても、修道院長でさえ彼がどんな人物なのか知らなかった。その後、修道士になる決意を固めると、彼は指導司祭のもとへ行き、懺悔をして、修道院に残った。 彼がどんな人物か、どこ出身か、何が彼を修道院へと導いたのか、誰も知らなかった。 しかし、あらゆる困難にもかかわらず、彼は霊的に成長し、順調に歩みを進めていた。中には全く読み書きができない者もいた。食堂での朗読や、教会での聖人暦の朗読を聞くだけで、それ以外は何もせず、時にはそれさえも理解していなかった。 歌についても理解していなかった。礼拝の際には「イエスの祈り」を唱えていたが、その心は善意に満ちていた。それにもかかわらず、彼らは霊的な境地に達していた。彼らは霊的な状態に達していたのに対し、現在では日曜学校があれば、霊的な書物もあり、多くの好条件が整っているにもかかわらず、そのすべてが水の泡となってしまっているのだ！ つまり、未開の人々にはこれほど強い霊的な成長があったのに、教養があり発達した人々には何もないということになる！ つまり、例えば、耕された畑があり、そこに種を蒔いても、一粒も発芽しないようなものだ！ これは悲惨なことではないか？ 皆さんはどう思うか？

いずれにせよ、私たちが不注意であれば、修道生活は持ちこたえられず、ひっくり返ってしまうでしょう。しかし、未来は当然、キリストと至聖なる聖母マリアの御手に委ねられています。私たちの慈愛に満ちた女主人である聖母は、ほうきを手に取り、ご自身の聖なる修道院からゴミを掃き出し、再びそこに秩序をもたらせてくださるでしょう。 私たちは、すべてが跡形もなく過ぎ去ってしまうことを理解しなければなりません。もし私たちが正しく、修道者らしく生きなければ、神

の御前に借りを負った者として立つことになるのです。私たちは、自らの魂を救うため、そして祈りによって社会に奉仕するために修道士となったのです。ですから、私たちがキリストにどのような誓いを立てたか、また、この特権——天使の位への召命という特権——を与えられなかった人々がこの世でどのような苦しみを耐えているかを、決して忘れてはなりません。

私たちは、自らの後に遺産を残さなければなりません

——ゲロンダ、多くの人が〔今〕修道院に希望を託しています。その責任は、私にとって重い負担となっています。

— ええ、多くの人が、今の唯一の救いは、聖コスマ・エトリアスに似た聖人が何人か現れ、彼らが各地へ散らばって説教を行い、世を啓蒙することにあると言っています。修道院は霊的な中心地です。もし修道院が1821年の蜂起を支援していなかったら、その蜂起自体も起こらなかったでしょう。そして、ドイツ占領下においても、修道院は屈服せず、解放闘争に貢献しました。だからこそ、²⁵⁹の無法者たちはそれらを破壊したのです。修道院の大部分はドイツ人によって焼き払われたのではなく、自国のギリシャ人武装集団によって破壊されたのである。ドイツ軍は「修道院で弾薬や武器が見つかった場合、それを焼き払う」と宣言していた。匪賊たちは、自分たちの手を汚していないように見せかけ、修道院破壊の黒幕をファシストに仕立て上げようと、修道院に忍び込み、古い弾倉を数個や壊れたライフルを何丁か仕込んでおき、その後、自分たちで占領軍に「あの修道院に匪賊が潜伏している」と密告した。ファシストたちは一斉検挙を行い、弾薬を見つけると修道院に火を放った。こうして、山賊たちは修道院を恐れていたため、多くの修道院を焼き払うことに成功した。「修道院が残っていれば——と彼らは言った——たとえ無神論体制を樹立できたとしても、我々は何も達成できない。それなら、燃やしてしまおう。」こうして、彼らは修道院を焼き払ったのだ。

今日、人々は発酵種を求めて修道院を訪れています。しかし、修道院そのものがめちゃくちゃな状態では、一体どんな発酵種があるのでしょうか？ そこには発酵種すら見つからないでしょう。困難な時代が訪れても、少しでも発酵種が残るよう、努力しましょう。

今、修道院に助けを求めてやってくるのは、呪術師やその類の邪悪な存在に頼る人々だ。やがて、罪に疲れた人々がやってくるだろう。あまりにも疲れ果てているため、たとえ酒を飲んだり罪を犯したりするように促しても、彼らは従わないだろう。この困難な時代において、神は個人的な招きによって人々を修道生活へと招いておられる。この世代は、最高の条件と理想を携えて修道者の道を歩み始めるが、悪魔はそのすべての素質を台無しにしてしまう。次の世代は異なるものとなるでしょう。修道院には、修道生活に不向きな多くの人々もやってくるでしょう。彼らは、修道士にならざるを得ないような状態に追い込まれるのです。彼らはこの世に疲れ果て、傷つけられているでしょう。夫婦は（教会の祝福があろうとなかろうと）離婚し、修道院に入るでしょう。世俗の

²⁵⁹ 「バンディット」とは、ファシスト占領下のギリシャにおける共産党の武装勢力を指す。——訳者注

生活に嫌気がさした若者たちも修道院へ向かうだろう。ある者は自分の魂を救うために、またある者は魂に少しの安らぎを求めるために。結婚を望みながらも、他人と人生を結びつけることを恐れる者たちも、修道士になるだろう。つまり、今後数年のうちに、精神的に病んでいる人や、単に家庭を築く決意が持てない人までもが、修道士になるかもしれない。「結婚して何が得られるのか？ どうやって生きていけばいいのか？」と彼らは考えるようになるだろう。「それなら、修道士になったほうがましだ」と。つまり、彼らは修道生活を一種の気楽な過ごし方として捉えることになるのだ。彼らがどれほど成功するかは、また別の話だ。修道院に入る者たちは悔い改めた者ではなく、彼らの置かれた状況が彼らを修道士になることを強いることになる。彼らの動機は完璧なものではないだろう。そこに危険が潜んでいる。人が世俗を離れて修道生活を選ぶ場合、事情は異なる。こうした不幸な人々には多くの助けが必要となるでしょう。彼らは世俗の快樂の味を覚えているため、悪魔は彼らに対して激しい戦いを仕掛けてくるでしょう。悪魔は私たちに対しては、そのような戦いを仕掛けてはきません。彼は私たちの霊的な働きを妨げ、私たちを落胆に陥れ、私たちの後に続く者たちが霊的な種を見出せないようにしようと努めるのです。

これらすべてを通じて私が言いたいのは、私たちが今、成功を収め、こうした人々を助ける力を持てるようにしなければならないということです。彼らに父祖からの遺産を残しましょう。私たちには「霊的な喜び」がありますが、天の喜びはありません。私たちは、出家式や叙階式、徹夜祈祷、「主のラビ……」の賛美歌、パンニカディルの揺れに喜びを感じます……。しかし、これらの喜びは天上の喜びではなく、心の肉的な喜び——その言葉の肯定的な意味において——に過ぎません。天上の喜びとは、それよりも高次で、言葉では言い表せないものです。人が天上の喜びをほんの少し味わうようになると、その心は躍り、狂喜します。天上の喜びを次世代に伝えるためには、私たち自身がそれを体験しなければならないのです。

第3章。 人生の最も深遠な意味について

来世への備えをしよう

——ゲロンダ、ある青年が姿を消しました。彼は両親に「自分は醜いから、その責任は両親にある」という自殺をほのめかすメモを残していました……

— 人々は、まだ人生の最も深い意味を理解していない。彼らは、この世以外の生命を信じていない。彼らのあらゆる苦しみは、そこから始まる。「私は不当に傷つけられている」と人は言う。「他人は喜んでいるのに、私はそうではない」。人々は自分が持っているものに不満を抱き、そこに利己心が混じり、苦しんでいるのだ。神はすべての人を愛しておられる。神は一人ひとりに、その人にとって有益なものを与えられた。身長であれ、勇気であれ、美しさであれ、あるいは他の何かであれ。神は、人がそれを有益に用いれば、救われる助けとなるものを与えられたのだ。しかし

、世界は「なぜ私はこうで、あの人あのようになのか」と苦悩している。だが、あなたにはあるものが、あの人には別のものがあるのだ。聖山でキリストのために修業に励んでいたあるルーマニア人の聖人は、そのような思いに苛まれているある人に、次のような話をしました。「カエルが水牛を見て、『私も水牛になりたい!』と言いました。カエルはふくれっ面をして、ふくれっ面をして、ついには破裂してしまいました。だって、神は誰かをカエルに、誰かを水牛に造られたのです。それなのに、カエルはとんでもないことをした——水牛になりたがったのです! だから、破裂してしまったのです!」誰もが、創造主が自分を作り上げたありのままの姿を喜びましょう。

人が、神と来世の永遠の命を信じるという与えられた恵まれた機会を活用するやいなや、すなわち、人生の最も深い意味を悟り、悔い改めて人生を立て直したその瞬間、神の慰めと神の恵みが直ちに訪れ、その恵みが彼を変え、生まれつきの欠点すべてを追い払ってくれるのです。多くの悔い改めた罪人たちは、謙虚に高潔な行いに励み、神の恵みを受け入れ、聖人となりました。そして今、私たちは畏敬の念をもって彼らを崇め、彼らの祈りを求めています。しかしかつて、彼らには多くの情欲、とりわけ生来の情欲さえも抱えていました。例えば、聖モーセ・ムリン。生まれつきの悪意を持つ、最も血に飢えた強盗であった彼は、神を信じるやいなや直ちに悔い改め、修行に励み始め、すべての情欲が彼を離れ、神の恵みが彼を訪れた。彼は預言の賜物さえ授かり、その靈感の鋭さにおいては、アルセニオス・ヴェリキーさえも凌駕しました。²⁶⁰ アルセニオスは、ローマの貴族の家系に生まれ、生まれつきの美德を持ち、外見上は博学を誇っていました。

—つまり、ゲロンダ、この人生の意味とは具体的に何なのでしょう？

— 何に？ それは、私たちの祖国、天国、楽園のために自分自身を整えることにある。要は、人がこの最も深遠な人生の意味、すなわち魂の救いを掴むことにある。神と来世を信じることで、人はこの一時的な人生が虚しいものであることを理解し、あの世のための「旅券」を準備するのだ。私たちは、誰もがいつかこの世を去らなければならないという事実を忘れがちです。この世に根を下ろすことは許されません。この世は、のんびりと過ごすためのものではなく、試練を乗り越え、あの世へと移るためのものです。だからこそ、私たちの前に次の目標を掲げなければならない。神が私たちを召されたとき、清い良心を持ってこの世を去り、キリストのもとへ舞い上がり、永遠にキリストと共にいられるよう、準備を整えることである。キリストが五つのパンを祝福し、何千人もの人々を満腹にさせたとき、人々はすぐにこう言った。「この方なら、立派な王様になるに違いない!」と。五つのパンと二匹の魚を食べて、人々は高揚した。しかし、キリストは彼らに、この食べ物について心配する必要はない、と告げられた。なぜなら、私たちはここに留まるわけではないからだ。この人生において、私たち一人ひとは試練にさらされている。それは、自分が神の求めに応えているかどうかを問う試練である。

²⁶⁰ 聖アルセニオス大聖人(354—447)はローマ出身であった。彼は深い知恵と高潔な徳を備えていた。テオドシウス皇帝が自身の二人の子供の教育を彼に託したことから、「王たちの父」という称号を得た。394年、神の啓示を受けて世俗を離れ、エジプトの荒野へと隠遁した。かつて宮殿で暮らしていたにもかかわらず、聖アルセニオスは極めて厳格かつ献身的な姿勢で修道生活を送った。

—ゲロンダ、人が神の御心を行うために、常に心に留めておくべきことは何でしょうか？

—人は心を神に向け、この人生に踏み込んだ目的について考えなければなりません。私たちは、世の中のあらゆることに手を出したり、安楽な場所に落ち着いたりするためにここに来たのではありません。私たちは、あの世の生活に備えるためにここに来たのです。ですから、私たちの心は絶えず、あの世の生活と、そこに至る助けとなるものに向けられていなければなりません。あらゆることに敬意を払い、敬虔かつ謙虚に精進することで、人は霊的な人生の意味を理解するのです。霊的な生活とは、抑えきれない勇気であり、霊的な饗宴である。饗宴とは何か、ご存知だろうか？ 修道生活の最も深い意味を知り、霊的な高潔さと、教父たちの持つ繊細な感性を身につけよ。そして、人生（修道生活ではなく、人生全般）の最も深い意味を、すべての人々が理解しなければならない。もし人々がそうすれば、ささいな難癖や争い、その他の自我の現れは完全に消え去るでしょう。神からの報いがあるのなら、この世で尊厳を保ち、他者から人間的な栄誉を受けるのではなく、来世のために少しばかりの「お金」を稼ぐ方法を考えましょう。

人は現実の生活という次元を歩むとき、あらゆることに喜びを見出します。生きていることにも、やがて死ぬことにも。それは、人生に疲れたから喜んでいるのではありません。いいえ、死ぬことでキリストのもとへ行けることを喜んでいるのです。

—ゲロンダ、彼は、神が許されることに逆らわないから喜んでいるのでしょうか？

—彼は、この人生は儚く、もう一つの人生は永遠であることを見て喜んでいるのです。彼は人生に疲れているわけではありませんが、「私たちが何が待っているのか、やがては去っていくのではないだろうか」と考えながら、そこへ向かう準備をしています。そこに自分の使命、人生の意味があることを理解しているからです。

例えば、社会福祉の現場で働く女性たちを考えてみましょう。彼女たちには優しさがあります。かわいそうに、他人のために奔走し、身を粉にして働いています。専門は心理学者ですが、彼女たちが他人を助けようとする方法が、うまくいかない場合もあります。例えば、足を切断された人を慰めに行くと、その人は彼女にこう言います。「君は二本の足でここに来て、『こんにちは』と言うが、僕には足が一本しかないんだ。」彼女には彼に何と答えられようか？ 心理学でどうやって彼を助けられるというのか？ もしこの人が人生の最も深い意味を理解できなければ、何ものも彼を助けることはできない。彼は、神によって許されたこの障害に対して、不平を言わなければ、来世で積み重ねられた天の報いを受け取れることを理解しなければならない。これを理解して、彼は喜ぶべきだ。たとえ他の人々が四本足で歩いていたとしても、彼はこう言うべきだ。「神よ、私が片足で歩けることを感謝します。」しかし、人生を霊的な視点で捉えられないため、これらの哀れな人々は他人を慰めに行っても、何を言えばよいのか分からない。例えば、に3人の子供を持つ35歳のガン患者の苦しみを和らげようと、ある「社会的慰め手」が訪ねてくる。彼女は彼女に何と尋ねようか？ もしこの母親が人生の最も深い意味を捉えられなければ、子供たちの将来を案じて絶望してしまうだろう。そして、彼女を慰めに来た心理学者自身も、より高次で、霊的により深い何かを理解できなければ、同じ絶望に陥ってしまうだろう。というのも、まず自分自身を精神的に整えなければ、相手に神からの慰めがもたらされるような形で、正しく隣人を助けることはできないか

らだ。こうして、これらの哀れな心理学者たちは、肉体的に疲れるだけでなく、人々に真に役立つ助けを提供できないことに気づき、落胆してしまう。つまり、二重に疲れてしまうのだ。

私たちは「善」を必然として認識しなければならない

人は善を必然として認識しなければならず、そうでなければ苦しむことになる。そして、「誰もが善を必然として認識できるわけではない」と言うのは嘘になる。私はそのような見解を正当化することはできない。善を必然として認識できるのは、5歳の子供でさえもだ。例えば、ある幼児が熱を出したとしよう。両親が医者を呼び、医者はこう言う。「お子さんをしっかりと押さえてください」——そして——パッと！——注射を打つ。その後、その子は医者の姿を見るやいなや、泣き叫んで逃げ出してしまう。しかし、もし最初にこう言われればどうだろう。「ねえ、君は病気で、熱があるんだ。学校にも行けないし、遊ぶこともできない。ほら、他の子たちはあそこで遊んでいるよ。でも、先生にちょっとだけ注射をさせてあげたら、熱が下がって、その後はお前も遊びに行けるよ」と最初に伝えておけば、その子はすぐに目を閉じ、自ら先生に注射のために手を差し出すでしょう。私が言いたいのは、もし小さな子供が「善」を「必要」として理解できるのなら、大人にとってはなおさら理解しやすいはずだということです。

人が何が正しく、何が正しくないかを理解した瞬間、それで終わり、話は決着する。例えば、私があなたに「窓から放り投げてやる」と言ったとしよう。それがどういう意味か、あなたは理解しているはずだ。知的障害のある人であっても、高層階の窓から落ちれば足を骨折してしまうことは理解しています。崖とは何か、平らな場所とは何か、何が善で何が悪なのかを理解しているのです。聖父たちの著作や福音書を読んだことのある大人なら、何が正しく何が正しくないかを知っています。その瞬間から、自分の考え方を切り替える必要があります。しかし、ある人たちに「なぜそんなことをするのですか？それが間違っていることが分からないのですか？」と尋ねると、彼らはこう言い出すことがよくあります。「ああ、残念ながら、私はこういう人間なんです。なぜこうなのかって？だって、以前もそうだったんですから……」——「そんな昔の話はいいから！今、私がこう言っているのだから、改めるために何をしているのか？」もし彼らが物事を理解できないのなら話は別で、その場合は言い訳も通る。しかし、頭が回らないという理由で、赤ちゃんだけがキャンディの代わりに石炭をつかむようなものだ。

—ゲロンダ、あなたのお母様は非常に思いやりのある方で、あなたを深く愛しておられました。それなのに、どうして生後間もない頃からあなたを厳しく育てられたのでしょうか？

—幼い頃から、人は人生の最も深い意味を理解し、心から喜びを見出すことができるのです。私が小さい頃、友達と競争して走ると、いつも彼らを置き去りにしていました。彼らは私に走らせようとはせず、追い払ったり、「移民」や「難民」とからかったりしました。私は泣きながら母のもとへ駆け寄りました。「どうして泣いているの？」と母は尋ねました。「友達が一緒に走らせてくれないんだ」と私は答えた。「走りたいの？ほら、庭があるじゃない、走ってきなさい。どうして外で走りたがるの？みんなに見て『よくやったね』って言われたいから？それには誇りがあるのよ。」別の時、ボール遊びがしたかったのに、また友達に追い払われてしまった。私はまた泣いて

、お母さんのところへ行った。「どうしたの、また泣いているの?」と、お母さんは私に尋ねた。「友達がボール遊びをさせてくれないんだ!」と、私は言った。「うちの中庭は広いし、ボールもあるんだから、ここで遊べばいいじゃない。何、みんなに見て、感心されたいの? そこには誇りがあるのよ。」その時、私はお母さんの言うことが正しいと思った。そして、人に見られるために走り回ったり、ボール遊びをしたりする気が、じわじわと失せていった。なぜなら、そこに誇りがあるのだと理解したからだ。「確かに――」と私は思った。「なんて馬鹿げたことなんだ! 母さんの言う通りだ。」それ以来、他の子供たちが走り回ったり、ボールを叩いたり、それを自慢したりしているのを見ても、私はあまり気にならなくなった。私は笑って、「何やってるんだ?」と言っていた――その頃、私はまだ小さくて、小学校3年生だった。その後、私は自然な生活を送った。そして今、もし私にこう尋ねられたら: 「8月に裸足でとげだらけの道を登ってアフォン山の頂上を目指すか、それとも、マントをまとわされ、称賛を浴びるような祝賀会に行くか、どちらを選びますか?」と聞かれたら、私はアフォン山に裸足で登る方を選ぶと答えるだろう。謙虚さからではなく、それが私の好みに合うからだ。

誇り高い人々は、子供の頃、家族から十分な助けを受けられなかったのです。世俗的な考え方は人を苦しめます。もし誰かがこの点で自分を放任し、親が子供たちが まだ幼いうちに手を差し伸べなければ、それはやがて固定化された状態になってしまいます。子供が意気消沈しないように少し褒めることと、そのエゴイズムを煽ることとは別物です。例えば、子供が詩を読む途中でつまずき、落ち込んでいるとします。それを見た母親が、「まあいいわ、いいわ。上手に読めたわよ」と言うのはまだしも、もし子供が詩をうまく読み上げたのに、母親が他人の前で「なんて素晴らしい子なの! 他のどの子供よりも上手に読んだわ! うちの子供が一番だ!」と他人の前で褒めちぎるなら、それは良くありません。このようにして、親はしばしば子供の中に誇りを育ててしまうのです。あるいは、例えば、子供が学校でいたずらをして、そのせいで先生に叱られたとします。子供が家に帰って父親に「先生は不当に僕を叱った」と愚痴をこぼします。もし父親と母親が子供の味方になり、さらに子供の面前で先生について「あいつに思い知らせてやる! よくも私の子供を……!」と言うなら、子供は後で自分のいたずらを正しいことだと考え、結局は些細なことで苦しむことになる。すべての基本は、子供がまだ実家にいるうちに何かを理解することにある。もし人が幼い頃から人生の最も深い意味を身につけていれば、その後すべては順調に進む。そうでなければ、人は儚いものや、実際には安らぎをもたらさない人々の称賛に喜びを見出し、儚い人間であり続けることになる。

悔い改めによって世界に貢献しよう

—ゲロンダ、今日、世界に最も役立つものは何でしょうか?

—もし今日、世界に悔い改めが説かれるなら、それだけが助けとなるでしょう。その恩恵を受けるために、悔い改めに特に重点を置いている聖人たちの伝記を、できるだけ多く読みましょう。神に悔い改めを求めることは、啓示を求めることを意味します。悔い改めを願い、より深く悔い改めることで、私たちは自然とより大きな謙虚さへと至るのです。そうすれば必然的に、大きな神の

恵み、神からの啓示がもたらされるでしょう。悔い改めのうちに留まることで、人は神の恵みを保つのです。人々は本来、善良な存在なのです。ほら、大多数の人々は、懺悔もせず、聖体拝領もせず、大きな無知の中にありますが、一方で、私のところに来て助けを求めてきます。そこには何か隠されているのです。

—ゲロンダ、もしかすると、人々が神に近づくきっかけとなるのは、試練なのでしょうか？

—善意を持つ者にとっては、試練は助けとなります。そのような心持ちのない者は、神を非難し、冒瀆し、自分を正当化し始めます。悪いのは、人々が「罪を犯しました」と認めず、ただ苦悩していることです。悪魔はこの世で大きな権力を握っています。私たちは彼に多くの権限を与えてしまいました。今日の人間は一体どうなってしまったのでしょうか！問題は、悔い改めがないために、神が介入して助けてくださるのを妨げていることです。もし悔い改めがあれば、すべてはうまくいくでしょう。私たちには嵐、嵐が待ち受けています！神が御手を差し伸べてくださいますように！全世界の悔い改めを願いましょう。また、意図的に教会に害を及ぼし、改心する気のない人々のためにも祈りましょう。神が彼らに悔い改めの心を授け、やがてより良い世界へと導いてくださるよう。

神の祝福を受けられるよう、可能な限り、世界が悔い改める手助けをしましょう。悔い改めと告白——これこそが今日必要なことです。私が人々に常に勧めているのは、悔い改め、告白することです。そうすれば、悪魔はその権限を奪われ、あなた方は外部からの悪魔的な影響を受けることをやめられるでしょう。人々が理解し、悔い改めるためには、衝撃的な出来事が必要です。例えば、ある人が姦淫を犯したことを告白するとします。告解司祭は彼に赦しの祈りを捧げ、悔悛の務めを課して、そこで終わらせてしまいます。しかし、告解司祭は、悪が単に姦淫だけにとどまらないことを、その人に理解させる手助けをしなければならない。悔い改める者は、その行為によって自分が犯罪者となり、二つの家族を破壊してしまったことを自覚しなければならない。しかし、一部の告解司祭は、自ら深く掘り下げようとしなければ、人々に深く考えさせることもない。

—ゲロンダ、善良でありながら、めったに教会に通わず、教会の秘跡に定期的に参加しない人々もいますが.....

—教会にあまり通わないけれど、心に敬虔さと優しさを持ち、それゆえに神がご自身の居場所を見出し、その人の中に宿られるというケースもあります。もしこうした人々が教会の秘跡の生活に参加していれば、霊的な生活において大いに成長していたことでしょう。一方で、教会に通い、懺悔し、聖体拝領し、必要なことはすべて行っているにもかかわらず、神が彼らの中に宿る場所を見つけられない人々もいます。それは、彼らの中に謙遜や優しさ、真の悔い改めがないからです。適切な精神状態に到達するためには、霊的指導者に対する懺悔だけでは不十分です。悔い改めも必要です。そして、あらゆる祈りは、神への告白から始めなければなりません。もちろん、「私はこんな人間だ、あんな人間だ、こんな人間だ！」と泣き言を言い続け、その後また以前と同じ生活に戻るようなことではありません。それは罪を真に受け止めることではありません。罪を真に受け止めることで、人はたとえわずかでも、より良い人間になっていくのです。

イスラエルの人々がどれほど簡潔に祈っていたか、覚えていますか？「起きよ、主よ、眠りから覚めよ。」²⁶¹、つまり「主よ、目を覚ましてください。なぜ眠っておられるのですか？」そして主は、「起きよ、...力強く、酒に酔ったように勢いよく、敵を打ち破り、彼らを後退させよ...」と応じられました。²⁶² 彼らは、どれほど素朴に、どれほど謙虚に、そしてどれほど大胆にこう叫んだことか。「主よ、今、私たちは異邦人に何と言えましょうか。あなたは紅海で私たちを救っていただきましたが、今、私たちを待ち受けているのは何でしょうか。荒野で死ぬことか、それとも異邦人の剣に倒れることか？どうか私たちを笑いものにはしないでください！」²⁶³ しかし、私たちには決して口を開いて、「主よ、なぜ眠っておられ、見ておられないのですか？」などと口走ろうなどとは思ひもしない——そうすれば、頭を殴られるかもしれないからだ。それは恥知らずな行為となるだろう。イスラエルの人々は、謙虚さと純朴さをもってこう語った。彼らは責任を神に転嫁したり、「なぜあなたはそうされたのですか？」と神に問いただしたりはしなかった。むしろ悔い改め、こう懇願した。「私たちはもっと大きな災いに値する者ですが、今、異邦人たちに何と言えましょうか？」お分かりだろうか？彼らは即座に神の憐れみを乞うたのだ。このことが理解できるだろうか？過ちの自覚と悔い改めがあったからこそ、神は介入され、「敵を打ち倒し.....」とされたのです。もし私たちも困難な状況に直面し、霊的な振る舞いを示せなければ、この世の人々は私たちについてこう言うでしょう。「さて、あなたの祈りはどこにあるのですか？あなたは祈っていると断言してはいませんか。一体どうしたのですか？」そうして私たちは笑いものになってしまうのです。

悔い改めは悪の消滅を促す

世界に悔い改めを求める際、私たち自身も罪を犯した者の一人として数え入れましょう。祈りの中で、「罪深いこの世界を助けてください」と断言してはいけません。聖書の三人の少年たちはバビロン捕囚の時代に生まれましたが、決して「私たちに何の罪があるというのか？」とは断言していませんでした。——しかし、彼らは神の前でこう告白した。「私たちに降りかかったのは当然の報いであり、それ以上の罰を受けるに値していた。」彼らは、あたかもバビロン捕囚以前に神の戒めを破った者たちの間にいたかのように、あたかも自分たちも罪に加担していたかのように語った。実際には、彼らはまだ生まれていなかったため、罪とは無縁であったにもかかわらず。バビロンの炉の中で彼らが捧げた祈りは、私の心を深く揺さぶる。「主よ、あなたが私たちに与えられたすべてのことに、あなたは義なる方です..... 私たちは罪を犯し、不義を働きました..... 今や、私たちには口を開くことさえできません..... どうか、私たちを最後まで見捨てないでください..... また、あなたが愛しておられるアブラハムのために、あなたの憐れみを私たちから取り去らないでください.....

²⁶¹ 詩編43篇24節。

²⁶² 詩編77篇65～66節。

²⁶³ 出エジプト記32:12、申命記9:28、詩編78:10を参照。

／つまり、「主よ、私たちが罪を犯したから、あなたが私たちを罰するのは当然です。しかし、罪を犯さなかったためにあなたが愛しておられるアブラハムのためだけに、私たちを見捨てないでください」ということである。彼らは自分たちも罪人であると認め、口にした言葉を信じていた。それゆえ、炉の中は涼しくなったが、それを見に来た異教徒たちは炎に焼かれたのである。²⁶⁴

このような自己研鑽を怠ると、人は絶えず自分への言い訳を見つけ始める。「悪魔にそそのかされて罪を犯した」とか、「アダムの子だ」とか、「エバの子であって、私の子ではない」などと言うのだ。ある「プロの神学者」が、かつて私にこう言ったことがある。「なぜ我々は今、エバの子で苦しむ必要があるのか？」——「親愛なる人よ」と私は彼に答えた。「それが、あなたの救いを妨げているというのか？ なぜあなたは、不運なアダムや苦しむエバにこだわるのか？ たった一つの過ちのために、これほど長い世紀を地獄で苦しむなんて！ しかし、キリストが私たちのもとに来て、私たちを救ってくださったのです。」——「たとえ七十の七倍も罪を犯したとしても——と主は言われた——悔い改めれば、私はあなたたちを赦す。」²⁶⁵ 私たちは何千回も罪を犯すが、誠実に悔い改めさえすれば、キリストは私たちを赦してくださる。それなのに、私たちはアダムとエバの子だとも言うつもりなのか？ そして考えてみてください。誰も「エバ」という名前を付けようとはしません。さあ、修道院に入る見習いの修道女に、修道名として「エバ」、あるいは少なくとも「ゾエ」と名付けてみてはいかがでしょうか。²⁶⁶ 「エバ」という名前が重く感じられるなら。エバに対してそのような態度をとることは、実に不公平ではありませんか！ 彼女は私たち全員の祖母であり、全世界の母なのです。それなのに、私たちは彼女の名前すら聞きたがらないのです！

そして、神が呪いを下したのは、本質的には悪魔に対してだったのです。「蛇は賢かった。」²⁶⁷ 悪魔は人間を欺くために蛇に憑依したのです。ほら、すべてがエバの子にされているではありませんか。彼女こそが私たちを破滅させたのだと言われ、もし彼女の不従順がなければ、私たちは今頃楽園で暮らしていたはずだ——悲しむこともなかったでしょう。しかし、もし私たちがキリストから「一度過ちを犯したから、何世紀も地獄へ行け！」と言われたら、その時はどう言うだろうか！なんて恩知らずな世の中なんだ！

いずれにせよ、悔い改めとは偉大なことである。私たちはまだ、悔い改めによって人が神の決定を変えることができるということに気づいていない。人間にそのような力があるということは、決して冗談ではない。悪を行うか？ 神はあなたを厳しく叱る。「罪を犯しました」と言うか？ 神は怒りを慈悲に変え、あなたに祝福を与えてくださる。つまり、言うことを聞かない子供が正気に戻り、悔い改め、良心の呵責を感じるとき、その父は愛を込めてその子を優しく撫でて慰めてく

²⁶⁴ ダニエル書 3:1-100を参照。

²⁶⁵ マタイによる福音書 18:22 参照。

²⁶⁶ Ζωή（ギリシャ語）— 命。参照：創世記 3:20。

²⁶⁷ 創世記3章1節を参照。

ださるのだ。神の戒めから逸れたイスラエル人は、七十五年間バビロン捕囚の生活を送った。しかし、ついに彼らが悔い改めたとき、キュロス王が即位しました。彼は、聖なる犠牲の場所を汚したイスラエルの子らよりも、むしろ立派な振る舞いをしたと言える人物です。神はキュロスの考え方を換え、彼を天の神を信じる者となさりました。こうしてキュロスはイスラエル人に自由を与え、金銭や神殿建設用の木材を授け、エルサレムの周囲に城壁を築き、イスラエル人自身でさえも——あえて言わせていただければ——示さなかったような慈愛と敬虔さを示したのです。²⁶⁸ そして、それはすべて、民が悔い改め、心を変えたからに他なりません。²⁶⁹ ご覧の通り、悔い改めは悪の消滅を促進するのです！

マカバイ記の全巻は必ず読むべきだ。これらは極めて力強い書物である。王の命令とはなんと凄まじいものだったことか！ ユダヤ人を象で踏み潰せ！ 責任者が任命され、処刑の準備が整えられ、五百頭の象を激昂させるために、乳香入りの強い酒を飲ませ、処刑を始めるために王の到着を待っていた。しかし、王は彼らに下した命令を忘れてしまっていた。象の責任者が王のもとへやって来て言った。「王よ、お待ちしています。象もユダヤ人も、すべて準備万端です。客たちも待ちくたびれています。」「一体誰が、お前たちにこんなことをするよう命じたのだ？」と王は答えた。叫び声、脅し……！ そして、これは一度だけでなく、三度も起きたのです。²⁷⁰ 王が自ら下した命令を忘れてしまうなんて？ これは冗談ではありません。しかも忘れただけでなく、その後、彼はユダヤ人に対する態度を根本から変えてしまったのです。ここにすべての根幹があります。すなわち、世界が悔い改めるためです。

— ゲロンダ、世界中の平和のために活動している様々な国際団体には、何か益があるのでしょうか？ それらは平和を維持するのに役立っているのでしょうか？

— それは多くの要因に左右されます。善意からこうした活動を始めた人々も確かにいます。しかし、時にはとんでもない「寄せ集め」が集まってしまうこともあります！ そこには魔術師もいれば、火を崇拝する者もいれば、プロテスタントもいて——そんなごちゃ混ぜで、目眩がするほどです！ そして彼らは「世界平和のために！」と闘っている。彼らに何の益があるのか？ 神よ、お許してください。しかし、この「ごちゃ混ぜ」は悪魔が仕組んだものだ。団体そのものが罪深いのであれば、そこに平和などあり得るはずがない！ 人々が神と和解していなければ、どうして平和が訪れるだろうか？ 人が神と和解して初めて、内なる平和も外なる平和も訪れるのだ。しかし、人が神と和解するためには、正気に戻らなければならない。悔い改め、神の戒めに従って生きなければならない。そうして初めて、人の内に神の恵みと平和が宿る。そして、その人は自分の周囲にも平和が保たれるよう手助けすることができるようになるのだ。

²⁶⁸ エズラ記第二1章1節以降を参照。

²⁶⁹ エズラ記第1巻8章88～92節を参照。

²⁷⁰ マカバイ記第3巻5章1～35節を参照。